



案山子



2017年冬号

新潟大学文芸部

リレー小説作品集

君を探す夏

君を探す夏

少女は微笑んだ。

冷たく、何もかもを悟ったような目が、まっすぐにぼくを見据えている。

昼には汗が湧き出るほど暑かった風が、ぼくと少女二人だけが存在する屋上の上を通り過ぎ、夕方の肌寒さを感じさせた。

グラウンドの方から何かの運動部の威勢のいい掛け声が聞こえてくる。

「私を見つけて」

彼女――川澄さくらはそうぼくに言い放った。

「お願い。一か月以内に、私を見つけて」

彼女は繰り返した。

夕暮れの赤い光が彼女を後ろから包み込み、その妖艶さを際立たせている。綺麗な長い黒髪が、風を受けて絹のように凜いでいた。

「見つけてって……おかしいよ」

意味の分からない彼女の言動に、ぼくはしどろもどろになりながら言葉を紡ぐ。

「どうして？」

彼女は軽く首をかしげた。

まるで、何か悪さをした子供が、自分が何が悪かったのかを大人に聞くように。

しかしその冷たい笑みが消えることはなかった。

「だって、君はそこにいるじゃないか」

ぼくは一步、彼女の方へ足を踏み出す。

でも、状況は何一つ変わらない。

川澄さくらが、屋上のフェンスを越えたわずかな足場の上に立っているという、絶望的な状況は、何一つとして。

「大丈夫だよ」

その名前のごとく、花が咲き誇るように彼女は笑った。ぼくを励ますためなのだろうか、彼女の目から先ほどの冷たさは少し消えていた。

今まで遠くからしか見たことがなかった彼女の快活そうな顔を見た瞬間、ぼくの呼吸が少しだけ止まる。

長いまつげに縁どられたその大きな黒い目には、戸惑ったような、見とれているような、本人でもわからないような顔をしたぼくが映っている。

「君ならきっと、私を見つめることができるよ」

答えになっていない。

そう言おうとした時、彼女はその白く細い足を後ろに下げ、オレンジ色の空を背に、宙を舞

った。

彼女の着ている、この場所とは場違いな白いワンピースが死装束のように思えた。

それは一瞬の出来事だった。

体が動くどころか、声すら発することはできなかった。

これが、ぼくが夏休みを目前に控えたとある放課後の、まさしく悪夢のような出来事だった。

*

セミの鳴き声が耳をつく。

痛いような、悲しいような声。

自分の望む結果をいまだ手に入れることができない彼らが、自然とぼく自身に重なった。

立森公園の錆びついたベンチに一人座り、ぼくはため息をついた。

体中から出る汗が滴り落ち、地面に浸み込まれていく。

学校から解放された無邪気な子供たちが、バリエーションの少ない遊具で遊ぶ姿が目の前にある。

少しだけむせるような土の匂いがした。

夏の昼の倒れそうになるほど暑苦しい熱気が体を包み込んでいるのを感じる。

夏休みが始まって五日がたった。

川澄さくらは、いまだに見つからない。

あの悪夢のような出来事のあと、我に返ったぼくは慌てて階段を駆け下り、彼女が『落ちた』であろう場所に向かった。

しかしそこには、彼女の死体どころか、血痕さえも、何も残ってはいなかった。

確かに、彼女はこの五階建ての校舎から身を投げた。

それはこのぼくがはっきりと見ていたし、鮮烈に記憶に残っている。

でも、その痕跡はどこにもなかった。

まるで、何事もなかったかのように。

当然その時のぼくはこれは悪い夢か、はたまた期末テストの勉強に疲れた脳が見せた錯覚なのだと思った。つまらない日常に飽き飽きしていたぼくが自分に見せた不可思議な幻想。もしくは、彼女がぼくをからかって仕組んだただのイタズラ。

そう、何度も思った。

そうであってほしいと、何度も思った。

そうでなければ、つじつまが合わない。

彼女の行動は、明らかに現実との矛盾を生み出しているのだから。

だけど、彼女の発した言葉の一つ一つが、ぼくにに向けた表情の一つ一つが、ぼくの心に鎖のように巻きついて離れない。

彼女は確かに消えた。

これだけは嘘ではない。

その証拠に、ぼくが幾度となく彼女の家を訪ねても。彼女は現れなかった。彼女どころか、その家族でさえ顔を出すことはなかった。

毎日毎日、この、広いとは言い難い田舎町である立森町の中を歩きまわっても、彼女の姿を見つけることはできなかった。同級生からやっとのことで取得した彼女の携帯の番号に何度もかけても、彼女の声を聴くことはできなかった。

私を見つけて。

彼女はそう言ってどこかへ消えていった。

彼女とは同じクラスだった。

県立立森高校二年五組。そこで、ぼくと彼女は四か月ほどの期間を共に過ごした。

でも、だからと言って、話したことは一度もなかった。挨拶をしたこともなかったし、グループワークで同じ班になることもなかった。もっといえば、目を合わせたことさえなかったかもしれない。

だけどぼくは、一方的に彼女を知っていた。

才色兼備で、クラスのみんなから好かれている、まさにぼくとは正反対の人間を、気にならないことの方がおかしいことだろう。

だから、あの夕暮れの瞬間は少しだけ嬉しかった。

彼女もぼくのことをちゃんと知っていてくれていたんだということ。そして何より、理由は何であれ、ぼくは彼女に選ばれたんだということ。この二つが、ぼくの自尊心を少しだけ満たしたのだ。

その結果、ぼくはわけのわからないことに巻き込まれたんだとしても、高校唯一の楽しみである夏休みを棒に振ることになったとしても、少しくらいなら良いのかもしれないとも思っている。

だが、さすがにもう探す当ては尽きていた。

しかし、ぼくにはもう彼女を探すことしか道はない。

退屈すぎて死んでしまいそうだった日常をひと時のうちに非日常に変えてくれた彼女。

ぼくは彼女を探さなければならないのだ。

これはある種の義務なのだ。

呼吸をするように、瞬きをするように、そんな風に、ぼくは彼女を探すのだ。

君ならきっと、私を見つけることができるよ

その言葉が頭の中でずっと反芻している。

よいしょ、という声とともにぼくは立ち上がる。

いつの間にか、セミの鳴き声は小さくなっていった。

さあ今日も、彼女を、川澄さくらを見つけに行こう。

今日は一端原点回帰して彼女の家を訪れてみることにした。他に探す当てがない以上、これが一番効率的だと思ったからだ。

彼女の家の前まで来て、いつものようにインターフォンを鳴らしてみるが、やはり反応はない。やっぱりだめか……そう思って踵を返そうとした時だった。

「……あの」

不意に後ろから声をかけられた。振り返った僕は思わず声を上げそうになった。だって、そこにいたのは—

「私の家に何かご用ですか？」

彼女が……必死に探していた川澄さくらがそこにいたのだから。

「か、川澄さん？」

「えっ、ああ！ あなた同じクラスの……どうしたの、こんなところで？」

「……ふえ？」

彼女の発言に思わず素っ頓狂な声が出てしまった。自分から『私を見つけて』とっておいて『どうしたの』はないだろう。

「どうしたのって……夏休み前にあんなこと言っておいてそれはないでしょ」

ぼくがそう言うと彼女はいぶかしげに眉をひそめた。

「夏休み前？ ごめん、君と話すのは今日が初めてだよね？」

今日が初めて？ どういうことだ、確かにぼくは—

……いや待て。

ぼくは改めて目の前の彼女をじっと見つめ、そして、気づいた。この人はぼくの探していた川澄さくらではない。夏休み前に会った彼女とは明らかに雰囲気が違う。

じゃあ、ぼくが探していたのはいったい誰なんだ？

「えっと、その……」

ぼくはすっかり混乱してしまいうまく言葉をつなぐことができなかった。そんなぼくの様子にあきれてか、彼女はふーっと大きく息を吐くとまっすぐな視線をぼくに向けた。

「とりあえず、一端落ち着こう。落ち着いたら何があったのか話してくれる？」

彼女の提案にぼくはゆっくりと頷いた。

＊

それから十数分後、ぼくは再び立森公園の錆び付いたベンチに腰掛けていた。しかし、今度は一人ではない。ぼくの隣には彼女、川澄さくらが腰掛け、ぼくの話に熱心に聞いている。

「一なるほど、ね」

これまで起こったことを一通り話し終わると川澄さんはあごに手を当て眉間にしわを寄せた。

「それでさっきはあんなこと言ってきたんだ。でも、それは私じゃないよ。その日は旅行の準備で学校が終わってからすぐ家に帰ったんだ」

「旅行？」

「うん、昨日までね」

なるほど、どうりで家を訪ねても誰も出ないはずだ。

「……でも、どうして電話に出てくれなかったの？ 何度もかけたのに」

「ちょっと前に機種変したんだ。でも、だいたいのことはLINEで足りるからあえて言わなかったんだよね」

とことんついていない。こんなことなら、番号を教えてもらったあの日にもっとよく確認しておけば良かった。と言っても、もう後の祭りだが。

「ねえ、これからどうするの？」

当てが外れたことに少し肩を落としているぼくに川澄さんがそう心配そうに声をかけた。

これから、か。

もちろんぼくの答えは決まっていた。

「探すよ。手がかりはなくなっちゃったけど……彼女はぼくが見つけ出すのを待っているからね」

ここまで来た以上、後に引くことはできない。

それを聞いて川澄さんはまた少し考えるような仕草をとった後、思いがけない一言を発した。

「私もその人を探すの、手伝っていい？」

「……へ？ な、なんで？」

「面白そうだなって思ってさ、それに、そのもう一人の私の正体も気になるし。ね、いいでしょ？」

そう言って川澄さんはぼくに笑いかけた。その顔はまるで無邪気な子どものようだ。

「いやいや！ 手伝ってもらうようなことじゃないし、それにさっき言ったとおり手がかり一つないんだよ？」

「だからいいんじゃない。手がかりを集めるにも人手がいるでしょう？ 一人で探すより二人の方がよっぽどいいと思うけど？」

「ど、ドッペルゲンガーだったりするかもしれないよ？」

「ドッペルゲンガーだったら、わざわざ人に探してなんて言うかな？」

……だめだ。これはぼくがいいと言うまで引かないつもりだ。ぼくは一つため息をついた。

「わかったよ。お願いしてもいいかな？」

ぼくがそう言うと川澄さんは満足そうに頷いた。

翌日から川澄さんと二人で、もう一人の川澄さんを探す日々が始まった。目の前に探し求めていた人がいるのに、同じ彼女を探すのはかなり奇妙に思えたが、川澄さんのやる気を前には何も言えなかった。それからぼくたちは午前中から日の暮れる夕方まで町の中を探し廻り続けた。

何の手がかりも掴めないまま三日経った、八月最初の日。

立森公園で落ち合ったのち、今日はどこを廻ろうかと考えていたとき、川澄さんが手で風を扇ぎ

ながら言った。

「今日特に暑いから涼しいところ行きたいなあ」

「じゃあ今日は川浴いを探してみる？」

確かに今日はこの夏一番の暑さであるとニュースキャスターが伝えていたのを思い出した。加えて水の事故に対する注意喚起も行っていたが、最近全国で多発しているという自動車による暴走事故に関する報道の方が悲惨だったので川の水辺に行くことぐらいなら平気だと思った。

日陰はないだろうが、水辺なら多少は涼しげな風が吹いていそうである。川澄さんは二つ返事で承してくれたので、さっそく町内を流れる立森川の河原へと向かうことにした。

立森川は水面を太陽の光できらめかせながら穏やかに流れていた。河原に到着するや否や、川澄さんは履いていたクロックスを脱ぎ捨てて川の浅瀬へ素足のまま入っていった。

「一緒に入らない？ 水冷たくて気持ち良いよーほらっ！」

川澄さんはとびきり良い笑顔で水しぶきをぼくに向けようとする。正直ぼくも川澄さんと一緒に水遊びをしたいという欲求に駆られそうになったが、もう一人の川澄さんを探さなければいけないという責任感が勝った。

「ぼくはこっち側の川浴いを先に調べてみるよ」

そう川澄さんに伝えて草の生い茂る河原を歩くことにした。川澄さんはまだ一人で川に浸かっていたようだった。

ぼくはひたすら腰ぐらいまでの高さのある草むらを掻き分け、探すべき彼女の手がかりがないか確認していく。この作業はすこぶるしんどい。掻き分ける度に虫や蚊がぼくめがけて飛び回る上に、掻き分けても見つかるのは捨てられた空き缶や雑誌などのゴミだけである。それでもぼくはこの作業を続けなければいけないという強い使命感に駆られた。川澄さんが見ているからなのか、それともあの放課後にあった川澄さんが忘れられないからなのか、感情の出どころはわからなかったが、その手を止めるという選択肢はなかった。

いや、本当はぼくがこんなにも必死に彼女の手がかりを探さなければいけない理由は薄々分かっている。ぼくは絶対に何がなんでももう一人の川澄さんなど存在しないことを証明しなければならぬ。そのために――。

「何か見つかりそう？」

急に川澄さんの声がしてぼくは現実に引き戻された。何にもないよ、と両手のジェスチャーを交えて答える。

「もう水あそびは満足したの？」

「ひとりで水にずっと浸かってたらすぐ飽きるよ」

彼女は少し笑いながら答えて、草を掻き分け始めた。どうやら川澄さんもこの作業を手伝ってくれるようなので、ぼくはまた手ごたえのない草を掻き分ける。

川澄さんに話しかけようと振り向いたとき、また川澄さんの声がした。

「私同じクラスだったのに君と最初に出会ったとき、すぐに思い出せなかったんだよね。こんな人クラスにいたっけ？　みたいな」

川澄さんは掻き分ける手をとめることなく、ぼくの方を向かずに淡々と話し始めた。と同時に、ぼくの存在感もさりげなく揶揄し始めた。

「でもこの数日間一緒に探してみても思い出したよ。日直とか掃除とかで一人きりになっても黙々と仕事してたでしょ。ほかの人がサボったりしても一人だけきちんと仕事してる人がいるなあって思ってたんだ。それがたぶん君なんだ。さっき一人で草むら掻き分けてる姿見て確信したよ」

川澄さんはそう言い切ると、顔をあげてぼくの間を見つめてきた。この数日間手がかりを探しているときに、川澄さんからの視線を感じる気はしていたが、おそらく記憶の中からぼくを見つけ出そうとしていたのだろう。それが今草むらを掻き分けている姿によって、記憶の片隅にあった姿に重なったと。

「君は責任感が人一倍強いんだ。それに一人きりになるのも恐れてないよね。まあだから目につきやすかったんだろうけど。四月から君と話せてたら、色んなことお願いして頼ってたのになあ」

最後の方は冗談交じりに笑いながら話す川澄さんに対して、ぼくはようやく口を開くことができた。

「ぼくは責任感が強いというよりもそれが義務だったり、ルールだったりするだけで型から外れることのできない面白みの欠片もない人間だよ。だからクラスメートも周りにはそんなに寄ってこないから、一人でいることが多いんだよ」

今日も含めてこの数日間隈なく必死にもう一人の川澄さんを探していたのも、もう一人の自分などいないということに川澄さん自身に気付いて欲しいという自分勝手な願望からだ。同一人物がこの世に二人存在するなどという非科学的なことをぼくは信じることができなかった。川澄さんの家の前で出会ったとき、確かに印象は大きく違ったが、何らかの原因で屋上で出来事が川澄さんの記憶から抜けてしまったと考える方がまだ現実的であるように思える。

「たとえ義務だとしても、それを誠実に行える人って少ないと私は思うけどなあ。でも自虐心のある君にはこれ以上何か言っても無駄だと思うから、もうこの話はこれでおしまい」

川澄さんはそう言うと、また草を掻き分け始めた。

結局お昼過ぎまで河原の草を掻き分け探してみたが、何も手がかりを掴むことはできなかった。というより川沿いである河原は夏一番の暑さを前にはそれほど涼しくなかったのも、川澄さんの誘いに負け最後は川の浅瀬に入って水浴びをして帰った。

立森公園で川澄さんと別れて自宅に帰る途中、お腹が痛くなったのでコンビニのトイレに入った。用を足してそのまますぐに店を出るのは少し躊躇われたので、雑誌コーナーで立ち読みをすることにした。何か買って店を出れば良かったのだが、あいにく今日は財布を家に忘れていた。

そこで一つの週刊誌を手にとって最初こそざっと見していたが、夏休みを目前に控えた女子学生が脇見運転の車にはねられたという記事からぼくは目を離すことができなくなっていた。

川澄さくらは僕と屋上で話した日事故に遭っている。

その事実をぼくは信じることができなかった。

週刊誌を雑誌コーナーに戻してコンビニを出たあと、ぼくは家に帰った。真実を見極めるには曇りなき眼が必要なのだ。一旦落ち着こう。冷水でシャワーを浴びて痛いのを我慢して目も洗って、縁側に座った。麦茶も飲んだ。よし、電話だ。

「もしもし、川澄さん。ちょっと変なこと聞くけど旅行の準備の日、車にはねられなかった？

あ、そうだよ。はい。はいどうも」

はねられていないそうだ。そうだろうとも。週刊誌に載っていたのは川澄さくらと同姓同名、同い年というだけの別人だ。これにて一件落着。だがこの町の学生が事故死したのは事実であり、亡くなった別の川澄さくらさんは大変お気の毒である。その無念は如何許りだろうか。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。しかし、なぜ高校生の死が週刊誌に載るのだろうか。まあ、それは後でい

いか。さて、屋上から飛び降りた川澄さくらをどう探すか。闇雲に探しても見つけれられる気がしない。思案投げ首の体だ。こういうときどうすれば……。仮説を立ててみよう。ぼくは紙に書き出した。

一、やはりあれは夢または自分の幻覚である。

二、川澄さくらが忘れてるだけ。超若年性アルツハイマー。または彼女のイタズラ。

平々凡々たる一市民のぼくが思いついたのは以上だ。さっそく確かめていこう。

初めに一について。これが正しいならまったく何という時間の無駄か。他人様まで巻き込んで、幻覚につきあわせるとは昼行灯（ひるあんどん）と言われてもしかたがない。昼行灯乃介の異名が立森町に轟く可能性は最後の最後、もう一つの仮説がだめになったら考えよう。

二つ目の仮説。川澄さんが忘れてるだけ。もしくはイタズラ。そうだとすると、落ちたことはどう説明するんだ。屋上から落ちたように見えたが、実は足場の下に教室のベランダがあって、そこに落ちたのかもしれない。頭を打って忘れてるんじゃないか。明日あの場所まで行ってみよう。

結論。ない。屋上まで行ったはいいが立ち入り禁止になっていた。そこで川澄さくらが落ちた場所の真下の教室の窓から下を見たが、駐車場が見えるだけ。ベランダはなし。落ちたら死ぬ。待てよ、下に木が見えるぞ。ここから落ちて、木に落ちれば死なないんじゃないか？ どうだろう、ここから落ちると木に落ちるのか？

億劫だが下に降りて最寄りのホームセンターでビニールロープと軍手を購入した。また教室に戻る途中、ちょっと危険すぎやしないか、リュックを落とすだけでも川澄さくらが落ちた様子を再現できるんじゃないかと思直した。

そういうわけで特に何も考えずリュックを落とす。あー……だめだ、木に届かない。リュックは普通に地面に落ちた。その時、建物から根性が腐っていると評判の警備員が飛び出てきて、こっちを見て何やら叫んでいる。どうやら怒っているらしい。また走って校舎に戻った。ここまで来るつもりなのだろう。しかしここは五階だ。逃げる時間はある。ぼくは義務やルールは守る人間だ。親以外に怒られたことなんてこの十数年の人生で一度たりともない。それをあんなつるっぱげに怒られて記録を台無しにするなんてまっぴらごめんだ。

そのときぼくはちょっと冷静さを欠いていた。早く逃げなきゃという一心で、校舎には隠れる場所なんていくらでもあるのに、ビニールロープの一端を固く窓枠に括り付け、残りの束を地面に落とし、軍手をはめて校舎の壁を蹴りながら降りる。ロープが細いので普通に握って降りるのは難しい。片手ずつ巻き付けてなんとか四階あたりまで降りた。降りやすくするためにまた壁を蹴ったときだった。ロープがねじれてしまい、ぼくは校舎を背にする形になった。その一瞬、何かワイヤーのようなものが見えた。もう一回ねじれてまた校舎の壁に近づいた。この時点で三階あたりだった。壁を蹴ってもう一度見るとワイヤーはさっきより遠ざかっていた。細いが丈夫そうなワイヤーだった。両手がふさがっているので触れない。よく調べたいが時間がない。降りきってリュックを回収、そそくさと立ち去る。また叫び声が聞こえて、見上げるとさっきの教室について警備員がぼくを見つけたらしく騒いでいる。リュックを人質に取られなくて本当に良かった。もう必死の形相である。逃げようと自転車に乗り校門から出ると、おばあさんに呼び止められた。

「あ、斎藤さん」

斎藤さんはこの学校の駐車場の近くにある初代校長の像に毎日水をひしゃくで頭からかけに来る、小さな商店の店主だ。

「あんた、あんな危ないことして。ついこの間も屋上から落ちた人がいるっていうのに……」

「え、ちょっと待ってください。斎藤さん、人が落ちるとこ、目撃したんですね？」

「ええ。でも不思議なのよね。その人、斜めに落ちていったように見えたのだけれど」

これは大きな収穫を得た。本日三度目の叫び声がして、振り返るとつるっぱげが校舎から走り出てくるではないか。

斎藤さんにお礼を言って、ぼくは自転車でその場を離れ、コンビニに向かった。

ぼくは縁側に寝転んで週刊誌を読んでいる。なるほど、斎藤さんの言う通りのことが書いてある。昨日は衝撃のあまり記事をよく読んでいなかった。付け足すと、学生が校舎から落ちて、

ちょうど来た車にはねられ、溝に落ちたのだ。ここで不審な点は、はねられた場所は彼女が落下した真下から五十メートル離れていたのだ。それで週刊誌に載ったのだろう。死体どころか血痕も残っていなかった、と思ったが、落ちた場所が場所なのと、運転手のはねた直後に気が動転して小一時間逃げてしまったので、気づかなかっただけというわけだ。では、あのワイヤーは？警備員に追われてなければもっとよく見えたのに。

「私を見つけて」とはどういうことなのだろう。これだけ聞くと隠れん坊で隠れている人を見つけるようなイメージだ。その後彼女は自殺するのだから、彼女は死体を見つけてくれと言いたかったのか？ 具体的に言えなかったのはなぜだろう。

では、もし死ぬつもりではなかったとしたらどうか。落ちたように見せかけて、ワイヤーを使って降りるつもりだったとしたら。途中ではねられるのは想定外だったのではないか。

ここで新たな疑問が湧いた。ぼくと川に行って、電話したのは誰だ？ あの日屋上から飛び降りた人物は確かに死んだのだ。まさか幽霊……？ 幽霊が存在するかしないかは分からない。他にもっとありえそうなのは……そうだ、そっくりな顔だったが大きく印象が違うのは、双子だからじゃないのか？ 双子だとしたら、川澄さくらはどちらなのだろう。でもどちらにせよ、生きている方は何か知っているはずだ。それなのに知らないふりをしている。そしてぼくを手伝おうとしてきた。

ワイヤーの終着点には何があるのだろうか。

「見つけた」

そこはお墓。その上にあの白いワンピースの女の子が座っていた。炎天下で、いかにもお盆日和だというのに、彼女は涼しげな顔をしている。

「お墓の上に座るのは、幽霊の特権なのか？」

「失礼ね、私はもうここにしか動けないのよ」

「君は…」

彼女はにこっと笑った。

「知らなくていいわ。数年前に自殺した女の子。川澄さくらの元同級生。それだけよ。姿なんてない。君みたいに存在も薄かったし、誰も覚えていない。自殺した理由も下らなかったの。でも誰かに会いたくなっちゃった。誰でもよかった。私の存在に気が付いてくれれば」

「誰も気づいてくれなかった。だから飛び降りた」

「川澄さくらの姿を借りてね」

彼女は真っ青な空を見上げた。

「彼女の姿を借りれば、何か起きるかなって。二度目だったけど飛び降りてみたんだ。飛び降りれると思ったんだよ。そしたら予想通り、君が来た。嬉しかった。本当は誰でも良かったはずなのに、なぜか君を見たとき、直感的に君が私を見つけてくれるって思ったんだ。幽霊の姿に戻ったとしても、この私がここにいるって。だから私は飛び降りた。でも誤算が一つだけあった。そ

こにはなぜかワイヤーロープがあった。私はその数秒間まるで蜘蛛の糸を掴むかのようにそれに掴んだ。生きたいと思っちゃったんだよね。馬鹿だな、もう死んだ命なのに。血なんて嘔き出さない。手の摩擦に苦しみ、地面に着いたと思ったら、警備員のおじさんに遠くから怒鳴られて、とっさに逃げようとしたら車に轢かれる。投げ飛ばされ、搬送され、私は眠りについて、そしてお墓の上に座っていた」

こんな非現実的なことは本当に起きるのだろうか。でも実際に起きた。というよりつじつまが合った。それだけでぼくは冷静になれるのだろうかと思ったが、空を見上げる彼女を見ていると、もうなんでもよかった。彼女はそうやって屋上で誰かを待って、ずっと空を見上げていたのかもしれない。

「何で週刊誌に取り上げられたと思う？」

「さあ」

「回顧するためよ。あの時と同じにしたの。私の自殺は週刊誌に取り上げられた。生前さんざん空気のように扱われたのに、死後は週刊誌に載る。川澄さんのせいね。最後ぐらい消えるように死にたかったわ」

「まるで川澄さんを恨んでいるような」

「恨んでなんかいないわ。ただ...少しだけ羨ましかった」

彼女は膝の上で頬をついた。

「お待たせ～」

麦わら帽子に白いワンピースを着た川澄さくらが、水のたっぷり入った手桶を重そうに持ってやってきた。

「あ、ごめんね。重たかったでしょ」

「大丈夫よ、これくらい」

ぼくは手桶を受け取ると彼女はその中に入っていた柄杓で水をすくい取り、お墓にかけた。

「きっと彼女も水浴びぐらいしたいよね」

まあ、こんな暑い日に水浴びしたら気持ちいいだろう。気が付くと、お墓の上にはいたあの子の姿がなくなっていた。

「結局、何か分かった？ その、私に似た人を探してるっていう話」

「あ...いや、まだ」

「そっかあ、あれのおかげで彼女のことを思い出したっていうのに」

確かに、あの後、彼女から電話でこの自殺の話を聞かなければ、ここに来ようと思わなかったし、ここに来れば何かわかると思ったら、呆気なく解決してしまった。

彼女の横顔は純白な肌でいつもにもまして美しい。でもあの屋上で見た姿とは違い、少しだけ優しい顔をしている。

「実はね、馬鹿な話だけど聞いてくれる？」

「うん」

「私、彼女のこと何一つ知らなかったけど、やっぱり悲しくてね。なぜか罪悪感にかられて、週

雑誌の取材を受けて知りもしない彼女のことを知ってるかのように話して。それでも気が済まなくて、私、屋上のフェンスにワイヤーをつるしたの」

「え！」

「人って飛び降りて地面に落ちる瞬間、ほんの数秒間意識があるんだって。あの自殺で少し調べただけだね。もし誰か死のうとしたとき、その数秒間でちょっとでも救えればいいなって思ったんだ」

川澄さんはくすっと笑った。

「その前に自殺を止めろよっていう話よね」

蝉がけたたましく鳴いていた。ワイヤーの終着点は「友情」か。いやそんなことはどうでもいい。名前の無い彼女はこのことが聞こえているだろうか。いや、聞こえてほしい。

ぼくはただただ川澄さんを見つめていた。

その後

幽霊となってぼくの前に現れた「彼女」が自殺した本当の理由とは一体何だったのか。

気になったぼくは「彼女」のご両親の元へ伺うことにした。

門扉から玄関までの道のりが異様に長い、割と大きめの家だった。玄関に着くと、「彼女」の母親と思われる女性がぼくを出迎えてくれた。

黒の長髪を微かに揺らし、カスタード色のワンピースに身を包んでいる。柔和な微笑みを浮かべ、菩薩のような丁寧な笑顔を浮かべていた。

「あら、いらっしゃい。どちら様？」

「あ……ぼくは、娘さんの知り合いというか……その」

「ああ、^{ゆかり}紫の」

ゆかり、っていうんだ、あの子。と思うと同時に、ゆかりさんのお母さんが一瞬、俯くのが目に入った。

が、すぐにぼくに向き直った。

「話があるんでしょ。上がって行って。今、お茶淹れるわ」

促されるまま、ぼくは靴を脱いだ。

小ぢんまりとした和室へと通されると、ゆかりさんのお母さんはすぐにお茶をお盆に乗せ、持ってきてくれた。

「紫のこと、尋ねに来たの？」

「そうなんです。少しでも、彼女のことが知りたくなって。すごく唐突なんですけど」

「そんなことないわ。あの子のこと、まだ気にかけてくれる人がいるってだけで、それだけで嬉しいわ」

ゆかりさんのお母さんはそう言うと、お茶を一口だけ喉に通し、それからゆっくりと口を開いた。

「紫はね、とってもおとなしい子だったの。誰にでも優しくて、めったに人と争ったりしない。

特別何かが得意とかはなかったんだけど、他人の悪口を一切言わない。それが、あの子のいちばんの才能だったわ」

心なしか、目に涙が滲んでいるようにも思えるけれど、それを気力でぐっと堪えながら、必死に話しているという感じだった。

「けどね、それが仇になっちゃったのね。優しすぎるのが原因で、あの子クラスメイトの女の子たちからいじめを受けるようになってしまったの。私も最初は知らなかったのよね、気づいてあげられなかったというか。あの子、歯を食いしばって、無理して私たち家族に笑顔を振りまいていたのよ」

「親に知られたくなかったんですかね。いじめられてた事」

「そうみたいね。私も担任の先生からの電話を受けて、初めて知ったのよ。あの子、家ではいつも笑顔だったのに。学校では泣いていたみたいね。ちょうど、その頃よ。川澄さくらさんって子とお友達になったのは」

あ、そこで川澄さんが出てくるんだ、とぼくはさらに話に耳を傾ける。と同時に、あれ？ と首を傾げる。

「あの……川澄さんは、そのゆかりさんとはただの同級生で。ほとんど知らないって言ってましたけど」

「きっと、強がってるのね。思い出すのが怖くなって、忘れよう、忘れよう、とずっと念じてたら全生活史健忘になっちゃったんだって。そう、さくらさんは教えてくれたわ」

「……」

「さくらさんがね、紫をよく遊びに誘ってくれたのよ。映画だったり、あとはそうね。立森公園とかだったかな。でも、あの子は誘われるたびに泣いていたのよ。誰かの助けを借りないと立ち直れない、そんな自分が嫌だって言って。優しいが故に自分にすっごく厳しかったからね」

幽霊という実体のない状態でしか、ゆかりさんに会ったことのないぼくは、なんとなく彼女の生きていた時の様子を想像してみる。本当は強いんだけど、周りから弱い者扱いされ、拳句の果てには臆病者に成り下がってしまう。その経緯^{いきさつ}を考えてみるだけで、胸が物凄く痛くなる。

「私もね、お父さんと一緒に、紫を元気にさせようといろいろ努力したのを覚えてるわ。不自然なくらい頻繁に遊園地に連れて行ったり、絵が好きだったから画集を必要以上に買ってみたり。その努力のどれもがね、宙を舞っていつちやって。

そうこうしているうちに、あの子も気づき始めたのかもね。

自分のせいで両親が無理してるって。それで、その罪悪感から、ほとんどしゃべらなくなってしまったの。学校では、とても浮いていたと思うわ。唯一の憩いの場であった家でさえ、笑顔を見せなくなってしまったんだから。その時の紫はとてもつらかったんだと思うわ。なにもかも、全部ひとりで抱えちゃって。そして、あの子は自殺してしまったの」

事の一部始終を一通り聞き終わっても、ぼくは一切の事実の羅列をうまく呑み込めずにいた。というよりも、呑み込んでしまえば、それでぼくの中の何かが壊れてしまうかもしれないと思いきえ抱いてしまった。

ゆかりさんのお仏壇の前で、ぼくは静かに両手を合わせる。

この数日間の出来事、ゆかりさんの体験。ひとつひとつ引っ張ってくると、少しだけ頭が痛くなってしまいうけれど、ぼくはそれを我慢して受け入れることにした。それから、平凡に過ぎていくぼくの日々がどこか羨ましく思えて苦しかった。けれど、この経験はきっと無駄なんかじゃない。ひよっとすると、起こるべくして起こったことかもしれない。

ゆかりさんの幽霊に振り回されたぼくは、唯一無二の体験をする機会に恵まれるという不思議な縁を手に入れたんだ。

おわり

リレー小説「君を探す夏」執筆者（執筆順）

星野 文香
竹重 倫直
柳澤 勇利
六井 加奈子
廣瀬 千晶
小山 江平

テセウスの少女

テセウスの少女

昔むかし、ギリシャにはテセウスと呼ばれる勇者がいた。

彼は怪物ミノタウロスを使役し、若い女性の生贄を求めるなど、圧政を強いる王の話を聞きつけた。そこで彼はギリシャの傍にある島クレタ島へ征く。テセウスはそこで出会った美女、アリアドネの助けを借りて怪物ミノタウロスを殺すことに成功する。彼が帰還した時アテネの人々は喜びに包まれ、その船を自由の証として街に飾ることにした。何十年と飾るうちに壊れた場所は修理を何度も繰り返した。

ある時、暇を持て余す哲学者はその船を見て呟いた。

「はたしてこの船は、テセウスの乗った船なのだろうか？」

2019/7/3 カンバヤシ 神林 メイ・芽衣のテキストファイル

きょう、一人の少女がわたしの家にやって来た。

妹の誕生日であり、そして十年目の命日でもあるその日に、それはやってきた。

トラックで運ばれ、梱包材でぐるぐる巻きにされたそれは、明るい緑色のツナギを着た二人の男によって運ばれてきた。

つるりとした卵を思わせる白い肌。運ばれるたびに上下に揺れるポニーテール。まるで棺桶に入れられた ヴァンパイア 吸血鬼の如く、かたく閉じられた眼と、つんと尖った鼻。赤い唇。

申し訳程度に、身体を隠すための薄いガウンを纏っている以外、何も着ていなかった。だからと言って、欲情出来るほど艶めかしくも無い。私に ネクロフィリア 死体性愛の嗜好は無い。

それは死んでいるようにも、生きているようには思えなかった。事実、それは生き物では無い。

多機能娯楽ガイノイド「ソルト」。私の部屋に運ばれてきた美少女を模した人形は、世間でそう呼ばれている。

薄いシリコンで覆われた、もちもちとした肌。ティーンエイジャーの平均身長に合わせた、身の丈一五七センチの少しばかり小柄な体躯。最近の萌えと言うか流行を投影しているのか、小ぶりなおっぱいに、ほっそりとした腰。顔立ちも少しアニメっぽいと言うか、幼い顔立ちをしていた。

不快感を覚えるかと言えば、そうでもなかった。不気味の谷と呼ばれる現象がある。ある種の人形があまりに人に似すぎると、人はそれにある種の恐怖を覚えると言う。けれども、そういった恐怖を私は感じなかった。むしろ、好感さえ持てる。庇護欲をそそると言うか。あどけない顔立ちをしているのだ。少し昔、流行したオタク文化というやつだろうか。その手の分野にはめっぽう疎い方であるわたしでさえも、なるほどこういうものかと思わされる。

『胡椒 パッパー では無く、新たな刺激 ソルト をご家庭に』

そんなキャッチフレーズと共に、彼女 ソルト は生まれた。まるで二次元から飛び出して来たような可愛らしい造形と、ヤマハ製の甘い合成音声。それが彼女の持つすべてだった。

多機能娯楽ガイノイドという勇ましい名前の通り、彼女は何でもすることが出来た。彼女は『オーソリテイ 権限 オーグメント』と呼ばれるものを、あたまたに、正確には人工知能にインストールすることで、様々な動作を 拡張する。ヒトのように学習することだけではなく、ある程度のことであれば、ちょっとしたチップを入れるだけで

、彼女はあらゆることをこなせるという。

料理、洗濯といった家事全般。ある程度のスポーツ(コメント：それにはeスポーツ……テレビゲームだって含まれている)。一時期話題になったことと言えば、そういった嗜好を持つ男や一部の女の欲望を吐き出すための性処理道具^{セクサロイド}としてであったり、完全に制御された兵隊であったり(コメント：曰く、日本製だからとても頑丈らしいとか)、とにかく、『^{オーソリテイ}権限』次第で、何でも出来るのだ。

例えば、その人形を友達に仕立て上げることも。

例えば、セックス・パートナーを作ることも。

例えば、誰かの行動を模倣することも。

例えば、死んだ妹を擬似的に蘇らせることも。

^{オーソリテイ}『^{オーソリテイ}権限』には擬似的な人格再現が可能なものもある。途方もない質問に回答し、その傾向に応じて、「彼女ならばこうするであろう」と行動する。

わたしは黙々とパソコンに向き合いながらその回答に答え続けながら、「おつかれ」とツナギを着た男たちに呼びかける。男たちが小さく会釈をするのが、光沢のあるディスプレイに反射して見えた。

当分の間彼らの視線を忘れることは無い。同情や好奇に満ちた目だ。寂しい一人暮らしの女性が、《ソルト》を買う。連中の頭には、彼女をどのように使うかという邪推が巡っているのだろう。

彼らの脳裏に浮かぶのは可愛らしい使用人か、はたまた……何にせよ、それにどうこう言うつもりはない。ドアの閉まる音がする。彼らがわたしの住む小さな城^{マンション}を出て行ったのだ。

わたしはため息をついて、安っぽい椅子ごとぐるりと回した。視界が眩しいディスプレイから、薄暗い部屋へと変わる。梱包材を剥がされ、ガウンだけになったソルトがそこにいた。

眼を閉じて直立している少女。薄暗い部屋に、わたしと年端の行かぬ少女(コメント：ガイノイドではあるけれど)が一人。

傍から見れば、なかなかインモラルな光景だなとわたしはちいさく笑う。男たちが邪推をするのも頷ける。先程のように搬入されている《ソルト》を死体と間違えて通報をされたという滑稽話は、彼女が産まれてこのかた、絶えることは無い。

実際、インモラルな事をしているのだ。わたしは今からある種の蘇生をする。妹を蘇らせる。

私はパソコンの画面に向き直る。そこには無数のSNSのアカウントがあった。そのどれもが、時間が十年程前で止まっていた。机の上には、数枚の色あせた分厚いファイルがあった。デッド・メディアと呼ばれる、写真。その集合体であるアルバムというやつだ。今よりは幾分か若いわたしと、その隣で笑う若い女の子。

勝気そうな釣り目がちな眼と、形の良い鼻。アーチをつくる唇。不愛想なわたしなんかよりもずっと可愛い。どこか、《ソルト》に似ていなくも無い。

わたしなんかよりもずっと生きている価値のある妹だった。

シークバーが、全ての質問行程を終わらせたことを告げる。私は、パソコンから、薄い、艶のある黒色のチップをパソコンから取り出す。

すぐに失くしてしまいそうなほど小さなチップだった。多分、ひ弱なわたしでも少し力を加えれば簡単に割ることが出来るだろう。するつもりは無いけれど。

21Gメモリ。そのあまりに小さく、あまりに薄っぺらいチップは世間ではそう呼ばれていた。21Gとは、容量をあらわすものではない。人の記憶容量をメモリにするのはナンセンスではある。

しかしながら記憶をもしも計測することが出来るのであれば、もっと膨大な容量になる。人の脳の記憶容量はおよそ1ペタバイトと考えられている。少しばかり古い記録媒体であるDVDディスクに換算するならおよそ20万枚になる。一般的なMP3形式なら数千年分の記録になる……人間と言うのは、何かしら別のもので換算しなければ気が済まないようだ。

閑話休題(コメント：まさか、日記に使うとは思わなかった。ひとりごとにせよ、日記にせよ、蘊蓄を交えたくなるのが私の癖のようだ)

わたしは、チップと《ソルト》を交互に見つめ、ぼつりと呟く。

「これが、今日からあなたの魂になる」

人が死ぬと、21グラムほど体重が軽くなるという。それが事実なのかどうか、恐らく確かめた人類はいないだろうけれど。

ロマンチストやSF作家なんかはそれこそが魂の重さなのであると雄弁に語った。消えた21グラムを吹き込むことは不可能だけれど、ロボット相手ならそれは不可能な事では無い。メモリが^{オルタナティブ}魂の代替品になる。

わたしはソルトの小さな頭を胸に抱くように、腕をまわす。こんなことをするのは随分久しぶりだ。それが、合成の髪とシリコンの肌を相手にしたとしても。

首の後ろにある小さなスロットへと手を伸ばした。そこに21Gメモリを差し込む。

やわらかな肌の感触と裏腹に、カチリと機械の良い音がした。

「ハロー・ワールド。ソルト」

わたしはソルトの耳元で囁く。起動の合図だった。

ソルトがゆっくりと眼を開けた。緑色の瞳が、わたしを見つめていた。澄んだ目だった、その奥でどんなことが行われているのだろうとぼんやり思う。

「あなたの名前は？」

「……^{ハダリ}葉多利。神林・葉多利」

記憶の中の声とは違った。それもそのはずだ。いくら記憶の中に近付けようと調整したとは言え、所詮は合成音声なのだ。誰それと言うアクターの声をサンプリングして、そのピッチやイントネーションをいじくっただけの合成音声。そのくらいは分かっていた。けれども、胸の奥がちくりと痛む。

「……認証。あなたの姓名を教えてください」

これからわたしの妹になる機械の発する、違う声。違う口調。あまりに事務的な言葉。

心臓を熱した針で貫かれたような気がした。真っ赤になった金属に胸を刺される痛みがした。焼けてきゅっと肉が締まり、抜けなくなった。じゅうじゅうと焦げる心臓の匂いを嗅いだ気がした。けれども、わたしはその痛みに耐えることが出来た。耐えて来た。

これまでも、これからも。

「神林・芽衣。……あなたの、お姉ちゃん」

「……お姉ちゃん」

ソルトは……葉多利は笑う。唇が写真データのままでのアーチを作る。堪え切れない涙が、葉多利のガウンを濡らした。

「お帰りなさい……お帰りなさい。芽衣」

「うん。ただいま、お姉ちゃん。えーと……」

葉多利の視線が泳いだ。するりと器用に私の抱擁を潜り抜けて、少女がとことこと部屋を駆ける。

部屋の隅に積まれたティッシュの箱。それを取り出して少女は私の傍に戻って来た。

「取りあえず、顔拭いた方がいいんじゃない？」

ニィと、少しだけ照れくさそうに葉多利が笑った。

その言葉に、私は聞き覚えがあった。記憶の奥を探る。

――「ほら、顔拭きなさい。みっともない」

葉多利が生身でいたときのことだ。多分、十年以上前のことになる。家族で遊園地に行ったとき、彼女ははしゃぐあまりに転んで膝小僧を擦りむいた。ぴーぴーと泣いている葉多利に、私はそう言ってハンカチを貸してやった。

葉多利は、覚えていてくれたのだ。

今まで感じていた苦しみが、祝福に思えた。

祝福を受け入れ、私はこれから生きるのだ。

^{ハダリ}
彼女と共に。

これから書く日記は、多分、幸せが綴られていくだろう。

2019/7/4 神林・芽衣のテキストファイル

葉多利は破瓜^{はか}の歳に死んだわけだ。どうして死んだかなんていまやどうでもいい。世の中には重要なこととそうでないことがある。つまり彼女の死因は後者だということだ。

あのときまだ十九歳だったわたしは死というものに慣れていなかった。だからひどく取りみだしたし、一時現実と空想の区別がつかなくなった。目の前によこたわっている冷たくなった彼女は、もしかしたらつぎの瞬間、満面の笑みをうかべて起きあがるのではないか。わたしは本気でそう思っていた。しかし彼女の遺体が火葬場にはこぼれ、骨になって帰ってきたとき、わたしはその場^{くずお}に崩折れたのだった。骨壺はおもかった。

テレビのむこう側で一万五千人が一瞬にして死のうが、わたしは知らぬ顔でいられる。それなのに、たったひとり身内が死んだというだけで「悲しい、悲しい！」とさけび散らすのだ。

「元来人間は現金な生き物なのだ」と、ある友人はいつか。「理想と現実の違い。理想は本質に沿って動くが、現実には本質をあざわらうかのようにのりくらりと流れるのだ」ともいつか呟^{ふう}っていた。しかしかれのかく言うのは、べつにわたしを諭すためでも理想論を語る教育者を諷^{ふう}するためでもなく、ただ自分自身を正当化するためだけなのだ。そういう点で言えば、かれは根っからのエゴイストであり、同時にエゴイストを嫌悪していたというわけだ。

かれとは昔、とてもふかい仲だった（コメント：『とてもふかい仲』でとどめておこう。どちらにせよ、もうむかしのことなのだから）。そしていまも、ふかい仲ではなくなっただけで関係はつづいている。

「他人になんて思われようが知ったこっちゃない。嫌われようが疎まれようが俺は俺だ」というのもやはり口癖で、わたしがかれの過激な言動を諷^{ふう}めようとする、かならずこう返してくるのだった。これはかれの内面をよくいいあらわしていて、けんか別れしたはずの元恋人のいえに平然と酒を携えたずねてくる自分勝手加減に、その証左が垣間みえる。

とにかく、今日もかれはわが家に晩酌しにきた。そしていくつかの、わたしを諭すようではない、理想論者を諷^{ふう}するようではない、ただ自分の酒の肴にするためだけの話をして去っていった。黒霧島の一升瓶をわすれていった。

かれがやってきたのは夕方の六時頃。そのとき、葉多利とわたしは、せまい部屋のなかでファッションショーをひらいていた。

ファッションショーという聞こえはいいが、結局のところ年頃の姉妹がやる着せかえごっこ

のようなものだ。いつまでも葉多利にガウンを羽織らせているわけにはいかない。そう思って昼間のうちに彼女に似合いそうな洋服を買いあさって来、気に入ったものを葉多利に選ばせていた（コメント：これも人工知能が定める行動予測のうちのひとつに過ぎないのだが）。

オレンジ色のワンピースを着た葉多利が、くるりとひとまわりして「どう、似合ってる？」とわたしに訊いたちょうどそのとき、玄関のよび出し音が鳴り響いた。そして、こちらはまだなにもいっていないというのに、勝手にドアがひらかれ、さきに挙げた友人が、わが家に侵入してきた。

「言葉と行動が一致しない人間にひとつ共通していえるのは、多様性を手放しに肯定している、ということだ。そういう人間は自分の言動に矛盾を自覚したとき、多様性という言葉でもってそれを正当化し、まるで自分が聖人君子になったみたいになにやにや笑いながらこう説いてくるのだ。『ひとそれぞれ、ひとそれぞれ』と。しかし奴らはなにもわかつちやいない。多様性は結論すべきものでなく、前提すべきものだ。そしてその前提を保ったうえで、いくつもの多様性、あるいは個性とよばれるものは淘汰されなくてはならない。ちょうど自然界がそうであるように」そう語りながら廊下をのしのし進んでくるかれを、わたしと葉多利はリビングで待ち構えている。

かれは、これもやはり平然と、他人の冷蔵庫を勝手にひらき冷えたソーダ水を二三本取りだすと、「言動の不一致という点において、やはりきみも自分自身を正当化してしまっているらしい」と言いながらリビングのドアを開けた。「どうのむかしに別れた男から、いつまでたっても部屋の合鍵を取り返さない女がいる。返せといえば男はすなおに返すだろうが、その女はいえに勝手に上がりこんでくる男をよしとしてしまっている」

わたしは黙って聞いている。

かれはわたしを意に介する風もなくローテーブルのまえに胡坐をかくと、ビニール袋から黒霧島の一升瓶を取りだす。そのあいだも「要するにその女は後悔している。しょーもない痴話喧嘩で別れ話を切りだしてしまったことをふかく悔いている。しかし彼女は男勝りなうえ頑固ときているから、その気持ちを伝えようとは一向に思わないってわけだ」と語りつづける。

と、そのとき葉多利がおもむろにつぶやいた。

「誰このおっさん」

おっさんとよばれた男は一瞬目をみひらき、そのあと葉多利の頭からつま先までをまんべんなくみた。

「ガイノイドか。おまえもミーハーだな」男はいう。

「ミーハーって……最近のはもてるひとが多くなってきてるし」

「これをはもてるのはだいたい自分ではなにもできない金持ちか、超がつくほどの物好きか、性犯罪者予備軍だけだ。いや実際世間には、このガイノイドをラブドールとかの発展形としてみている層もあるんだぜ。たとえばほら、フェミニストだとか。しかし、これは性犯罪を未然に防いでいるという見方もできる。警視庁発表によると、セクサロイドが発売されてから性犯罪の事件発生数は減少傾向にあるらしい。被害者の性別にかかわらず、だ（コメント：あとから確認したがこれは本当だった）。

たしかに性犯罪はへった。風俗通いする独身のおっさんもへった。援助交際する女子学生もへった。世界はすこし平和になった。しかし少子化はより深刻化しそうだ」

かれはどこからともなく取りだしたグラスに黒霧島とソーダ水を入れる。

「ちょうどいい。ガイノイドにまつわるいくつかの話を今日の酒の肴にでもしようか。これに関しては話題に事欠かないんだ。警視庁捜査一課特殊犯捜査第八係の若きホープとしてはね。……さて、なにから話そう。ン、じゃあ、ガイノイドの オリジナル 原型 となった ジェイ J という男の話からはじめようか——

ガイノイドの原型となったJという男の話から始めようか。

かれはもともと米国の軍人だった。とても有能で若くして大尉にまで登りつめるが、イラク戦争中、味方が投げ損ねた手榴弾をもろに食らって両足と前立腺を失ってしまう。運よく一命はとりとめたものの、未来への展望とこれまで積みあげてきたキャリアを一瞬で奪われたかれには不満がのこるばかりだった。愛しあっていたはずの妻も隣家に住んでいたしがいない男に寝とられてしまうし、周囲の憐憫のこもった視線がひどくわずらわしかった。そんなわけで彼はただれた生活を送っていたわけだが、そこにある日、米軍からとある依頼が持ち込まれる。その依頼の内容とはすなわち、長く秘密裏に進められていた義体化計画の第一号実験体になってもらいたい、というものだった。Jはこれを快諾した。

かれの身体はつぎからつぎへと改造されていった。皮膚は人工皮膚に、骨は水酸燐灰石製のバイオマテリアルに、関節は球体関節、筋肉はスプリング、神経系は電気回路に、肝臓は
エレクトロントラップ
半導体二次電池に、心臓は冷却水循環装置、血管はそのチューブ、肺は熱交換器に（コメント：なるほど葉多利の呼気があたたかいわけだ）、消化器系は一切排除され、その空間を情報処理系統が占める……という具合に、Jの首から下は完全にロボットと化したわけだ。

やがて眼も耳も鼻も口も機械に置き換えられ、そして最後にのこったのは脳だった。脳を無機物に置換することができれば人間の完全な義体化に成功する。

ここで話題を転換する。人間の脳のなかにある大量のDVDは、べつに20万回分の映画を記憶するためにあるんじゃない。（コメント：こめかみを人差し指でたたきながら、かれはいった）ここには生命誕生以来40億年にわたって紡ぎあげられてきた生命活動の基礎となるプログラム——あるいは詩的に言うて『心』——が保存されている。断言しよう、心はプログラムだ。家族が死んでかなしいと思うのも、強大な権力に反感を抱くのも、だれかを好きになるのも、すべてはプログラムの致すところってわけだ。

義体化計画研究チームは総力を挙げてこの心という名のプログラムの開発に着手した。ダイナミックかつ繊細に入り組んだ心の処理手順アルゴリズムを読み解くのは困難を極めたが、世界中でおこなわれているあらゆる先進研究の50年先をいくとうわさされる実態不明の研究組織の助言をかりて、わずか四年でその基礎プログラムを完成させる。あとはそれにJの個別の人格データを組みこむだけだった。芽衣、おまえもやったはずだ。人格再現プログラム——途方もない質問に回答し、その人格の解答パターンや思考パターンを再現する。……おまえが回答したのはせいぜい1千回どまりだろうが、Jの人格再現には10万回以上の質問が費やされた。もちろんすべてかれ自身が回答した。

さて、こうして完成された人工人格はたびかさなる試験運用とことこまかな修正が施されたのち、Jの脳と置きかえられる。

結論から言うてこの実験は成功だった。JはJのまま、記憶の欠落、人格の変異などは一切なかった。とはいえ、人間には感知できないレベルでの変異があったのでは？ と訊かれたらなんとも答えがたい。しかしかれにはたしかに思考回路というものがあつたし普通のロボットにはありえない自我とよべるものも持っていた。——たとえば、こんなことがあつた。脳が置きかえられたあと、実験チームはかれを数日にわたって実験室にとじこめ、不具合がないか最終検査をしていた。そのあいだ、かれは全身にプラグを装着させられてはいたものの、意識ははっきりとしていて、検査とは何ら関係のないことを考えながらイスにじっと座らされていたという。……どうだ？ きみは耐えられるか？ 何十時間もイスに座りっぱなしだなんて。きっと無理だ。俺なら2時間でギブアップしちゃうね。まともな人間になればなるほど、これは不可能ごとになっていく。そういう点でいえば、Jもまともな人間だったってわけだ。

検査が5時間ほど経過したあたりで、かれはついに耐えられなくなって、何でもいから映画がみたい、といいだした。研究チームは困惑した。当然だ。彼の人工脳はむきだしになって、いたるところにプラグがさしこまれていたんだから。しかしこれが逆説的な自我の説明にもなっていたわけだ。なぜなら、ロボットが退屈を感じることはないから。退屈を感じるのは自我をもった存在にだけ許されている。Jは十数の映画のタイトルを早口に並べたてると、研究チームのなかで一番若かった研究員をレンタルビデオ店に走らせた。この若手研究員、実は日本人で、名前はわすれたが、これがのちのち研究室から人格再現プログラムの技術を日本にもち帰り、いまやガイノイドの世界トップシェアを勝ちとるにいたる大企業を設立することになるが、これはまあ、いわゆる『別のお話』ってやつだ――

――かれは、からになったグラスに黒霧島だかソーダ水だか知れない液体を注ぎこむ。グラスの半分までいれると、そこにまた、黒霧島だかソーダ水だか知れない液体を注ぎこんだ――

――焼酎にソーダ水をいれようが、ソーダ水に焼酎をいれようが出来上がるのは同じだ。焼酎のソーダ割り。ここには可換性がある。ところで、ロボットにかぎりなく近づいた人間と、人間にかぎりなく近づいたロボットとは、果たして同値といえるだろうか。Jの肉体はかぎりなくロボットに近づきはしたものの、心のほうは人間のそれそのものだったはずだ。人間の人間たる所以が心の存在であるとしたら、ロボットとの人間にあらざる所以が心の不在であるとしたら、Jは人間であったといえるが、しかし、こんなことをいう人間もなかにはいたわけだ。『いったいJは何者だ?』――

――いったいJは何者だ?」

かれはそれきりで黙ってしまった。こたえをわたしに求めているのではない。それ以上言葉をつぐ必要がないのだった。

ひどくながい時間がたったような気がした。かれはグラスに酒を注いではそれをのみ干すという作業に没頭しているようだった。葉多利とわたしといえば、さて、そのときいったいなにをしていたのかよく覚えていない。とりあえずかれの話を聞いていたことはたしかだったが、それでもなにもせず聞いていたはずもなかったろうから、きっと他愛のないことでも考えていたのかもしれないし、そうでなかったのかもしれない。

やがてかれは、沈黙のあいだに流れる、死んだ時間を惜しがるかのようにふたたび語りだした。「誰だってこんなことをすき好んでやったりなんかしない。Jは米軍からの依頼がきたときすでに末期のがんに犯されていた。退役後、墮落をきわめ、酒と煙草と薬物ドラッグにあけくれた生活が災いしたのだ。生きるためにかれは肉体を捨てざるを得なかった。そしてかれは生きのびた。こうしてみればかれの選択に間違いはなかった。いや正確には、間違いのみつげようがなかった、というべきか。結果論、彼は生きのびた。それだけだ。が、しかしかれはその一年後、自死の運命を選ぶ。ある日突然発狂し、空中に漂うなにかを捕まえようとするように部屋中を走りまわったあと、みずから人工皮膚と人工骨を破壊し、むきだしになった冷たい心臓を、いや、冷却水循環装置を握りつぶしたわけだ。Jの体内で絶え間なく発生する熱量は、冷却水のとどこおりによって行くあてなく蓄積されてゆく。そしてある段階でそれは限界に達し、オーバーヒートした。かれは機能を停止した。

Jは電源プラグを抜いたTV画面のようにうんともすんともいわなくなった。再起動したとしても、以前のJのような挙動はみせない。明らかになにかが変わっていた。これはおかしいと思った研究者たちは、Jをばらばらにし、全身を精密検査した。その結果、かれの人工脳、これが

本来の重さから21グラムだけ軽くなっているのがわかった.....

果たしてこれが人為的ミスによるものか非科学的な俗説に説明できることかは今となって判然としない。腐れオカルトマニアたちはこの出典元のさだかでないわき話に狂喜乱舞しているし、科学者ははじめから都市伝説のたぐいに過ぎぬと決めこんでかかっている。.....俺がこう話すのも、ただ酒の肴のひとつにでもなればと思っただけのことだ。ふかい意味なんてこれぽっちもないんだ。ただ、俺がいたいのは、だ。こんな神話があつて.....いや、この話はもういい。すこし冗長すぎる気がする。わからなくなってきたぜ。酔ってるんだ。.....すこし長居をしすぎたかもしれない。そろそろおいとまさせてもらおうか、押しかけといてこんなことをいうのもなんだが.....」

かれは立ちあがると、ふらふらした足取りで玄関口にあるいてゆく。葉多利とわたしはそのあとにつづく。

「これから仕事が忙しくなるかもしれない」不意にかれはいった。「今度いつ来られるかわからないや。ごめんな」

「わたしは来てなんてたのんでないよ」

「そうだったかな。でもまあ、なにかあつたらここに電話してくれ」

かれは新品の名刺をわたしにわたして、ドアノブに手をかけた。

「その電話番号だったら仕事中でもつながる。使ってもいいし、あるいは使わなくてもいい。おまえがきめることだ」

「.....」

「でもまあ、きっと必要ないだろう。今はそいつがいる」

かれは葉多利をみた。

「こいつの名は？」

「葉多利よ。わたしの妹」

「.....ハダリか。なるほど。いい名前だ」

「そうね」

「しかし、『似ていることは異なる存在であることの証左にほかならぬという原則を見失わずにおき、みだりな混同に陥ることだけは避けねばならない。』」

「なに？」

「上司の口癖だ」

かれはコートを肩にかけてままドアをひらいて玄関をでた。そしてドアをあけたままにして最後にこういった。

「ハダリ、そのワンピース似合ってるぜ」

「あ——」ありがとう、と葉多利がいい終えるまえに、かれはぼたんとしてドアを閉め、足早に去っていった。

部屋のなかが急にしずかになった。

葉多利はせまい部屋のなかで、オレンジ色のワンピースのすそをゆらしていた。

2019/7/7 神林・芽衣のテキストファイル

「次はいつになるか分からない、って言ったじゃない。随分早いよね」

彼は、そうすることが当然であるかのように上がり込む。そうだったかな、覚えていない、などと曖昧に返事をしながら、いつものように酒瓶を床へ置いた。

「のんだくれだ」

葉多利がじっとりとした目線を浴びせると、彼は自嘲的に笑いながら「違いない」と言い放った。彼の靴下は汚れていた。土の飛沫が乾いたような白い跡が残っており、土手でも歩いたのかと

思いつつ玄関に目をやると、私の靴、葉多利の靴（コメント：キャメルカラーのサマーブーツは、オレンジのワンピースと相性が良い。新品だ）、そして彼の革靴が並んでいた。私は、それらが「並んでいる」という事実、独り目を丸くしていた。

彼に、靴を揃えるという習慣があっただろうか？

リビングに視線を戻すと、相変わらず酒ばかりを流し込む彼の自堕落な姿が目映った。

直後、「何かつまみはないか？」という彼の声で、ちょっとした疑問などは思考の彼方へ消えた。彼の身勝手なところは、出会った当初からちっとも変わってはいないし、素直につまみを探してしまう自分も変わってはいなかった。茶棚の奥にミックスナッツが仕舞われていたことを思い出し、黙ってそれをガラスの中深皿に注ぎ入れる。

どうぞ、と差し出すより先に、彼はさらに手を伸ばし、ナッツをほおぼった。押しつぶされたナッツの香りが立ち込めて、私も思わず手が伸びてしまう。

「お姉ちゃん、それ、好きだよ」

横からひよっこ顔を出した葉多利が、破顔というにふさわしい笑みを湛えると、愛おしさで胸が押し広げられるような感覚を覚える。葉多利のその一言は、この瞬間まで片時も離れなかった——死が二人を別つことの無かった世界線を思わせる。葉多利の、昔を振り返るような言葉の数々（コメント：それらはもちろん、21Gメモリに刻まれた情報から演算された表現なのだが）は、失われていた時間を埋めていくかのように感じられた。

「葉多利も食べる？」

冗談めかして皿を差し出してみると、彼女はその細く白い指先でアーモンドをつまみ、ほんの少しの間眺める。そして、それを口に運んでしまったのだ。

「ああ、葉多利！」

「おいしい」

ニコニコ笑う彼女を咎めることは出来ない。私が差し出したのが悪いのだ。ソルトには消化機能がない。人間と同様の滑らかな運動機能や、あらゆる外部刺激を感知し得る無数のセンサーを並べると、消化機能は除かざるを得ないのだ。この点は、プロトライブから現在に至るまでに変わっていないらしい。（コメント：このことは、彼からJの話聞いたのがきっかけで、調べてしまった。）

「ど、どうしたら——説明書はどこにやったかな」

私が慌てふためいていると、彼が隣で失笑した。

「説明書なんて、今はもう製品にはついていないだろう。ネット上に落ちてるさ。さては確認してないな？」

凶星を指されて返す言葉を失う。

「ソルトの取り扱いも把握できていない『お姉ちゃん』に、俺からアドバイス」

彼は、二つあった酒瓶のうち一つを差しだし、それを葉多利に飲ませるよう促した。

「葉多利は未成年よ」

「ソルトに法律は関係ないだろう。……彼女は人間じゃない、あくまでロボットなんだ、メンテナンスも要る」

そんなことは分かっている。分かっているはずなのに、言い返すための言葉は喉につかえて出で来ない。

「ソルトは食事が出来ないわけじゃない。消化が出来ないことに加えて、消化管の代わりに付けられている経口挿入物タンクの容量が1Lしかないから、食事に向いていないというだけだ。タンクは胃と違って伸び縮みできない。」

「タンクを取り出すの？」

「タンクは取り出せない。タンクが1 L近くまで溜まると、トイレで内容物を外に出す機能が搭載されている。ただ、タンクの中身を自浄する機能は備わっていないから、本来は大量の水で流す。酒はその代用品だ。度数が高いほど洗浄作用が高い」

流れるように話す彼の説明を聞いている間も、葉多利はナッツを口に運んでいた。葉多利のAIに、娯楽のひとつとして食事が記憶されてしまったのかもしれない。

「ほら葉多利、これも入れておきな」

彼が葉多利に酒を渡すと、彼女はありがとうとお礼を言い、それを口にした。

「酒はたくさん置いておくといい、俺のためではなく、葉多利のために」

彼はその後、何時間か家に居座った。葉多利は楽しそうだし、それは私も同じことだった。しかしそれでも、なぜだか違和感を覚えてしまう。葉多利と彼が、同じ空間に存在しているということに。彼と出会ったのは、私が葉多利を失って間もない頃だった。私は、彼に葉多利の代わりとしての価値を見出していたのかもしれない。葉多利とは似ても似つかない、彼に。

葉多利が私のもとへ戻ってきた今、私にとっての彼は――？

2019/7/15 神林・芽衣のテキストファイル

葉多利と私の生活は、日に日に自然なものになっていった。私の毎日の楽しみは、一食だけ葉多利と食事すること（コメント：食後に大量の飲酒を促すことにも、少しずつ抵抗がなくなってきた）、風呂場で葉多利の肌を優しく洗ってあげることだった。この柔らかな肌が、耐水性と油脂性を備えた人工皮膚であるという事実は、思い出さない日が増えた。

午後、また彼が訪れた。

「土産を買ってきたぞ」

彼の手に握られていたのは、文庫本一冊も入らないであろうサイズの、小さな紙袋だった。私が手を伸ばすと、彼は私をかわし、それを葉多利に差し出した。

「開けていいの？」

葉多利が目を輝かせる。彼は、おうと適当にうなずき、リビングカーペットの上に胡坐をかいた。葉多利が開けると、オレンジ色が鮮やかな小瓶が姿を現した。

「マニキュアだ！」

葉多利は、おもちゃを与えられた子犬よろしくはしゃぐ。私は、彼の方を見やり、皮肉たっぷりに「素敵なプレゼントね」と言ってしまう。

「俺は昔、ある女に贈り物をした。香水だったかな、健気にも列に並んだ覚えがある。だが悲しいことに、数日後それをゴミ箱の中から見つけてしまった。教訓を得たね、供されるラーメンの味は、列の長さに比例しないんだと。俺はそれ以来その女に贈り物をしなくなった」

「あれは、においが気に入らなかったから――そうやって遠まわしに言うの、やめてくれない」

「最初に遠まわしに非難したのは、どっちかな」

まただ。別れ話に発展した日も、確かこうやってどうでもいい喧嘩をしたのだ。静かに嫌味をぶつけ合う私たちを他所に、葉多利はマニキュアを試し塗りしている。これ以上言い合っても、葉多利を困らせてしまうだけだ。

飲みたい気分になってしまった。私は冷蔵庫からソーダ水を取り出し、彼に差し出した。

「どうせ今日もお酒持ってきてるんでしょ。私にも割って」

すると、彼は怪訝な表情を浮かべる。

「酒？ 酒はない」

「嘘。おつまみもあるよ、チャーシューなら」

「いや、要らないな」

どうも会話がかみ合わない。持って行き所の無くなったソーダ水を、そっと下した。そのとき、彼の携帯がけたたましく鳴る。彼はハンドサインで小さく謝ると、廊下に出て電話を取った。聞き耳を立てるつもりで廊下を覗いたが、思ったよりもずっと小さな声で会話しており、事の重要性を感じる。このあと彼は現場に向かうのだと、なんとなく思った。

廊下の先に、玄関が見える。そこには、私たち姉妹の靴が並び、その秩序を乱すように彼の靴が脱ぎ捨てられている。彼らしいな、と思うと同時に、刹那、先日の玄関先が思い出された。

胸にじわりと広がった違和感は、彼の「悪いが、仕事だ」の一言にかき消された。

夜になって、彼の忘れ物に気が付く。いつ忘れたのだろうか、腕時計だ。青い文字盤は、正確に時刻を刻んでいる。今日忘れたのか、先週忘れたのか——分からないが、知らせておいた方がいいだろう。以前渡された電話番号に電話を掛けると、ワンコールでつながった。

「おお、明日取りに行く。探していたんだ、助かった」

電話はすぐ切れた。

2019/7/16 神林・芽衣のテキストファイル

彼が訪れたのは、夜遅くなってからだった。

「久しぶりだな、最近仕事が忙しくて」

「なにいつてるの、昨日会ったじゃない」

「そうだったか？」

彼は玄関に靴を脱ぎ捨て、ずかずか上がってくる。忘れ物を受け取ってすぐ帰る気はないようだ。昨日は飲んでいなかったはずだが——最近、彼の記憶が曖昧になっているのを感じる。彼の健康状態が気がかりだ。（コメント：葉多利がいきものでないことを忘れがちな私は、人のことを言える立場でないが）彼の左手には、腕時計がはめられている。急ごしらえに買ったのか、合皮のベルトが安っぽい。

「ハダリ、爪が派手だな」

焼酎の大瓶を開けながら、彼が呟いた。葉多利は不思議そうに顔をゆがめ、こぶしを作って、オレンジに輝く爪を隠した。

2019/7/20 神林・芽衣のテキストファイル

今日は一日、葉多利とプールで遊んだ。とはいえ、人の多い大型のプールに連れていくことは出来ない。近所の市民プールで、ただただ何往復も泳いだ。

今日一日分の力を使い果たしたのか、彼女は少しぐったりとして、先に床へついていった。葉多利のために照明を落とし、ソファに腰かけていると、ついそのまままどろんでしまう。

夢とうつつの境界線をうろついていると、静かな部屋に、玄関の鍵が開く音が響いた。この部屋の鍵を持つのは、私と葉多利の他に一人しかいない。

起き上がる元気はなかった。靴が脱ぎ捨てられる音、そしてはだしの足が廊下を闊歩する音を、黙って聞いていた。

細く開いたカーテンの隙間から、月光が差し込み、深い影を落とす。

「どうしたの、こんな遅くに」

返事はない。名前を呼ぼうと開いた口に、彼の唇が押し当てられる。右手は首筋を乱暴に這い、半ば引き裂くようにして部屋着の襟をこじ開ける。唇越しに体重を掛けられると、私の上半身

は抵抗も出来ず座面へ倒れ込む。長い舌は気道を塞ぎ、酸素の行かない頭が下した判断は、とにかく足をばたつかせることのみだった。疲れ切った私の足は、彼の腕に、足に押しえつけられると動きを失い、与えられる刺激のままに痙攣する。

いや、やめて、放して。叫んだはずだが、どのくらい声に出ているだろうか。分からない。

意識を手放すか手放さないか、というところで、これの動きがぴたりと止まった。直後、彼の体は力を失い、私の上に倒れ込んだ。彼の頭部から、何かが流れ出て、私に伝っては部屋着にしみこんでいく。

「葉多利——」

私に見えていたのは、割れた黒霧島の酒瓶を片手に、月明かりを受ける彼女の立ち姿だった。

「お姉ちゃん、もう大丈夫だよ」

周囲に広がるビンの破片、動かない彼。私はようやく状況を理解した。

一度は愛した男が、自分の腹上で死んでいる。そのような状況にあっても、私の中にあるのは、葉多利に対する愛情と恐怖のみだった。私を助けてくれた葉多利、大好きな笑顔の葉多利。しかし、人を殴り殺すという選択肢を瞬時に取ってしまう彼女の行動は、どこから来たのか。この二週間で、私が葉多利を変えてしまったのか。それとも、最初から21Gメモリに刻まれていた彼女の本性を、ソルトが引き出した結果なのか——

姉のために人をも壊してしまう彼女に、強烈に惹きつけられる。

突然、死体がビクンと震えた。目を見開き一歩後ずさる葉多利。彼はゆっくりと体を持ち上げ、家具伝いに壁へ近づくと、照明のスイッチを入れた。血まみれの室内を想像し、一度は目をきつく瞑る。しかし、再度ゆっくりと目を開くと、そこに散らばっていたのは血ではなく「水」だった。彼の頭部からは、今もこんこんと水が湧き出ている。

「やってくれたな、畜生」

小さな声で毒を吐く彼。水の湧く頭上に、小さなスパークが見て取れる。

「最後の同期情報によれば、こうするのが正解だったはずだが、違ったのか。最近どうも個体間同期が上手くいかない、クラウドの機能に異常があるのか？」

彼が一人、何か呟いている。すべてを聞き取ることは出来なかった。

「そこのおまえ」

彼が突然指さしたのは、葉多利の方だった。

「俺には分かるぞ、お前も次世代型なんだろう？ お前は誰と同期している？」

ばつん。大きな音を立てて、彼はくずおれた。彼が言っていたことの意味は、まったく理解できなかった。

「お姉ちゃん、明日はちょうど、粗大ごみの日みたい」

葉多利が唐突に口にした「粗大ごみ」という言葉にどきりとする。

人は息絶えてもゴミにはならない。この国では、死すれば仏になるという考えさえある。しかし、壊れたソルトは確かに粗大ごみなのだ。誰も供養などしない。動いていた頃は、あんなにも人に近似していたというのに——

どこまで人に似せれば、一体何を集めれば、人とソルトを等号で結べるのだろう。

「お姉ちゃん、この人の電話がここにあるのは良くないよ。突然ソルトが返ってこなくなったら、持ち主がGPSで探しちゃうかもしれない」

促されるままに、電話を掛けた。しかし、部屋の中で呼び出し音はしない。

スリーコールで、電話がつながった。

「もしもし、どうした芽衣、こんな遅くに」

電話越しに、彼の声が聞こえる。私は、反射的に電話を切った。

どうしたこと——。今電話につながったのは本当に彼？　ここにいる彼そっくりだったソルトは一体何？　今までうちに来て酒を飲んだくれていたのは誰？　それにさっき言っていた『お前は誰と同期してる？』って言葉はどういう意味？

ソーダの泡のようにあふれ出す疑問が脳内を駆け巡る。額に熱を感じると私は椅子に腰かけ、目を閉じて深呼吸を繰り返した。

「お姉ちゃん。少し休んで。あとは私がやるから」

そういうと葉多利はごみ袋やほうき、ちりとりなどを持って、せつせとソレを片付け始めた。

「——ねえ。葉多利。その、さっきソレが次世代型って言ってたけどあれって……何？」

「うん？　そんなこと言ってた？」

後ろ姿でほうきを掃いている彼女はそう言った。

えっ。あの距離で私が聞こえて葉多利が聞こえてないはずがない。ましてソルトが一度聞いた会話を忘れるなんてありえない。

言葉を失った私はそれから葉多利になんて声をかけたらいいか分からなくなってしまった。

私は雑巾で床を拭いている彼女を尻目に、うなされるような熱と共にベッドに潜って寝た。何かを忘れるかのように。現実から目を背けて。

2019/7/21 神林・芽衣のテキストファイル

朝、ごみ収集車が鳴り響かせたごうんごうんという重低音で私は目覚めた。

「おはよう。お姉ちゃん」

葉多利は起きた私ににこやかな笑顔を見せてくれた。昨日のことなんて何もなかったかのようなそんなすがすがしい笑顔だった。

2019/7/27 神林・芽衣のテキストファイル

あれから一週間が経過した。

一人で居ることがすっかり怖くなってしまい、外出すらままならない状態になってしまった私は、近所の食料品店へ買い物をしに行く際にも葉多利を連れて行くようになった。

この一ヶ月の間、私の周囲で何が起こっていたのか。その答えは未だに持ち合わせていない。あの夜以来、彼が一度もわが家へ顔を出さないのは、どのように捉えれば良いのだろう。以前に渡された彼の携帯電話へ掛ければ何か判ることは確かなのだが、その「何か」が果たして良いものなのか、悪いものなのか、私には皆目見当もつかなかった。

つい先ほどからこのように日記をつけていた途中、突然、携帯電話が鳴り響いた。電話の主は……彼だった。

通話ボタンを押すことを躊躇っている間にスリーコール。

着信に応じるための深呼吸をしている間にツーコール。

覚悟を決め、おそろおそろ通話ボタンを押した。

「もしもし、俺だ。用件だけ手短に。今夜十時にいつもの公園へ来てくれ。オーバー」

一方的。あまりにも一方的で理不尽。けれど、こちらの事情なんてちっとも鑑みない振る舞いが彼らしくて、妙に懐かしくて。気付けばホッと胸を撫で下ろしている自分がいた。

指定された場所は、別れ話を切り出してしまった公園。

一瞬、葉多利を連れて行こうかとも考えたが、いつまでも姉が妹に甘えているわけにもいかない。幸い公園はわが家の近所だ。一人でも大丈夫だろう。

公園に着くと、彼の姿はすぐに見つかった。ご丁寧にも、あの時に私たちが座っていたベンチに腰かけていた。

「人間は自らの記憶に依存しがちだ。他人の思考を読み取れないからこそ、真に信じられるものは自身が持っている経験に基づいた記憶だけなのだ」と心の奥底で思い込んでいる。実際、それはある程度信じるに値するものだろう。何しろ、自らが嘘を吐かない生き証人そのものであり、記憶の認識というプロセスは自らの経験や知識に裏付けされるものなのだから」

声を掛けるよりも先に、彼はいつものように講釈を垂れ流し始めた。このような光景を、もう何度見ただろう。デートの待ち合わせをしていたあの頃から、彼はちっとも変わらない。

「ただし、これはあくまでも正常な人間の場合だ。『正常である』という状態を『`認識、と`記憶、が寸分変わらず合致している状態』と定義するならば、世の中には『正常でない』人間の方が圧倒的多数を占めていると言えるだろう。誰にだって勘違いや誤解は大なり小なり生じる。ならば、絶対に`認識、と`記憶、を間違えないことこそが人とソルトの違いなのか？

俺はここ数ヶ月間に渡り、とある反社会組織を潰すために被験者として組織内に潜り込み、潜入捜査をしていた。奴らはソルトをウイルス感染させて暴走させることで計画犯罪に利用しようと目論んでいたようだが、その実験結果は数多の`俺擬き、を見てきたお前も知っての通り。現代の科学技術を以ってしても完璧な`認識、と`記憶、の同期は不可能であり、イレギュラーな要素が多すぎるため実用レベルには至らず。

悪の組織によって立証されたというのは些か不本意だが、現代の科学を用いても『正常』で有り続けることは難しいらしい。まあ、逆説的に言えば現代人はロボットの完全な下位互換ではないと証明されたのだから、人間にもまだ生きている価値があると好意的に捉えることも出来るだろう。

.....ああ、すまん。すっかり言い忘れていた。`俺、じゃない、`俺擬き、がお前を襲った件について謝ろうと思っていたんだ。危険に晒してしまったようで悪かったな。本当はもう少し穏便な実験になるはずだったんだが、`俺擬き、が思いのほか暴走してしまったな。実験はあくまでも同期の完全性を測るだけのはずだったんだが、記憶に対してクラウドの容量が足りてなかったのか、同期が不十分で個体間の引継ぎが不完全になり、結果あのようなアホ個体も出来上がってしまったようだ。

ともあれ、お前のガイノイドが`俺擬き、をぶち壊してくれたおかげで奴らはクライアントから実験を見限られた。実験に使われた次世代型は全て廃棄処分。ついでに幹部クラスは全員逮捕。これでしばらく日本国内ではソルトを悪用した犯罪が起こることは無いだろう。紆余曲折あったが、これにて一件落着だ。お前のガイノイドにも後で感謝状を贈ってやろう」

「.....違うわ。葉多利は私を護ってくれただけよ」

やっとのことで口を挟むことが出来た。こちらを向いた彼に諭すように、言葉続ける。

「それから、葉多利はただのソルトじゃないの。ようやく私の所に戻ってきてくれた、大事な妹なの。だから、そんな無機質な呼び方をしないであげて」

瞬間、彼の顎に添えられていた手が頭部へ移動した。好奇心を刺激されている時に出る彼の癖だ。

「.....お前の妹の名前は`ハダリ、と読むのか？」

「そうよ。それがどうかした？」

そう答えた瞬間、彼は笑い出した。あまりに突然のことすぎて困惑する。今のやりとりの何がおかしいというのだろう。

「`ハダリ、——ペルシア語で`理想、を意味する言葉。なるほど、ソルトにはピッタリじゃな

いか。こうなることを見越して「葉多利、なんて名前をつけたのだとしたら、お前の生みの親は相当なセンスの持ち主だぜ」

彼は笑う。嗤う。私の拳が強く握りしめられていることも気付かずに、ただただ己の感情を素直に表現する。

「ああ、実に良い話を聞くことが出来た。やはりお前と居ると退屈しないな。――さて、前置きが長くなってしまったが、本題はここからだ。俺はお前に問わなければならないことがある。そのために、ここに呼び出した」

そういつて彼は私に向き直った。その表情は普段のへらへらとした飲んだくれではなく、警察官としての面持ちだった。

「お前は自分自身の記憶に自信があるか？」

「何よ、唐突に。記憶力にはそれなりに自信があるつもりよ。日記だって毎日つけているし」

「ならば問おう。お前は神林葉多利の死因を憶えているか？」

「.....そんなの、どうだっていいでしょ。わざわざ嫌な記憶を思い出させないで」

十年前に、葉多利は死んだのだ。それは変えようのない事実であり、故にそのことについて論じる意味はない。

「ふむ、では次の問い。お前はどのようにして生計を立てている？」

「.....親が生前残してくれた遺産が沢山あるのよ。それを切り崩して使っているわ」

葉多利と同じく、両親も既に他界している。幸い、両親の遺産額は莫大だったので私は葉多利を生き返らせることが出来た。

「では次。この十年間、お前は何をして過ごしてきた？」

「.....葉多利を喪って、貴方と出逢って.....それからのことは大体判るでしょ？」

その後も古傷を抉り出そうとしているかのような一問一答が続いた。途中、彼の問いの意図を探ろうと試みたこともある。しかしながら、やはり彼の考えていることは相変わらず判らない。この質問の応酬から彼は一体何を見出しているのだろう。

「それでは、これが最後の問いだ。.....いったいお前は何者だ？」

彼はそう口にして目を瞑った。私は、おもむろに口を開く。

「わたしは、私は、産まれた時からずっと、神林芽衣よ」

「.....いや、違うな。お前はかつて「神林葉多利、だった」

少し肌寒い夜風が二人の間を通り抜けた。

「何を、言っているのかしら？」

動揺を隠せない。だって、彼が話している内容は事実であるはずがないのだから。

「今から十年前、不幸な事故がとある家族を襲った。それは事実だ。しかし、死亡したのは妹の葉多利じゃない。姉の芽衣だ」

彼の言葉が、わたしの聴覚を暴力的に刺激する。

「神林葉多利にとって、神林芽衣は唯一無二の絶対的な存在だった。しかし、そんな自分の命よりも大切な姉が自分を庇って身代わりになってしまった。葉多利の心は、そこで一度壊れた」

彼の言葉が脳内を駆け巡り、反響する。何か胸の奥底から込み上げてきそうになるのをグッと堪えた。

「「神林芽衣、という存在がこの世から消えることは葉多利にとって世界から光が消えることと同義だった。故に、葉多利は彼女の姿を模し、自ら「神林芽衣、だと名乗ることで自身の世界の光を護った。幸いなことに、彼女にはマメに日記をつける習慣があった。芝居に関して天賦の才を持っていた葉多利にかかれば、日記などの記録媒体から彼女の性格を読み取って模倣すること

など造作もないことだった」

「……ねえ、ちょっと。止めてよ。そういう冗談で人を脅すのは怪談話だけにしておきなさいって」

心拍数が跳ね上がり、呼吸が不規則になる。しかし、彼はその口を閉じようとしないう。あまりにも聞き手の状態を考慮しないその理不尽さに抗議しようと見上げれば――愉悦に満ちた彼の顔がこちらを眺めていた。

「それから十年の年月が経過し、外見も内面も完全に『神林芽衣』に擬態することに成功した葉多利は、自身の購入したソルトに『神林葉多利』と名付け、自らの妹とみなした。かくして、『姉になった妹』と『妹になった姉』はかつて喪われた美しい姉妹愛をやり直す……何とも泣ける話じゃないか！」

彼は泣いていた。笑い過ぎて、目尻に涙が浮かんでいた。

「『似ていることは異なる存在であることの証左に他ならぬという原則を見失わずにおき、みだりな混同に陥ることだけは避けねばならない』」

彼は呟く。上司の口癖を。

「『ソルトによって死者の人格を完全に復元することは理論上不可能だ。どうしてもと言うのなら死者に直接訊ねる他ない』とも言っていた。そりゃそうだ！ 他人の本性を完璧に把握できている人間なんているわけがない！」

彼は笑う。ひたすらに笑う。嗤い続ける。

「お前のその狂気に満ちた歪んだ愛情を、俺は否定しない。なにせ俺はエゴイストだ。いつだって自分の知的好奇心を最優先に考える。故に、俺は真実を追い求めなければならない」

彼は立ち上がり、ワタシの正面に回った。今、ワタシはどんな表情をしているだろうか。

「さて、『お前』という存在が不明瞭であることを自覚してもらった上で改めて問おう。さあ、俺に真実を教えてくれ！」

彼は屈み、ワタシの耳元にそっと囁きかけた。

「いったいお前は何者だ？」

了

リレー小説「テセウスの少女」執筆者（執筆順）

丸山 佳祐

小原 優一郎

川邊 舞

岡田 笙

星野 佑介

第二十四回お題作品集

お題「し」

クリアハーツ

古井 龍

茶色いコートに丸いハット帽をかぶり、薄い色のサングラスをかけたマフィアみたいな恰好をした男の人と、その背中に隠れた同じ恰好をした(ただしサングラスをはずしている)私より少し小さい男の子が、門の前で地図を見ながらキョロキョロしていた。

ちょっと私が近所まで散歩しようと玄関を開けた時である。

——あっ。私がジッと見ていて目が逢ったのか、こっちへ向かってきた。そして私の家の成瀬という表札を見てインターホンを押すと、すぐに家の中にいた母が飛び出て迎えに来た。

「あら、遅かったですねえ^{つくよ}月詠さん！ ささ、あがってあがって。恵美。お茶淹れておいてね」

え、外出しようと思ったんだけどなあ。まあいつか。いったい誰が来たんだろう。お客さん来ると言ってたっけ？

お茶を入れて客間に入るとお母さんが強面のマフィアみたいなおっちゃんと談笑をしていた。「まだ仕事が残っているので、それでは私はこれで失礼致します。手短な挨拶になってしまいました。また伺いますね」

「あら、そうですか。やっぱ先生はお忙しいのねえ」

「ええ、まあ忙しいことはいいことですよ。それじゃあね恵美ちゃん。年頃なのにごめんね。急に愚息を押し付ちゃって」

——うん？ 私が疑問符を頭に浮かべているとおっちゃんは家を出ていった。お母さんが見送ると家には男の子だけ残った。

「それじゃ改めましてよろしくね。純くん。^{なるせ みな}成瀬美奈です。困ったことはなんでも言ってね。もう家族みたいなもんだから。ホラあんたも挨拶して」

「あつ、^{えみ}成瀬恵美です。どうも」

——ところでお母さん、この人誰？

私は目の前のぼさとした髪の子に聞こえないようにコソコソと話した。

「ちよっとお！ もう1ヶ月前にも話したし、昨日も話してたじゃない！」

「あっそうだっけ？」

てゆうかそんな大きな声で返事されたらコソコソ話した意味が.....。

「もう。あんた、わかった。いいよって軽い返事してたからちゃんと聞いているか少し心配だったけど、やっぱり聞いてなかったのね。まったく.....あんたの本当のパパよ」

「ええ!!」

私はびっくりして彼と母を二度見してしまった。

「嘘よ」

ああびっくりした。彼もお茶を飲みかけたのか少し咳き込んでいた。

「実は彼、あんたとの許嫁なの。さっきお見送りした時決めました」

「えっ！」

私が驚くより先に今度は彼が聞き返した。

「てゆうのは冗談で。あ、別に冗談にしなくてもいいんだけど。純くんを今日からうちで預かることになりました。この話するの三度目よ」

あ～そういえばなんか夕飯の時に今度うちに誰か来るみたいなこと言ってたような気がする。その時金曜ロードショーのコマンド一見てたから生返事した記憶が……。お客さんがちょっとウチに寄るくらいだと思ってた。

「というか、あんた覚えてないの？ 小さいころよく一緒に遊んだじゃない」

「あ、ああ。そういえば、そうだっけねえ～」

全然覚えてないや。

「お母さん。このお兄ちゃんだあれ？」

弟の^{しょうた}翔太が眠そうな眼をこすりながらやって来た。騒いだから起こしちゃったかな。

「翔太。挨拶して。あんたの本当のパパよ」

そのネタ小三の子どもにもよくやるな……。

「パパ……？ うそでしょ。死んだはずじゃあ」

いやいや、本当のお父さんも生きてるよ。

「よろしくね！ パパ。今度のパパはいつまでもつかな？」

お前どこでそんな言葉覚えたんだ。

そんなことを口走り翔太は彼に飛びついてじゃれていた。

「ところで、なんでウチが引き受けたの？」

「それはもちろん、遠縁の親戚の子だからっていうのもあるけど、なんでも魔女の修行のために来たんだってさ」

「ドコト？」

「そこら辺は私も詳しく知らないから純くん後は頼むわ」

「えっあっはい。で、では、改めまして月詠^{つくよじゆん}純と申します。急に押しかけてすいません」

彼が頭を下げるとその長髪が少し揺れた。前髪が長くちよつと目が隠れている。整った顔をしているけど少し幼さが残る顔だった。体つきは若干細い。一コ下か同い年かな。

「僕の家系は昔から魔女の血が流れていて、いわゆる魔法っていうものを扱ってきました。それで十七歳になると成人したとみなして、家から出て行くんです。それで、今回お邪魔させて頂くことになりました。一応これらは世間では秘匿されているんですけど、このことを知ったからといって罰則とかはないので安心してください」

そう彼はすらすらと台本を読むように語った。

「……まあにわかには信じがたい話ですけど、美奈さん。ご家族にこのことは話されてないんですか？」

「うん。ウチならそういうこと言われても大丈夫かなって」

大丈夫ではないです。訳が分からないです。

「え！ お兄ちゃんマジョっ子なの!? さっきさわったけどちゃんとしてたよ！」

「翔太。違うんだよ。魔法っていうのは魔法を扱う人々全体をさす言葉だから男でも魔女なんだよ」

お母さんが得意げに翔太に語った。てゆうか翔太ドサクサに紛れて何してんのよ……。

「ええっと、でも、魔法なんて信じられないですよ。百聞は一見に如かずと言うので……実際にや、やってみます」

そう言うと彼は飲み干した湯呑に手をかざし、深呼吸を始めた。オーケストラの演奏が始まる時のような、張り詰めた空気が流れ、彼はやや頬が赤くしてゆっくりと口を開いた。

『――僕の吸う血が塩であるかのように

飲み干してもそれは渴きをひどくする

あなたがくれた優しさは心を潤し 慈しみの雨を降らす——hydoor』

美声で聞き入ってしまう声だった。そして、どこか懐かしい声でもあったような気がした。

「わあ！ お兄ちゃんすごい！」

私がハッと我に返ると、彼の手から小さな雲が現れ、空になった湯呑に雨を降らしていった。

「すごいわねえ。この水飲めるのかしら」

「一応水道水レベルの純度は確保しているので飲めます。今度は雪解け水レベルまでにします。

後、この魔法なんですけど、僕たちは普段『ウタ』と呼んでいます。魔法ってワードで話を他の人に聞かれたら、危ない人に見えるかもですから」

へえ〜。しかし、すごいな。超常現象じゃないですかコレ。

「お兄ちゃん。そろそろ一杯になりそうだよ。後、なんかこの雲ちよっとずつ大きくなってない？」

「え？」

彼がよそ見をして力説していると、湯呑から水が零れはじめ雲は大きくなり次第に雨量を増やしていった。

「あ、アレ？ す、すぐに止めます！」

彼の動揺に同調するように雲は膨らみ風も出し、テーブルを広く濡らしていった。

「ちよっと大丈夫？」

私が何気なく彼がかざしている手に触れたとたん、雲は一気に爆発し、部屋中に水が飛び散り服が濡れてしまった。

「すすすすいません！」

彼が必死に誤って首を激しく上下している。うん。髪についた水めっちゃ飛ぶ。

「ごめんなさい。すぐに水を蒸発させますから！」

自分の胸に手を当てて深呼吸すると、また場の空気が緊張し始めた。

『——洗濯物に 太陽の光が流れこむ

水は服の舞台上で道化に化けて 照明を浴びて踊りだす—— endyoo 』

そう彼が唱えると衣服やカーペットについていた水が蒸発し、半分ほど乾いた生乾きの状態になった。

「よ、よし後数回唱えればしっかり水はとんで乾くはずですよ」

「お、おう。よろしく頼むわ」

彼がまた同じモノを二回ほど唱えると八割方乾いていった。

「うーん。すこしまだカーペット濡れてるなあ。あとちよっと唱えよう」

「いや、後は自然乾燥するからもう大丈夫だよ」

「いえ！ 僕の不幸事ですから完璧に乾くまでやらせてもらいます」

食い下がった彼はまたまた同じモノを唱えた。すると今度は服がアイロンがけをしたみたいに熱くなっていった。

「ちょ、純くんもういいよ。ほとんど乾いてるから！」

「むっ。ということはまだ乾ききってないということですね。——洗濯物に 太陽の光が……」

「だ、大丈夫だからストップストップ！ もういいって！ 熱っ熱いいい！」

「ごめんなさい。再三に渡りご迷惑をお掛けしてしまって……。いつも最初がいいんですが、色々理想を求めて失敗するのも常で……」

「いや、まあ悪気があったわけじゃないし、むしろマジで魔法が、『ウタ』が存在するって肌で

実感できたから」

家で純くんの壮大な実演が終わった後、お母さんが彼と一緒にこちら辺を案内しなさいと言われて私たちは外に出た。

「ここは、いいところですね。ワクワクします。それに一二月なのに外にでもそこまで寒くないです」

純くんは興奮しているのか、頬は赤みがかっていた。

「それはよかった」

ゆっくりと歩いて数分後、私たちの眼前には漁船がずらりと一列に並んでおり、かもめが潮風に乗って空を舞っていた。今日は空気が澄んでいて遠くにある雪化粧をした富士山がくっきり見える。

「そういえば、昔よく遊んだって言ってたけど、ごめんね。実を言うと覚えてないんだ」

「あ、謝らないで。実を言うと僕もほとんど記憶にないから——気にしないで」

両手を横に振って引きつったような笑顔を見せた。

「あ、さっきお母さんが純くんのお父さんを先生って言ってたけど、お父さん学校の先生なの？」

「うん。ウタの学校のね。実は僕の家系はみんなウタの学校の関係者なんだ。両親は好きな仕事に就きなさいって言ってくれたけど、僕も親に憧れて先生を目指してるんだ」

「へえ。すごいなあ」

「ただ、僕は女性と子どもがどうも苦手で、それを克服するためにここに……ほんとうは来たんだ。そ、その、魔女が一人立ちするのは、た、建前なんだ」

ほう？ 純くんは周りに人がいないことを確認してから俯き気味に語りだした。

「魔女が一七歳で一人立ちするっていうのは昔の風習で、今もやっているところはあるんだけど……そういうのはほとんどやらないのが最近なんだ。」

なるほどねえ。コミュ力をつけるために私たちと共同生活を送ろうってことね。

「ごめんね。嫌だったら、嫌って言って構わないから」

「うん？ そんなことないよ。まあ私も花の一八歳だけど、そういうとこあんまり気にしてないから——そうか。これからウタの修行と苦手意識の改善、がんばってね。応援するよ」

「あ、ありがとう」

「うん。まあ色々大変だと思うけど、大丈夫だよ。君には夢があるからね。——私は夢を諦めたから」

私は地べたに座りボトムさすの布越しに伝わる膝を擦った。

私は小さいころからこの港町を走り回るのが大好きだった。海鳥が空で鳴き、風が潮の香を運び、水面からは時折魚がジャンプする。そんな生まれ育った風景を見ながら走るのは気持ちよかった。

小学校の運動会の短距離競争はいつも一位か二位の成績で、よくお母さんがほめてくれたことを覚えている。

中学はそれを生かして陸上部に入部した。一時期スランプに陥った時があったけど、私にはその時、夢があった。私の足で全国に行ってやる！ そう意気込んで練習し、いいタイムが出せるようになった。しかし結果はあと少しというところで全国に行けず、その高い壁を痛感する。

でもこの悔しさをバネに高校でまた頑張ってみようと思った。そうしたら、遅めにきた成長期とも重なり一年生でレギュラーになった。

でも、三ヶ月前に急に膝に違和感を覚えた。勢いよく走ると膝に鈍い痛みが出る。今じゃまともにダッシュなんてできない。色んなお医者さんに診てもらったけど、成長痛や筋肉の過度な疲労とか、他にも色んなことを言われたけどこれといった原因は特定できなかった。

部の籍は残してもらっているけど、陸上から離れざるを得なかった。一応体がなまらない程度に運動はしてるけど、ほぼ惰性でやっている。

そして、この膝はこのまま完治しないんじゃないかっていう変な確信を持っている。例えば魂って見えないし不確かなものだけど、あるような気がすると思う。それに近い感じだ。

「ねえお兄ちゃん。今日もそれやってるの？」

開けた庭で純くんはフラスコに鮮やかな色の液体を入れ、草や花の粉末を混ぜてシェイクしていた。それを翔太が三歩くらい下がって様子を見ている。

「よし、これでどうかな？」

すると、ぼふんという小さな爆発音とともに黒煙がフラスコから勢いよく出て純くんの顔を覆った。

「ああ今日も失敗だねえ～。どんまい！」

「うう……ありがとう」

漫画みたいにパンチパーマっぽく髪がチリチリになりながら純くんは答えた。こっちに来てからかれこれ三日は今日みたいなことをずっとやっている。

なんでも、体に効く薬を作ってるのかなんとかって言ってたけど、そのために何日も費やして頭を爆発させてまでよくやるなあ。

「う～ん。配合の調整が難しいなあ」

「そうだね。もう三十回転ケイデンスをあげよう」

「それっぽいこと言ってるけど話噛み合っていないぞ翔太……。どう調子は？」

「あ、それが、まだ、なんとも……」

「ふ～ん——やめたりしないの？」

「うん。これだけは、何としてでも完成させるんだ」

純くんが珍しく自分の意見を強く主張した。

「ねえお兄ちゃん。今度はさあ、ほうきで空とんでよ！」

「えっ……どうして？」

「だって、ほうきで学校までいけたら、今日はほうきでとばしてきたんだぜ！ ってじまんできるじゃん！」

何だその高級車で来たみたいなノリ。

「え、えっと、ほうきで飛べなくもないけど、翔太くんを乗せるのはちょっと危ないし……空飛ぶのはすごく目立つから、あんまり魔女はやらないんだ」

「あ、そうなの。魔女って空飛ばないんだ。」

「そ、その、車とかバイクとかの方が速いし、目立たないように認識をごまかすような魔法もあるんですけど……それはその魔法をずっとキープしないとイケないので、ちょっと疲れるんです……夢がなくてすいません」

「え～できないの～」

「ほらほら純くんを困らせない。ま、ほどほどにね。お疲れ様」

私は翔太を引っ張ってその場を後にした。結局彼はそれから夕飯ができるまでずっと庭で作業をしていた。

連休が明けた月曜日に純くんはウチの高校にやって来た。我が二年三組はクラスの男子と女子はよくもわるくも元気のいい奴らで、一方的ではあるが、仲よく接していた。

彼は勉強はどの教科も大体できていて、先生たちが感心していた。ただ、運動だけが苦手なのか体育の時間になるとちょっと困り顔をしている。そんな彼をいじりつつクラスのメンツは純くんにも色々とおアドバイスをしていた。彼がコミュ力を鍛えるためにここに来たのは正解かなと思った。

「というか、今更だけど純くんって同い年だったのか」

「あ、うん。こんな言葉遣いだし、身長もあんまり高くないから、よく言われる……」

「あ、それは失礼なことを言ったね……。そういえばウタの方はどう。うまくいってる？」

放課後、夕焼けをバックに私たちは通学路を歩いていた。

「えっとまあ……頑張ってる」

「あんま無理は良くないよ。この前は材料の木の根っこを探すとか言って、帰ってきたら泥だらけで、葉っぱとか木の枝とかがいっぱいついてたからびっくりしたよ。体壊したら元も子もないからね」

「——うん」

「膝を壊した私だから言えるんだ。ほどほどでやめときな」

「ありがとう。——あの、恵美さんの膝はきっと良くなるよ」

ぎざっと、靴を地面にこすらせて止まった。

「なんだって？」

「そ、その、大丈夫。絶対……良くなるよ」

「何を根拠に？」

自分でもトゲトゲした言い方だと分かっている質問した。彼は俯いたまま黙ってしまった。

「——この膝が、良くなる保証なんてどこにもないよ」

私は踵を返して家に向かった。眩しい夕焼けを背にして——。

家に帰るとなんだか居間が賑やかだった。

「やあ。純、恵美ちゃん。学校お疲れ様」

「こんにちは」

ドアを開けると純くんのお父さんが家族と談笑をしていた。単身赴任のウチのお父さんも帰ってきたのか。

「まあ今日は飲んでいってください」

「いいんですか？ すいませんそれじゃ少しだけ」

親父たちの酒の会話を他所に私は自室へと向かった。

バックを放り投げベッドにバフッと倒れ込む。夕飯まで寝ようかと思ったが色々なことが頭に浮かんでそれどころじゃなかった。机を見ると私が表彰台に上がった時の写真や部活のメンバーとの合宿の写真が立てかけてあった。

……少し汗をかいて気持ちを変えよう。制服を脱ぎ捨てて動きやすいジャージに着替えた。

今日はカツオのたたきやマグロの刺身、あさりの味噌汁などなど地元の食材をふんだんに使った海鮮フルコースだった。

「どんどん食べてね。純くんもまだまだ大きくなっていくから遠慮せずに食べて」

お母さんがそう言うとお茶碗にご飯を山盛りにして出していた。苦笑いを浮かべつつ純くんはご飯を頬張った。

食事が終わると母は洗い物をし、お父さんは翔太とゲームをやっていた。私が部屋に戻ろうとすると純くんのお父さんが彼の部屋の前にいた。

「あ、恵美ちゃん、ちょっといいかな？」

純くんのお父さんは人差し指で廊下に繋がる縁側を指さした。窓ガラスからは満月の光が柔らかかに流れ込んでいた。

「今日、純の登校日だったけど様子はどうだったかなあ？ 今そのことを聞こうと思ったんだけど、食べ過ぎたのかちょっと横になるって言われてね。あ、このことはお母さんには内緒ね」

「それはすいませんでした。ええっと、そうですねウチのクラスのメンツは基本、フレンドリーなやつが多いので純くんもなじんでいけるとおもいますよ。不良っぽいやつはいなくもないですけど、他人を巻き込むようなやつはいません」

「そうか。それは転校しがいがあってよかった」

「あ、そうか転校してきたんですか。前はやっぱりそっち系の学校ですか」

「そうだね。ウタの学校にいたよ。それがある日突然、昔の魔女の習わしに従って、家を出てみたいって言われて、びっくりしたんだ。今まで親の決めたことを純粋に聞いてたから、自分からワガママを言い出したのははじめてだった」

優しく光る満月を懐かしむように純くんのお父さんは語った。

「少しだけモメたんだ。でも、純の決意が固くてうれしかった。今まで純の好きなようにやって欲しかったけど、あの子滅多に反抗したことがなかったからね。それでこれは良い機会だと思って、転校させたんだ」

そうだったんだ。前の学校を転校してまでよくやるなあ

「あと、恵美ちゃんからみてウタの修行は順調かな？」

「私、ウタについては何も分からないですよ」

「いや、だからこそだよ。客観的な意見が一番いい」

「——ううんと、私から見てもあんまりうまくいってないと思います。なんていうか、詰めが甘いと思います。初めてウチに来た時も、ウタを見せてくれたんですけど、最後に失敗しちゃったし、最近、作っている菓みたいなものも、よく爆発させて顔を黒くさせてますよ」

純くんのお父さんは私の話を聞いてフツツと笑った。

「そうか。やっぱり詰めが甘いかな。純は小さいころから要領が良かったんだけど、いつも必ず最後はミスしてしまうんだよね。テストでも高得点はだしても満点は取ったことはない。ウタも最初はいいんだけど、最後だけ安定しない。完璧主義なのかもしれない」

確かにそういう節はあると思う。でも理想が高すぎて、少し行き過ぎてしまってるようにも思える。

「あの子は誰かのためなら力を十二分に発揮しつつ制御もできるから、そういう所はできるんだけどね。ま、そんなわけで純をよろしくね。協力して欲しいとまでは言わないから、あの子のことは見ておいて欲しい、それだけで僕も純も助かるよ」

「あっ……はい」

「面倒事を押し付けて悪いね。おっともうこんな時間か」

その後、純くんに軽くあいさつをして、家族にまたお邪魔しますと言ってからタクシーに乗って帰っていった。

それを見送った後、お風呂に入って今日のことを考えた。

——難しいことを言われたな。三ヶ月前ならまだしも……。

努力する人は見ている気がいい。だけど、自分がもう努力してもかなわない人が、努力し

ている姿を見続けるのはちょっと辛い。夢は違えど、今の私にはそうやって努力する人を素直に応援できない。

――器が小さいな。

そう思って一杯になった風呂桶を頭から一気に被る。水の重みが体を叩く。

部屋に戻ろうと縁側を渡ると冬の風が吹く中、外で純くんが何か作業を行っていた。その姿は寒さに目もくれず真剣そのもので体から熱量を発しているように見えた。

私は体が湯冷めしているのを肌で感じ、自室へと急いだ。

「気をつけて行ってらっしゃいね」

お母さんが見送って家を出ると今日は風が強く、頭を押さえていても髪の毛が縦横無尽に舞い乱れる。

「お姉ちゃんの髪の毛すげえ！ パンテーンみたい！」

「うっさいわ。前見て歩かないとケガするよ」

急いで出たから髪を結ぶのを諦めた。けどさすがにこの髪の毛長くなってきたなあ。もう肩より長いから近いうちに切ろう。そう思って足早に学校に急いだ。

席に座ると退屈な授業の連続でついウトウトしてしまう。特に数学は苦手分野でさっぱり分からないから、数式を説明する先生の言葉が子守歌のように聞こえてきて、こっくりこっくりと船をこいでいった。

「恵美～。起きな。もうお昼終わるよ」

「うん？ もうこんな時間かあ」

友達に起こされて時計を見ると、次の授業まであと十分くらいしかなかった。

「まあ一日くらい昼飯抜いても死にはしないか」

「何言ってるの～。前のあんたなら、一日三食じゃ足りないとか言ってたじゃない。」

「それよりも今は寝るほうがいい。睡眠は神が与えた唯一の救いだからねえ」

「あんた夜何してたの？ また雑誌とかネットとか見てたんでしょう。大概にしておきなさいよ」

「わーってるって」

午後の授業は得意科目を除き、基本上の空でまた寝たり起きたりを繰り返していた。

「だ、大丈夫……？」

休み時間に純くんがそんな私を見かねてか小声で聞いてきた。

「うん、大丈夫だよ。いたって健康」

「そ、そう……よかったらコレ食べる？」

彼が差し出してきたのはカロリーメイトだった。いただくかと思っただが、あと数分で授業が始まるから遠慮した。

「あ、その、食べたくなったらいつてね」

「あ、うん。その時言うよ」

結局、私は朝から何も食べずに放課後を迎えた。

たまには部活の方にも顔を出すか。先生は配慮してくれて無理に来なくても構わないって言ってたけど、籍を残してもらってるから少しは働かないと。

そう思って私はグラウンドに出た。部室に行くと後輩が挨拶をしてくれた。でも、どことなく遠慮してるような挨拶だった。私は笑顔でその挨拶に応じて、タイムウォッチやハードルなどをグラウンドに持ち運ぶ。

「おっ、成瀬！ 今日はその髪の分け目きまってるな！」

「はっ。なんですか先生ソレ。意味分かんないツス」

部活の皆は私がグラウンドに来るとどこことなく気を使ったような反応をしていたが、会った人をとりあえずなんでもいいから誉める先生だけは、いつも通りの対応で話をしてくれた。

「よ～しそれじゃあ準備運動終わったら走るぞ。――成瀬、タイムを頼めるか？」

「分かりました」

それからはいつも通りの練習をみんながヘトヘトになってこなし、私が機材を運んだり、紙にペンを走らせたりした。

楽しいとも苦しいとも言えない時間が流れていった。

「はい。それじゃ今日はここまでだな。お疲れさん。帰り道気を付けて帰れよ。特に成瀬、お前顔が少し青かったぞ。ちゃんと食ってるか？」

あ、昼飯抜いたのバレてる。

「もちろんですよ。今日のお弁当は青魚でしたから」

「アホ。それで青くなるのはザリガニだ。体に気をつけろよ」

「は～い」

その後、たまにしか私がこないから、大方の片づけを自分から進んでやらせてもらった。気が付くともうとっくに日は落ちてちらほらと空に星が瞬いていた。

よし、最後は砲丸投げの鉄球をしまっておしまいか。

私は手にグッと力を入れて持ち上げた。え～とこれは奥の棚にしまうんだっけ？

電気が来ていない部室は薄暗かったのでゆっくりと進んでいった。その時足元の重たい箱に小指をぶつけた。

――痛っ！

私は体勢を崩し、棚に背を打ちつけると鉄球のカゴを落としてしまった。

「大丈夫ですか？ さっきすごい音聞こえましたけど」

「あ～大丈夫大丈夫。ちょっと物をこぼしちゃっただけだから～。もうこれで終わるから帰っていいよ」

慌てて散らかったものを片付ける。すると一瞬だけクラッと足がもたついた。

「先輩本当に大丈夫ですか？ あの、その、一人で帰れますか」

後輩はオロオロして心配そうな顔をして近づいてくる。

「いやいや、何ともないって。最近運動してなかったから足がなまってたなあ……。あ、じゃあ鍵だけよろしく頼もうかな！」

私は散らかったものを手早く片付け、部室の鍵を渡すとその場を早足で離れた。するとももの数分で息が上がってしまった。

――あれ、私こんなに体力なかったっけ？

街灯の下で額を拭くと冬にもかかわらず汗でびっしょりだった。そして、その光が膝に照らされると真っ青に膨れていた。

――早く帰ろう。そう思い右足を一步踏み出す。すると鈍い痛みが膝全体を覆った。それでも歯を食いしばって進んだ。

家からは歩いて二十分ほどで着くが、今日はその時間が何倍にも感じた。帰り道の途中にある浜に出てようやく学校から半分歩いたと分かった。膝が焼けるように熱かった。

――休憩ついでにアイシングってことで、ちょっと海で冷やそうかな。

辺りに誰もいないことを確認し、靴と靴下を脱ぎ、両手でスカートが濡れないように持って膝まで海に入る。

——くうう冷たい！

顔が顰め面になり思わず天を仰ぐ。すると今日は雲一つなかったのか満天の星空が煌めき幻想的な風景を描いていた。

地元の空はこんなに綺麗だったのか。私は海水の冷たさを綺麗な風景を見ることで誤魔化し、しばらく観察していた。

「うう風が強くなってきた。そろそろ上がるか」

独り言をつぶやいて上がろうとすると、波が一気に引いていった。

——うん？

ふと後ろを振り返ると私の背丈くらいの高さの波がズォツと押し寄せて来た。

私は成す術もなく波に飲まれてしまった。音が消え重さが消え、息ができず、視界は黒一色になる。

まずい、沖に流されている感じがする。早く泳がないと！

震える体にかつを入れ、両手両足で水を押しのける。

その時、膝に激痛が走り泳ぐスピードが弱まった。すると波は容赦なく覆いかぶさり私を沖へと連れていく。そして海の底へ底へと押し込んでいった。

頭が真っ白になり、息が止まった。海面に顔を出そうと手足をばたつかせても、上昇するのは口から漏れ出した大量の白い気泡だけで、肉体は底へと沈んでいく。

そして、限界まで張った糸のような意識が切れると、テレビの主電源を切るように視界の景色がぶつつりと消えていった。

「ねえ貝には真っ白で綺麗な真珠っていうのがあるんだよ」

霞がかって誰かは分からないけど、聞き覚えのある声があった。

「そうなんだあ。私それが欲しいな！」

無邪気な私はそう答える。

「それじゃ僕がウタで貝をおびき寄せてみるね」

誰か分からないけど、その人は美しい声で言葉を紡いでいた。私は今か今かとそれを待っていた。しかし、中々それらしきものは出てこない。私はその人の肩をゆすった。

「ねえねえ、まだ？ 早く早く！」

「——わっちょっと。今やめたら！」

すると、海面が一気にせり上がり厚く高い水の壁が押し寄せてきた。

——なんだろう。暖かい。氷塊と化した私を溶かすように暖かなものが体を包んでいた。

見ると厚手の真っ黒なマントに包まれており、誰かに抱きかかえられていた。

「えっ……あっ……純、くん？」

声が届いていなかったのか私を砂浜に静かにおろすと、深呼吸をして口を大きく開ける。空気がピリツとし、言語を聞き取れないくらい素早く紡ぐ。

すると、ぼふっと水がはじけた音がして、濡れていた服が一瞬にして一滴の水も残さずにカラカラに乾いた。そして生地は冷えた体に心地よい熱を持っていた。

「あっ！ 恵美ちゃん大丈夫?!」

「あ、あれっ？ 私海におぼれて、そこから——いたっ」

「起き上がっちゃダメだよ。ああもうこんなに……」

私が起き上がろうとすると、膝がひどく傷みだした。状態を確認しようとスカートを少し持ち上げると、そこにはフジツボが何倍も大きくなったような貝が膝にひっついていて、それが怪しげに光り何匹も膝を覆っている。

「な、なんじゃこりゃああ」

「え、嘘、恵美ちゃんにも見えてる？　もしかしてさっきのでタガが外れちゃったのかな」
恐る恐る触ってみるが手が貝をすり抜けていった。

「大丈夫だから落ち着いてね。今ソレを取り除くから」

純くんは懐から貝殻を取り出し静かに深呼吸をしはじめた。

『——ごめんなさい

あなたはまだ眠たいと思う　でも起きてほしい

あなたは生きた風の音を聞き　私達が愛した海の香りを吸い

生命が立ち還ってゆく場所へと　戻って欲しいの—— リユーオー lyuoo 』

純くんが言葉を紡ぎ終わると、貝殻の中が淡く光だした。それを開けるとキレイな赤い絵具のように見えた。

「——そ、その、誤解してほしくないんだけど、僕も必死で調べたんだけど、どうやらこれしか方法がなくって……。ごめん——恵美ちゃんには申し訳ないんだけど、ちょっと目を閉じてもらえるかな……。僕も恥ずかしいんだ」

「えっどういう——」

純くんは薬指で赤いものをすくうとそれを唇へとつけた。淡く怪しげで男性にもかかわらず蠱惑的な唇になった。改めて彼の顔を見ると目鼻立ちがハッキリして美男子の印象を受けた。

「えっ嘘……マジ、ちょっ」

純くんがスツと寄り添ってくる。私は色々な考えが脳内を駆けめぐり、何が何だか分からなくなって固く目を閉じた。

心臓の鼓動が早鐘を打つように鳴り響く。両手をぎゅっと握りしめる。体を縮こませる……顎を少し上げる。波の音や風の音が消え去り、心臓の音だけが耳に響いた。

——ま、まだか！　以外と焦らすタイプなのか！　うおおおするならちやちやっとしてくれえ！

そして不意に、水ようかんのような柔らかな感触がした。体がビクッと震える。

「……えっ？」

唇を尖らせたままそお～と目を開けてみると、純くんは私の膝に優しくキスをしていた。

膝についていたドでかいフジツボみたいな貝はにゆるにゆるとのたうち回り、私の足からボトリと離れていった。

「お、おおう！」

「あ。目を開けないでっていったのに……。これで、貝は落ちるから、ちょっとだけ目を閉じて我慢してもらえるかな？　あといくつかで終わる……から」

「ふえっ？　あっはい」

何を言ってるか今一つ理解できず赤面した顔を上下に振ると、純くんはそおっとその淡く光る唇を私の膝に押しつける。

「——んっ」

その水気を纏った柔らかな二つのものが膝に触れる度に声にならない声を上げて身悶えする。

私はくすぐりが極端に弱い。脇や足裏はもちろん、ひざも撫でられるように触られるとこそば

ゆくてしょうがない。

そんな場所にそうやって優しくされると、くすぐったい感覚とそれとは別の感覚も同時に刺激された。

星々が暗い夜空を彩る砂浜の上で、そうして唇が膝に触れるたびに体が跳ね、心臓は口から飛び出す勢いで鼓動し、喉からは短く圧縮した声を発し、口からはよだれが溢れだした。

「——お疲れ様。もう終わったよ」

過呼吸に陥りかけた時、眼を開けると膝から貝は全て消え去っていた。

「その、実はね、その貝は昔僕がウタを使った時、失敗しちゃって、恵美ちゃんに取り付いたものなんだ……。それは宿主に寄生すると栄養を補給するんだけど、栄養の行き渡りが悪くなると、攻撃し始めるんだ。特に成長期で体の方に栄養を取られたりすると、起こりやすいんだって...今貝を取り除いたから膝の調子は良くなっていると思うけど——どうかな？」

純くんが何を言ってるか私には今一つ理解できなかったが、膝の状態を確認すると痛みはほとんど消え失せていた。腫れも大分引いて地肌のそれになっていた。

「その、気づくのが遅くなってごめんね。そのせいで大分、恵美ちゃんを苦しめちゃって——もっと早く来るべきだった」

「いや、その、昔、貝がついたのって、多分、私がちょっかいだしたからだよね？」

「あ、えっ。昔のこと覚えてたの？」

「う、うん.....さっき思い出した」

頬をぽりぽりとかく。お互い何も言えずに気まずい空気が流れた。

「あ、もうこんな時間じゃん帰らないと！」

「そ、そうだねっもう帰ろう！」

すると彼はどこからともなく箒を持って来た。

「まだ、足の調子もよくないし、箒でいこう」

「いいの？ 目立つって言ってたじゃん」

「まあそこそこ高いところを飛ぶし、この時間人気はないから」

防寒のためと、落ちないために二人でマントを被さる。そうして箒に跨った。

『——丘に立ち風を感じる 翼がざわめき羽ばたきたがる

君の元へ舞い降りたい ぼくは大地を離れ

空に繋がれた鳥になる——petao』

おおっすごい飛んでる。そういえばさっきからウタ失敗してないな。.....誰かのためならってそういうことか。

「なあ.....純。お前、こっちに来た理由って何さ？」

「それはその、前話したとおりにコミュ力をつけるため.....さ」

.....本当かよ。お前、本当は私を——そう言おうと思った瞬間、おなかがぐう〜と鳴り響いた。

「あ、そういえば、コレ食べる？」

懐から取り出したのはいつぞやのカロリーメイトだった。

「ああ、別にだいじょう.....ごめん。やっぱ食べる」

純がははっと笑って差し出した。チーズ味だった。

「——そういえば、どうやって私を見つけたのさ？」

「えっあの、本を読んで待って、いや、本を読んでたらつい夢中になってさ、それで暗くなって帰ろうとしたとき陸上部の子が声をかけてくれて——」

なるほど、そういうことか。

「でも、これでまた恵美ちゃんが夢を追えることができちゃった。翔太君から偶然聞いたんだけど、ネットや雑誌で走り方を研究したり、負担がかからないようにゆっくりと何時間もかけてトレーニングしてるって……でも、もっと早く僕が——」

「純のせいじゃない。私のほうこそ——ごめん」

彼の背中に額をつけ、腰に回してる腕に少し力をいれる。

「私のせいで、純がプレッシャーを抱えやすくなっちゃってさ、ごめん。それと——ありがとう」

「いや、その、僕が緊張しやすいのは体質だから」

まったく、こいつは優しすぎるな。危なっかしいくらい。

「ねえあの空飛んでるの何!？」

ふと下の方から男の子の声がした。私たちを指さして、大声で隣の大人を呼びかけていた。

「鳥にしてはデカいわね。もしかして宇宙人かしら！」

「マジ！ 写メろ写メろ！」

光の点滅がこちらに向かって飛んできた。

「えっ、どどうしよう。写真はさすがにマズイ！ い、急いで認識阻害の魔法を展開しないととと！」

「落ち着け純、あの声は多分、ウチのしょ——」

そう言おうとした途端、箒が上下左右に揺れ振り落とされそうになった。

「だ、大丈夫だ！ 心配ない。あれは——し」

「シ？ 死？ もしかして新聞記者の『し』?! 全国紙に載ったらそれはマジでガチでヤバイ！」

純の肩が震度八強くらいで震え、箒がそれに連動する。私はもはや口を開くことすらできなかつた。

——やっぱり詰めだけは甘いな。誰かが見て上げないとね……。あつ、今ビキッて箒にヒビが——。

・あとがき

読んで頂きありがとうございます。今まで最後の行いっぱいまで書いていたのでついに念願のあとがきを書くことができま

去る者に來たるもの（文音 憂）

去る者に來たるもの

文音 憂

曇天が続いている。夏真っ盛りのこの時期にしては些か冷える。私の家の前には広い通りがあって、この時期はスイカや氷の行商人の売り声、近所の子供たちの遊ぶ声がよく聞こえたものだった。家の中には私の主人と、その母親が何やら忙しそうにしていた。ここのところ主人は外出することが多く、夜遅くに帰って来ることも珍しくない。縁側の横を主人の母親がバタバタと行ったり来たり。縁側で寝ようとする私のことも少しは、考えてもらいたい。つい数日前、近くの町で何やら大きな事件が起きたらしい。それからというものの、主人も母親もわたしをかまってくれない。そういえば、主人の嫁はどうしたのだろう。近頃、姿を見ていない。足音がせわしなく聞こえる縁側から起き上がり、玄関にある黒電話の下に座った。廊下に置かれている振り子時計の音がよく聞こえた。この音が私はとても好きだ。何故だか、とても心地よく感じる。そして、その音は私に懐かしさを感じさせるのだ。ずうっとその音、チクタク、チクタクと私に語りかけるその音は、かつての、何かを、遠い昔に忘れてきたものを、時折見せてくれる。勿論、現実から意識を遠ざけ、深い眠り落ちたときだけに……。

時間を忘れ、うとうとしていると、急に聞こえてきた足音で現実に引き戻された。主人が鞆を持って玄関へやってきた。大急ぎで靴を履き、近所の地主さんからもらった洋傘を手にし、扉に手をかけた。

「勝彦や。弁当忘れとるぞ」

「あ、すみません」

慌しい玄関をほんのり焼き魚のおいが包み、私の心にちょっとした平穏が訪れ、空腹を誘った。食欲がある方ではないのだが、さすがに昨日から何も食べていなかったので余計に腹が減ってきた。

「今日も帰りは遅いのかい」

「はい。街の方は人手足りず、今でも多くの方が治療を待っています」

「無理するんじゃないよ。命あつての我が身なんだから……父さんも、あんな事にならなければ」

「母さん。その話はしないでくださいよ……じゃあ行ってきます」

主人の背中が物憂げだった。そんな背中を見ると私も近寄って行って、かまってもらうことにも気が引けた。しばらく玄関を眺めていた。すると居間の方から私を呼ぶ声が聞こえた。

「おいで。ご飯だよ」

一日ぶりの飯は美味かった。主人が持って行った弁当にも入っているであろう魚は特に。振り子の時計が八時を告げた。食べ終わると私は、また縁側の方に行き横になり、雑草の中に歪に葉をつけた木々の庭をぼんやりと眺めていた。

日が落ち、庭の景色は漆黒の闇に飲まれていた。夜空に輝く星も月も何処へ行ってしまったのだろうか。夜になっても厚い重い雲が空を覆っていた。私は場所を移し、主人の寝室へ行った。机の上はおびただしい紙の山が今にも崩れそうになっていた。椅子には脱ぎ捨てられ、深くしわの入った白衣があった。おそらく明日も、明後日もこの白衣を見ることになるだろう。窓の外を眺めてみた。静寂と沈黙を作り出す厚い雲がゆっくりと動いていた。机の上に並べられた本に飛び乗り窓の下を眺めた。夜に降り注ぐべき光はそこには無く、どこまでも続く黒い海が広がっていた。しばらく外を見ていると、その中に人影が見えた。主人が帰ってきた。私は急いで階段を降り玄関を降りた。そこには主人と母親の姿とともに見知らぬ男の姿もあった。

「お帰り。大変だったでしょう。おや、そちらの方は」

「夜分に失礼します。私は大浦診療所の溝口と申します。実はこのようなものを」

母親はそれを見た途端表情が変わった。

「それは葉子さんのペンダントじゃないの」

「やはりそうでしたか。実は身元確認のために他の親族の方にも確認していただきたいと思いまして……」

形が歪み煤ぼけていたがすぐに分かったようだった。すると主人はおもむろに口を開いた。

「葉子が見つかったよ。住民の治療の合間に葉子が足を運んだはずの満天町の仮設診療所にはいなかった。けど今日は、たまたま大浦の診療所に行って、遺品の整理をしていたら……これが……」

主人は口を閉ざして下を向いた。やがて大粒の涙が滴り落ち、嗚咽が玄関に悲しく響いた。

朝が来た。黒電話の音が私の目を覚ました。居間の隅っこで寝ていた私は、日光を求め縁側に向かった。しかし私の淡い期待はまたもや打ち砕かれてしまった。雨だった。しとしとと静かに降っていた。私は憂鬱な気分になり家の中へ引っ込んだ。廊下を歩いていると、母親が電話に出ていた。

「はい。少々お待ちください」

電話を置くと、二階の主人を呼んだ。

「勝彦。電話だよ。勝彦、起きてるのかい」

母親は二階の寝室へ向かった。私も主人が心配になりついていった。寝室に入ると主人は布団の上でうつ伏せになったまま動かなかった。母親が主人の体を叩いて起こそうとする。

「勝彦や。いい加減起きなさい。あんたに電話だよ」

「……うう……」

起きるのが辛そうだった。やっとのことで起こすと、ぼさぼさの髪のまま階段を下り電話に出た。

「もしもし。ああ、いつもお世話になってます。はい、わかりました。すぐに向かいます」

受話器を置くと、ゆっくりとした足取りで主人は二階へ上がり。身支度を整え降りてきた。

「ほれ、勝彦。朝飯を食って行かんと」

「今日はいいですよ」

「そんなこと言って、夜まで働くんだからちゃんと食べないと」

「わかりました……」

主人はゆっくりと朝食を口に運んだ。その表情は辛うじて平静を保っているようだった。その表情の裏には喪失感、疲労感があり、どこことなくやつれたようにも見えた。いつもきびきびとした立ち振る舞いの主人だが、家を出るまでいつもの倍の時間がかかっていた。時計は九時を知らせた。重い足取りのまま主人は洋傘を持って家を出た。やがて母親も外出し、しばらくの間、閑散とした館には私だけが取り残されていた。

時計の鐘は十字、十一時、十二時と次々と時の進行を告げた。何をやる訳でもなく、家のあちこちをうろうろしては適当なところで横たわる。そんなことを繰り返していた。雨足が次第に強まった。こうなっては縁側にはむしろ出たくはない。午後になっても母親は帰ってこなかった。一体何をしているのだろう。私は食べ物を探し求め台所へ行った。幸いにも主人が食べていた朝食の残りが流しの横に置かれていた。おそらく母親が私にくれようと思って置き忘れたのだろう。私はそそくさとそれを平らげると、黒電話の下に横になり眠りについた。そして夢を見た。



高台に立っていた。本来ならば向こうは青い海が見えるはずだが、真っ赤な海と灰色の煙が広がっていた。人々の悲鳴や助けを求める声も聞こえた。高台の下の町は大きな荷物を持った人々であふれかえっていた。私はただ立ち尽くしていた。その時、私の後ろで大きな汽笛が鳴った。驚いて振り返ると脱線した機関車があった。

「早く！ここから離れろ！」

運転手が叫んでいた。すると機関車から大勢の人が出てきて、一目散に走りだした。ものすごい勢いで過ぎてゆく人の波、喧騒、悲鳴。人の波にのまれ、気が付くと私は病院らしき建物の前にいた。状況が理解できなかった。すると建物の中から若い女性が私の許へ駆け寄ってきた。緊迫した表情だった。

「先生！何をなさっているんですか。早く治療をお願いします」

その女性に手を引っ張られて、建物の中に入るとそこには異常な光景が広がっていた。酷いけがを負った大勢の人々がそこにいたのだ。火傷を負った者、血を流している者、骨が折れている者。老若男女、皆が悲痛な叫び声とともに助けを求めている。私はすぐに、けが人たちの治療にあたった。考えている暇はない。本能的に手が動いた。不思議だった。何故私が治療できているのか。

しばらく治療を続けた。何人治療したかは覚えていない。しかし全く疲れを感じなかった。病院内の人間の殆どを治療し終わると、私は近くの椅子に腰を掛け一息ついた。

「先生、お疲れ様です。お茶をどうぞ」

「ああ、ありがとう」

近くにいた女性が私に茶を持ってきてくれた。茶の中に私の顔が写った。どこか達成感に満ちたようだった。しばらくそれを眺めていた。すると突如私の顔が歪んで見えなくなった。すると轟音とともに、私の体が揺れ始めた。周りの人間も大きな揺れに床に倒れ込んだ。何が起きたのかわからない。突然の大きな揺れは、私の身動きを奪った。建物が揺れている。そう分かった瞬間、向こうに見えた天井が崩落し、瞬く間にこちらの方に向かってきた。一発の衝撃音とともに目の前が真っ暗になった。



私は、はっと目を覚ました。目は覚めた。しかし夢の中での揺れがまだ残っている。いや、この家が揺れているのだ。私は冷静になろうとしたが、揺れに対する恐怖がそれを妨げた。家が揺れている。怖くなり居間にある卓袱台の下へ隠れた。しばらくすると揺れはおさまり。辺りは何事もなかったかのように元の景色を私に見せつけた。二階に上がり主人の布団の中に潜り込みしばらくはそこから出なかった。

夜になった。雨はやんでいるらしい。私は布団から出て下へ降りようとした。その時顔と体に違和感を覚えた。何かがまわりついているようだった。手で払ってみると、それは黒い毛だった。私に毛でないことは確かだった。しかもその毛から主人のにおいがした。布団を見てみるとかなりの毛が落ちていた。体に着いた残りの毛を払うと、階段を降りた。すると母親がもう帰っていた。私の顔を見て母親は言った。

「今ご飯あげるからね」

目の前に差し出された飯を食っていると、母親は仏壇の前に行き、鐘を鳴らし手を合わせた。「あんた。あんたが死んでもう何年経つんだろうね。この電報が届いたとき、私はどうしていいかわからなかったよ。でもあんたが助けた人たちから『ありがとう』っていう手紙や言葉をどれだけ受け取ったか……今、勝彦が大変なんだよ。あんたと同じ境遇にいるんだ。どうか私たちのことを見守ってておくれよ。あの子もあんたに似て、他人様のために自分のことを忘れてしまう性分だからね」

そう言うと、母親は仏壇の前から離れて居間で縫物を始めた。

しばらくして主人が帰ってきた。母親はいつものように勝彦を迎えた。

「お帰り勝彦。今日は早かったね……。勝彦、あんた顔色悪いけど、どうしたんだい」

「ちょっと気分が悪くなってしまって……。後の治療は他の先生にお任せしてきたんですよ。もう寝ます。食事は要りません」

そう言って主人はゆっくりと二階の部屋に上がっていった。母親は上っていく若者の背中を寂しげに見つめていた。私も主人の様子が気になり二階へ上がった。部屋の扉が少し開いていた。そこから主人の部屋に入ると、疲れ切った主人の姿があった。布団に横になったままピクリとも

動かなかった。まさか死んでいるのではと思った私は、主人の顔の近くに横になった。かすかに息をする音が聞こえて安心した。しかし、その音は今にも消えてしましそうな脆弱な息だった。ふと、主人が顔を上げて私を見た。主人の顔がほんの一瞬和らいだように見えた。すると主人は再び顔を伏せ、私の背中を優しく撫でた。お互いに安堵し、主人も私も眠りに落ちた。



大きな家の前にいた。見覚えのある家だ。どこの家だろう。そんなことを考えていると後ろから男の呼ぶ声が聞こえた。

「このタンスはどこに運びましょうか」

「あっ……奥の部屋へお願いします」

どうやら引っ越しの最中のようなのだ。しかしこの家は……。

「これで全部ですかね」

「はい、多分……」

引っ越しが終わったようで、家の中に入ろうとした。すると、引っ越し屋が私を呼び止めた。

「すみません。まだこれが残っていました」

そう言って運んできたのは大きな振り子の時計だった。振り子の時計……。見覚えがあった。そうだ、この家の。

「その時計は、廊下においてください」

廊下に置かれた時計を見て私は確信した。この時計はここに私が置いたものだった。しばらく時計の振り子を眺めていた。やがて振り子の音と心臓の鼓動が重なった。振り子の音、一つ一つ、チクタク、チクタク、忘れかけた何かが甦るようだった。懐かしさ、寂しさ、喜び、一気に押し寄せる。振り子の音は繰り返す。いつまでもいつまでもでも時計は動いていた。

どのくらいの時間が経っただろうか。時を経つのも忘れて振り子の音に聞き入り、振り子の動きを見ていた。すると突然、ガチャンという音とともに時計が止まった。辺りに沈黙が訪れた。音という音が消えて無くなった。時計の針は十一時五十八分で止まった。ただならぬ恐怖感に襲われた。家の中に差し込んでいた暖かな光はすうっと消えて無くなった。暗闇の中に時計と私。時計は再び動き始めた。先程よりもずっとゆっくりと。そして時計は私から遠ざかり闇の向こうへ消えていった。



窓から差し込む光で目が覚めた。辺りを見回すと主人の姿は無かった。もう仕事へ向かったのだろうか。徐に体を上げ、階段を下りて行った。玄関へ向かうと主人は靴を履いていた。母親も見送りのために玄関へ来ていた。

「もう大丈夫なのかい」

「ちょっとだるいですが、大丈夫ですよ」

「勝彦や、無理はいかんよ」

「分かってますよ。でも、今で多くの人たちが苦しんでいるんです。助けなければ。その中には私の友人も恩師もいます。放ってはけません」

「でも、勝彦……」

それ以上母親は何も言わなかった。

「……でも……みんな変わり果てた姿で……死んでいきます。助けようとしても……助けようとしても……」

主人の表情は喪失感と疲労感に満ちていた。

「じゃあ行ってきます」

玄関の扉が寂しげな音を立てて閉まった。

やがて時は流れ、夏の暑さもほんの少し和らいだように見えたある日、母親と主人は朝早くに家を出た。花、線香、柄杓を持ち、黒い服を纏っていた。私はいつものように玄関にある黒電話の下で二人を見送った。

時計の鐘が私だけのいる家中に響き渡った。しかし、私は違和感を覚えた。心なしか鐘の音が低く聞こえた。主人は日に日にやつれ、顔色も芳しくない。発する声にも覇気がなくなっている。今日は外に出てみようと思い、縁側へ向かう。柔らかな日に光が私を迎え入れてくれた。体いっぱい光を受け、体を伸ばして横になった。しばらく頭の中を空っぽにして、庭を通り過ぎるそよ風の音を聞いていた。

時計は十字を告げた。やはり鐘の音は低かった。時計が壊れたのかと思い廊下に向かったが、壊れているようには見えず、規則正しく時を刻んでいた。時計の前で振り子を眺めた。もし時計が壊れていたとしても私にはどうすることもできない。こんな大それたものを私がどうこうすることなど考えられない。もし私が直せたとしても……、この時計だけはたとえ壊れてしまっても、そのままの形で残しておきたい。そんな思いが私の中にあった。

玄関の扉が開いた。主人たちが帰ってきた。母親はすぐに食事の準備をするからと言って、台所へ向かった。主人もゆっくりとした足取りで居間の方へ向かった。そういえば今日は何も食べていなかった。台所から良い香りがしてきた。私はその香りに誘われて急ぎ足で台所へ向かった。しばらく母親のそばに座っていると、お椀に入った飯を出してくれた。嬉しいことに焼き立てのサンマにもありつくことができた。夢中になって食べた。久しぶりの御馳走で心も体も満たされた。満足感に浸りお椀の前に横になっていると、廊下の方で足音がした。気になって行ってみると、主人が外出しようとしていた。

「もう行くのかい」

「ちょっとゆっくりし過ぎました。今日は宇品の方に行くので少し遅くなります。それじゃ」

「あっ、ちょっと。今日は夜から天気が崩れるらしいから」

そう言って母親は主人に洋傘を手渡した。

「それじゃ行ってきます」

私に背を向けた瞬間、主人の動きが止まった。そして、手に持った洋傘が玄関にカチャンと音を立てて落ちた。

「勝彦……？」

「……ううう……」

苦しげなうめき声とともに主人はその場に倒れ込んだ。

それから主人が外出することはなくなった。主人の部屋には知り合いらしき白衣の男が出入りするようになった。扉の隙間から時折主人の姿を見ていたが、以前の主人の面影はどこかへ行ってしまった。それからというものの、私は一日の大半を縁側で過ごすようになり、家の中をうろうろすることは殆どなくなった。夢を見ることも。

縁側から見る外の景色は、秋の入り口を告げていた。私は相変わらず縁側でのんびりと過ごしていた。何事もない平和な時間だった。日光浴は私の唯一の楽しみ。最近はずっと晴天が続いていた。だが、遠くに見える厚く黒い雲の存在が少し気になった。もしかしたら、午後から荒れるかなと思い、今のうちにたくさん光を浴びた。そういえば、最近主人の様子を見ていない。いつしか部屋の出入りする人も来なくなった。気になった。主人の様子を見ようと二階に向かった。部屋の扉は少しだけ開いていた。隙間に顔を突っ込んで扉を押し開けた。部屋の中には横になっている主人がいた。私に気付いたらしく、体を起こして、近づいた私を抱き上げた。主人はもう主人ではなかった。前よりもひどくやつれ、目は虚ろで、髪の毛は半分ほど抜けてしまっていた。かつての精悍な顔立ちは完全に無くなっていた。そして、立ち上がり窓の外を眺めながら、私に向かってこう言った。

「お前が家に来たのは、父さんの命日だったな……。父さんは立派な医者だった。それに比べて私は無力だった。誰も助けられない……。無力な人間だ。親友も、恩師も、そして……。愛する葉子も……。閃光の中に消えていった」

主人は抱き上げた私を畳の上を下ろすと、小さくうめき声をあげて、その場にうずくまった……。そして動かなくなった。伏せられた顔から、やがて鮮血が滴り落ちた。

庭の木々の葉は紅葉し秋になった。振り子時計の音も消え、主人の姿も母親の姿も家の中から消えた。私は相変わらず縁側に横たわる。そんなある日、玄関の扉が開くのが聞こえた。

「お父さん、広いお家だね！」

「あなた。なかなかいいお家じゃないの」

「そうだろ。友達に良い物件があるって紹介してもらったんだよ。ほら、あんな立派な時計も置いてあるぞ」

「前の住人の方が置いていったのかしらね」

しっかりと身なりの夫婦と、娘がこの家にやってきた。足音がこちらに近づいてきたので、私は庭へ降り縁側の下に身を隠した。家の中にはにぎやかな声が響き渡り、これまでにはない

明るさに包まれた。しばらく彼らの声を聴いていると、ふと、しっぽのあたりに何かが止まった感じがした。見てみるとそこには一匹のトンボがとまっていた。追い払おうと思ったが、私はトンボが飛んでいくまでしっぽを動かさなかった。

しばらくするとトンボは庭の向こうへ跳んでいった。私は縁側の下から出て、空を見上げると、厚い雲に覆われていた。あの時の曇天と同じだ。私は庭の外へ向かって歩いた。どこか遠い所へ行こう。雨宿りのできる静かなところへ。しばらく歩いて後ろを振り返ってみると、かつての家は暖かな光に包まれていた。私の行く道は暗く真っ直ぐ。曲がり角などない。それが、どこまでも、どこまでも続いていた。

終

【後書き】

この作品を最後まで読んでくださってありがとうございました。まだまだ拙いところが多く残っておりますがご容赦の程。さて、年が明けまして2017年になりました。そこで、今年の抱負をまず述べたいと思います。今年の抱負はズバリ『挑戦』です。

今回の作品は前回までの作風とはテイストを変えて書いてみましたので、思いのほか時間がかかりました。自分としては新しい形式に挑戦できたので、また作品の幅を広げることができてうれしい限りです。

次の作品投稿では、また違ったジャンルの作品に挑戦してみたいと思います。皆さんに作品を読んでもいただけるのが何よりの喜びです。それでは、また次回の作品でお会いしましょう！

【後書きの後書き】

この作品をテーマにした楽曲を作りたい！

エインフェリアの葬送（文月遼、）

エインフェリアの葬送

文月遼、

寂れたスポーツジム。裏口をそっと開いたのは女と見紛うような少年だった。幼い顔立ち、むいたばかりのゆで卵のようなきめの細かい肌。カールした長い睫毛に、くりっとした眼。押井克洋は、自分の顔が嫌いだ。正確には、最近まで嫌いだった。

「こっちには気付いてない」

「さて、仕事をやるよ」

克洋の言葉を聞いて、北村なつきは頷いた。身の丈一五七の克洋よりも背が高い。口数は少なく、どこか機械的だった。切れ長の瞳に長い黒髪は、彼女に近寄りがたい雰囲気^{ヴァルキュリア}を発している。無骨な拳銃やプロテクターが、彼女のまとう凜とした空気をより鋭くしていた。戦乙女^{ヴァルキュリア}のようだ。ある少女は言った。

「千尋。やれる？」

なつきの言葉に、安藤千尋＝なつきをヴァルキュリアのようと例えた少女が頷いた。応える代わりにネコ科の肉食獣よろしく、ふーっと威嚇の唸り声を上げた。深く呼吸する度に人工の金色をした鋭角的ツインテールが揺れる。

克洋は、自分に静かに言い聞かせた。

三人は、高校生だ。そして、殺し屋^{ヤングガン}だ。

「スナッチャー」。克洋たちがそう呼ぶバケモノが、世間にはびこっている。彼らの目的も理由も不明だが、分かっていることがある。

彼らは人殺しが大好きで、殺した人間になりかわる。

——彼らの蛮行を止めるのが。ぼくたちだ。

克洋の手には、小柄な彼の手にはいささか大きな拳銃が握られている。タウルスM1911、ガヴァメントピストル。その隣にいるなつきと千尋は、イタリアのベレッタP×4。人体工学に基づいた、流線型のモデル。超然とした美少女に相応しい上品で、そして野蛮な武器だった。

千尋はベレッタを持つ方とは逆の手に、悪魔の鉤爪を思わせるナイフを持っていた。グリップの傍にあるリングに指を通してしっかりと保持している。カランビットと呼ばれる東南アジアで用いられる特殊なナイフだ。普通の人間が扱えば自分を傷つけかねないそれを、彼女は身体の延長のように操れる。

「千尋。奴を仕留めて」

なつきは獅子のような少女の尻を叩いた。千尋が一瞬頬を赤らめ、そしてすぐに狩人の顔になった。

千尋が姿勢を屈めて音もなく駆け寄り。その首筋に鉤のようなナイフを突き立てる。そのまま腕の関節を引き裂く。とどめとばかりに心臓部を一突き。ものの二秒もかからずに千尋は「スナッチャー」の急所を引き裂いて片付けた。断面からは血のようにスパークと千切れたコードが零れる。

「行くよ押井。千尋は上の階を。インカムは切らないでね」

千尋が耳元を軽く叩いて、音も無く階段を登る。

なつきの声に合わせて、克洋はガヴァメントを強く握りしめる。なつきが扉を蹴り開け、軽い足取りで駆ける。心の中で二秒数えて、克洋はその後に続く。

近くにあった扉を蹴り開ける。案の定、そこは何も知らずにやって来た不幸な人の屠殺場になっていた。

血まみれの部屋で、ガタガタと音を立てるルームランナーの上をせっせと歩く女がいた。コンベアに巻き込まれたのだろうか、頭皮とそれに残った頭髮が挟まっていた。傍に、つるりとした骸骨とてらてらした脳を晒した女性が息絶えていた。

ベンチプレスに首を押しつぶされて、真っ青になった男がいた。それを見ながら、別の男二人が重りを少しずつ加えている。まるで耐荷重のテストをするみたいな、義務的な動きだ。克洋となつきが動くよりも早く、ごきりと湿った音が部屋に響いた。

男の首が潰れ、皮膚から白いものが突き出した。

なつきと克洋はほとんど同時に、片方の肘を軽く曲げたウィーバースタンスで拳銃を構える。肘が心臓を守るような位置になるから、とっさの生死を左右するのだ。

克洋はルームランナーを黙々と走る女の背中を狙って、引き金を引く。ぱたりと女が倒れ込んだ。ルームランナーに髪が巻き込まれて、ぶちぶちと嫌な音と共に髪が千切れる。

すかさず駆け寄って首を踏みつけ、その後頭部に再度弾丸を叩き込む。びくりと、スナッチャー、の身体が跳ね、動かなくなった。念のために、何発か撃ちこんで振り返る。

そう言えば、これが実戦での初めての殺しだ。

思ったよりも、殺しは簡単だ。克洋は思う。

上の階から、銃声が響く。一つはリズムカルな訓練されたそれ——千尋のものだ。そしてもう一つは、映画のように派手に連射している音。インカムから、千尋の声が届く。そして、銃声。

《先輩、お嬢ちゃん。今日は簡単な仕事って、言って無かった？》

「そのはずだったね」

《今ね、撃たれてるんだけど。これ、どゆことさ？》

克洋が眼を見開く。なつきは涼しい顔で返事を返す。

「片付けなさい。仕事はかわらないわ」

《ういっす。気を付けなよお嬢ちゃん。多分、この連中。アタシらが来ることを知ってやがった》

一瞬、克洋は血の気が引くような心地を味わった。けれども、なつきも、千尋もおびえた様子は見せない。男の自分が先に怯えるのも情けないと思って、薄いスモークのかかったシューティング用のゴーグルを掛け直した。動揺を気取られないために。

簡単な仕事——単なる的当てでは無く、銃撃戦なのだ。

突然近付いた死。そして、高揚。けれどもその高揚は仕事の前と比べればほんの少しのものだった。FPSなどではないリアルの死が近づいている。

「不良少年。こっちにもすぐ、連中が来る。時間はそう無い」

「その前に、打って出ると？」

分かって来たじゃないか。そう言うようになつきは軽くベレッタを掲げる。

「なつき先輩はどっちが良いですか？」

「新入りに危ない仕事、任せられないかな」

「じゃあ、ぼくが後ろで」

克洋はガヴァメントをホルスターに戻し、スリングで引っかけていた近未来的な釘打ち機を構える。クリス・ヴェクターと呼ばれるそれは光学照準器と、極端に短い銃身が特徴だ。弾幕による制圧力と.45ACP弾の威力もあって狭い場所で戦うには最適の得物のはずだった。

克洋はそれを訓練用施設でしか使ったことは無いが、訓練と同じようにやればいと言い聞かせた。

「がんばって」

「ええ。分かりま——」

なつきが、克洋に身を預けるように身体を倒した。とっさに少年はそれを支える。ふわりと甘い石鹼と火薬の匂いを感じる。

なつきと克洋の唇が僅かに触れ合う。

「続きは今度ね、なんて」

克洋がそのことに反応するよりも早くなつきは身を離し、廊下へと飛び出した。

廊下には既に、待ち構えるように数人の「スナッチャー」が立っている。その手に握られているものも、彼女達と同じサブマシンガンだった。

妙だとなつきは思う。少なくとも、マトモな後ろ盾も無いような、「スナッチャー」の使えるそれではない。部長であるなつきがゴネにゴネて手に入れた高級品なのだ。

足元を、真横を銃弾が跳ねる。

「どこで手に入れたかは知らないけど……ムカツク」

なつきは手ごろな部屋に飛び込んだ。ロッカールームだ。着替え中だったのか、ズボンを半分下ろしたまま息絶えた男の死体が転がっている。

なつきはそれをひつつかんで廊下に放り投げる。一瞬でそれに無数の穴が開いてどろりと血が地面に広がった。この程度のブラフにも引っかかる間抜けが、私と同じ銃を使っている。なつきの眉根が少し寄った。

なつきは身を乗り出して連射。二点バースト機能で、バカみたいに弾丸を使いほしない。けれども、狙いは定めずに、ひたすら引き金を何度も絞る。

その後ろで、克洋もサブマシンガンを構えていた。光学照準器を覗き込んで、慎重に身体の内中線を狙い撃つ。

たたん。たたん。たたん。と、引き金を絞り続ける度に「スナッチャー」に穴が開く。さすがに一発二発ではいけないけれど、三セットもやればスナッチャーとて耐え切れはしない。

「なつき先輩、もう一人来ます」

近づいて来る足音に、克洋は再度部屋に飛び込んで、再度頭を出して様子を伺う。ゆっくりと歩いて来る巨漢がいた。筋肉ムキムキの大男だ。身の丈が一九〇を超えている。昔流行ったアクション映画のスター似ているような気がして、克洋は心の中でそいつを和製ドルフと呼ぶことにした。

「了解、また私が囹をやるから、お願いね」

インカム越しに、なつきの声が聞こえる。扉を手で開いて、それにもたれかかるようにして弾倉を交換している。

なつきが盾にしているのは分厚い扉だ。拳銃弾程度で貫けるものではない。.45ACP弾の威力は高いが、貫通力は低い。

けれど、和製ドルフの持つ物が巨大なマシンガンであれば話は別だ。M249・MINIMI軽機関銃だ。バイポッドもお構いなしに、巨大なそれを平然と構えている。使用するのは5.56mm NATO弾。押井たちのそれと比べものにならないほど強力だ。

「なつき先輩！」

克洋の叫びの意図するところに気が付き、なつきが部屋に飛び込もうとする。克洋が身を乗り出し、サブマシンガンをフルオートで連射する。わずか3秒でマガジンを空にする。

ぶすぶすとその胴体に拳銃弾が突き刺さり、和製ドルフは多少バランスを崩す。けれど、その動きは変わらない。30発近い弾丸を、平然と受け止めた。克洋が眼を見開く。

和製ドルフが引き金を引いた。反射的に、克洋は身を隠す。

MINIMIの吐き出す弾丸が、扉、壁ををまるで障子紙か何かのように容易く引き裂いた。グリーンチップ弾だ。弾丸をプラスチックでコーティングし貫通力を強化している。

扉を引き裂いて尚、勢いを残した弾丸が、少女を貫いた。腕に、お腹に、胸に、そして首に。
「――あ」

なつきが息を吐いた。そして糸の切れたマリオネットのように倒れる。ごぼごぼと少女の首から、泡と血が漏れ出した。

克洋は柔らかな彼女の唇を思い出していた。

なつきが、首に出来た穴を塞ごうとするように手を伸ばした。こぼれ出るいのちを逃がさないように。

「……なつきっ！」

《ナツ先輩！ 何があったの、お嬢ちゃん！》

階段を駆け下りる音と共に、千尋が飛び出した。汗まみれだった。奪ったのだろうマシンガンを手元に携えている。

少女の眼が濁る。

スポーツジムの受付が、無数の弾痕で醜くめくれ上がっていた。バラバラになった`スナッチャー、の残骸が散らばっている。その一つに、彼女は並んでいた。

狭い廊下を、銃の放つ閃光が満たす。誰かの咆哮が響く。それが誰のものなのか。克洋は気が付かなかった。

「下がるよ、お嬢ちゃん！」

「でも！」

「でもも、何も無い！」

それでも。克洋は叫ぶ。叫ばずにはいられなかった。

「なつき！」

克洋の数メートル先、大小さまざまな火線が幾重も飛び交う廊下。そのど真ん中で、仰向けになって、なつきが倒れていた。

微かに潤んでいた、理知を湛える瞳は床に散らばる澱や血と同じ色に変わっていた。すっかり濁り切っている。

長い艶やかな髪は、血の中に散らばって広がっている。血の海に沈む。美しい。克洋はなぜかそう思ってしまった。

そして、なつきの身体には、小さな穴が、ぶすぶすと開いていた。腕に、お腹に、胸に。そして首に。

あちこちに開いた穴が、銃弾の熱で醜く盛り上がっていた。血が溢れ、首の穴からは口や鼻から出ていた筈の空気と混ざり合っごぼごぼと血の泡を作っている。

一際酷い銃火が煌めいた。地面を裂き、なつきの身体を、二人の隠れていた遮蔽物を引き裂いた。

少女の身体が弾けた。

克洋が吠えた。それは、懇願だった。

――やめてくれ。

銃弾が叩き込まれる。

――やめてくれ。

衣服を切り裂き、その下の皮膚に弾丸が沈む。

――やめろ。

弾丸が彼女を引き裂いていく。胸が抉れ、腕が千切れる。

ものの十数秒で、少女が肉の塊になった。

克洋の叫びは、既に意味を成していない。

散らばった服の断片が、克洋の前に転がった。鮮やかな青いブローチが目に入る。それをひつつかんで、踵を返した。

千尋が二挺のサブマシンガンを連射しながら「スナッチャー」を牽制する。自分たちの持つ牙は、特権では無かった。

自分がおもちゃを手に入れて粹がっていた子供に過ぎないのだと、克洋はようやく気が付いた。

千尋の援護を受けながら、克洋もろくに照準を合わせることなく、ガヴァメントを連射した。

泣きじゃくって、ブローチを握り締めて、弾倉を交換して、撃ちまくって、克洋は逃げた。出来ることはそれだけだった。

千尋はいい仕事をした。なつきは言うまでもない。克洋も全力を尽くした。それでも、死ぬときは死ぬのだ。撃たれた後に、お涙頂戴の言葉も残せやしない。一切のドラマも何もなく、当たり前のように。自然の摂理であるように。なつきは死んだ。

※

乾いた銃声が響く。克洋の足元にかしゃんとガヴァメントが落ちた。弾丸が額を掠め、つうと血が流れる。

克洋は定まらない思考のまま思う。こぼれてくる涙と血でぐちゃぐちゃになった液体が胸元を汚した。

モニターに、頭をぶち抜いて死んだ男の姿が映る。

克洋も同じことをやろうとした。けれど、生きていた。

.45口径は反動も強烈だ。無造作にこめかみにつきつけたところで、跳ね上がる銃口は頭蓋を砕いてはくれなかった。

――ぼくは死ぬことすらできやしないのか。

克洋は絶望に包まれた。それでも、ガヴァメントを拾い上げ、制服の下のホルスターに納めたのは、なつきや千尋によるしごきがあったからだろう。

夕暮れの街を、克洋は行く。額を青いハンカチ――結局、なつきに返し損ねたもので額を押さえながら、夢遊病者のように。

河川敷をランニングする、野球部員とすれ違う。野太い掛け声があって、その後ろを自転車で追うマネージャーの女子がいた。時折その少女が熱っぽい視線で走る一人を見つめていた。

その表情がひどくまぶしかった。川の水面に、克洋の顔も映った。最近はそれも気にしないようになっていたはずなのに、今ではどうしようもなく幼い顔に見えた。情けない顔を見たくなくて、克洋はサングラスをかけた。スモーク越しの色のあせた、薄暗い世界はそれなりに居心地が良い。

気が付くと克洋は映画館に来ていた。それも大きなシネコンでは無い。パチンコの隣に並ぶような、場末の映画館だ。

――気分が沈むと、押井克洋は映画館へ行く。

克洋はひとりごちて、そこに入っていった。

平日の夕方というのに、ホールは静かだった。パチンコもやっていない。

なつきたちと出会ったそこには、もう自分以外誰もいないのだ。克洋はパチンコ店を覗き込む

。人体のあらゆるパーツがぶちまけられた凄惨な光景はどこにも無い。

映画館に踏み入っても、数か月前と変わらなかった。克洋の背をばかにした「スナッチャー」も、もういない。映画館は、何もかもがあの時のままだった。貼られているポスターも。

いかにも無理をしている実写映画。お気楽な恋愛映画。やたらとナイーブなアメコミヒーロー。銃に突き刺されたナポレオンフィッシュもそのままだった。

克洋はそのまま、一番小さなシアターへと足に運んだ。学校の体育館のスクリーンがマトモに見えるような安っぽいスクリーンは灰色で、何も映してはいない。

ど真ん中に克洋は座る――なつきと会った時と同じように。

深く椅子にもたれて、克洋は目を閉じる。あの時は彼女がやって来て、柄にも無く映画批評なんかをしてみせた。銃を突きつけられた。変な気にあてられて、柄でもない気障なことを言ったし、撃たれもした。

そして「スナッチャー」に出会った。それを殺した。銃の持つことの意味を、知った。命を奪い、奪われる意味を知った。

「知りやしなかったんだ。人の生き死になんて」

克洋はひとりごちる。撃たれる覚悟のある者のみが銃を撃つ資格があると、とある探偵は言った。それくらいならいいやと思っていた。自分が死ぬならいいと思っていた。どうせ身長は伸びないし、女顔をバカにされることには飽いていた。派手に暴れて、派手に死ぬならそれも悪くないと思っていた。

けれども、死んだのはなつきだ。克洋では無い。探偵は一つミスを犯した。銃を持っていいのは撃たれる覚悟のある者では無く、愛する人を喪う覚悟がある者だけなのだ。それは自分が死ぬことよりもずっと辛くて、きっと悲しい事だ。

「これからだったんだ」

克洋となつきの関係はこれから始まるはずだった。次の休日に映画に行って、二時間と少しの間の沈黙を過ごし、それを埋め合わせるように、適当な店でくつろぎながらああでもないこうでもない映画の内容について語っただろう。ゲームセンターでガンシューティングでもやって、その拳銃を模したコントローラーのチャチさを笑い合っただろう。

夕飯を食べに行き、克洋が奢ろうとして、なつきは先輩風を吹かして奢ろうとして、結局割り勘に落ち着いたりするのだろう。そして、また次の休日に何をするか、帰りの電車で話し合うのだ。そして、どこかで殺し合いをする。

そんなことを繰り返していくうちに、きつとなつきは卒業して大学にでも行って、そこで清掃部を続けて、克洋もきつとその後を追う。克洋も、後輩を作って、殺しを続けるのだ。

ずっと続いて行くはずだった未来が、全部消え去った。

涙は流れず、虚無だけがあった。拳銃を引けるほどの度胸も衝動も消えたのなら、このまま死ぬやしないかと克洋は思う。

どれだけそのシートにもたれていたのか、克洋も分からない。

「大物かお馬鹿さんか。ナツ先輩には悪いけど、あの人は見る目が無かったってことかしら」

小生意気な少女の声が聞こえ、克洋は振り返る。ほとんどがシートの背もたれに隠れてしまっているが、微かに揺れる、人工的な金色の髪が見えた。それが克洋の後ろの席に座り、何度もシートを蹴っている。

「シートは蹴るな」

「脚が長いのよ」

「よく言うよ、ぼくよりチビなくせに」

「男のくせにメソメソとしてるよりマシっしょ。アンタほんとに股にぶらさげてるの？」

恥も臆面もない下品な言葉に克洋は鼻白む。やはり彼女は苦手だと小さく舌打ちをする。

「それで、どうしてここが分かったんだ、千尋」

「お嬢さまはご趣味に逃げると思いました」

「逃げてるんじゃない」

「じゃあ、何をしてるの」

その言葉とともに、シートがどっと強く蹴られる。軽く前につんのめりながら、克洋は拳を握り締めた。言い返せるような言葉は結局見つからず、歯を食いしばった。

「ま、何でもいいけど」

「お前は！」

克洋は頭がかつと熱くなるのが分かった。思わず立ち上がり、シートの背もたれに手をかけ、千尋を睨む。

短いスカートもお構いなしに、千尋は脚を組み、手を後ろに組んで椅子にもたれている。ほとんどスカートの下布地を見せつけるような格好だと言うのに、いやん、などと冗談めかして言うものだから、さらに克洋の怒りを煽った。

「何とも思わないのか！ 人が死んだんだぞ！」

「トーゼンじゃん。撃たれりゃ人は死ぬっしょ」

タバコよろしくくわえたロリポップを砕きながら、千尋はぼんやりと克洋を見ていた。彼女も、虫のような眼をしている。

「なつきが死んだんだ！ 何十発も弾丸を受けて！」

涙こそ流していないが、激昂する克洋を見て、千尋は眉をひそめる。小さく舌打ちをするのが克洋にも聞こえた。

「ごちゃごちゃうっさいな、ピーピー喚くな童貞野郎」

千尋の手が、コンマ遅れて克洋の手が動く。少女は太腿に、克洋は脇に。ほとんど同じタイミングで、二人は銃を向け合う。

「自分の頭を吹っ飛ばせないのに、アタシのはやれるって？」

「黙れ」

千尋と克洋の視線がぶつかる。無言の睨み合い、千尋がニヤリと笑う。その意味を克洋が問い質すより先に少女は口を開く。

「ナツ先輩で五人目」

「.....何が言いたい」

「アタシの恋人。同じ清掃部。パパとママ。んで.....」

笑いながら指を折って数える千尋を見て、克洋は息を呑んだ。それでどうして、この少女は笑っているのだろうか。喉を鳴らすように、千尋は乾いた笑い声を立てる。

「喪うコトにかけちゃ、アタシのが先輩ってコト」

「慣れたってことか。慣れろってことか」

いんや。千尋はそう言ってゆっくりと首を振るう。

「慣れることは無いよ。けれど、耐える術は学んだ。唇を噛み、上を向く。潰されそうになったら、別のコトに没頭する」

「別の事.....」

「例えば.....実践してみる？」

千尋はゆっくりとシャツのボタンを外した。微かに日に焼けた肌と、薄桃色の下着、そして白

い肌が露わになる。

千尋は押井の胸倉を引き寄せる。そのまま唇を押しつけ、舌を捻じ込む。口腔をねぶる。銃を持たない方の手を掴んで、自身の胸に押し付ける。克洋はミルクのような柔らかな匂いと手のひらの柔らかさに、上あごをしごかれる感覚に一瞬だけ酔う。

「っ……あ！」

陶酔は醒める。克洋はすぐに千尋を突き飛ばす。こぼれたよだれを袖で拭う。「ごちそーさん」とだけ言って、千尋は唇をちろりと舐めた。唇がてらてらと蠱惑的に輝いている。

「傷心の男が女を貪る。定番っしょ？」

彼女のセクシャリティを知らなければ——なつきを知らなければ、クラッと来たかもしれない。その彼女がここまでの程度に、投げやりになっていることにも気が付いた。

「抱かれないのはお前じゃないのか」

「ああ？ テメエがメソメソしてっからおっ勃たせてやってんだ。こっちが欲情してるように見えるか？ ええ？ 童貞野郎」

克洋の眩きに、千尋は目を剥いた。彼女の眼が真っ赤に充血している。軽く眼を擦ってから、千尋が悪態をついた。

「つまんねー奴。お受験でもやってろ」

千尋は銃を担ぐように持った方と別の手を、ひょいと克洋の前に突き出した。掌を上、何かを乗せろと言うように。

銃を返せ。千尋はそう言いたいのだ。部活なんざ辞めて普通の世界に戻れ、と。そして、返してしまえば、なつきと過ごした日を喪うことになる。

「そしたら、千尋一人になる」

千尋は鼻を鳴らす。先程までの激昂が奇妙なほどに鎮まる。

「二週間もすれば、転校生が来る。そいつはどういうことか、殺しの腕に長けた奴でね……おまけに、美人」

克洋は目を見開いた。そんな簡単に人員の補充が利くようなものなのか。清掃部と`スナッチャー、の規模を考え、気が遠くなった。驚く克洋をよそに、千尋は続ける。

「ナツ先輩は確かに強かった。けど、リソースとして考えればいち損失だ。センパイに比べりゃアンタはリスの金玉だ。けれど、リソースとして考えれば、いちの戦力だ」

なんも変わりはないのよ。けらけらと千尋は笑った。ひどく乾いた笑い声だった。千尋が傷ついてないわけないのだ。克洋よりも、なつきとの付き合いが長いのだ。

「分かった？ アンター一人、ナツ先輩一人、消えても何も変わらない。それだけ`スナッチャー、との戦いは広がってる」

「それなのに、ぼくらは`スナッチャー、のことを知らない」

「そ。イタチごっこ。けれど、勝負ってのは戦い続ける限りは、負けはしないの。この戦いに勝ちは無。だから、戦う」

「戦い続ければ、負けはしない……」

克洋はひとりごちた。

「そ。ついでに敵がいる。失恋をしたら、相手を恨むって訳にはいかないけど、この仕事はそうじゃない」

千尋は一瞬目を細めて克洋を見た。そこに少なからず、割り切れない感情を見て、克洋は彼女の視線から目を背けた。彼女はすぐに、「そういう経験も多いし」と、おどけてみせた。

千尋のように単純に思えば、克洋は一瞬そう思った。すぐにそれを打ち消す。彼女が何をし

たいのか、分かったからだ。

そして、それは克洋も望んでいることだった。

「ところで千尋。ここ数日、部室に来なかったな」

「まーね。メソメソした野郎の顔を見るのも嫌だったし」

「今日は、メイクが崩れてる」

「.....何が言いたいの？」

「ぼくにも一枚噛ませろ」

千尋はかぶりを振った。お前は分かってないというように。

「やり返したいんだろう」

千尋の言葉を遮った。銃をホルスターに納め、少女の隣に回り込む。今度は千尋が視線を逸らす番だった。

「別に。やり返す相手もないし」

「なら、なんで敵がいるって言った」

黙り込む千尋に、克洋はさらに詰め寄る。

「先輩は.....なつきは死んだんじゃない。殺されたんだ」

死んだと殺されたでは、意味するところが違う。

「スナッチャー、に？」

「いや。和製ドルフにだけじゃない。誰かに」

千尋の顔から表情が消えた。怪訝そうに顔をしかめるけれども、その眼には炎があった。続けると、その眼がうながした。

「連中の装備は、ぼくらと同じものだった。高級品だってことはぼくにだって分かる。おいそれと手を出せるものじゃない。ここから先は、ぼくの想像だ。千尋は言ってたろ。奴らぼくらが来ることを知っていたって。じゃあ、どこから武器が、情報が来たのか。ぼくらの近くからだ。調べてただろうけど、例えばあの銃の製造番号はどうだった？」

克洋は言葉を区切った。サングラスを外し、踏み潰す。

「やり返す相手がいるってのは、幸運ね」

「ああ」

「ナツ先輩が休日はダメって言ったの、アンタのせいでしょ」

「ああ」

克洋がシートを跳び越えて手を伸ばす。千尋が立ち上がる。二人の顔が再び近付いた。唇が触れそうな距離。千尋はわざとらしく叫んでかぶりを振る。

「ああ、くそ。惚れっぼくなって。アンタが女なら、惚れてた」

「ぼくも、千尋がレズじゃ無ければ.....いや、それでも」

「ナツ先輩が好きって？ ああ、クソ.....」

千尋は鼻をすすった。克洋も、胸を貸すくらいには男だった。

「なんでだよ」

くぐもった千尋の声が、呻く。

「何で、お前じゃなかったんだよ。何で、お前じゃなくて.....ナツ先輩が死んだんだよ.....おかしいじゃん.....」

克洋も、同じ気持ちだった。どうして千尋とぼくが生きているのだろう。考えても答えは出なかった。出るはずが無かった。

※

「それで、調べたっていうのかい」

「ええ。あの豚。私らが学生だって、甘く見てた。けど、ナツ先輩はそうじゃなかった」

千尋曰く、克洋の推理はほとんど正解だった。犯人は清掃部の顧問だ。潤沢に降りる予算をいことに、武器の幾つかを余分に納入していた。予備という名目で、いくつかのパーツに分解されたそれを少しずつくすねていたらしい。

「なつき先輩は勘付いていたと？」

「正解。あの人さえ消せば、色情狂とタマナシだけ」

「タマナシって、酷いな」

薄暗い通りを、後部の荷台に克洋と千尋を乗せた軽トラックが走っていた。やがて、閉鎖した老人ホームの前で停まる。三階建ての、それなりに良い造りの場所だった。昔は何故閉鎖したか分からなあったが、今の克洋ならその理由が分かる。`スナッチャー、や清掃部絡みだ。

「一分したら、撤収して」

千尋の言葉を聞いて、運転席に着いた青年は頷いた。

「準備はいい？」

二人は軽トラックの荷台、それにかけてられた幌の中にいた。いつもの制服姿に、分厚いボディーマー——今度はライフル弾も止められるモデルだ。千尋の言葉に克洋は頷く。

千尋が幌をはがした。克洋は荷台に据え付けられた、巨大な銃を掴んでいた。ブローニングM2機関銃。克洋たちのつかうサブマシンガンよりも、和製ドルフの機関銃よりも強力な12.7mm弾を使用するものだ。隣で千尋は丸い円筒のついた銃座にしがみつく。Mk 19自動擲弾銃。グレネードをフルオートで撃つ。

どちらも、克洋たち清掃部の最終兵器だ。

二つの銃声が夜をつんざく。一撃でレンガを粉々に砕く弾丸が、装甲車を吹き飛ばす爆弾が次々と建物を破壊する。

「十字の方向！ 来るよ！」

千尋の声に遅れて、軽トラックに弾丸が突き刺さる甲高い音と火花が散った。

反動を無理やり押さえ込み、克洋は機関銃を振り回す。掠めた弾丸が、飛び出してくる数体をバラバラにした。

二階の窓べりに、軽機関銃を備え付ける不屈き者がいた。すかさず千尋がグレネードを発射。

ぽん、ぽんという間の抜けた音と共に放物線を描いてグレネードが窓に飛び込んで、部屋の内装ごと粉々に吹き飛ばす。

銃撃の数こそ減ったが徐々にトラックに集中する。克洋の持つ機関銃に火花が散った。ぴったり五十秒が経過していた。

克洋がARX-160を千尋に放り投げて荷台から飛び降りる。MINIMIと同じ弾丸を使う軍用のライフルだ。千尋はそれを受け取り、ひょいと荷台から飛び降りる。

それを合図に、兵器を満載したトラックが走り去った。千尋がARXを撃ちながら少しずつ前に進む。克洋は手に取った不細工な銃を抱えて入り口まで走る。

ほとんど割れているガラスを蹴り砕き、克洋は中へ飛び込んだ。狭いホールに待ち受けるように`スナッチャー、がいた。けれども、持つ武器はちゃちな拳銃がいいところだ。胸に弾丸を受けて、克洋は軽く眉をひそめるだけだった。

克洋は手にしていた不細工な銃を腰だめに構える。暗い室内に竜の息吹のような光が瞬く。AA(オートアサルト)-12——名前の通り、散弾をフルオートで放つそれは、ホールの敵を瞬く間

にジャンクへと変えた。

「やるじゃん、克洋。んで、奴はどこだと思う？」

二人は階段を見やった。エレベーターは待ち伏せをされる。克洋と千尋は頷き合い、階段を駆け上る。克洋が先頭。それを千尋が援護する形だった。

数体の残骸を跳び越え、克洋たちは一気に三階まで駆け抜ける。階段の下を千尋が警戒する間、克洋は廊下へ躍り出る。

廊下の先にある、真っ黒な銃口と視線があつて、克洋は身体を引っ込める。ほとんど同時にライフル弾の嵐が廊下と壁を引き裂いた。

「っ……あ。いいの貫った。死ぬほど痛い」

克洋はボディーマーに視線を落とした。お腹あたりに数発の細長いライフル弾が沈んでいた。

ヘビー級ボクサーのパンチを受けたらこんな感じだろうかと思ふ。克洋は思う。視界はくらくらするし、脂汗が滲むほど痛い。

「でも、生きてる。ぼくは、生きてる」

なつきのように死ななかつた。お腹を撃たれて、腹圧で内臓をぶちまけたりもしない。それだけで十分だった。克洋はボディーマーを脱いだ。アーマーの仕組みは普通の布と変わらない。強靱だが何度も受けていれば繊維が綻んで使い物にならなくなる。そうなれば単なる

デッドウェイト
重いジャケットに過ぎない。

「廊下にマシンガン。多分、なつきを殺した奴。和製ドルフだ」

予備の弾倉をポケットに詰め込みながら、克洋はぼやく、それを見て、千尋はじろりと少年を見た。

「何だよ」

「呼び捨てにするんだ、センパイの事」

「いつか、出来たらいいなって思ってた」

「あっそ。援護お願い。めくら撃ちでいいから」

千尋は腰のベルトに留めていた手榴弾を手を取った。ピンを抜き、レバーを握り締めて克洋に身を寄せる。克洋は少女の肩にかけたスリングからライフルを手を取った。

「今、胸触った？」

「触らせたくせに。アーマー着てるだろ」

そのまま克洋は身を乗り出して引き金を絞る。閃光が交差する。その隙間を縫うように、千尋は転がすように手榴弾を放った。克洋は弾丸が近くを通過する恐怖を堪えながら心の中で3つ数えて、身を隠した。

外でグレネードランチャーをぶつ放した時もだが、爆発音と言うのは意外と小さいのだなと克洋は思う。小さいと言うか、くぐもっているのだ。ぼふん、という間抜けな音がする。

克洋は頭を出して廊下の様子を伺う。へしゃげたマシンガンと崩れた壁が見えた。克洋はARXを千尋に返した。

「今度はアタシが先行する。援護お願い」

千尋がライフルの下に取り付けたフラッシュライトを灯しながら進む。和製ドルフが守っていたのは、施設の中で最も大きな個室のようだった。ライトが表札を照らす。

「連中なりのVIP待遇ってことかしら」

「死刑囚にはステーキを食わせるだろ」

ごとりと、崩れた壁の傍で物音がした。巨大な影が動き、千尋がその影にぶつかって吹き飛ばさ

れる。その勢いでライフルが廊下を滑る。和製ドルフは生きていた。

千尋はストンピングをかわし、アーマーを脱いでカランビットを引き抜いた。その足元を薙ぐように切るが、和製ドルフは脚を引いてそれを避け、そのお腹を蹴り飛ばした。

克洋はAA-12を和製ドルフに構えたが、すぐに放り捨てる。下手をすれば千尋にも当たる。克洋はショットガンを捨て、腰のガヴァメントとサバイバルナイフを引き抜いた。

「千尋っ！」

和製ドルフは背中を向けていた。克洋はその背中に何発かを撃ちこみ、その脇腹にナイフを突き立てた。和製ドルフは振り向き、ニヤリと笑う。お前を知っているぞと言うように。

克洋は首を振った。克洋は身を屈めて飛んできた肘を避け、ナイフを引き抜いた。振り返るドルフの胸にナイフを突き出す。確かな手ごたえがあった。

心臓の前に掲げた和製ドルフの腕に、ナイフが刺さっている。和製ドルフはそのまま腕を振り回す。紙のように克洋は吹き飛んで壁に叩き付けられる。衝撃で、ガヴァメントは遠くに転がっていた。息が出来なくなって克洋はひゅうと酸素を求める。

視界は霞んで、意識が遠のく。今度は千尋が起き上がり、その腕にカランビットナイフを突き立てる。重たい一撃をかいくぐりながら、必殺のカウンターを狙っている。

——無理だ。

克洋は思う。体格差がありすぎる。多少の弾丸じゃびくともしないのに。ちやちな刃物で勝てるはずが無い。けれども、千尋はあきらめなかった。

それを見て、克洋が戦わないわけにはいかなかった。全身に力を込めようとしたけれど、身体が言うことを聞かなかった。

千尋が死ぬのは時間の問題だった。和製ドルフは千尋に馬乗りになって、その首を締め上げている。けれども克洋の目の前には、P×4が転がっていた。千尋が克洋を見る。口が空気を求める以外の形に動く。

——たたかえ。

戦い続ける限り、負けはしない。そして、生者は戦う義務を負う。死者を背負って、別れを背負って、生き続けるのだ。

一発だ。一発で決めなければならない。それ以上は克洋の体力がもたないだろうし、なにより千尋も死ぬ。リアサイトを覗く。狙いは和製ドルフの後頭部。

克洋は確信をもって引き金に指を置いた。指に力がこもる。拍子に、照準が僅かにずれた。けれども、外れたのではない。

狙いを修正されたという気分。冷たい指に導かれたように。

軽い銃声がした。放たれた.45ACP弾は、和製ドルフの後頭部に突き刺さり、花が咲くように爆ぜて機械の脳を露出させる。

「……千尋、生きてる？」

「……なんとか。そうだ。終わったらさ——」

五分ほど沈黙が続く。最初に、ゆっくりと千尋は立ち上がる。袋詰めされたパチンコ玉が握られている。ドアを開く。

なつきから教わったのは殺しの技術だけでは無い。日用の道具で人を惨たらしく殺すのは、簡単な事なのだ。

克洋と千尋は、はじめて「人間」を殺した。

※

気分が沈むことがあると、押井克洋は映画館へ行く。少し前までは小ぢんまりとした映画館へ行

っていたが、潰れてしまっただけからは駅前にある大きなシネコンへ行くようになった。

休日と言えど、ホールは閑散としている。チケットを発売して、克洋はぼんやりと物販ブースを見ていた包帯まみれの少女にそれを一枚手渡した。

「ん。先行ってて」

一緒に見ようと言い出したのは向こうだと言うのに、返事は素っ気ない。克洋は彼女を置いてシアターへ足を運ぶ。

装飾の小さな鏡に、少年の顔が映る。柔らかな猫っ毛の黒髪に髪に白い肌。長く、カールした睫毛。幼い。女性のような顔立ちと言うだろう。身長も、かなり低い。一五七センチ。女史高生の平均身長と同じくらい。けれども、背筋を伸ばし歩く少年に、気後れは無い。

夏場でも少年は薄手のジャケットを羽織っていた。その奥には、P×4の入った小さなホルスターが引っかかっていた。

克洋は端の一番小さなシアターに足を踏み入れる。人は誰もいない。終了直前の映画となればこんなものだ。

克洋がシートに沈む。すると清潔な石鹸の匂いと、そして少しばかりの火薬と血の匂いを感じた。少し遅れて声が聞こえる。

『失礼、隣をいいかしら』

「すみません。先約があるんです」

『へえ、デート？ 何を見るの？』

そう言って、声はくすくすと笑った。耳元をくすぐられているような、甘い声だった。

「さあ？ 確か、恋愛映画だったような」

『ちょっと、それは無いでしょう』

「これを観たいって言ったの、別の人ですし」

それにしたって、タイトルや俳優くらい覚えておいたらと、呆れる声がある。反論できないなど、克洋ははにかんだ。

『それで、今度はどんなことがあってここに来たの？』

「それは、どういうことですか？」

『気分が沈むとき、あなたは映画を観るんでしょう？』

「ちょっとだけ違います。押井克洋は、気持ちの整理をつけるために映画に行く。その世界と、自分と向き合っただけで、気持ちを落ち着けるんです」

『変わらないじゃない』

変わりますよ。克洋は言った。娯楽を逃避に使うことと、娯楽に沈むことには多分、大きな違いがある。

『それで、気持ちの整理をつけたいようなことって？』

「.....好きだった人に、会えなくなったんです」

『そう。辛いね.....もしかして、その人を恨んでいる？』

惚れた人を憎めるほど、克洋は気持ちを切り替えられない。

「全く。と言ったら、嘘になるけれど。それ以上に.....」

克洋は唇を噛んで、眼を閉じたまま上を向いた。アネモネのブローチを握りしめる。冷たさに、なつきの指を思い出す。

『それだけ聞ければ、充分かな。そろそろ私も行かなくちゃ』

「ぼくからも一つ質問です。また、会えますか？」

『そうだね。押井、あなたが良い人に出会うか、立ち直るまで』

克洋は目を開けた。チュロスやフライドポテト、ホットドッグ。ジャンクフードを山ほど抱えた千尋が近付いてくる。

清潔な石鹸と火薬の匂いは消えていた。堪え切れなかった涙が零れた。それを見て千尋は困ったように肩を竦める。ドアが閉じた音がした。`彼女、がきつと、出て行ったのだ。

――グッドバイ、なつき。これできよならだ。

――けれど、ぼくは。いいや.....

――おれは当分良い人に出会えそうにない。

――ぼくがどうしようもなくなったときは、会いに来てくれ。

清水栞ちゃんは死を幸せに（白杏）

清水栞ちゃんは死を幸せに 白杏

煙がゆらりゆらりと漂っている。

ねずみ色の空へと、遠くて遠くて。

まるで自由を物語っているように、儂く、薄くなってゆく。

これは煙草の白煙である。かつて、仏蘭西で起きた大革命に、自由の印として革命の戦士たちは狼煙を煙草に変え、自由を讃えていた。それを契機に自由の白煙は一気に世界へと広がり、今、この私もその「自由」をくわえて、ふーと嘆きとともに煙を吹き出した。

しかし、この時代では自由の意味とは何？独りの身で自由をも称するのかい？笑止.....

此の時、私がかくわえているのは煙草ではない、自由でもない。ただの孤独にすぎない。

*

「佐倉課長。今月の売り上げデータもまとめました」

「ありがと、清水くん。あとで読む。そっちに置いといて」

「はい」

「今日はもうあがっていい。ご苦労だった」私は清水に微笑んで言った。でも、彼女は何かを言い出しそうで、デスクの向こうに突っ立っている。

時間は夜八時半ちょっと。もう誰も会社にはいないはず。うちは残業しない方針なので、残っても残業代は出ない。社員たちは早々に仕事を終えて帰った。私たち以外。

「どうした？清水？」

「あ、あの。一緒に帰らないですか？悠太先輩？」

「っ！」自分の口角が上がったのを感じた。「懐かしい呼び方じゃないか。今日はどういう風の吹き回しだ？栞ちゃん？」

私は仕事をいったんとめた。

うんと背伸びして、久々に前歯も見せて笑った。

「今日は悠太先輩と一緒に帰りたいですので.....金曜でもありますし、ついでにこう.....」

彼女はこ恥ずかしく杯を手に持ち飲むふりをした。

「だから遅くまで残ってくれたのか。普段一番早い仕事を片付けたのに」私は軽く笑った。

「片付けて、そんな面倒がりそうな言い方はしていませんよ」栞は唇を尖らせて言った。

彼女今日はピンクのリップスティックを使った。可愛さと若さのアピールなのだろうか？

私より二歳年下だから、まだまだ乙女気分.....かな？

「まっ、しばらく待ってくれ。支度する」

小さい金色羽根の飾りの付いているヘアリングでブランの髪の毛をポニーテールにしているのは、もう彼女の固有印象だ。ロングの時もショートの時も、彼女はいつでもポニーテールだ。高校のころからずっと。その羽根のヘアリングは確か私からの誕生日プレゼント、彼女の大学卒業式で贈ったもののようだ。

「そういえば、先輩？なんでひげを伸ばし始めたんですか？おっさんくさいですよ」

「ウっ！そんなに似合わないかい？」

「似合いません。まあ、分からなくもないですよ。27才という若い年で海外支部長と任命され、その若い姿で見下される心配もあるかもしれませんが。それはただ自分をフリーターっぽくするので、やめた方がいいですよ。せんぱーい」

「そ、こ、ま、で、似合わないのか！この指摘のダメージは甚だしい……つか！世界中の髭のおじさんに謝れ！必ずしもみんなフリーターじゃないだろう！」

「ごめなさい、でも分かってくれました？速く剃ってくださいね♪」

「潔く適当に謝ったな？はあわかったよ…剃ります。剃ればいいだろう……」

「ついてにその油っぽい髪の毛もやめてください。政治家……」

「はいはい！ちょっとした出来心で、もうしないからこれ以上言わないでくれ！」

相変わらず、その感の鋭さと口の鋭さに私はどうしようもできない。

来月、アジア第一支部を開く予定だ。場所は台湾の台北。

アジアで発展しようとする企業のほとんどは、台湾を第一選択にする。日本企業にとって一番入りやすい市場は台湾だからだ。そこでしくじったらもうアジアは無理だといわれている。確かに、アジアでは唯一の親日国は台湾、そこもだめなら中国はもちろん韓国、インドも無理だろう。

「いらっしやい！何名さま？」黒いシャツを着ているお爺さんが来た。

「予約した清水葉です。」

「九時からの二名ですね？」

「はい、そうです」

「はいどうぞ！」

お爺さんは素早く中に入った。変わりに大学生の兄ちゃんが案内してくれた。

「いつも元気ですね、あのお爺さん」

「清水くん。予約もしたのか……」

「葉ちゃんです。先輩～私、効率のいい女でしょ♪」

「……うん」こっちははめられた気分だが。

まっ、いいか。この店も久しぶりなんだし……

今、元気にしてるかな？^{ひらり}蝶 先輩……

店内のつくりは客のプライベートを重視して一つ一つの和風ボックスに障子とやや厚い壁が隔ててある。もちろんみんなでわいわいする広い空間も設けてある。

私たちのいる和室は一番シンプルなタイプ、床の間も飾り花もない。ただ机一つに座布団四枚、そしてお互いがいる。

「ここの畳の匂いが好き～」清水は横になって言った。

「……………」

「どうしました？何かおかしいですか？」

「自分も意識してるなら話が早い、四人席なのになぜわざわざ私の隣で寝てるんだい？」

「.....」

なんで逆にこっちが呆れた顔で見つめられなきやいけないんだ？

彼女は無言のまま起きて、勝手にメニューは開いた。依然として私の隣席に当たり前のようになっているけど。

「飲み放題にする」

「おお、お？話が淡々すぎて、危うく大事なことを流しちゃう寸前だ！」

彼女こらメニューを横取りしてしまった。

「なによ！今日ぐらい飲ませてよ！」

「駄々こねても無駄だよ、子供でもあるまいし、自重自重。そもそも酒に弱いくせに」

「弱いけど、日本酒がすきですもん」

「嫌いじゃなかったっけ？」

「鍛えたから、今は好き.....」

「はい？」

「好きになれましたって言ってます！女の子の変化は小さい所でもちゃんと見つけないとモテませんよ。」

「ごめんなさい」

「デリカシーに欠けますよせんばい。仕事ばかりだと未来の奥さんに浮気されますよ」

「はい。悪かった。ごめんなさい」

「道理であるヒラリ先輩に振られてばかり.....あつ、言わない約束ですね。聞き流ししてください」

聞き流せるとでも？栞ちゃん、先のすごく傷つくんだよ。

「越淡麗にする？」

ここは男の度胸の見せ場だ。酒で流そう。

「もうちょっと辛口のもいいです」

「じゃ大久保、ついてに刺身、こ鍋」

「あの、大久保はちょっと辛.....」

「あ〜？」

「はい、大久保にします。やっぱ怒ったんじゃない、大人気ない」

そろそろ冬の気配も濃くなってきた。いつ冬将軍が来てもおかしくない。台湾には雪は降らないのできっと日本より住み心地がいいだろう。寒がりやなのに、なんで日本で生まれたのか？神さまの意地悪というやつか。

「おお！熱かん！先輩、注ぎますよ」

「うむ」

両手で持ち上げ、右手で注ぐと同時に左手は軽く徳利の下に添え、とても手馴れているように見える。

「栞ちゃん、最近よく飲む？」手が換わった。

「いいえ全然、外で飲まないよ普通」

へ～練習したのか、酒注ぎを。

「では、先輩～かんぱーい！」

「乾杯」

透き通った杯の合わせ音が合図のように、一日中強張った神経がどんどん緩くなってゆく感覚がする。

彼女の頬も薄紅色になってゆく。

*

先輩と知り合ったのは高一の春の日、学年2つ上の先輩は図書委員としていつも学校の図書室にいた。

正直いって、先輩はかっこういい人ではない。でも不細工でもないよ。いたって普通の、平凡な男子高生、存在すらもちよっと薄かった。

けれど、好き、になっちゃった。

うちの高校はなんと漫画コースがある。しかしその本棚はわざとなのか知らないが、とても高い。私の読みたい漫画にはいつも手の届かないところに置かれている。

中学生の幼稚さはまだ残っているせいか、本棚を登ろうとした。いえ、登ったの。

あと数センチ、のところに、私はジャンプすれば手が、届く！

「へい！」よし！取った！

と思いきや、本棚は音を立て、傾けてくきて、倒れてしまう。

「ちよっ！倒れないで！死ぬっ！」

あっという間。全然逃げようができない。力を絞っても持ち堪える時間もほんの一二秒程度だけ

本がパタパタ落ちて、もう無理……

「よく堪えた！もう大丈夫！」

と思うと先輩が助けてくれた。

あとのことはよく覚えていない。知ってることは一つ——私はもう、救えないほど、この平凡な男に惚れてしまった。

そして私も図書委員会に入った。

私の恋話は誰にも教えない。こんな話を信じてくれる人もいないだろうしね♪

とにかく、一歩ずつ距離を縮めていこう！

「先輩、今日はこれで」

「ああ、ご苦労。また明日」

「先輩は……まだ帰らないですか？」

「鍵当番だから、清水は先に帰って」

先輩の言葉には他人を拒絶しているような気配がする。気のせいだと思っていたけど、だんだん確信に変えた。

いつも元気そうに見えるのに、いつだってやる気のない先輩は、本当にみんなを拒んでいる。

拒まれた私は今日もまた、一緒に帰れない.....

前触れもなく、秋が私の心をノックした。

寒気でだんだん手が冷たなり、寒がりの私は誰かの手で自分の手を暖めたくなった。そういう気持ちで私を駆使して、二学期のある日、私は勇気の一步を踏み出した。

「先輩、夕暮れも早くなりましたね」

「そうだね。今日は早めに帰ってもいいぞ」

「あっあの、一人で帰るのは、あの.....」だめ、先輩にこんなばればれな嘘をつけても！

「確かにこの時間では危ないかも。いままで気づかなかったごめん」先輩は生物の百科事典を閉じて帰る準備をし始めた。「今日から送ってあげる。途中でもいいかい？」

あれ？ あっさりと信じてくれました？

「もしかして家まで送ったほうがいい？」

「あっ、すみません！途中まででいいです！」

ああ、アームストロングさんは言った——ひとりの人間にとっては小さな一步だが、人類にとっては偉大な飛躍だ。その一步を踏み出すため、どれだけの知恵と勇気が必要だろう。それにひきかえ、私の一步は、簡単すぎる。ひどい罪悪感が藤のように心に絡みついた.....

「日が沈む、黄昏の空、木の葉らも、赤に染められ、秋か夕日か」

夕日に赤く染められた大地と秋に染められたもみじ、そっか、もの景色の和歌ですか。

「美しい和歌です」

「そうか？ありがとっ」

「でも『日が沈む』と『黄昏』の意味がかぶっちゃいましたし、ぶっちゃけ浅い和歌です。そもそも和歌で落とされる女の子はこの時代にはいませんよ？」しまった！言い過ぎました！

「ウっ！なかなか痛いコメントだ」

先輩の苦笑いに、なぜかしら、ちょっと嬉しそうに見える。

どうして？

「今度はもっと深みのあるのを作る。今の無し、いいな？」

「はい！」約束を交わした？二歩も進んだ？

*

湯豆腐は昆布の出汁に浸って、うま味に満ちた一品になった。味噌と店の秘伝タレで一層この小鍋に風味を付け加えた。

ふつふつと泡がたって、泡のように話題が絶えなく変わり、私たちのお喋りはいつまでも終わらない。そんな気がする。これもまた酒のお蔭なのだろうか？

「だからって、ただのミスで仕事をやめるとか、そういうのは日本人の悪い癖だ、無責任だ」

私は不満を吐き出せてスッキリした。

「でも先輩、それは武士道というものでしょう？大和精神ですよ？」

「失敗を死で逃避するのを大和精神とするな」

「はあ.....」

熱爛の暖かさに惚れた栞ちゃんは知らない間でもう何本も飲んだ。

「男性に性欲がないですって？ウソ！」

「正確にいうと雄には性欲がない。ほら、ほとんどの動物に発情期があるだろう？匂い、フェロモンで雄を誘惑する。そして雄はその時にしか交配したくならない。一年中が発情期の生き物は多分人間と一部の哺乳類だけ。それで世界中の女はこうして平気にいられるのは男たちの理性が働きしているからさあ」

「はあ……」

「雄は基本的頭を動く前に手が先に出す。要するに、理性がないと男は哀れで女性に魅了される一方の生き物とのことだ」

「要するに私の雌としてのフェロモンが足りないことですか……」

そして飲んで……

「先輩～アナタとてもモテてますよ～へへへへ～♪」

「そう？誰に？」片方の眉毛が上がった。

「同じ部門の子たちにですよ～でもね～みんな先輩のこと、ゲイだと思っけています」

「へ？」初耳だけど！

「だって、先輩に選ばれ、一緒に支部へ行く人達みんな男ですもん。しかも独身で～ほら、谷岡、小林、山田、宗像、森原……」

「待て待て！独身だからこそ行きやすいじゃない？好きな人と離れ離れって苦しいよ！そして森原は女性だぞ？」

「森原さんは女好きですレズです！」

へ？初耳だけど！

「だいたい、先輩は仕事熱心すぎます！もっと周りを見てくださ～い！」ぽんぽんと、彼女は机を叩いて言った。

「はあ……」

そしてまた飲んで……

「大学で台湾人と知り合っただけで台湾に異動されて、こうゆ一のあり～！いえ！ありえないでしょっ！会社の頭おか～しい！残された人の気持ちはどうしまうすか！せんぱ～い！」

「はあ～いや、ちょっと飲み過ぎませんか？清水くん？」

「栞ちゃんです！」私の襟を掴み、私を揺らした。

更に飲んで……

「先輩～佐倉悠太せんぱ～い～、ううう～可哀相に、独身だけで台湾追放～」

今度は泣き上戸？

「おい！台湾に謝れ！しかも独身は可哀相じゃない！自由だから！」

「へりくつですよ～ハハハハ———♪」

すると、とうとう。

「やっと酔って寝たか……こいつを絶対に他の人と飲ませない」私は拳を握って誓った。
呼吸の音は穏便、当分起きることはないだろう。

紺色のコートを彼女に被り、ついでにポニーテールに結うヘアリングも外してあげた。
これでよく眠れるはず……多分……

「トイレに行ってくるね」まっ聞こえないか。

障子を引いて、和室を出た。廊下の温度は個室より低くて、体がこ震えた。

「台湾か……また遠くなるのか……」

私は深く溜め息をついた。

「何が遠くなるのだ？悠太君♪」

真っ黒な髪を赤い簪で結い上げ、仲居用のキツネ色の和服を着用している女性が後ろから声をかけた。

酒で緩んだ神経再び強張ってきた。

些細な動きで深呼吸一回、振り返る。

「お久しぶりです。蝶先輩」

＊

追ってきた。先輩の跡を探して、意外と近いほうにいた。

先輩は全国模試で上の中なのに、地元の大学に入った。そこまでやる気がないと思わなかったが、お蔭で大学進学に苦労せずに済んだ。

「悠太先輩……ハ～フ～」

「なに？」

「なんで、天文部は、登山しないと、いけないん、ですか？ハーハーハー」

「それはね、創立者に聞いたほうが……手を貸す、掴んで」

「ありがと、ございます」

登山はいいけど、この高難易度の山を登る必要はどこにある！先輩とこんな形で手を繋ぎたくないのよ！岩壁だよ！馬や鹿でもこんなところ登らないよ！

「しかも、夜中ですよ！」

「なに？」

「まぶしっ！」

先輩のヘッドライトの光が目差し込んだ。

「ごめん」

「あと一キロ！もうひと頑張りのよ！」先頭にいる部長からの掛け声。

「はい！部長！」先輩の声が耳元に大きく響いた。

「……はい！」

私も一緒に台詞を口にしたい。さもないとあの人に返事するものか。

「あの女、ヒラリ先輩は、なんで疲れないですか」

「さ元気だけが取り柄の人だからね。蝶先輩は」

そんなのところがいい！

悠太先輩の目はヒラリ先輩を見るときだけ煌く。

ヒラリ、^{わたぎひらり}綿木蝶。アメリカ合衆国国務長官、ヒラリー・クリントンと同じ名前だ。

だからかな、ヒラリ先輩のことが実に好きになれない。

でも彼女は先輩の好きな人。長い黒髪と花が咲いているような笑顔は彼女の特徴、典型的な大和撫子、見た目だけは……

「みんな！ヘッドライトを消して！」林を出、先に着いたヒラリ先輩は夜空を指して言った。「ほら！空を見上げて！」

晴れ渡る夜空に星々が満ちている。天の川、流れ星、名の知れず星座、全部ここにある。

「どうだ！自力で得たこの景色！ここまでついてくれてありがと！よく頑張った！諸君！」

本当に綺麗、美しい。先の不満の全ては満ち零れそうな星に一掃された。

あれが起きる前に……

「ヒラリ」

「へ？いやここでは、うんっ〜♥」

一人の男がヒラリ先輩の肩に手をかけ寄りかからせて、唇でヒラリ先輩の唇を……

「〜「またか……」〜」

新入生たちは目を逸らした。二三年の部員みんなもう慣れた。ヒラリ先輩と校外の男と、みんなの前でキスすることに。

「……………」

先輩は、あの男を睨んでいる。

「あの男、前回との違うよね」

「ああ、五番目だ。高校から今まで」

「五っ！すげえな〜」

はい、そうです——ヒラリ先輩は、ビッチです。

「先輩、スルースルー、子供の教育によくないよ」

「そうだね。行こう」

なんで、なんで悠太先輩はあの女に見とれるのよ。どうして私じゃない！

思いつきり叫びたい、星にこの気持ちを訴えたい！

先輩は私の手を引っ張り、人群れから離れた。

ここで、コクったらうまくいけるかな……

いいえ、うまくいかないよ。先輩はただ意地を張っている、逃げたのだ。

私たちは登山装備を横に置き、芝に座り込んだ。私たち、ただ星を見つめ、何も語らない。

このまま何分間星の光に浴びらればかり。

「^{ひとや}一夜から、^{ひととし}一年かけり、^よ読めきれぬ、^{はちじゅうはち}八十八の^{とわものがた}永遠物語り」突然、先輩が^{うた}詩を。

それは誰に詠ったものですか、と聞きたかった。

「へ～悠太君また難しい俳句を作ったのかい？」

「ええ、まあ」

ヒラリ先輩が来た。

「彼氏さんをほっておいていいですか？蝶先輩」悠太先輩は頭を上から後ろに振り向かった。

「大丈夫よ、ところで、今度は簡単な俳句を作ってよ。あたしにも分かるヤツ」

「……はい、分かりました」

「十分後集合ね、遅れないでよ、葉も」

「「はい……」」

悠太先輩は、長く息を吸い、そして一気に吐いた。まるで、叫んでいるみたい。

「ねっね！私も髪の毛をヒラリ先輩のようにしたらどうですか？メイクも練習しちゃいましょうか！」

「葉は今のでいい。ポニーテールが好き。メイクもどうしてもの場合だけ、薄くするでいい」無理に雰囲気を変えようと思って髪の毛のことを話したのに、乗ってくれました……

「戻るぞ。葉」

先輩、今の気持ちは、いったい……だめ、想像はつかない。でも、きっと私と同じもやもやに違いない！

「先輩！」声かけてみた。「それは俳句じゃないです！」

先輩は目を大きく見開いた。

「和歌ですね、いいえ、俳諧です！私には分かります！『八十八』は、空にある星座の数！永遠に終わることのない星の光を、讃える詩です！今回は……」私に聞かせるために作った詩です。ね？「まあまあいい詩です！」

言いたいことを最後まで言えなかった。

くやしい、くやしくて涙が零れそう……

「……フン、ありがと、葉」

「っえ？」トーンが外れた。

先輩はヘッドライトをつけた。今回灯りは私の目に直接差さなかった。

でも、先輩の顔がはっきり見えない。

「戻るぞ、しおり～♪」

だめですよ。そんな喜びそうな声でかけられると、本気泣いちゃうよ……

「葉ちゃんって呼んでください」

「へいへい～」

＊

涙が、頬に？

何でこんなときに昔の夢を見たの？今はどこに……

目を開けると机の脚と先輩の鞆が目に入った。先輩はいない……

酔いで眠ったのね。

あ、下着は……

手でミニスカートをめぐり、自分のそこを触った。

まだある？服も乱れてないじゃない？既成事実にはなれなかったか～

先輩の軟弱者、腰抜けの意気地なし！

女が寝転んでるよ！布を減らさないどころか増やしたってどうゆーことよ！

先輩のコートをどっかに捨てたいのに、結局服の匂いを嗅ぎはじめ……

ちがう！これで私が変態になってしまう！

やはりコートを部屋の角に捨てた。

「あれ？ヘアリングが外された？……まあいいか♪」

これしきで喜ぶ私はどうかと思ってるけど、悠太先輩にしてはヘアリングを外せるだけで称賛に値する♪

「って、先輩は？」

障子は一応閉じている……

＊

「悠太君、最近元気にしてる？」

「うん、元気ですよ」

「ひげ伸びたね、髪形も変えた。よく似合うよ」

「そうですか？似合わないと言われましたけど」

「ねね～葉も来たね？もう恋人になった？」

「いえ、彼女とは……上司と部下の関係です」

「へえ～つまんない～」

二人で屋上に来た。冬の夜風で酔いは一欠けらも残らず吹き飛ばされた。

「先輩は寒くないですか？」

「心配してくれてありがと、寒くないよ」

私はやや寒いけど。

「って？遠くなるって？」先輩は向こうのビルに向かって聞いた。

「まだ気になってますか？」

「いいたくない？」

「いいえ、言います」

どこから言えばいいのか？

「実は来月……」

最近の色々、自分の武勇伝みたいなことを漏れずに先輩に話した。

「悠太君も偉くなったね。よかった」歌っているように言った。でも喜んでくれているのは分かる。

「先輩……」まわせ！頭脳！舌！「私と……」

「うん？」

「私と行きませんか？台湾に」

「私、結構暑いのが苦手なんだ～、遊びに行くの？」

「私はもうすぐ部長になります！すごく頑張ったんです！今の私はあなたの世話もできます。もうあんな男の相手にならなくていいです！」言い続けろ！「ずっと、好きです！先輩のことが大好きです！」

先輩は優しい表情で私の言葉を受け止めた。

「.....知ってるよ」

「いえ！先輩はちっとも知らないんです！今までなんども告白しました！でも先輩はいつも逃げて逃げて逃げるばかりです！私の気持ちを冗談にして！」

「.....悠太君の気持ち、いつも伝わったよ」

「じゃどうして？どうして頷きも断りも、何一つもくれないですか？」

唇が震えている。足も、手も。でも今回は逃がさない。

「悠太君との関係を壊したくないのさ。お喋りしたり、ふざけあったり、いつまでも続く。今までのように。これは素敵なことだと思わない？」

「思わないです。分からなくなるので、いったい私は先輩の何なんですか？ただの後輩？友達？恋人候補？」

「候補なんて人聞き悪いよ」

「答えて！」

思わず怒鳴った。先輩は怯えて肩を窄めた。

「ごめん.....私も分からないよ.....」

「.....はい？」

「だって、悠太君は何でもできる。こんなにできる人には、私の存在が必要なの？」先輩は涙をこらえている。「知ってるもん！悠太君の気持ち！そして好きになられた時点でもう友達に戻れないことも！」

「先輩は私のこと、好きですか？嫌いですか？」

私は奥歯を噛んで答えを待つ。

「.....わ」

「分からないだけは止してください」

「知ってるもん！」先輩は初めて私の前で叫びを出した。「知ってるから、もう促さないで、言うから.....」

先輩は服を握り締め、答えを吐き出した。

「大好きです」

え？

想像外の答えだ.....

「誰よりも好きです。高校のときから、ずっと」

「じゃどうして私から何回も逃げたんですか！」

好きですって？これは一番納得できない答えだから、心底から怒りだした。

「だって、悠太君には私が不要ない、からだ.....スー」

「何ですかその答え！好きだから必要に決まってるじゃないですか！なんでセンパイが泣くんで

すか！こっちが泣きたいですよ！ずっと分からないままで遠ざかれて」

「私は！悠太君の足手まといになりたくない！」はっきりと、先輩は喉を哽らしながら、言いたいことを伝えてくれた。「悠太君と一緒にいて、私が、プレッシャーを感じる。頑張らなくちゃ頑張らなくちゃって！でも頑張っても追いかげばっかり、いつの間にか悠太君はもう私の前にいる！追いつけない人になった！私はただのお飾りとして悠太君の傍にいたくっない！私は、悠太君に相応しくないんだ……」

先輩はもう涙が零れている。顔も鼻も真っ赤になって、息も狂ってしまった。

彼女が抱えている悩み、こちらは全然知らなかった。いえ、知らせてもしなかった。このバカ女はこうやって十数年生きてきた。

「ね…悠太君、これで満足した？」

「……」

「答えて！」

「蝶先輩……」

「先輩と呼ぶな！今まで守ってきた絆も、縁も、全部台無しになった！私の手で……もうこれ以上頑張れない……こんな私はあなたの先輩と名乗る資格はない」

「過去の関係に戻れなくても新しいのを……」

「先輩の言うことを聞きなさい！」彼女は乱暴に涙を拭いた。「これは始めて、そして最後、先輩としての教えだ。よく聞きなさい」

いや、いやです。聞きたくないです。

頭を揺らしても、先輩は止まる気はない。

「自分の幸せを掴んできなさい、私のいない未来をここから築きなさい。また、一から、やり直しましょう」

熱い涙がお互いの頬を濡らした。

「ね？聞いてくれるよね？」

涙に咽びながら、返事を喉から搾り出す。

「……………」無理だ。

こんな簡単に、先輩を……！

「……そっか、分かった。あなたの口にした先輩は全部偽物ね、ああ、バツカみたい。こんな偽善者のために悩んできて、損だわ」

「せん……」

「黙りなさい」

彼女は左手を私に見せた。

その薬指に金色を指輪がある。

「来月よ。私にも私の家庭がある。もう私たちはこれでお終いよ。私のことを諦めて、私も諦めるから……」

彼女は振り向かず、さよならもなく、私の前から消え去ってゆく。

*

口を左手で塞いで、声を出さないように。

右手は先輩の紺色のコートを強く強く抱きしめ。

私はただ、ただ……裏で涙を流すことしかできない。

私はヒラリ先輩の代わりになれない、先輩を慰める立場でもない、当事者すらない！

私は先輩のために涙を流す。それだけはできる。

一番、先輩が好きなのは私なのに、一番、佐倉悠太を愛している女は、この清水栞なのに！

なのに、なぜ、ここで先輩を抱きしめる勇気が出ないの？

足の音が近づいた。ヒラリ先輩だ。

「いたのね？栞」

「はい」声が震えている。

「寒いから、早く帰ったほうがいいと思うよ。特に女の子は」先輩は私に背を向けたまま喋っている。

ヒラリ先輩はそっと屋上のドアを閉めた。

たぶん声を漏らさないための……

「どうして、ヒラリ先輩はそんな嘘をつくんですか！その指輪、偽者でしょ？しかも悠太先輩からの誕生日プレ……」

「なんで？」やっと顔を向いてくれた。「わかるの……？」

「蝶に花の模様、それは悠太先輩のセンスです」自分のヘアリングをヒラリ先輩に見せた。

花、葉っぱ、羽、先輩は自然と動物が好きだから。

ヒラリ先輩の金色の指輪に細かく青の蝶々と花の水晶が嵌っている。

「わざと模様を隠したでしょ」

「栞、察しが良すぎて男に嫌われるよ。女は黙ったほうがいいときもある」ヒラリ先輩は右手で指輪を隠した。

「先輩の、悠太先輩の気持ち分かるくせに！自分の気持ちも大事にしてるくせに！」

「……これが分からないってことはまだまだ子供だね♪そろそろ大人に……」

「子供です！大人に、女になることはヒラリ先輩のような卑怯者になるくらいなら、ずっと子供のほうがよっぽどマシです！」

ヒラリ先輩は頭を低くして肩も上がった。そしてまた自然体に戻った。

「君の言うとおりでわ。綿木蝶は卑怯でバカな女」

「やけくそですか。子供と喧嘩したくないから逃げるんですか。悠太先輩の気持ちから逃げてそして私との喧嘩からも逃げて、いったいヒラリ先輩はどこまで逃げるんですか」

「……………栞って、性格悪いって言われたことはない？」

「おや？やっとな乗ってくれるんですか？上等です！」

「いいや、羨ましいだけよ」

「……………羨ましいですって」

「ええ、栞は私のできないことができるから羨ましい」

「なにそれ！なにそれなにそれ！何が羨ましい、あなたの口からすると嫌味にしか聞こえない

です！」一発でいい、コイツを殴りたくてたまらない！

「そうになったらごめん、性格悪いのはこっちのようね」

ビッチだから性質が悪いに決まってるじゃない！

「でもね、ありがとう」

「.....今回はなに？ありがとう？新しい嫌味？」

「悠太君のことはよろしく、私はここで悠太君の人生から退場する」

「死ぬ気.....ですか？」私は答えに恐れながら聞いた。

「いいえまさか、死で逃げることは悠太君の一番軽蔑していることじゃない、私もだよ」
先濡れた頬をかまわず、とても、とても綺麗な笑顔だった。

「結局、蝶先輩こそ本物の大和撫子...彼女に比べて私は子供にすぎない.....は～」蝶先輩は名前どおりの人、どこかに花があれば寄っていくと思っていった。でも違うか、蝶先輩はその名前とまっ逆な人間だった。

一種類の花の蜜にしか吸わない蝶だっている.....蝶先輩はそうだった.....

その後一週間、先輩、悠太先輩は会社に来なかった。三週間の休暇を取ったから。でも仕事の資料はすでに整って定期的にFAXで送ってくる。うちの部門これからやるべきことを全部メールで全員に知らせた。

会社に顔を出さないと給料が出ないのに。

「まさか、台湾に行く前に一回日本を旅行しようと思ってないかしら？」

「いや～それしにても頑張り過ぎだよ、課長は。旅行中も仕事を完遂したってどんだけの超人だよ」

「ね～できすぎだよね～」

先輩のいない事務室にとんでもない噂が蠅のようにうろうろ飛び回っている。実に不愉快。

先輩は超人ではない。ただ我慢強いだけ。先輩もできる人ではない、とても不器用で、とても甘えん坊な人。

その夜、先輩を家まで送った。初めて先輩の家に訪ねて、結局先輩は涙も枯れ果て、冬の夜風のせいで高い熱も出た。

その晩ずっと先輩の手を握ったまま朝まで.....

「少なくとも、寝言にヒラリ先輩の名前は出なかったことは褒めてもいいところかもしれない.....」

「清水さん？何か言った？」

「いえ、何でもないです。すみません」

よし、今日もう一回先輩の家に行こう！お見舞いのついでに既成事実も.....あ、まず帰ってシャワーしないと.....

ポジティブな絵空事で頭をいっぱいにして、今日は絶対に先輩の鬱陶しさを薙ぎ払います。

＊

ねずみ色の空は街角の騒がしさも人の憂鬱も包み込む。そしていずれそれを持ち去り、青いまま

で私たちを見守り続ける。

「そんなはずなのに、一週間たっても憂鬱は増える一方じゃないか」

これは最後の一本。普段あんまり吸わないタバコは今日だけで三パックも吸った。

ひげは剃った。髪型も戻した。でも気持ちはいつもの自分じゃない。

いつもの温かい紺色のコートをきている。なのに今日は妙に寒く感じる。

いえ、寒く感じるのはもうこの二日間のことではない.....

「フランス人は全部どうかしてる。こんなの自由も何も、ただ虚しいだけじゃないか.....」

ここは私の住んでいるマンションの屋上だ。たまにここで布団を干す主婦がいる。最近は曇りで屋上は格別に人気ない。

それ以降、会社に出る顔はない。さらに言うと、葉に会う顔はない。

「子供みたい泣いて、手を繋いでもらって、看病してくれて、朝ごはんまで.....」

もう完全に葉ちゃんがお母さんじゃないか！もう顔も合わせられない。

こんな理由で溜まっていた有給を使ってしまった私に昔の自分もきっとバカ野郎って叱ってくるだろう。

ずっと誰かの目線を気にせず、蝶先輩だけを見て生きてきた。今、もうそんなことをする道理はない。だからこその他の人も考えが気になるようになった。

ふと、自己分析してみた。

意外と存分に泣いたあと、一切合切すっきり見えるようになった。そして、熱以外なんともない。いたって平気。むしろ清々しい。

まるで今まで蝶先輩への感情は偽りみたいに煙草の白煙となった。

真っ白に忘れられないが、時間の流れに身を任せれば、この思いの残り香も流されるだろう。最後に残るのはきっと楽しい記憶の欠片だ。

「問題はこれからだ.....」

二十層のビルから見下ろすと、なにもかも米粒みたい。みんな大事、けれど小さい。自分もその中に一員であることはどうしても否定できない。となれば、自分も一つの米粒として大事にされているのか？

「いや、食べ物に勿体無い日本人は決して一粒の米を大事にしないか」

こう思い込むと、自分のこと本当にどうだってよくなる。

「いっそ.....」

ポン！

「センパイ！なにやってるんですか！」

屋上のドアが勢いよく開けられ、喉を千切るくらいの声で、葉は私に叫びかけた。

「しおり.....ちゃん？」

急に強い風が吹いた。もともと走って崩れた髪の毛はさらに乱れた。息もつかせない。

しかし彼女は全然それどころではない。

「葉ちゃん、どうして.....」

「先輩のバカ！」

「ウツ」

「やりたいこと何一つもしてないくせに！まだ何も叶ってないじゃないですか！夢も仕事も恋も！なにっ一つも！」

「……………」

「27年間ずっと独りぼっちで、女も抱いたことなく死ぬのですか！童貞のままで死ぬんですか！」

え？

「ただ振られただけで！恋の修羅場でしくじっただけで、躓いただけで！ただの失敗で死のうとするなんて！先輩も立派な日本人じゃないですか！」

葉はマフラーを引き外した。

「残された人は、寂しいですよ……好きな人と離れ離れは、悲しすぎます……」マフラーを握り締めて「今日、仕事を早めに終わらせました。早く、一刻も早く、先輩に会いたかったからです」

初めて、葉ちゃんは涙を見せた。

「急いで家に帰って、シャワー浴びて、先輩は雄に性欲がないって、だから、勝負下着に置き替えました。既成事実をつくれれば、私も一緒に台湾について行けるのに……」

「葉ちゃん……」

「なのに！なんで先輩は全然振り向かないですか！私がここにいます！ずっと先輩の傍にいます！大好きですよ……」

彼女の姿は私に痛々しく感じさせる。彼女の告白も……

「葉ちゃんは、とてもいい子、優しく、たまに突っ込みもしてくれる可愛い女の子だ。私のような意気地なしより、もっといい男がいるはずだ……」

葉はとてつもなく怒りあふれる目で私を……

「葉ちゃん！私はちっともあなたに相応しくない！分からないか？」

「先輩、それは、蝶先輩も話した言葉です」

「っ！」

私は息を呑んだ。

「葉ちゃん、私は、そんな……」

「先輩なら分かってくれるはず、そんな風に言われたら、どれだけ悲しい、ことが……」葉はもう心の堤が崩れた。「先輩の、バカ！死ね！」

「葉ちゃん、ごめんね、分かったもう泣かないで……」

「死にましよう……私も一緒にいくから、もう、すべてどうでもいいです！」彼女は向かってきている。「もう心が疲れまして……」一歩、一歩私のところに「一人の人間を、愛し続けていて、もう疲れまして……」そして私の足元の前まで……

「葉ちゃん……」

触りたいが手が出せない。

どうやって落ち着かせればいい？

「ス——ウ！」栞はいきなり息を吸い込んだ。「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——！」

渾身の叫びは私の魂も揺らがせる。でもこれは私が受け止めないといけない、栞の怒りだからだ。

そして私はまた何もいえない。
そのまま口を閉じた栞の待つことしかできない。

長い時間が経った。そんな気がした。
そして、彼女は口を動いてくれた。
「私の一番認めている大和撫子は言ったんです。死で逃避するのは軽蔑すべきことって」
「うん」

「私の大好きな男もそう言ったんです。死で逃げるのは無責任だって」
「うん」

「先輩は？まだ私の先輩ですか？どこにもいませんね？」栞ちゃんは私に仰向いて、潤い涙目で見つめて問うた。

シトシトと雨が降ってきた。優しい雨だ。

夕日が雨雲を避け、世界をオレンジ色に。

今、栞ちゃんの睫毛にかかっている雫は誰によるものか？空の女神さまか、それとも彼女自身か？

この熱くて赤い頬もまだ何によるものか？日の女神の悪戯か、それとも私の前にいるからか？色んな質問が頭に浮かぶ。

彼女は輝く瞳をそっと閉じて、もう一度私を導いてくれた。
理性より、感情のままにいつって、彼女は揺らぎのない鼻息で私に呟いている。
彼女の手からマフラーを取って、彼女の空いた手は私の胸の前の服をきつく握った。
そのマフラーを彼女の項からかけ、自らの懐に彼女の体を引き寄せた。

睫毛にある透き通った雫を軽く取り上げ、私は首を傾き、彼女のそして私の質問を唇で答えた——

これから先は、ずっと、佐倉悠太は清水栞の.....

*

今日も半袖日和、澄み渡る空に輝かしい日差し。私たちはその下を歩いている。

「や～食べました～」栞はお腹をポンポンと叩いた。
「ほどほどにね、体によくないよ」
「太っても私から離れないでしょう♪なら大丈夫なのです」
「ハハハハ.....」苦笑いした。

飲み放題の店はおとんどない代わりに、食い放題の焼肉屋、レストランはどこにもある。

「幸い頼んだ料理は全部食べた。でないと200元のサービス料はちょっと高いぞ」
「え？安いほうでしょうか？今は台湾元1元に対して日本円3.5円ぐらい、ですから700円！」

「違うよ、両国の所得比も一緒に考えればまだ三をかけないといけないだろ？だから2100円」

「ウッ、安くないです」

途方もない雑談を交わしつつ、道中を散歩している。

ここは西門町、台北にある彼の電気街と似ている街だ。栞ちゃんはそのこのメイド喫茶によく行くようだ。しかも私の仕事時間で通っているらしい。

支部長だからってこれはこれで財布も厳しくなるな～

「ああ～アイスが急に食べなくなりました……」

「今は一月だよ？アイスとか売ってる？」

「台湾暑いですから、きっと売ってるに決まってるでしょう？あ！マンゴーカキ氷！特盛りと一緒に食べよう～！」

「うあ、引っ張らないで！つーかまだ食べれるのか！」

「ヒヒ♪だって私今、二つの胃袋があるもん♪」栞は私の手を彼女の下腹に当てた。

「っ！」自分の顔が熱くなったのを意識した。「へいへい～食べて食べて、責任は私が取る」荷が重く感じ始めた。

私たち二人の細胞の一つ一つに、あの日の記憶が刻んでいる。私が救われた日。彼女に消えない傷跡を残した日。

そして、この情熱と優しさに包まれる国で新しい生活は始まっている。

「先輩！速くおいて～！」

栞は大きく左手を振っている。その薬指はキラキラと光っているところを見て、ふっと幸せを感じた。速めに足を運んだ。

「先輩？違うでしょ？」

「ヒッ……」彼女ははしやぎをとどまった。

「まだ慣れてないなら別にいいよ」

「いいえ、言います、言いたいです。でも今じゃない」

栞は私の後ろに回った。

まだ時間がかかりそうだが、気長で待とうか。

すみません、マンゴーカキ氷大盛り、お願いします！
「不好意思，我要大的芒果冰一碗！」店員に声をかけた。

私になまりがあるから店員はちよつとびっくりした顔をしたが、無事伝わったようで、手素早く作ってくれた。

「ウォ！」

突然後ろから小さい衝撃と、耳に小さな囁きが入った。

「愛してる、ゆうた～♥」

黒感 (Puney Loran Seapon)

黒感

Puney Loran Seapon

これは俺、^{かなぎゆうた}冠風雄太が中学生の頃の話。

その頃の俺は、『いじめ』を題材にした本をよく読んでいた。題材にした、と言っても、小説とかそういうのではない。何と言っていいかは分からないが、近いのは体験記とか専門書とか、そういったものだと思う。

俺自身、小学校の時にいじめられていて、それから逃げるように奴らがない中学校に通い始めたから、きっと他の人よりも『いじめ』という単語に敏感だったのかもしれない。図書館で適当に本を探していた時、『いじめ』というシンプルなタイトルの本を見つけて、思わず立ち読みしてしまったのは、今でもよく覚えている。

それからだ。俺が意識的に『いじめ』を題材にした本を読むようになったのは。

小学校の時は男女問わず散々いじめられた。その時はとても悲しく、同時に腹立たしかった。こいつらをどうしてやろうかと、出来もしないくせに、いじめてきた連中をぼこぼこにする妄想をしてストレスを発散させ、その度に結局現実がチラついて虚しくなった。そんなんだから、きっと余裕がなかったのだろう。ありがたいことに中学校のクラスメイトにそんな下らない事をする奴はおらず、そしていないことが、俺に余裕を持たせてくれた。

余裕が出てくると、人間は少し違うことを考えるようになる。本を読んでいるとき、俺は自分がいじめられていた時のことを思い出して、無性に腹立たしくなってきた、昔やったように、頭の中でやつらをひどい目にあわせてやる妄想をした。体験談を読んでいる時は、語り手に自分を重ね合わせて、いじめてくる連中を殺してやりたい衝動に駆られて、その光景を頭の中でイメージした。ついでにその中に、自分をいじめてきた連中を入れて、一人一人ひどい目に合わせた。こんなことを考えるのが、実はとても快感だった。

こんな黒い自分のことなんて、とてもじゃないけど誰にも言えない。でも、それを苦痛に感じたことなんて無かった。たった一人だけの世界に閉じこもることが、かえって俺自身をより深く、妄想の世界に連れて行ってくれたからだ。

そんなことをしていた中学生時代も終わり、話は俺が高校生の時に移り変わる。

『いじめ』についての本を好んで読んでいると、どうしても頻繁に目に止まる単語がある。

そう。『自殺』という言葉だ。

小学生時代、『自殺』することを全く考えなかったか、といわれれば、嘘になる。自分が死んだら、あいつらは周りからどんなに責められるのだろうか？ それを苦痛に、あいつらも自殺してくれるだろうか.....なんて考えたことはあったかもしれない。それでも自殺しなかったのは、それ以上に、どう仕返ししてやろうか、と考えていたのではないかと思う。結局行動に起こすことなんて出来なかったから、頭の中でだけ、ではあるのだが。

頻繁に目にする単語なので、図書館で本を探していたりすると、それを題材にした本がやたらと印象に残り、つい手に取ってしまう。俺は今度は、そんな本を結構読むようになっていた。流石に自殺した人の体験記、なんてものはないから、自殺しようとして思いとどまった人の体験記とか、自殺してしまった人の親族の話とか、そんな本だ。

『いじめ』の本を読んでいた時は、少しばかり人目を気にするようにしていたのだが、その頃の

俺は感覚が麻痺していて、人目がどうだとか考えず、電車の中や教室内で普通に読むようになっていた。

そんなだから、友達に心配された。俺が自殺しようとしているほど思い悩んでいると思ったのだろう。別にそんなことなど無かったのだが.....挙句、そんなに話したことの無いクラスメイトから、「何か悩んでいるなら相談に乗るよ?」と言われてしまったので、それからは人前で読むのは控えるようにした。

本を読んでいる間、俺がどんなことを考えていたのか、よく覚えていない。『自殺』という言葉が、自分にとっては選ばなかった選択肢であるから、どこか心のそこから強く考えることが出来なかった、ということか。

一つ覚えているのは、『いじめ』の本を読んで、頭の中で惨い妄想をしていた時ほど黒い感情は感じていなかった、ということくらいか。

俺が『自殺』の本を読んでいたのは、受験勉強が始まった頃まで続いた。

そして時は過ぎて、大学時代。研究室に配属され、後二ヶ月もすれば大学院生になっているだろう。ここが、俺の、今現在だ。

俺は自室で、ベッドの上でうつ伏せになりながらパソコンの画面を見つめていた。もう、かれこれ三時間はパソコンを使えばなしだ。

少しだらだらしすぎか、と思うものの、それでも俺はパソコンを使うことをやめない。少し前にネット小説にはまり、ここ最近はそこにアップされている小説を読むのが趣味になっていた。

読むジャンルは、ファンタジーや学園もの。後は二次創作も少々.....といったところか。

だが俺が今一番はまっているもの。それは『復讐』ものだった。

まあ『復讐』と言っても何でもいいわけじゃない。『クラスメイトにいじめられている主人公』の復讐劇を、俺は好んで読んでいた。

読んでいると、中学生時代の俺を思い出すのだ。自分を登場人物に重ね合わせて、妄想で快感を得ていたあの頃を。

好都合なことに、ネット小説で自己投影するのは楽だった。話の中で、勝手に主人公がクラスメイトをボッコボコにしたり、少し過激な作品だと虐殺したりしてくれるから。特にファンタジーものは比較的過激な描写が多い。妄想にさほどエネルギーを使わず、快感を得ることが出来た。

だが、ここ最近、あまり快感を得ていない。パソコンを使って探しているのだが、俺の求めている『復讐』を盛り込んでくれている作品は、俺が想像していたよりずっと、数が少なかった。読みたくて読みたくて仕方が無いのだが、そもそも作品がない、というのだからどうしようもない。

最近は、読むことより探す時間のほうが長くなってしまっていて、趣味のつもりがかえってストレスを溜めてしまっている。これでは本末転倒だ。

溜息を吐き、俺はようやくパソコンをシャットダウンした。

こういう時は、古本屋で立ち読みをするに限る。

「.....お、坂木じゃん。お疲れっす」

古本屋に向かう最中、俺は見知った顔に出会って、会釈しながらそう声をかけた。

「うー？ ああ、なんだ冠風か。お疲れー」

そう言いながら挨拶を返してきたのは、坂木加奈子。俺と同じ研究室に所属していて、来年は一緒に院に入る。友達かと聞かれれば首を傾げざるを得ないが、こうして見かけたら挨拶を交わすくらいには仲がいい。勿論彼女とかでは絶対に無い。

「奇遇だねー。どこ行くの？」

「ああ、ちょっと古本屋まで。坂木は？」

「いや、私は特に.....古本屋、ついていっていい？」

結構長居をするつもりだ、と一言入れると、坂木は大丈夫、と言って頷く。本当は一人で行きたかったが、断るのも悪い。思わぬツレが出来てしまった。

それから四時間後。

「冠風ってさ、暗いジャンルの本が好きなの？」

古本屋を出た後、坂木にそう聞かれて、俺は黙る。店内をぶらついていたら、面白そうな『復讐』ものを見つけてしまったのだ。今日は坂木と一緒にだから、あまりそういうジャンルの本を読むのは控えようと思っていたのだが.....結局我慢出来ず、気がつけば読み始めていた。一応、坂木も別の棚に向かったから気がつかれる心配もないだろう、なんて思っていたが、甘かったようだ。

別にばれたら何か問題があるわけではないのだが.....ちょっと気まずい。

「あー、まあ、割と好きかな」

悩んだ結果、そう言った。本当は『大好き』なのだが、そこまでは言わなくていいだろう。

俺が肯定すると、坂木は何か言いたげな様子で、だが何も言わなかった。

「あー.....いいだろ別に。好きなものは好きなんだよ」

煮え切らない態度に、俺は少しだけイラっとして、同時にそんな態度を取らせてしまったことに申し訳なく思いながら、やや投げやりに言葉を発した。

そんな俺の言葉に、坂木も前の調子を取り戻したようだ。

「んー。読んだ後、後味悪くならない？」

「あー、どうだろう？ あんまし考えたことないかな？」

俺はどちらかという、復讐している人物に自分を重ねることに意義を感じており、読んだ後は寧ろ快感を覚える方だ。とは言え、これは流石に言えなかった。

「てかさ、復讐ものって、何が面白いの？ 憎しみの連鎖とか何も生まないじゃん。あ、もしかして、自己投影？ 復讐する俺かっこいいー、みたいな」

何か間違っているような気もするが、意外と正解に近いところまで自力でたどり着かれたことに、俺は少し驚いた。

「坂木は、復讐ものはあまり好きじゃなさそうだな」

「ま、ね。私は、うらみとか憎しみって、時間が経つと自然と消えていくものだって思っているからさ。ああいったものを読んでも、あんまし共感できないんだよね」

「えー？ それは何とというか、ちょっと綺麗ごとな気がするんだが.....」

「綺麗ごとで結構。綺麗なんだから、そっちの方がいいじゃん」

そんなものだろうか、と考えながらも、頭では別のことも考えていた。

その後は大した話しもせず、俺は坂木を家に送ってから、自宅に向かった。

その夜。

俺は寝転がりながら、考え事をしていた。

坂木は、うらみや憎しみは時間が経てば消える、と言っていて、俺はそれを「綺麗ごとだ」と否定した。

だが、彼女の言っていることを、俺はバツサリと切り捨てられずにいる。

完全に否定しきれないのは、否定出来ない根拠があるからだ。

俺は、もう昔読んでいたような『いじめ』や『自殺』を題材にした本を読まなくなってしまうていた。『復讐』ものは読んでいて、そこには『いじめ』も、作品によっては『自殺』も盛り込んでいるものの、それは結局はフィクションで、現実ではない。昔読んでいたようなノンフィクションに、俺は然程興味を惹かれていなかった。

それだけじゃない。たとえば、中学生時代の俺なら、『学生がいじめを苦に自殺した』という話をニュースや新聞で見れば、程度の差こそあれ、腹を立てていた。本気でそう思うことがあったのかは疑問だが、それでも、幾ばくかは黒い感情が湧き上がってきたものだ。だが、今はどうだろう？ 腹を立てるところか、ほとんど心を動かされない。無関心で、どこか他人事になっている。自分は冷たい人間になってしまったのだろうか？ 少なくとも俺自身、自分勝手な思い込みなのだろうが、『いじめが原因の自殺』に腹を立てている自分が、優しい人間だと感じてすらいた。

妄想も変わってしまった。昔はきちんと自分の頭で考えていた気がする。でも、最近はどうだろう？ ただの投影で終わってはいないだろうか？

極めつけは――ここまで思ってから、俺は目を閉じて、なるべく考えないようにした。したつもりだけど、出来なかった。

昔、自分をいじめていた奴らの顔を一人一人思い出していく。結構な数を浮かべることが出来たが、これで全部かと聞かれると自信はない。昔はこんなじゃなかった。一人一人、確実に全員を思い浮かべることが出来て、そしてその度に、黒い感情がふつふつと湧き上がっていたものだった。それがどうだろう？ 全員を思い浮かべられたか自信を持ってない上に、思い浮かべた顔に対して、俺は何の感情も抱けないでいる。

否定したつもりの『綺麗ごと』は、『綺麗ごと』なんかではなかった。

その事実を、俺はどうしても、どうしても、認めたくなかった。

幸か不幸か、俺は彼女の『綺麗ごと』を否定するだけの材料もまた、持ち合わせていた。俺は今、『復讐』ものの小説や漫画に、強い興味と関心を抱いている。これは心のどこかで、まだあいつらをひどい目にあわせてやりたいと、そう思っているからではないか？

そう思うと、安心出来た気がして、急に眠くなる。俺はそのまま、部屋の電気がついていながらも関わらず、深い眠りに堕ちていった。

三日後。俺はバイトをしているのだが、そこで大失敗をやらかした。原因は完全に俺の不注意で、正直、どんな失敗をしたのか、思い出したくも無い。

バイト先の上司から、ものすごい剣幕で怒鳴られた。ここまで怒られたのは、人生で初めてかもしれない。クビを言い渡されなかったことだけが、救いといえば救いか。

そんな考えは、とても甘かった。翌日、暗い気持ちでバイト先に向かうと、俺の居場所は無かった。誰も目を合わせてくれないし、挨拶してもそっけない。上司にいたっては、挨拶も返してくれないありさまだ。完全に自業自得なのだが。

これから先、こんな雰囲気はずっと続くようなら、いっそ自分から止めてしまうべきなのかもしれない。と、言うより、寧ろそうなることを向こうが期待しているように感じる。

バイトをやめるべきかやめないべきか、悩み始めて数日が過ぎた。

結構な時間が経っても、バイト先の雰囲気は相変わらず悪いままだった。変わったことと言えば、俺の心境か。自分でも驚くほど、冷静さを取り戻していた。ついこの間までは「相手のことを考えて、こちらからやめるべきなのは」なんて考えが大半を占めていたのだが、最近では「向こうが何も言ってこないなら、いっそこのまま居座るか」なんて考えが大半を占めている。我ながら、なんと図太いことかと思わなくも無い。

気分が最高に落ち込んだ時期は、正直「いっそ、バイトをやめて死んでしまおうか」なんてことがチラッと頭を過ぎったりしたのだが、今思えば何と馬鹿馬鹿しいことを考えていたのか、当時の自分の神経を疑いたくなる。いや、大分沈んでいたから、相当まいつていたのだろうが。それでも、たかだかバイトで失敗したくらいで自殺しようとはいくらなんでも大げさだ。

人間は、何かで頭が一杯になろうとも、時間が経てば別のことを考える余裕が出てくる。今の俺には、その余裕があった。

俺は、少し前までの自分を馬鹿らしく思いながらも、結局自殺までしなかったのは何故か、考えてみる。

ああ、そうか。

考え始めてから、ものの数分で、俺はその理由が分かった。

俺は小学生の時、いじめられていた。それでも、今をこうして生きている。自殺するところまでは追い込まれなかった。

俺は、その事実を、無駄にしたいは無かったのだ。死んだら、あの時必死で耐えていた自分のやってきたことが、今になって無駄になってしまう。

それを理解した途端、俺はホッとした。少し前までの俺は、坂木の言葉を否定するために、無理にそれらしい理由を作り上げて、やや強引に納得していた。

認めよう。実は、彼女の言葉に、俺はひどく動揺してしまっていた。良い悪いは別として、小学生時代に俺がいじめられたのは、結果として、今の自分を作り上げている一つの要因だ。そこには、中学生、高校生、そして気持ちは薄れてきたとは言え、今の俺自身が、黒い感情によって得てきた快感や、黒い感情そのものも含まれる。時間と共に憎しみが消えてしまうのなら、俺を作り上げているその要因も、時間と共に消えてしまうのではないか。それは、今までの自分を否定することになるのではないか。そうなったら、俺はどうなるのだろう。そう思って、それが怖かった。だから、坂木の『綺麗ごと』を肯定したくなかったのだろう。

でも、そうじゃなかった。確かに坂木の言ったとおり、時間と共に、俺の中の憎しみの感情は、もうすでに消えてしまっている。俺はきっと、冷たい人間になってしまったのかもしれない。

でも、俺はちゃんと、昔の自分の頑張りを守ろうとした。あの頃から大分時間が経った今でもそう思えたのなら、これから先もきっと、俺は俺自身の頑張りを守ろうとしてくれるのだろう。それはつまり、自分の中の、消えてしまうかもしれない要因がもたらしてくれた、一つの大きな財産だ。

俺は大きく息を吸い込んでから、ゆっくりと吐き出す。

全く、あんな言葉のせいで、随分と心をかき乱された。今度坂木に会ったら、一言文句を言ってやろう。「何を言っているんだ、お前」と思われるかもしれないし、実際に言われるかもしれないが、こちらの勝手な自己満足だから、別に構いやしない。

ああ、もしそう言われたら、お詫びに昼食でも奢るか。

俺の気持ちは、久しぶりに晴れやかと言っていいものだった。

【あとがき】

事実は小説よりも奇なり。お久しぶりです、Puney Loran Seaponです。

特に意識したわけではありませんが、初のお題作品です。一応、それなりに『死』の雰囲気はありそうなので。

本来は別の作品を……と思っていたのですが、あれ、おかしいな。ページ数が規定内に収まらない。そういうわけで、急遽予定を変更して、この作品を書き始めた次第です。なんというか、まあ主人公に共感できる方が、果たして世界にどれほどいるかは疑問です。疑問ではありますが、まあこんな主人公もアリだろうと個人的には思います。

そういえば、こっちの方にあとがきをちゃんと書いたのって、今思えば久しぶりの気も……もっとページ数に余裕を持って書きたいところです。

では、また！

一般作品集

ココロ買いますか（篠川 百合子）

ココロ買いますか

篠川 百合子

バッグの中には十万円が入っている。意外とお金って軽いんだ。そんなことを思いながらぼくはこの国の首都にある国立ココロ研究機関の一般来場口に入る。サイボーグのように均一な顔をした受付嬢があちらこちらに並んでいる。同じ制服、髪型、化粧…。銀行などでよく見る光景なのに、何だかそれがこの場所だと一層恐ろしく感じられた。

「こんにちは。本日はどうされましたか」

ぼくは意を決して口を開く。このために、このために今日ここへきたんだ。

「ココロを、買いにきました」

「かしこまりました。ココロの購入についての説明プリントはこちらでございます。まずこちらをご覧ください。よろしければ必要事項をご記入ください。つぎに同意書にサインをしなくてはココロが買えない仕組みとなっておりますので購入する場合はサインをお願いいたします」

そう言ってパタパタと奥の方へは行っていく。ぼくは改めて紙面に目を遣る。同意書は小さな字で細々と書いてあった。ココロを購入するとなるとこれは相当に気を遣うんだろうな。けれども、これをすべて読む人などいないのだろう。ぼくは軽くその同意書に目をはしらせる。そこでふと気になったことがあった。

このココロは返却不可能です、という記述である。先ほどのお姉さんが帰ってきたら話をきこう。そう思ったのだ。

そもそもココロを買うというのはどうやら政府の苦肉の策が発端のようだ。世の中に蔓延るブラック企業。この国の経済は徐々に縮小されていき、まわらなくなってきた。生産性よりも儀礼・通例を大事にする国民性はそう簡単には変えられない。この国でもう成長はみこめない。そう考えた政府はココロを売り買いすることで生産性をあげようとした。言うなれば、肉体的負担はある程度諦めたうえで精神的負担を軽減して作業効率をあげようとしたのである。実際、心に関する病気も減り、この制度が発足してから一年の経済成長率は著しかったと話に聞く。今年で二年目の開始間もないプロジェクトだ。まだまだ課題は残っているらしいがそのココロを買うための研究機関はすでに五大都市に設置され、今に至るといふわけである。

「すみません、遅くなって。全部書けましたか？」

「あの聞きたいことがあるんですが…。この『ココロは返却不可能』とはどういうことでしょうか」

「ああ、これですね。まあ、ココロを買って、あとからココロを買う前の自分には戻りたいと言ってもできませんよということです。ですので、購入する際は長考したうえでお願いします」

事務的に平然と述べる彼女が少し不気味に感じた。自分が思っていたよりも何か重要なものに足をかけている予感がする。でも、きっと、それは日常生活でもそう変わらないことなのだとも思った。

「ああ…。でもココロの上書きは可能ですよ。少し料金はお高くなりますけれど」

無言で考えこんだぼくに受付嬢は話しかける。深く考えてはならないと直感が働く。何より、深く考えたところで今のぼく自身がすでに限界なのだ。首都のこの街までわざわざ足を運んだのはそのためだろう。

「わかりました」

汗ばむ手でペンを握りサインをする。そこに書かれた梅田一春という文字は少し斜めに下がっていてぼくは思わず書き直したくなった。だがそんな衝動を知らない彼女はひゅるっとぼくから紙を持ち去って言った。

「ただいま次のご案内をいたします。それまで、左手側の待合室Bで椅子に掛けてお待ちください」

この部屋にいる人の多くは少し思いつめた表情をしていた。もちろんそうではない人、未知へと思いを馳せているだろう人もいた。僕はいったい今どのような顔をしているのだろう…。この部屋に鏡がないことを少し惜しく思った。そう時間もたたないうちには人はやってきた。先ほどの受付嬢と制服も髪型も同じであったがどうやら違う人らしい。ウメダサンーウメダサンーと甲高い声でぼくの名前を連呼する彼女は覚えたての言葉を叫ぶインコのようだった。

「はい、梅田はぼくです」

そう答えたぼくが案内されたのは医師のところだった。医師と言っていいのかぼくにはわからなかったが、白衣を着ていかにもという雰囲気醸しだしていた。カルテのようなものを持った彼は偉そうに足を組みながらぼくに椅子にすわれと促す。ぼくはすでに彼に何もかも見透かされているような気がしたし、彼のこの不遜な態度はぼくへの嘲笑のような感じがした。彼はふっとカルテから目を話してこちらをむく。何かを探るような視線に、ぼくは目が合わないようにするので精一杯だった。

「ああ、ウメダさん。キミは、ココロを買いに来たんだってねえ。どのココロを買いたいんだい？」

「ぼくは上司のココロを買おうと思って…」

「上司…！何か会社で問題でも起こしたのかい？言っておくがこれは一応診察でねえ。ココロを売る時に必要なことなのだよ」

「問題なのはあ上司です。ろくに仕事もできないくせに責任転嫁や説教ばかりして…。あの人の怒号を聞かない日はない。もう、耐えられないんです！でも、会社も辞めたくない。あの人のせいで辞めるなんて阿呆らしい、何より、ぼくの今までしてきたことが水の泡だ」

ぼくの人生で誇っていいことはこれだけかもしれない。それなりに名の知れた企業に就職することができたのだ。この分野の職に就くのは幼いころからの夢でもあったし、ようやく手に入れたこの肩書はアイデンティティーとなり、手放すことなどできなかった。年を重ねるにつれ肥大した自尊心はついにはぼくを縛る鎖となり果てた。

「事情はわかったよ。いいかい、ここではココロを買えるなんて言うけれどねえ。正確にはココロを買うことなんざできないんだよ。ココロを買うというより記憶を操作するという方が正確さ。ココロを買いたいってやってくるひとたちってのは大体が嫌なものから逃れたい、だとか、好

きで好きでたまらないあの人を手に入れたいとかいう強い意志をもっているやつらだ」

医師は今までの客を思い起こしているのだろうか。ぼくと彼のあいだにある何にもない空間に持っていたペンを指し示すように振る。

「じゃあ、記憶が書き換えられるってことですか」

「うん、そうだねえ。だけど、相手の記憶を書き換えることは難しい。まあ、お相手さん本人がここにやってきて自分のココロを売りますっていうなら話は別だがそんなこと了承する奴なんざそうそういない。相手のココロを手に入れたい女の子なんかもよく来るんだがそれはお断りしてるよ。本来の目的からもずれるしねえ。自分の中にある相手の記憶をキレイさっぱり消すことならできるんだけどねえ」

「では、ぼくの記憶が。ぼくの上司の記憶が消えると…。でも、記憶を書き換えた後はどうなるんですか」

「書き換えられたあとはねえ、きみでいうなら、上司のいうことがあまり気にならなくなるんだよ。次第に上司はただの記号みたいになっていくんだよ。色々ちくちくと言われてもねえ、こう無頓着になるというか…。それこそ直接殺傷するとかいうことがない限りね」

「じゃあ、とりあえずは安泰なんですね」

「でも、記憶つつうのは厄介でねえ。なんたってひとが紡ぎだすものだからねえ。いろんな歯車が絡み合ってそれでようやく完成するんだ。だから、一つのパーツを取り換えると周りに多少なり、影響がでる。…君はそれで本当にいいのか」

医師は先ほどまでの人を嘲っているような態度を辞めてぼくのほうを向いた。先ほどまで組まれていた足はいつの間にか下ろされている。彼の目は実験動物を見つめるそれのようでもあり、小さな子供を見つめる慈愛に溢れた聖母のそれのようでもあった。

「…大丈夫、です」

いつの間にかそう口から漏れてしまっていた。ぼくははっとして手を口の方へ持っていく。つい、触れてしまった唇はざらざらと乾燥していた。

「そっか。まあ、少し脅してしまっただけねえ。影響が出るって言ってもそう深刻ではない。世の中の辻褄を合わせるために自分の脳でいい様にまわりに修正が行われるだけだ。それにこの仕事が成立するのも発展した科学、医学のおかげだよ。あくまで書き換えられるのは『ある人に関する記憶』だけだ。まあ、何回もココロを買ったり、買うココロ自体によってもまちまちだねえ」

ぼくは少し怖じ気立った。あの理不尽な上司から逃れようと思ってこの首都までやってきた。前よりニュースや噂でこの施設のことは耳に入っていたがまさか自分が本当に利用するなどとは思うまいよいよ、あの上司から解放されるのかもしれない。

診察室で医師と話をした後、ぼくはそのまま施設の奥にある部屋に案内された。部屋の中にはいくつか白い塗装をしたカプセルが置いてある。なんだかあまりにも人工めいた冷たい空間にぼくはさめた思いがした。ココロはあたたかなものだと人間の本質だと、ぼくたちはずっとそれに縋ってきたけれど思い上がりにすぎないのか。そう考えてしまう。

「ああ、そこに寝て、これを頭につけて六時間ほどすれば記憶は書き換えられるよ。君の場合、

会社の上司だね。君と上司が出会ったのはいつだい？」

「今から七年ほど前です」

そうだ、新卒として入社した会社だ。あの頃が人生のピークだった気がする。馬車馬のように働かされ、上司の鬱憤の吐き口とされる。思ったよりもきつく、理想ばかりは語ってられない仕事と精神的苦痛。そんなことの繰り返しだった七年間。友達との関係も次第に薄れていき、彼女とも中々会えない日々が続いた。

「なるほど。まあ、そこで眠れるまで嫌な上司の記憶を思い浮かべてなさい。まあ、はじめは少し光がまぶしいが徐々に眠くなるだろう。あ、この薬を先に飲んで。私もね、可視化された君の記憶をみることになるがねえ。治療と一緒にだよ、気にしないでくれ」

先ほどから医師の隣で助手をしていた女性が白いカプセルの蓋をしめる。だんだん暗くなっていく視界にどこか既視感を覚える。これから起こるであろうと自分への変化に微かな不安が募った。

「おはようございます。しっかり記憶は書き換えられたようですよ。今、先生を読んでくるのでウメダさんはそこで待っていてください」

先ほど、助手をしていた女性はぼくがパニック状態になっていないか確認した後、そう言っていなくなってしまった。

ココロを買ったが、このカプセルに入る前と後であんまり変化がないなというのが印象だ。上司のココロを買うためにここにきたのは確かだが上司はそれほどまで劣悪な人だったのだろうか...

「おや、目を覚ましたようだねえ。うん、新しい記憶は日を追うごとに定着するよ。あとは脳のお仕事だ。今はまだ不安定な状態だからねえ。色々思うところもあると思うけどこれはそういうものだと深く考えないで受け入れるのが一番だねえ。まあ、不備があつたらまた来なさい」

そう言って去っていく医師。ぼくはまだ実感はないけれど何だか肩にのっていた重みが少し消えたような気がした。明後日行かねばならない会社がそこまで憂鬱ではないようにも思えた。

「あ、ウメダさん！お会計！」

そうだそうだ、ぼくはココロを買いにきたんだった。

「八万二千元となります」

一応十万円少しはもってきたぼくだが多分足りないだろうと思っていた。足りない分はクレジットでも月払いでもしようとも思っていた。

「...思ったより安いんですね」

「ここはあなたのような人のための場所ですから。高すぎれば意味がないでしょう」

嬉しい反面、複雑な思いがした。ぼくの記憶はこんなにも安いものだったのだろうか。

二日ぶりの会社は拍子抜けするほど淡々と過ぎていった。医師から渡された診察書にはぼくに会社の上司の記憶を書き換えたと記載してあった。ぼくがココロを買おうとするにいたった経緯も

書いてあったが何だかどうでもいいように感じた。梅田、今日どうしたんだよ、と同期にまで言われたので驚いたのを覚えている。

「梅田、しっかりしろよ。お前のせいで損失したんだ」

「どうしてくれるんだよ、この納期。今日までだぞ、今日まで。お前は今まで何を学んできたんだ」

「おまえ、何で帰ろうとしてるんだ。あるだろう仕事はここに。上司が仕事してるのに帰ろうなんざ...」

「おまえがいるせいで会社の評判も利益も落ちるんだ。それなのに給料もらえているだけありがたく思え。残業はお前の損失分、だからな」

上司の言葉がただのBGMに聞こえる。ぼくはそれをただただ聞き流す。周りは動いているのに上司が怒り狂うその様子は映画を見ているようでもあった。自分でも役者にでもなったみたいペラペラと薄い紙に向かってお辞儀をする。すみませんでした、すみませんでした。これを繰り返せばよいだけの三文役者だ。ぼくは何だか上司が哀れに思えてきた。いい年をして立場が低い者へしか威張ることしかできない。そんなことで己の心を癒しているともいうのか。この平謝りをするという行為は元来好きではないがいずれこの男にぼくは頭を下げさせてやろうとも思った。ぼくはきつとこの無能な上司のせいで昇進できないのだ。しかし、少し俯瞰してみるとこの上司に苦手意識を持っている人も少なくないのだ。ぼくは彼に哀れみと少しの同情心を同時に感じている。無能上司と心の中で彼を揶揄しているぼくも下の者を責め立てることでしか自尊心を満たせない上司も結局のところ同じなのではないか。そう考えてしまう。

ココロを買ってから一か月ほどたったころだった。

「久しぶり、話があるんだ」

そう電話をくれたのは大学時代からの友達であるひろきだった。久々の沈んだ電話に、ぼくはお前が落ち込むなんて珍しいこともあるもんだと笑いながら返したのだった。ひろきとは卒業後も定期的に飲みに行ったり、互いの彼女も交えて旅行をしたりと縁の切れない付き合いをしていた。ぼくがずっと付き合っている彼女もひろきとぼくと何人かの友達で行った合コンで出会った。ぼくがひとめぼれした彼女と付き合うのに彼には手を煩わせたなど懐かしく思う。

彼女である美香とぼくは五年目で今、同棲はしていないがいずれ結婚するんだろうなとぼくはそう思っている。しばらくは仕事でぼくも余裕がなかった。だが、ココロを買ったからだろうか。何だか最近はずごく調子がいいんだ。今度の休みに美香を以前から行きたいと言っていた温泉地にでも連れて行こう。ちょっと奮発して部屋に露天風呂付きのホテルにでもしようかなと考えているうちに約束していたレストランについてしまった。

こんなところに来るなんてひろきも珍しいなと思う。品が良くまとめられていて女性受けしそうな個室居酒屋。席に案内されるとそこには彼一人が座っていたわけではなかった。茶色くウエーブがかかった髪の女性が隣に座っていた。

美香だ。

ぼくはそのときようやく理解したのだ。彼が沈んだ声を発していたわけを。そして、ぼくは彼女と親友をともに失ったらしいことに。ああ、ぼくはついに捨てられたのだと。晴天の霹靂とはこ

のことでぼくは身動きも声すら発することができなくなっていた。

店員さんに促され、ようやく席にすわる。久しぶりに会った彼女は美しくなっていた。ぼくの彼女はここまで綺麗なひとだったのだろうか。

「...久しぶりだな、美香とひろきは どうして一緒にいるんだ？サプライズか？」

ぼくは答えがわかっていただけで聞かずにはいられなかった。少しでも望みがあるなら縋りつきかかった。二人はごめん、と言った。お互いをかばいあうような様子に何だかぼくが悪者になったような気分だ。泣きたいのはこっちなのに。

「ごめん、一春。一春のこと本当に友達だって思っているよ。きっと裏切ったってなるよな...。本当にごめん」

「ごめんなさい。悪いのは私なの。寂しかったの。一春の一番は自分でしょう、いつも私は二の次。結婚だって...。結婚の話だって、出そうともしなかった。私もう三十歳になっちゃうのよ」

ぼくに相手にされない彼女を慰めている間に彼らに情が生まれたらしい。ぼくはやり直そうと言えなかった。彼女とやり直すには今更だし、彼と親友を続けていくには自分の惨めさに耐えられそうになかった。悲しいを通り越してそれは湧き上がる憎悪へと変化した。いつまでも自分に酔っていて、ぼくとの友人関係を円滑に終わらせようとする男にも、すべて人のせいにして自分は悪くないのだと喚く女にも。そして、ぼくにも。

気づいたら国立ココロ研究機関の入口に立っていた。あれから一か月後にこの地に足を踏み入れるとは思えないだろう。機械的でどこか冷たい空間に人工的に配置された窓口。ぼくはその一角に出向いた。

「ココロを、記憶を買いたいんだ」

似たような顔をしている受付嬢はぼくの記憶という言葉に反応したのか。それとも前回ぼくの対応をした受付嬢なのか「二度目の方ですね」と静かに確認をとってから同意書やココロについて説明する書類を置いて奥の方へ引っ込んでしまう。すべての手続きが終わった後、診察室に案内された。

「おやあ。ウメダさんじゃあないかい。」

そう言ったのは前回と同じ食えない医師であった。なんだか、この男に前回、記憶を見られたらしいこともあって、面とむかって話すのが気恥ずかしくなった。それになぜか彼の視線が嫌だった。見られていると思うとなぜだか居心地が悪いのだ。

「久しぶりだねえ。前回のココロはどうだい？」

「最初こそやり返そうみたいな怒りは覚えたけど今はなんだろう感情が湧かないんだ」

そう言って、おかげで平穏が保たれそうだとぼくは続ける。

「じゃあ、今日はなんでココロを買おうと思ったんだい？」

「...彼女を親友にとられて」

これを言わなければココロを買えないと知っているぼくは不本意ながらも彼に話す。そう話し

たとき、彼のぎょろっとした目玉がぼくをじいと責め立てているような気がした。

「ずっと仲が良かったんだ。十年の親友と五年間付き合っただけで結婚を考えた彼女を失ったんですよ、ぼくは。仕事も何も手をつけられない...」

ぼくは叱られた子供みたいに焦って付け足した。

「本当に買うのかい？うーん、ココロを買えば精神的安定は保たれるのかもしれない。仕事の効率もなにも生産性は上がるだろう。心の病気も減っているという統計もでている」

この医師が長く説教をしているようだから嫌になった。ぼくは悩んでいるんだ。なんだかそんなことでココロを買うのかとこの医師に馬鹿にされているように感じた。いっそ、医師に関する記憶も消そうかななどとそんなところまで思案を巡らす。

「あはは...。なにも言わないねえ。ココロを買うというのはある意味薬にも毒にもなるんだ、それだけはしっかり覚えておきなさい」

ぼくはココロに依存しているというのか。しかし、この耐えがたい苦痛を背負って生きていけるほどぼくは能天気ではなかったし、仕事への支障もきたしたくはない。二度目のカプセルはやはり暗くかった。ぼくはずっと目をつぶっていた。時折、光が当てられているらしく、粘膜がぼやと明るくなる。何だか、母親の子宮みたいだ、と思った。いつの間にかぼくは眠りに落ちていた。

あれから、ぼくは定期的にココロを買いにあの施設を訪れた。あの医師の言うことは全くの嘘ではないようでぼくココロを買うのが良くないらしいこととわかっていながらもやめられないでいた。

次第にぼくの家を溜まっていく診断書とそれに書かれたココロを買いに至った始めた経緯。それらは外国のテレビのドラマを見ているようで現実味がなく、他人事のように思えた。

ふとLINEを見ると母から着信があったので出してみる。

「あんた、元気にやっているかい？礼二が結婚するんだって」

「おお、おめでとう！めでたいなあ、弟が結婚かー今度あいつの好きな...」

と答えたところでぼくはあれと思う。あいつの好きなものってなんだっけ。...あいつ？

「母さん梅田礼二って弟だよな？」

「あたり前じゃない！あんたついにボケたかい？礼二が言っていたのよ。一春がおかしいからちょっと見に行ってくるって。あの子が言っていたのはこれかねえ。一応、病院いきなさいよ。あんたたち兄弟も昔から喧嘩してるって思ったら、心配したりして仲良いところあるんだから」

ぼくはなんだかわけがわからなくなっていた。ぼくには弟がいるのはわかる。でも、母の話に何一つ覚えがないのだ。ぼくの兄弟の性格は何だったんだろう。弟の好きなものは？ぼくは錯乱して電話を切る。よくよく考えなおしてみるとぼくは弟だけではなく友達や同期の記憶も深く思い出せないことに気づく。親友は△△さんという記号のようなものはでてくるけれど、それは歴史

の年表を頭の中で読み上げられているみたいで現実味が帯びていないのだ。ぼくのなかにある思い出のどれが本当でどれが嘘なのかわからなくなってきた。ちかくの散らばった診断書を漁る。

そのとき、いくつかの診断書のあいまからは同意書のコピーが落ちてきた。そこには返却不可能という文字がはっきりと映し出されていた。ぼくはそれを思い切り壁へ投げつける。

思わず、そのまま家を飛び出していた。絶望とはこのことだ。

親友も同僚も名前と関係性はわかっては彼とどんな話をしたんだとか、ぼくはどんな人物なんだとか深くわからなくなった。顔すらもぼんやりとしか思い出せない。ぼくの頭が友達だと指し示すリストの名前に情すらも湧いてこなかった。だれもぼくを知らない土地に行きたいとも思った。そもそもこんなに記憶を消して書き換えたぼくは、本当にぼくなんだろうか…。そう考え至ったとき、怖くなった。ぞっとした。すれちがう人はもしかしたらぼくが忘れているだけで昔の知人なのかも知れない。ぼくはもしかしたらどこかでとてつもなく恨まれているのかもしれない。次から次へと迫りくる恐怖から逃れたかった。ぼくは気づけば電車に飛び乗っていた。着いたのはあの国立ココロ研究機関である。ぼくはドアが開くの待つすら惜しかった。

「すみません、ぼくのココロを売りたいんですけど…」

鮮明な夢 (chima)

鮮明な夢 chima

ホームの上、けたたましくなる警告音。
私はいじっていたスマホから顔をあげた。
するとそこには一人の少年が前に立っていた。
いや、立っているわけでない。
飛んでいた。灰色の背中。今にも翼が生えそうな。
やがて、やってきた特急列車が、彼を消した。

見てしまった。
「付き合ってください！」
後輩の女の子が森戸に告白しているところを。
森戸さとしは私の親友で、毎日一緒に家に帰っている。だから、放課後、いつものように彼と家に帰ろうと昇降口に向かったら、その途中で見てしまったのだ。びっくりして思わず柱に隠れてしまった。声だけはよく聞こえる。
「以前からずっと好きでした」
彼女のことはよく知らない。だが声だけで十分彼への思いは伝わる。私と彼は付き合っているわけではないが、私は彼のちょっとした優しさや一緒にいる楽しさなど、彼女が彼に恋する気持ちは少し分かる気がした。森戸が大きく息を吸った。
「ごめんね。俺は恋というものがよく分からないんだ」

彼を待っている間、隣町の私立の高校に通う妹、詩織からメールが入った。
「電車が止まった。人身事故みたい。家に帰るのが少し遅くなる」
天候によって電車が止まることはよくあるが、人身事故となると、飛び込み自殺かそれとも踏切事故か……。私の住んでいるところは田舎でそうそう人身事故は起きない。あと数日後には地元のテレビでニュースとして取り上げられるだろう。

不意に今日の夢のことを思い出した。飛び込み自殺を目撃する夢。偶然としか考えられないが、その夢のことを思うと、無性に悲しかった。まだ何一つ情報がないが、きっと誰かの命が一つ亡くなったのだらうと、感傷的にならざるを得なかった。

「沙織、お待たせ！」
背後から森戸の声がした。息を切らしている。先ほどの告白のことを言うべきか、一瞬だけためらった。

「……森戸。さっき後輩の女の子に告白されているところ、見ちゃった」

「そっか」

彼は一息つく。

「さ、帰ろう」

彼はにこっと笑った。なんてきれいな笑顔なんだろうと同時に、先ほどの告白した後輩の女の子を思った。

彼と話すことは今日一日起こったこと、面白い話や下らない話、趣味の話や将来の話。では彼となぜ一緒に家に帰るかというのは、帰る方向が同じことと、馬が合うということだけだ。それ以外無い。

ただ時々帰り道で肉まんを買ったり、夏はアイスを買ったり、たまにラーメン屋に行ったりする。今日も近くのコンビニに寄った。互いにほかほかの肉まんを見ながら「寒くなってきたね」と話した。

「そういえば」

私は先ほどカバンに入れたスマホを取り出した。

「明後日、妹の高校で今度文化祭をやるの。少し遅い文化祭だけど一緒に行かない？」

スマホに映る文化祭のポスターを彼に見せた。

「いいね、行こう！」

「いいの？」

「だって沙織、他に行く人いないだろう」

彼はそう言うのと笑った。もう何よ！と私は肉まんを一気に口の中に入れるが熱くてむせてしまい、彼はまたそれを見て笑った。調子が良いんだから……そう言いながら彼の横顔の白さを見つめている自分がいた。

「たっだいまー！」

詩織は疲れたあとと言いながらソファにダイブした。リビングにつながるキッチンで私は料理をしている母を手伝っていた。

「お母さーん！ ごはーん！」

「その前にお風呂よ」

詩織はスマホをいじり始めた。好きなバンドの最新情報に夢中らしい。

「詩織、今日の電車大変だったね」

「あ、うん。人身事故ね。飛び込み自殺だったの。しかもうちのクラスメート」

空気が一瞬止まった気がした。蛇口から流れる水の音。鍋から沸騰する音。換気扇の音。すべての音が私に押し寄せてきた。

「え？ どういうこと？」

「自殺したのが同じクラスの男子だったってこと。まあ、ほとんど不登校だったから、数えるほどしか会ってないけど」

蛇口から流れる水の音。鍋から沸騰する音。換気扇の音。まるで物凄いスピードで電車が通り過ぎるかのように、すべての音が私に押し寄せてきた気がした。

「詩織それホント？」

「うん」

「でもつい数時間前のことでしょ？」

「いや、同じクラスの人がたまたま同じホームにいてその場を目撃したんだって」

「誰も止めなかったの？」

「うん。でもまさかそこでホームに飛び込むなんて普通思わないじゃん」

確かにその通りだ。しかしそんなに身近な人だとは思わなかった。詩織と同じ年だから高校一年なのか。私はまた今日の夢のことを思い出した。確かあの時飛び込んだ少年は、上下灰色のスウェットを着ていた。背も少し高かった。ちょうど森戸くらいだった気がする。夢だからよく思い出せないが、彼の灰色の背中、そしてまるで飛ぶように踏み出した一歩。

「目撃したその子、きっと一生その光景忘れないだろうね」

私がそう言っても、詩織は相変わらずスマホをいじっていた。

次の日、一時間目から体育だ。

小さな更衣室で女子がギュウギュウ詰めを着替える。授業まで時間がないのに、更衣室からグラウンドまで遠い。とにかく急がなきゃと着替えるが、友人の真紀がにやっところちらを見た。

「沙織、最近森戸くんと一緒に帰ってるでしょ」

「うん。帰ってるけど」

「『うん帰ってる』じゃないよ！ ねえ付き合ってるの？」

私はきょんとした。なぜか周りも静かになる。皆そば耳を立てているのだろうか。急に恥ずかしくなった。

「ち、違うから！ 誤解だから。何もないから！」

「その動揺の仕方は、まさか？」

「違うから！」

グラウンドに着いて、早速授業が始まった。サッカーのグループ分けをされ、最初は休憩だった。真紀も同じだ。

「沙織、さっきのことだけど」

「だから付き合っていないから！」

「分かったよ、そんな大声で言わなくていいから」

真紀はけらけら笑っている。これでも中学からの親友なのだから驚きだ。

「そうだけど、なんで一緒に帰ってるの？」

「別に理由なんてないよ」

「友達だから？」

「うん。それ以上でもそれ以下でもない」

グラウンドの向こうで男子がサッカーをしている。その中に森戸もいる。

「彼、きっとモテるよね」真紀がつぶやく。昨日彼は後輩から告白されていたから、そうなのかもしれない。

「色白で、背も高く、スポーツ万能、成績も優秀、それにイケメン」

確かによく見てみると顔も整っている。ちょうど彼にサッカーボールが回ってきて、ドリブルして、一気にゴールを目指す。

「あんまり考えたことないな」

「え、本当？ あんなに完璧な人いないと思うよ」

ゴール直前、彼は味方の人にボールをパスする。味方のその人はボールを受け取りシュートするが、ボールに当たってしまう。

「ああ、あんなひ弱な奴にパスしなければ良かったのに」

真紀はそう言うが、私は彼の「ドンマイドンマイ」と励ます顔に見惚れていた。

夜、部活が終わり、昇降口に行くとすでに彼がいた。十月下旬で次第に日の入りも遅くなってきた。

「沙織、今日のサッカー調子よかったね。遠くから見えたよ。沙織がゴール決めてるところ」

「あ、うん」

あの後、先ほどのいじりの恨みを晴らすため、サッカーで真紀たちの敵チーム相手に奮闘したのだ。そんなこと言えるはずがない。

「明日だっけ、文化祭？」

「九時ぐらいに駅に待ち合わせしよっか」

「うん。俺、その高校に行くの初めて」

「私は三月に妹の合格発表で行ったよ。森戸は兄弟とかいなかったっけ」

「ああ、いないよ」

日が暮れるのも早くなった。つい先月ぐらいまで夕焼けを見ながら下校していたのが、今では真っ暗だ。

「実は、明日妹がステージ発表するらしいんだけどね」

「え、すごいじゃん。何するの」

「分からない。教えてくれなかった」

「ふーん。でも、沙織の妹に会うの楽しみだな」

きっと妹は当日文化祭の準備とかで忙しいから、二人を会わせるのは難しいだろう。彼を横から見上げると、徐々に近づくコンビニの光が、彼の白い顔を照らしていた。

次の日の朝、今日は晴れていた。この頃寒い日が続いていたから、とても暖かい。

妹の高校に着くと、文化祭の大きな看板が立っていた。駐車場にどんどん車が入っている。中に入ると、出店から各教室のイベント、中庭に設置されたステージなど小さい子供から大人まで大賑わいだ。

「ここ入ろうぜ」

げっ。お化け屋敷だ。ここだけは避けたい。

「……あとでにしない？ ほら、たくさん人が並んでるよ」

「なんで？いいじゃん」

「ええ……」

そう言いながら並んでしまった。

並んでいる人たちはほとんどが友達数人組かカップル。こうやって森戸と並んだらカップルに見えるのだろうか。森戸を見ると、すでに私の怖がりを見抜いたのか、にっこ笑っている。私はふんと腕を組んだ。しかし、落ち着かない。どうしてもそわそわしてしまう。

「お待たせしました。どうぞ中へ」

中は真っ暗。足元だけ電気が付けられ、薄気味悪いBGMが流れている。奥から悲鳴が聞こえる。私は思わず森戸の服をつかむ。

「沙織、大丈夫だから」

「う、うん」

前に進んだ。下から照らされる美術室によくある石膏像。天井からのすだれのように張られたスズランテープ。足元にひかれたマット。あまり派手な仕掛けがないことに気が付いた。

「あ、意外といけるかも」

すると後ろから知らない声。思わずびくっとした。

「森戸」

そういうと、掴んでいた森戸の服がない。

「森戸？ 森戸？」

「沙織、こっちだよ」

私は声のする方へ行った。

「森戸、行かないでよー」

ライトが突然光り、そこには森戸でなく、お化けがいた。ぎゃー！と叫んで、ドアの漏れた光に走る。するとドアが開かない。

「誰か開けて！」

後ろからお化けが近づいてくる。どんとどんとドアを叩いて、それでもお化けがのっそりやってくる。やっと扉が開いた。お化け屋敷から出た私は思わず膝をついた。気づくと隣に森戸がいた。ずっと腹を抱えて笑っている。

「なによー」

「だって、ずっと隣にいてずっと怖がってたから可笑しくて」
そんなに笑わなくていいじゃん、と顔を赤くしてムツとした。
それでも、彼は屈託ない笑顔だった。
悔しいくらいの満面の笑みだった。

色んなところを回り、出店で買った美味しそうなチュロスを手には、中庭のステージにたどり着いた。ステージの前には人だかりが出来ていた。

「沙織の妹ってそろそろ？」

「うん」

するとステージの幕が開いた。一気に歓声があがる。ドラムの叩きつける音。ギターをかき鳴らしたセーラー服の女の子。そしてマイクを片手に叫ぶ詩織がいた。

「みんな！ 行くよおお！！」

私は腰を抜かしそうになった。詩織がマイクに向かってひたすらノリノリで歌っている。確かに普通の人よりも明るい性格ではあるが.....

「すごいね、あのボーカル」

「.....あれが妹だよ」

「え、マジで！」

「.....普段はあんなぐーたらなのに」

「え？ なに？ 聞こえない」

「いや、なんでもない！」

私たちの会話を打ち消すように詩織の叫ぶような歌声が中庭に響いている。非常に恥ずかしい。すると詩織がこちらに気がついたみたいで、一瞬真顔になったと思ったらにこっとウインクをした。群衆たちはきゃーきゃー言っている。あんなにだらしない詩織の事を考えると本当に想像のつかない光景だ。

「かっこいいよ、すごいよ」

彼は微笑みながら言った。私はその白い横顔を見つめた。

「森戸」

彼の名前を口にして、彼には届かない気がした。

帰り道、影が伸びていく中、電車の線路が見えてきた。踏切を渡り駅に向かう。終始今日の文化祭のことを振り返り、彼が笑った。

彼と自分の影が横並びになる。いつもは学校の帰り道で、互いに制服の輪郭をした影だが、今日は私服だ。あんまり変わらないかもしれないが、今日は妙に特別に感じた。

ふわふわしている。夕暮れのオレンジ色にとけこんでいる。彼の笑顔。白い肌。何度も何度も見てきたはずなのに、まるで初めて見る感覚がする。

不意に数日前の森戸に告白した後輩の事を思い出した。彼女がこの光景を見たら、どう思うだろう。現に、サッカーの時に真紀から「恋人みたい」と言われた。はたから見たら恋人なのだろうか。

「森戸、ひとつ聞いていい」

「ん？」

「どうして森戸はあの後輩の女の子をフったの」

森戸はうーんと唸りながら空を見上げた。

「あ、飛行機雲」

彼は指したその先に、よれよれの飛行機雲。夕暮れの空にとけこみ、一つの絵を描いているようだった。飛行機雲はふわふわとしたとけそうなこの私のようにも思えた。

「僕は生きることに必死だったから、恋というものがよく分からないんだ」
一瞬何を言っているかよく分からなかった。きょとんとした私を見て、彼はにこっと頬を挙げた。

「うそだよ」

彼はあははと声をあげた。私はムツとしたが、すぐ笑った。

ふわふわしている。オレンジに染まり、キラキラしている。まるで長い長い夢を見ているようだ。いつか終わってしまうのか、夢から覚めてしまうのかって考えるよりも先に私は目の前の彼と笑っていた。

今が一番幸せなのかもしれない。そう思った。

夜、部屋で課題をしていると、突然ぱたんとドアが開いた。

「おねえちゃん！」

制服姿の詩織は、荷物を持ったまま部屋に入ってきた。文化祭後の片付けもあり、今帰ってきたようだ。ずいぶんと疲れた顔をしている。

「お帰り。あ、楽しかったよ。それにしても、昼間のバンドは一体――」

「そんなことより」

彼女はぱたんと荷物を置いた。

「お姉ちゃん、今日男の人と来た？」

「うん。学校の友達だけ」

「私が歌ってた時、お姉ちゃんの隣にいた？」

「うん。それがどうしたの」

「いや…」

詩織が一瞬目を細めた。

「この前死んじゃった同級生にそっくりだったからさ」

物凄いスピードで電車が通り過ぎた。

そんな気がした。

あの夢が不意打ちのように現れる。

「もしかしてその同級生のお兄さんかなって」

「森戸は兄弟いないよ」

妙に焦る。自殺した少年と同一人物。そんなはずがない。年齢も高校も違う。なのになぜか焦る。なぜだ。

「森戸って……」

おねえちゃん……と今にもすがりつくような目をしている。大丈夫。別人ならつじつまが合う。でも今にも口にする言葉を言ってほしくない。言わないで。聞きたくない。

「……その人の名前って何？」

崩れる。グラグラと崩れる。落ちる。

急展開過ぎるよ。

私は必死で手を伸ばした。

おねえちゃん。

誰かが身体を揺すっている。

妹だ。

制服を着ている。

黒い服の人がいっぱいいる。

単調なお経。

お焼香の匂い。

黒い縁の写真。

森戸さとしくん。

全て夢だった。

あの帰り道の肉まんも。サッカーのゴールも。文化祭のお化け屋敷も。オレンジにとけこむ飛行機雲も。

存在した森戸さとしは、ホームの灰色の少年だけ。

彼は妹と同じ高校の同級生で、約半年引きこもり、ホームに飛び込んで自殺した、私の知らない少年。

私の知っている森戸さとしはどこにもいなかった。

もし彼の自殺を止めていたら。

もし彼がもう一度やり直したいと思っていたら。

もし私と一緒に学校生活を過ごしていたら。
エゴだ。全て私のエゴだ。
だから必死につじつまを合わせていたんじゃないか。

ホームの上、けたたましくなる警告音。
私はいじっていたスマホから顔をあげた。
すると、そこには一人の少年が前に立っていた。
いや、立っているわけでない。
飛んでいた。灰色の背中。今にも翼が生えそうな。
やってきた特急列車が、彼を消す、その瞬間。

彼はこちらを向いて、笑った。
満面の笑みだった。
その白い肌がくっきりと輪郭を成して
優しく輝いていたんだ。
恐ろしいくらい美しい笑顔に魅せられて。
私は夢を見たんだ。

なんで。なんでこっちが夢でないんだ。
こっちはこんなにも不鮮明なのに。
彼は夢の中で沢山笑っていたのに。

黒い縁の顔がぼやけている。
黒い人たちの真ん中を歩かなきゃ。
そして手を合わせるんだ。
誰かこっちを見ている。
彼なの？
森戸なの？
床から落ちる。
いやこれはきっと「膝から崩れる」って言うんだ。
立たなきゃ。
誰かが背中をさする。
目から涙があふれる。
そうだ。涙。涙が止まらない。
やっと鮮明になってきたよ、森戸。

彼は黒い縁の中で笑っていた。

りんかく (chima)

りんかく chima

ヘッドライト
うってかわって
みずたまり
とととんと
ひろがれひろがれ
しろいりんかく

悴む傘
キラキラしているはずの
重たい
重たいその先に
いいですかって
肥大化した背に
応答無し
朦朧と
濁流
後頭部で
溢れ返り
二度と戻らない
はずだった

テールライト

くつきりとした
ほころび
ふりかえる
とんとんとんと
ちいさな私を
なでるりんかく

嗚呼
私は上手く生きたい

雨がやんだと傘を閉じ、急に灰色の空がむき出しになった。重たい足を引きずる私もまた、むき出しの感傷がいつ癒えるのかと、嘆いていた。この現実が妙に不鮮明なことも、現実逃避の夢でやたら鮮明な汗をかくことも、それでも非情な現実を迎え入れなきゃいけないことも、きっとこのどす黒いアスファルトに溜まった雨水のせいだとするなら、そこで生まれた白く輝くりんかくも、このどす黒い雨水を生み出した不鮮明な現実のせいなのだろうと気付くはず。雨が降ってきた。明日も降るのだろうかため息をつくまもなく冷たい風が吹く。そもそも本当に明日が来るのか。濁流のように押し寄せる徒労に私はいつかの憧憬を取り戻せるのだろうか。明日、私は笑えるのだろうか。

その瞬間、ひかり。

目を細めた、私の陽かり。

たくさんの雨粒が光り曖昧なハイライト。その先の、大きな大きな虹。あれこそ美しい輪郭。夢を見ているのか。それともこれこそ現実なのか。なんて儂く脆い輪郭なのだろうか。それでも私は泣いていた。不安定な情緒と私の涙は、落ちて、跳ねて、小さな美しいりんかくとなって、広がっていった。

喜話では三人の小供を上から伯、仲、叔季と呼んでいたがそれぞれ甲、乙、丙（へい）に改めた。

一

唐揚げと化すまさに危急存亡の秋（とき）を脱してはや三年ばかり、静穏なる空気漂う秋の正午、吾輩と千代君の入った鳥籠は窓際に置かれている。ガラスを隔てたさわやかに日のさしそむる庭では雀殿が中の子が朝に撒いた米をついばんでいる。

いつもならこの時間は千代君と二羽で日向ぼっこしてうとうとするのだが、今日は誰かが帰って来たらしい。玄関からドタドタと騒がしくこちらに向かう音がする。

バツと大きな音を立てて戸を開けて乙が居間に飛び込んできたかと思うと、床にうつぶせに倒れこんでそのまま大声で泣き出した。これには吾輩も千代君も仰天した。

「悔しい。負けた.....負けた」

床に口をつけんばかりの姿勢だから非常に聞き取り辛いがこんな感じのことを言った。言い終わるとまた愁嘆場を演じ始めた。起き上がって包丁を持ち出して自らの胸に切っ先を向けたりしまったりを繰り返したかと思うと、急にぽいと投げ出した。その投げ出した包丁が鳥籠の近くに落ちて吾輩は肝を冷やし、人間と生活を共にして約三年が経った今、この種族の他を顧みない習性を再確認した。

俯いて突っ立っていた乙が包丁を拾いに来て、吾々と目が合った。そっと指を籠の隙間に入れてきたので、先ほどの怒りを込めてささくれを嘴で引きちぎる。痛っと言って指は引っ込んでいった。

夕刻甲以外の家人たちがぞろぞろ帰って来て吾々はまた座敷に戻された。夕食時になってやっと細君が乙が部屋に籠城しているのを発見した。

どうやって両親を説得したのか、乙殿は自室という籠の住人となった。学校に行かなくなったのだ。

冬の気配を感じる季節になった。吾々は熱帯原産の鳥なので寒さに弱い。例年なら昼間暖房のついているのは後架しかないから鳥籠は後架に置かれる。これに対しても文句はあるが今は良い。なぜなら今年は乙殿の部屋に置かれるからである。

一人と二羽が家に残された。バードケージスタンドごと北側にある部屋に移され、隅に置かれた。この部屋に入るのは初めてである。勉強机と布団と本棚の他に何も無い。白い無地のカーテンは閉まっている。他の部屋とは空気が違う。古い家だからしょっちゅう虫が出るが、この部屋は生き物の気配がしなかった。この殺風景な部屋に吾々が来てさぞうれしかろうと乙の顔を見ると、予想外に愁色をあらわにしていた。籠の入り口を開けて洗濯はさみで抑え、鳥が自由に入出入りできるようにすると、勉強机で何やら書き始めた。籠の入り口を離れ机の上に降り立つ。何を書いているかと思えば、愁嘆場の理由だった。聞くところによると文字に書き起こすことで心を

整理しようとする人間もいるらしい。びっしりと原稿用紙数枚を既に字で埋めている。字は人をあらわすというのが成程いじけたような筆跡がそこにあった。自伝を作る気かと思う程事細かに自分の心情を綴っているがこれに興味を持つ者は少なからう。だが人間の通う学校という物について知識を持っておいて損はあるまい。

新学期転校生が来たがクラスになじめず浮いた存在になり、見かねて優しくするとくつついてくるようになった。担任の教師にそうするよう言われたらしい。困ったことにそれまで行動を共にしていたグループのメンバーに責任を取ってグループから出ていくよう言われてしまった。

ある日転校生が乙の好きな生徒と親しく互いに打ち明け話をしている場面に遭遇し、どうにか不幸な気分になってほしいと悪口雑言を綴った手紙を転校生の上履に入れておいたが、気づかずそのまま履き、脱いだ拍子に落とした。

拾ったのがクラス一の権力者で、朝夕のホームルーム以外ずっと背面黒板に貼られることになった。これを書いたのは乙だろうと転校生が言ったことで、乙はクラス中に無視されることになった。一方この事件の被害者である転校生の地位は飛躍的に向上した。

以上について乙殿は「負けた」と自評している。転校生に負けたというのか、それともこの事態に顔色無からしめられたという点で自分に負けたというのかは分からない。

吾輩のこれまでの鳥生を振り返ると、ペットショップ時代隣の箱で似たような事があった。こういった類の騒ぎは人間界なら他のクラス、ペットショップなら隣の箱の住人にとって非常に楽しいものである。当事者とは遠く離れていながら事の顛末を知ることができるのだ。少なくとも吾輩には良い暇つぶしになった。

今は何を書いているかシャープペンシルを動かす手の下を見ると引きこもっても親が心配してくれないとか、ちょっと心配してくれたらもう学校に行けるのとか、下の子にからかわれても言い返せないのが辛いとか、自分は家庭内でも負けているだのとかいう事だった。一体何に負けたのか。不平不満は尽きないらしい。御苦労千万にもシャープペンシル殿は愚痴もこぼさずおとなしくこれに付き合わされている。

突然乙が手をとめた。途端今まで骨髓に徹した恨みをしみこませていた紙をくしゃくしゃにしてぽいと背後に投げた。先日の包丁が思い出される。慌てて空中に避難した吾輩の身にもなって欲しい。

「もう何も考えたくない……。書いても書いても次から次へと頭が言葉で一杯になってしまう。助けて……」

独り言なのか吾輩に助けを求めているのか考えていると、吾輩を手に乗せようとしてきた。丁重にお断りしようとして後ろに下がるが手が追いかけてきた。腹と足の間に割り込んできたので仕方なく指の第一関節に乗ってやる。手乗り文鳥だからといってそう易々と一步分の貴重な体力を使いたくない。

「もう疲れた。お前だけだよ、慰めてくれるのは。スペランツァ……。お前の世話は全部やるから、他の誰にも懐かないで。お祖父ちゃまやお祖母ちゃまは甲のものだし、お父さんお母さんは丙

のものなんだから」

千代君の名前が出ないのはなぜだろう。

手に乗ったついでに指の皮をちぎって頂戴しようと試みたが、ささくれと違って上手くいかなかった。乙はまたギャーとかなんとか言って吾輩を落とそうとした。元気が出たようでよろしい。

二

冬が到来した。それでも乙は籠城を続けた。恨みつらみの内容はすっかり家族の愚痴に変わった。

そんな折、母方の祖父が危篤だという電話が来た。細君は朝六時に玄関のチャイムを連打し一家全員を叩き起こした祖母殿が持ってきたチョコレートケーキをどう切り分けるか考えている最中であった。慌ただしく主人と細君は出ていき、小供たちは例の唐揚げ爺さんの家に預けられた。ついでに鳥籠も一緒に運ばれた。

「ね、助かると思う？」

「危篤だって伯父さんが言うのだから……」

「あんまりそういう話をするもんじゃないよ、あんたたちのせいで死んだってお母さんに言われるよ」

祖母殿が甲の言葉をさえぎって言った。甲と丙はそうですねと言って子供部屋へ移動した。乙も鳥籠を持ってついて行く。

「あんたって一人が好きなんでしょ、どっか行ったら？千代と鳥で遊ぶから鳥籠は置いてって」

「お前が嫌いなだけだよ」

「勉強するから二人仲良くどっか行きなよ……」

「暖かいのは居間とこの部屋だけなんだもの。あのまま居間にいたらお母さんの悪口が始まるからここにいる」

「今までお母さんにも親がいたからちよつとは気を使ってたところもあるんじゃないかな。あっちのお祖父ちゃまがいなくなちゃったらどうなるんだろう」

姑去りでも心配しているのだろうか。

「でもたまにお母さんのこといい

大学出てるって褒めてるよ」 「まあね。だから子供である我々もいい大学に行かなきゃお母さんはますますいじめられるんだよ」

「え、なんでそうなるの」

「会話に入ってこないで」

「とにかくそういうわけだから勉強したいんだよ。二人ともおとなしくしてて」

「二人って言わないでよ。騒がしいのはいつだってこいつなんだから」

「は？あんただってだいたいぶ煩いでしょ。夜な夜なあんたの部屋から泣き声が聞こえるってお父さんもお母さんも迷惑がってたよ。気持ち悪いつて。しかもひきこもり。妖怪かよ！家の恥だっ

てさー！」

乙はこれを聞いてさすがに腹が立ったらしく甲が筆入れから出していたノック式のペン数本をちゃぶ台で一度にガチャリと押してペン先を出した。危険を察知した丙がとっさにちゃぶ台の足を攔んで持ち上げ盾にしたのと、乙の投げたペンが丙の額に当たったのと、ついでに言うと甲のちゃぶ台に乗っていた勉強道具が全部畳の上に落ちたのが同時だった。甲さんは末っ子の額に目をやると血が少し出ているのに気づき、これから激化するであろう戦いから避難するために恐るべき速さで気配と足音を消して部屋から脱出した。その疾きことかの黒き虫の如し。気の利かぬことに鳥籠を持って行ってくれなかった。

「お父さんやお母さんのこと言うと毎回暴力的になるよね。おでこ血が出たんですけど。言いつけていい？」

「いいよ。なんならもっと血だらけにしてあげようか。お前いつまで反抗的にするつもり？もしかしてまだあの事根に持ってんの？」

「当然でしょ、死ぬまで許さない。」

「そっかー。でもお前に大した復讐はできないよね？残念だね。大人になったら全く関わらなくなりそうだし」

「そうかな。お母さんが言ってるのを聞いたよ。あっちのお祖父ちやまのイサンのことで伯父さんと大喧嘩したんだって。大人になっても兄妹喧嘩するんだね。いくらでも復讐するチャンスはありそうだけどなあ」

「お前遺産が何だか分かるの？」

「……」

「馬鹿だね。小学生は難しい事言うべきじゃないよ」

去年まで自分も小学生だったくせに随分尊大である。

「分かるよ！」

「じゃ言ってみな」

「は？なんであんたに言ってやんなきゃなんないの？」

微笑ましい喧嘩になったので寝ることにした。乙と丙が犬猿も畜（ただ）ならざる仲な理由が分かるかと思ったが結局分からなかった。末っ子さんが血だらけになる事態になったら起きることにする。



散弾銃で撃ち抜かれた。声を発することもろくにできず、その場に静かに倒れ伏す。肺は膨らんだまま動きを止め、大動脈への血液の流れが止まった。

その瞬間、私はなんて臆病なんだと気づく。死を目前にしてなお、生への渇きを感じたからである。執着は捨てた。そのはずだった。ところが、ほんの一瞬にせよ、死ねないと吐く私がいたのだ。その事実には私自身が驚いた。臆病で、卑怯だった。

そんな映像が脳内で流れ出していた。空気がすっかり乾ききったマンションの一室。電気を点けず、薄暗い部屋。窓の外では、機械的な拍子をとった雨音が静かに鳴っている。それに負けじと轟音を発する古びた洗濯機の目の前に、私は立っていた。

「これで、八回目か」

八回目。その数字に意味など無かった。ただ、自分自身の中で確実に覚えておかねばならない、いや、決して忘れるという行為が許されないものである。時に私を癒し、時に私を苦しめてきた途方もない時間。それが今日で八回。ただ、それだけのことだった。

今から一週間前、私は、マンションの近くにあるごみ捨て場を訪れていた。この街では、ひと月に一度しか古紙回収の日が無い。そのたった一度の機会を逃せば、私の部屋は雑誌と新聞によって間もなく埋め尽くされるだろう。なぜなら、七誌の週刊誌・五紙の新聞を毎週欠かさず購読しているためだ。昔の自分であれば、そんな面倒な事は絶対にしない。それが今ではこうだ。ネットで簡単に、しかもこんなにもスピーディーにモノが買える時代になったのは、幸か不幸か。

古紙の束を金網のごみ箱のそばに置く。ふっ、と息がこぼれるのと同時に、そのごみ箱から煙かすが微かに出ているのに気付いた。指定外の真っ黒なごみ袋から、その煙は宙へと昇っている。なんなんだ、とごみ袋の結び目を恐る恐るほどく。

燃えていた。

真っ黒な袋の中で、真っ赤な炎がゆらゆらと揺れている。中は生ゴミか何か、鼻をつく腐臭が鼻を通り、喉を抜け、体内に注がれる。次第に、吐き気が襲ってきた。煙も辺りに広がり、視界が灰色に塗りつぶされ、呼吸もままならない。

そうしているうち、けたたましい音と共にパトカーが駆けつけた。おそらくは、近くの住民か歩行者の誰かが通報したのだ。

火は、すぐに消し止められ、一連の騒動を面白がり群がった野次馬たちは興味を失ったように散った。

「きみ、これは一体どういうことだ。説明してくれ」

警官の一人が私に尋ねてきた。

私は少し考えた後、気づけば逃げることを選んでいた。

「ちょっと、きみ！ 待ちなさい！」

追いかける警官を振り切ろうと、私はただただ路地を駆けまわった。それでも、あちらはあちらで懸命に喰らいついてくる。構わず逃げ続け、建物同士の間にある細い抜け道に差し掛かった。壁に立てかけてあった木製の角材を後方へとばら撒くように投げる。足場を乱された警官はその場で転倒し、頭を打ったようだ。かすかなうめき声を上げながらこちらを睨んでいる。

それを無視して、自宅マンションへと走ることにした。

玄関に辿り着き、そのまま倒れる。息が乱れ、目も思うように開かない。

「どうしたの伸介さん？ ゴミ捨てんのにやけに時間かかってたけど」

妻の亜紀だ。髪を後ろに束ね、エプロンを身に着けていた。

「俺は……伸介なんかじゃない。橋川典武だ」私は、叫ぶようにして亜紀に訴えた。

「橋川典武？ ふふふっ、誰それ。全然笑えないんだけど」

「冗談なんかじゃない。笑わせてるつもりもない」

私はリビングへと行き、クローゼットから自分の衣類を数着取り出し、手提げ鞆に乱暴に詰め込んだ。

「何してるの、伸介さん」

「だから、俺は橋川典武なんだ！ もう放つといてくれ」

「さっきからおかしいよ。急に、何言ってんの？」

「あなたには関係ない。迷惑もかけないし、頼むことも何もないんだ」

「いい加減にしてよ！ 頭おかしくなったの？」

「そうじゃない」

「だったら、何？ この下手な芝居は何なの？ 後ろめたいことでもあるんなら、直接話せばいいじゃない」

「あなたは……一体誰なんだ？」

「何言って……ってちょっとお！」

亜紀の手を振りほどき、私は足早にマンションを去った。

それから一週間が過ぎ、私は隣町の安いマンションを借りた。

そして今、洗濯機の目の前で後悔を繰り返している。

どうして私は、こんな人間になってしまったんだろう？

どうして私は、現実の世界に馴染めなくなったんだろう？

答えならすでに知っていた。ところが、それを認めたくない自分との葛藤の中で独り闘うしかなかった。臆病とも、傲慢ともいう。何とでも言え。そのような紋切り型の評価にさして意味など無いのだから。

困ったものだ。困ったものだ。逃避癖とうひへきという難病は。



「ええーと、橋川典武くん？ こないだ履歴書見せてもらったよ。三十過ぎてんのに、まだ未婚なんだね」

町にあるブックカフェ。八人目としての日常を送るのには資金が必要だった。そのため働き口として選んだのがここだ。目の前の椅子に腰掛けているのは、小太りの店長だった。白髪が目立つが、それに反比例する肌の色黒さが特徴的である。

「ええ。結婚とかはまだ。一人の時間が好きなんです」

「そうかあ。この時代はさ、早く結婚しちまった方が楽だぞ」

「そうかもしれませんね」

あっさりと採用されることに決まった。

はじめのうちは、清掃員兼雑用係として私は働いていた。単純作業の繰り返しなだけに、正直退屈を感じていた。

ある日曜日の昼。平日以上に客足が多く、ブックカフェは賑わっていた。

聞き慣れたカントリーミュージックが店内に静かに流れている。私は繰り返し聞いたせいで、その曲の歌詞を暗記してしまう程だった。

そんな、のどかな雰囲気が一変。

銃声が響いた。

目と口の三か所に穴をあけた黒い覆面を被った男たちが拳銃を手にし、店内に入って来たのだ。数は四人。

客たちは悲鳴を上げ、騒ぎ始めたが、覆面の一人が黙れ！ と威嚇発砲をすると途端に黙り込んだ。私は、カウンターの陰に隠れ、しゃがみ込む。

「金を出せ、だとかそんなことは言わねえ。初めに言うておくが、俺たちは強盗じゃない。この時代の救世主だ」

リーダーと思しき男が、色黒の店長に向け、そう発した。店長は、ただ呆気にとられ、返答に困っている。

リーダー男はさらに店長に詰め寄る。

「俺たちは、^{あきらか}「昭」という急進派の一派だ。この世を作り直そうとしている」

「なぜ、この店を襲った？」そこで、それまでじっと黙っていた店長が口を開いた。

リーダー男は不敵に笑い、銃口を180度回転させるように客席へと向けた。再び悲鳴が上がる。

「襲っただと？ 聞き捨てならんな。俺たちは諭しに来ただけだ。お前ら、知ってるか」銃口を一人のサラリーマンらしき人物へと向ける。「こいつ、内閣の官僚なんだぜ」

驚きと戸惑いの視線が銃口の先に集中する。

その人物は、芯の通った太い低音で応えた。「私に用か」

私はその顔をカウンター越しに見た途端、つい先日、国の経済対策会合にて自身の不適切な発言をしたがために、謝罪会見をした人物だと気づいた。

「あれ、あの人って謝罪会見の人じゃん」

カウンターに隠れていたのは私だけではなかったようだ。OLと思われる女性が、ひとり呟いていた。黒の短髪で、快活な印象を受ける。

「あの、そのトーンでしゃべると銃がこっちに向けられますよ」

あくまで奴らに聞かれぬ程度の音量で、私は彼女を注意した。

「だって、テレビに出てた人だあ、って思って」

「出てたと言っても謝罪会見じゃないか」

「それでも一世を風靡した有名人なことには変わりはないでしょ。そんな人が目の前にいたら、そりゃ誰だって驚くでしょ」

この場合に一世風靡という表現はいかがなものか、と私は内心で葛藤を抱える。

リーダー男は相変わらず吠え続けていた。「いいか、お前ら！ こいつはな、国の予算を、国民から集めた税金を、国民の言いなりになって使うことはできないと言いやがったんだ」

えっ、そうなの？ と私の隣でOL女性がまた呟く。

リーダー男は続ける。

「こんなにも無責任な奴が閣僚でいいのか？ こんなにも腐敗している人間が時代を引っ掻き回してもいいってのか？」

彼は誰に問うでもなく、店内に自らの鬱憤を巻き散らかしているようにも見えた。

私は、面倒な事だけはごめんだ、と隣のOL女性にある提案をした。

その内容は、簡単に述べればこうだ。おそらく、現時点で襲撃者のグループに存在を気づかれていないのが私とあなたの二人だけ。そして、私はこの店の従業員。火災発生用の避難ルートも当然知っている。カウンターのすぐ脇に非常口がある。そこから避難ルートにつながるから、一緒に逃げませんか。

「断ります」彼女はきっぱり言い切った。

「え、どうして」

「だって、このやり取りなんか面白いし。見てて、どこかカタルシスもある気がする」

「何言ってるんだ。あなたも、私も、命の危険があるんだ」

「そんなの分かってる。けど、あたしはここにいる」

「しょうがないな！」

私は、彼女の腕を引き、物音をなるべく立てないように気を配りながら、非常口の外へ彼女を連れだした。

「ちょっと！ 強引じゃない？ あたしは断ったはずだけど」

「あそこにいたら、私たちだって狙われたかも分からない」

「それはそうだけど」

しばらく、私たち二人は外の裏路地を走り続けた。すれ違う通行人が何事かと視線を注いでくる。

大きな川にかかった橋までやって来た。私も彼女もかなり疲れ切ってしまい、互いに息を切らしていた。気づけば、辺り一面が淡黄色の波に飲み込まれていた。

「これじゃまるで、あなたが誘拐犯みたいじゃない」

OL女性は、橋の手すりに寄りかかりながら言った。

「すまない。けれど、私の直感が働いたんだ。アイツらは普通じゃない。とにかく一刻も早くあの場所を去るべきだと思ったんだ」

「でも、あたしたちだけ助かったって意味ないじゃない」

「それは問題ない」

「え？」

「さっき走っている途中、友人に連絡をしておいた」

「友人に？」

「ああ、そうだ。友人の一人に刑事がいるんだ。今頃やつらは袋の鼠だ」

「あなたって、意外に器用なのね」

「ん？」

「ううん、何でもない」

彼女は、川を静かに見つめ、水面に映し出されている夕日の眩しさに目を細めた。「そういえば、名前」

彼女の一言に、私は一瞬戸惑った。「名前？」

「そう、あなたの。あたしは、秋澤^{ひかり}星。あなたは？」

「橋川。橋川典武.....にしたはず」

「したはず？」「あ、いや何でもない」「ふうん、のりくんね」

そんな他愛のない会話がしばらく続いた。

話を聞くと、彼女はどうやら不動産屋に勤めているということだった。ここ最近は、無理難癖をつけてくる顧客が多く、相当にストレスが溜まっていたのだという。

「だからあたしね、静かな場所でコーヒーでもと思ってあそこにいたのよ」

「そうだったんだ。ところで秋澤さんは……」

ひかり
「星 でいいよ」

「あの、ひかりはさ。ん？　　というか、ひかりってどんな字をあてるのかな？」

「ホシ。夜空に浮かぶ星、って書いてひかり。変でしょ」

「そっか。まあ、それは置いといて。ひかりはさ、どうして不動産屋になろうと思ったの？」

星は少し沈黙した後、言葉を選ぶようにして答える。「父よ」

「お父さん？」

「そう。もともとは女優を目指してたの。だから、大学に入る時も映画学科が設置されてるところだけを受験して」

「その大学に入ったんだ？」

「ううん。受けたところは全部落ちたの。浪人するのも癪だからって、両親を説得してメディア系の専門学校に行ったのよ」

「女優になるのを諦めなかったんだ」

「まあね。けど、その直後に父が肺炎で他界したの。実家はそこまで経済的な余裕がある訳でもなかったし、半年かけて猛勉強して宅建の資格を取ったの。父が不動産屋だったから」

「お父さんと同じ職業を選んだんだね」

「結果的にはね。別に好きでやってる訳じゃないのよねー、こんな仕事。ストレスは溜まるしさ。ま、こんな事言ったら同業者から怒られちゃうかもしれないけど」

私たちのちょうど真上あたりでカラスが大きく鳴いた。星はそのカラスをじっと見つめ、ため息をついた。

「ところで、のりくん。逃げてきたはいいけど、この後どうすんの？」

何も予定を考えていなかった私は返答に困った。そんな私を見かねて、星はじゃあさ、と切り出した。

「じゃあさ、あたしの家に来ない？　家といってもマンションだけど。ちょうどこの近くのの」

「いや、でもな。そこらのビジネスホテルに泊まるからいいよ」

「せっかく夕食ごちそうしたげるって言ってんのに？　ほら、あたしの命を救ってくれたお礼ってことで」

結局、私は彼女に従うことになった。



食材の悲鳴に聞こえた。堅気であるはずの牛肉やネギ、豆腐たちが熱湯の中に沈没し、喘いでいる。それはまるで、軽く口を突いて出たスキヤットのように、意味もなく静かに空気を震わせていた。

秋澤星の部屋は六畳一間のワンルームだった。白と黒を基調としたシンプルな空間づくりがなされており、どこか男性的だと思わせられる。

「明日から十一月かー。早いよね、時間って」

星は自ら煮込んだすき焼きをお椀に取り分けながらつぶやいた。

私も彼女に倣い、鍋をつつく。「うん、普通に美味しい」

「普通、は余計でしょ。美味しい、だけ聞けばいいの」

「星はさ、普段もこうやって料理するんだ？」

「まあね。……えっ、しないの？」

「ごく偶に、くらいだな。でも、割と外食と出前のローテーション。自分でもヤバいと思ってる

」

「思っ**て**はいるんだ」

「そう。結局いつも三日坊主に終わるんだけどね。そういえば、卵一個もらっていい？」

「卵につけて食べる派なんだ？」星は、冷蔵庫から卵を取り出し、私に託す。「嫌い」

「えっ、何が？」

「あたしの家ではすき焼きを卵につけて食べるのがタブーだったの」

「そう.....なんだ」

「うん。だから、それ見てると凄く新鮮」

新鮮、という響きに悪い気はしなかった。否定もせず、肯定もしないその単語に対し、耳にする度に便利さを覚える。

食後、沈黙が訪れた。よく考えてみれば、ここまではほとんど当たり障りのない話で時を繋いでできていたことに気づく。逆に今はこの沈黙が妙に気にならない。

それだけ、私自身が星に対して順応しており、逆も然りという事である。そして、沈黙を破ることほどエネルギーを不思議に消費することはない。沈黙は金、雄弁は銀とはよく言ったものだ。

「ねえ」

いつの間にか、ベッドに仰向けになっていた星がその沈黙を破った。「嫌じゃなかったらいいんだけどさ」

「なんだい」^{あくび}欠伸をしながら私は応じる。

「あたしのこと、抱いてみない？」

一瞬、星の顔を見つめる。彼女は天井を見上げている。「勿論、のりくんが嫌じゃなかったら話だけど」

「急にどうした？」不思議と穏やかな口調で私は答えていた。

「どうしたもこうしたもないよ。あたしが今、そういう気分になってるだけの話」

「そういう気分？」

「そう。父を亡くしてから、時々あるの。急に寂しさがぐっと胸の奥にこみ上げてくるっていうか。魔物が突然、あたしをがんじがらめにするの。そういう時、誰かに抱いてほしいって思うの」

「それが.....私でもいいのか？」

「うん、いいよ。あたしを助けて」

助けて。その一言を聞いた瞬間、私の中のもう一人が現れた。それは本能かもしれない。あるいは、理性という鎧を失った草臥れた兵士かもしれない。^{くたび}私は、星に上から覆いかぶさるようにしてベッドに上がっていた。

星の瞳が滲んでいた。きっと、その^{そうぼう}双眸の裏には幾重もの感情が渦を巻いているのだろう。息苦しく、涙を浮かべなければならぬ程に、しっかりと魔物が棲みついているのだ。星はそっと私の背中に両手をまわし、顔と顔を近づけようとする。

私の瞳も滲んでいた。

私は何だ。星という一人の女性にとって一体何なんだ？ どういう存在なんだ？ そもそも今現在の私は橋川典武として存在している。これが現実と融け合っているのか。

脳内を支配していたのは罪悪感だけだった。

「駄目だ。私は.....君を抱けない.....」ゆっくりと私は上体を起こす。

「どうして？ 思いっきり抱いてよ！」星の涙がその量を増した。

「私は.....私じゃないんだ！」

そう言い残し、私は彼女の部屋をとびだした。



ネオンの明かりが痛いほどに眼に注がれる。深夜であるにも関わらず、辺りは人々と車で活況に満ちていた。

街まで走ってきた。いまだ ^{まぶた} 瞼の裏側では、先程の星とのやり取りが ^{ありあり} 歴々と映し出されている。だが、不思議と後悔は無かった。

合法カジノの店舗内に身体を滑り込ませる。中に入ると、薄暗い照明の下、ゲラゲラと下品な笑い声を上げる者や甲高い奇声を発して悦に入る輩たちがたくさんいた。

「おい」

急にディーラーと思しきダンディな雰囲気をした男性から、油性ペンのようなものでおでこをつつ突かれた。

「はい.....私ですか？」

「そうだよ。これが拳銃だったらお陀仏だったぞ」そう吐き捨てるように言い放ったこの男の眼には見覚えがあった。

昼間の襲撃犯だ。

不満足に溢れた、社会に ^{はんぼつ} 反撥する眼。突き刺すようなその眼にはどこか ^{ふらち} 不埒な美意識さえ感じた。

「お前は、昼間の」

「てめえがサツに通報した奴だろ。てめえの友人はとんだ大馬鹿者だったみてえだ。たった二人ぐらいの部下を引き連れて俺達を捉えに来た」

男の話はこうだ。私が星と共に逃げ出した後、喫茶店に私の友人を含む刑事三人がやって来た。ところが、相手方の頭数の方が上回っており、三人とも逆に拘束されたという。おそらくそこで私の存在も吐かされたのだ。増援を呼ぶための通信機器等も没収され、結局襲撃犯のグループは官僚の男性一人を連れ、このカジノへやって来た。

「このカジノは今日から俺達 ^{あきらか} 『昭』の総本部にしたんだ。昼間はたったの四人だったが、今は六十人。あの時の十五倍だ」男は、淡々と述べた。

私は辺りを見回した。さっきまで賭博に ^{ふけ} 耽っていた者達が、それとはまた別の ^{こうふん} 亢奮に満ちた笑みを浮かべ、私に視線を注いでいる。

やられた。でも、どうして？

どうしてこいつらは私がこの合法カジノへ来ることを予想できたんだ？

「てめえの奥さんだよ」

私が問い質すより先に、目の前の男が告げた。「てめえが少し前に捨てた奥さんがいっただろ。その女から聞いた。てめえがよく合法カジノに出入りしてるってな」

亜紀が？ 私が ^{たぶら} 誑かしてしまった女だ。

「伸介さん.....いや、藤木 ^{たかひろ} 貴裕よね、あなた。.....ずっと、受け入れられなかったのよ。あなたが私を騙してたなんて」

そう言いながら奥にある木製の扉から出てきたのは、亜紀だった。黒いドレスを身に着け、銀白色に煌く毛皮のロングコートを羽織っている。

突然の再会に、私は言葉を失った。なぜ、ここに亜紀が？

彼女は淡々と話し始めた。

「あなたが家出したあの後、正直混乱してたわ。けど、どうしても真相を突き止めたかった。それがたとえ、非合法的やり方になったとしても。だから、彼らに内偵調査を依頼した」

周囲の男たちの視線が亜紀に集中する。

「そしたら、あなたとんでもない人だったのね。出生した時点での姓名は藤木貴裕。中学生の時に家出して名を変えて工藤宏樹、そのあと親戚に拾われたのにそこから逃げ出して武田耕太、保護施設に入所して高校にせつかく進学できたのにいじめを理由に退学、施設を抜け出して青木潤一、社会人になってからも幾度か拠点を換えながら桐丸慎二、須川政樹、高橋尚人、山倉伸介。そこで私と出会った」

私は何も言い返せず、ただただ唇を噛みしめるばかりだった。

彼女は続ける。

「あなたがやってることは間違いなく犯罪よ。やむを得ない事由によって氏を変更しようとするときは、戸籍の筆頭に記載した者及びその配偶者は、家庭裁判所の許可を得て、その旨を届け出なければならない。戸籍法第七條よ。ところであなたは、血の繋がりもない赤の他人を戸籍の筆頭に据えた戸籍謄本を繰り返し偽造した。その黒幕が誰だったかなんて知りたくもないけど。私が恨みを抱いてるのはそこじゃないわ」

「だったら、なんなんだ……」辛うじて一声絞り出すことができたことに、私は自分でも驚く。

亜紀は、深紅に染まった唇を力の限り歪ませた。

「あなたは私を騙して、そのまま私と結婚したのよ！ 私はそれさえ知らなければ充分幸せだった……なのに、あなたは！ あなたは……その幸せを踏み躪^{にじ}ったのよ！」

それだけ言うと、彼女は傍にいた男から散弾銃を渡され、その銃口を私に向けた。

がらんどろ。

散弾銃で撃ち抜かれた。声を発することもろくにできず、その場に静かに倒れ伏す。肺は膨らんだまま動きを止め、大動脈への血液の流れが止まった。

その瞬間、私はなんて臆病なんだと気づく。死を目前にしてなお、生への渇きを感じたからである。執着は捨てた。そのはずだった。ところが、ほんの一瞬にせよ、死ねないと吐く私がいたのだ。その事実^に私自身が驚いた。臆病で、卑怯だった。

終

後書

この話を執筆するにあたって、頭のどこかである作品と結末を重ねていた。

古典ギリシア三大悲劇詩人の筆頭に立つアイスキュロス（Aischylos）。彼が晩年、紀元前四五八年に上演したのが『オレスティア』三部作である。『アガ멤ヌーン（ΑΓΑΜΕΜΝΩΝ）』・『供養する女たち（ΧΟΗΦΟΡΟΙ）』・『慈みの女神たち（ΕΥΜΕΝΙΑΔΕΣ）』の三作品であるが、この中で今作に似ていると感じたのが『アガ멤ヌーン』だ。

簡単に粗筋を記す。トロイア遠征軍の総帥たるアルゴスの王アガ멤ヌーンが凱旋する。その際、もとトロイア王女で、今は捕虜として屈辱を強いられるアポロンの巫女カサンドラーを城へと引き連れる。

アガ멤ヌーンにはクリュタイメストラという王妃がいるが、この女性が実は夫であるアガ멤ヌーンに対して^{はげ}烈しい憎悪と怨恨を抱いている。その理由は、アガ멤ヌーンが実の娘であるイーピ

ゲネイアを儀式の最中、生贄として捧げてしまったことに起因する。

そして、アガ멤ノンに対して敵意むき出しの感情を持つ者がもう一人。それは、アイギストスという男で、アガ멤ノン暗殺を企てた首謀者である。彼自身が一連の陰謀を生み出した張本人で、クリュタイメストラと共謀していた。アイギストス自身の闇に関しては、長くなるのでここでは割愛する。

そして今作、『蛹』。『アガ멤ノン』と照らし合わせると、主人公＝アガ멤ノン、星＝カサンドラー、亜紀＝クリュタイメストラ、過激派組織《昭》＝アイギストス。こういった構図を組み上げることができる。

.....とまあ、堅苦しいコト書いてみたけど、これは殆どテキトーな後付けにすぎません。許してくれ！

千切れん坊（文部 蘭）

千切れん坊

文部 蘭

弱酸性の眩きたちが 反射鏡に跳ね返され
梱包された立方体だけが 受け入れられてく

イット ワズ クロウス

気づいてしまえば 粉まみれ
ただ 満遍なく まっしろけ
そのくせ滲む 涙声は
遠ざける程 ^{かさ}嵩を増す

そんな景色も結局 蜃気楼

折り目が付いてしまったなら
もう 元には戻れない
思い出をすべて ^{ふるい}篩に掛けて
せめて 鶴になろう

そんな僕らは 千切れん坊

床一面に敷かれた毛足の長い絨毯が、心地よく感じられるのは、足を踏み入れた瞬間に限られる。細いヒールと、不自然に正三角のつま先は、アンバランスに床へ食い込む。締め上げられた指先、引き伸ばされた足の裏は悲鳴を上げていた。

しかしすべての招待客は、園に開いた花々のような笑顔を浮かべる。彼らは「仮面」を被っているのだ。仮面舞踏会でなくては「仮面」を脱げないなど、なんという皮肉だろうか。

私の顔には、つけるべき仮面はないように思われた。なんせ、誰一人として私の顔を覚えることができないのだから。壁の花、という言葉があるが、見いだされない花は、花であっても花でない――壁際で足を休ませながら考えた。花瓶に挿して愛でるべき花には、全て名前が与えられ、さらには意味が与えられる。私にはベニスという名が与えられたが、誰も私をその名で呼ぶことはできない。ならば、私の持つ意味とは。

「お初にお目にかかります、私、モビリス家の――」

「すみません、気分が悪いので、放っておいていただけますか」

「おや、それは失礼……」

広角を釣り上げた仮面が退散する。初めてではないよ、モビリス家分家の次男坊さん。去年のクリスマスパーティで挨拶したでしょうに。私の顔は、誰も覚えられない。私にとって知人が集まるパーティであっても、会場のすべての人間にとって私は「初対面の客」なのだ。私が今日、このドレスを脱いで帰れば――親さえも、私が私であることに気が付けないことだろう。

帰ろう。ずっとここにいても、私は不毛な「初めまして」を繰り返すのだ。

一步踏み出す。しかし、私の足は既に、私の手を離れていた。糸を切られたマリオネットよろしく、私の膝はかくんと折れた。

「おっと、危ない。お疲れのようですね」

右腕が後ろへ引かれる。どうやら私は、ドレスを汚さずに済んだようだ。振り返ると、見たことのある顔があった。

「お久しぶりです、ベニス嬢」

久しぶり、と、確かに彼はそう言った。その微笑はやはり仮面に思われた。しかし、それでも、私は――



パルティール考古堂に、夏の日差しは差し込まない。さらに言えば、入り口を見つけるのも難しいだろう。夏の使者が、考古堂の外周に立ち並ぶからだ。

「うわあ、これ、どこまで伸びるの……」

「ひと夏でこんなに伸びるなんてね。ラクトも向日葵の真似でもしてれば大きくなるんじゃない？ あ、もう無理かしら」

「ベニス……シフォンが新種の薬草の治験体を探してたなあ」

「ごめんなさい勘弁して」

窓の内側から顔をのぞかせるのは、ラクト・ガルビエ。その向こう、店の最奥では、店長であるバシラス・サブティリーが揺り椅子に腰かけていた。

「ベニス嬢、水遣りありがとうございます」

「いいえ、いつもは店長に任せてばかりだから、たまにはね」

「ところで、グリシアが見当たりませんか」

「ああ、グリシアは初めてのお使いに出してるの。もう二時間になるし、そろそろ戻ってくるんじゃないかしら。店長こそ、どこへ行ってたの？」

「この間頂いた山に、欲しい薬草が生える季節なので、少々」

にっこり笑う彼の額に汗はない。時々、この人は本当に人間なのかと訝しく思う。

噂をすれば、小さな足音が近づいてきた。ふわふわとした白い髪とグレーの瞳。グリシア・ストレプトだ。腰まで伸びる長い髪は、頭の高い位置で束ねられ、少し重そうに揺れている。

「グリシア、おかえり」

私が手を振ると、暑さにへばっていたグリシアの顔が、ぱっと明るくなった。

「ベニス、ただいま！」

出会った頃に比べると、グリシアは少し背が伸びた。しかし心の成長はまだまだ体に追いついていない。彼女が床に荷物を降ろすと、細い腕が赤く日焼けしているのが目についた。

「お金足りた？ちゃんと買ってこれた？」

「うん、小麦粉と、卵と、レタスでしょ。あとは、モンブラン」

グリシアが指折り数える。トマトも頼んだはずだが、三十分の道のりを、二時間かけて巡ってきたということを思うと、とても指摘はできなかった。彼女なりの苦労があったことだろう。

「ケーキが崩れないうちに、食べようか」

グリシアに代わって荷物を持ち上げ、テーブルへ向き直る。ラクトと店長は既に着席しており、フォークを「構えて」いた。「ベニス、おれが配膳するよ」

ラクトががたりと立ち上がる。その目はきらきらと輝いていた。箱の中には、モンブランがおとなしく座っている。

「はいはい、どうぞ」

余程モンブランが好きらしい。ラクトがおやつをねだるときは、いつも決まってモンブランなのだ。ラクトが丁寧にひとつずつ、モンブランを取り出していく。一つ一つ吟味するようにつめ、

「おれは、これ！」

と、お気に入りをもまず自分の前に置いた。

すべてのモンブランが並べられる前に、グリシアは既にフォークを突き立てていた。

「それでは、いただきますようか」

店長がほほ笑んだのを合図に、私も手を付ける。

外気で少し温まってしまったモンブランは、それでも美味しく、十分もしないうちに無くなった。店長はフォークを置くと、珍しく神妙な顔つきでケーキの皿を眺めた。

「店長？ どうかしたの？」

「いえ、毒が入っていたもので」

「毒が——？」

反射的にフォークを落としてしまう。店長は苦笑いすると、モンブランが乗っていた厚紙を手にとって火をつけた。

「どうやら何者かが、考古堂を狙っているようですね」

私の隣で、ラクトが青ざめて冷や汗をかいている。私の背中にも、いやな汗が伝った。

＊

「本当に始末できるのでしょうねえ？」

今度の「客」は、ひどく神経質だった。椅子から立ち上がってからというもの、繰り返し臀部

を叩いている。椅子は、そんなに汚れてはいなかったはずだが。

「もちろんです、ご安心くださいませ」

店長は笑顔のまま、潔癖顔の客を店から送り出した。

「店長——いいえ、ボス。彼が私たちが狙っている犯人、という可能性もあるんじゃない？」

「それはないでしょう。私が毒モンブランの犯人なら、わざわざのこのこと敵地に赴いて顔を晒すことはありません。それだけのリスクを冒す人間であれば、最初から毒殺などというまどろっこしい方法は取らないですからね」

私は、握った拳の中に汗をかいていた。暑いからではない。毒モンブランの一件があつてからというもの、私は何もかもが信じられなくなっていた。私には、毒入りモンブランが「警告」であるように思われて仕方なかった。最初から全員殺す気だったのなら、最初方からすべてのモンブランに毒を仕込むだろう。毒に「完全なる」耐性を持つ店長が口にしたから、死者は出なかったものの——

一人、また一人と、順に殺していく。犯人はどこからか考古堂の中を覗いていて、戦慄する私たちの様子を楽しむつもりだったのではないか——そう考えると、ここを訪れる「表の客」も「裏の客」も、全てが容疑者に思えるのだ。動悸がする。吐く息が浅くなるのを感じる。冷たい汗が頭皮の穴という穴全てから吹き出し、脳の奥がじんじんとしびれ、ついには。

「ベニス嬢」

ボスの声に、はっとする。

「ごらんなさい」

ボスが指さした先には、アンティークの全身鏡が立っている。そこには、ひどい顔をした自分が写っていた。眉間に皺を寄せたその顔は、蠟のように白くなっている。おびえた子犬のように情けない表情だった。

「.....ごめんなさい、先に休ませて」

ベニスはさ、この仕事、向いてないよね。——以前、ラクトに言われた言葉が掠めた。

這うように自室へ戻り、ベッドの上に四肢を投げ出した。

「みんな、どうしてあんなに強いんだろう」

口に出すと、弱々しい自分の声が耳に届き、なおいっそう自信を失わせた。

不意にノックの音がある。どうぞ、という前に、扉が開いた。

「ベニス、大丈夫？ お水、持ってきたよ.....」

細い体躯、つたない言語。しかし私よりもずっと強い芯を持っている。ここへ来て最も日が浅い彼女でさえ持っている覚悟のようなものが、私には備わっていない。

グリシアが、読書灯の脇に、そっと水を置いた。ありがとう、と礼を言うと、彼女は首を激しく横に振る。振り回される髪が面白く、少し笑ってしまった。体を起こして水を持ち上げる。ふと彼女の手元を見ると、痛々しい赤い日焼けが目に入った。

あの日を思い出す。グリシアがお使いに行ったあの日。彼女がモンブランを持ち帰ったとき、既に毒は仕込まれていた。あのモンブランは、間違いなくいつものケーキ屋オリジナルのモンブランだ。別のモンブランと交換することはできない。なじみの店で買ったモンブランに、毒を仕込めたのは彼女だけだったのではないか。私たちはグリシアのことをよく知らない。店長が気まぐれで連れてきた彼女。ものを知らない無垢な少女のフリなんて、いくらでも出来る。

なぜあんなにもお使いに時間がかかった？

なぜ誰よりも先にケーキに口をつけた？

自分のモンブランに毒がないのを知っていたから？

「グリシア！」

大きな声が出た。グリシアがびくりと肩を震わせる。

「ど、どうしたの、ベニー—」

「ごめん、出て行って」

「でも」

「ごめん—」

グリシアは、不思議そうに眉根を寄せる。そして、ゆっくり部屋を出て行った。後ろ髪をひかれたかのように繰り返しこちらを振り返りながら。

「そんなわけないのに。仲間を疑うなんて、最低だ」

手元の水を見つめる。徐に口元へグラスを近づける。唇が冷たいグラスに触れ、自分の手が震えていることに気が付いた。

結局、水は捨てた。

*

『ベニス、聞こえる？』

耳元で、ノイズを含んだ音声が聞こえる。

「聞こえるわラクト」

『おっけい。こっちは睡眠剤の散布に成功。今から、撒いてない廊下と部屋を指示するから、その通りに移動して』

「ボスのほうは？」

『こっちが失敗した時に備えて、別室で準備してくれてるよ。睡眠剤がまかされている部屋は、まだ煙っていて視界が悪いはず。標的がいる終着の部屋は当然撒いてあるから、気を付けて』

「了解」

作戦が次のフェイズへ移り、とりあえずは胸をなでおろす。

「うまくいったね、ベニス」

「そうね……」

ずっと体調が悪い。仕事に打ち込んでいれば忘れられるかと思っていたが、グリシアの顔を見ると頭痛が戻ってきた。グリシアの屈託のない笑顔が、張り付いている仮面に見えて仕様がな。いつ寝込みを襲われるかと思うと夜も眠れず、いつ切りかかられるかと思うと彼女の前を歩けなかった。

彼女が私の急所を狙えば、一瞬で命を失うだろう。

「さあグリシア、突き当りを右よ」

耳元に伝わるラクトの指示を、そのままグリシアへ伝え、前方を歩かせた。

小さな邸宅だった。もちろん庶民の家と比べれば大きいけど、貴族とは比べ物にならない。暗殺目的も大したものではなく、貴族の息子が別荘をひとつ手放してまで、わざわざ殺すような相手とは思えない。誰が誰に殺意をもつか、わかったものではない、と思う。

マスクをつけ、煙を吸わないように部屋に入る。そこには、貧相な体つきの男が寝ていた。私は速やかに男の服を脱がせると、小さなビニールプールを広げ、眠った男を中に入れる。

「グリシア、必ず即死させて。あとは骨と肉を分けるだけでいいから」

グリシアは頷いて、肉断包丁に手を添え、「スイッチを入れる」。一見して、変化はない。しかしそれに触れている彼女には、確かに違いが判るようだ。しばらくびくりとも動かなかったグリシアは、ある瞬間、合図でもあったかのように動き出した。

包丁が肉の中を泳ぐように滑っていく。しかし血は散らない。代わりに周囲に広がったのは、焦

げ臭い香りと少しの蒸気だった。切り口は褐色に焼きしまり、僅かに肉汁が染み出す。ビニールプールの中は、滲出する焼けた血液で少しずつ赤くなっていく。それでもグリシアは的確に体を捌いていった。プールの中で細かくなっていく体が、元の形を失っていくうちに、捌かれている体が自分のものであるかのような錯覚に捕らわれ、眩暈がする。

「ベニス、終わった」

気づいた時にはすでに、作業は終わっていた。骨と服はボスのトランクへ、そして肉はプールごとビニール袋へ移した。

「ラクト、解体完了」

『お疲れさま。トランクはおれが回収するからそこに置いておいて。二人は隣の部屋から、連結式の衣装室を經由して厨房へ』

「肉はどうやって処分するの」

『厨房の床下に魚醤樽があるはずなんだ。一番新しい樽に肉を混ぜて、元通り蓋をして』

「了解。……魚醤だなんて、物好きね。ラクト、よくそんな趣味まで調べられるわね」

『これだけが僕の特技だからね』

ノイズが切れる。睡眠剤の煙が散り始めているのがわかる。少しずつ視界がクリアになってきた。――時間がない。

「急ぐわグリシア」

グリシアは愛刀の生臭い汚れを拭つつ、うなずいた。

*

「これが魚醤……初めて見たわ」

床下、と呼ぶには少々広すぎる空間があった。半地下といったほうがいいかもしれない。採光口が開けられており、日が高いうちは天日が当たりそうだ。これを樽と呼ぶのも語弊があるように思う。大瓶、というのが適切かもしれない。一メートルはあるであろうガラス容器の中には、形が崩れつつある魚がぎっしりと詰まっていた。新しいものほど魚が原型をとどめており、目を逸らしたくなる。柔らかい部分から順にとろけているのがわかる。すべての魚は瞳を失っていた。

「臭いよう」

グリシアが鼻をつまむ。確かにひどい臭気だ。肥溜めのほうがいくらかマシだ。マスクをしていながらも、鼻を強烈に刺激する。吐瀉物を掃き溜めたかのように吐き気を催す。

蓋を開けた瞬間のことは、二度と忘れられないだろう。あまりの悪臭に、思わず呻く様な声を上げてしまった程だ。肉を投げ込むと、混ぜずともずぶずぶと沈んでいった。魚の軀達が、寄って集って肉を貪っているようにも見え、急いで蓋を閉めた。

気持ち悪そうに口で呼吸するグリシアと手をつなぎ、外へ出ると、そこにはラクトが待っていた。

「臭いはどうだった？」

「最悪ね」

「嗅げなくて残念だなあ」

茶化すラクトを睨み付けると、彼は目を逸らした。

「行こうベニス、もう薬剤の霧は晴れちゃったんだ。じきに使用人たちが目を覚ますよ」

「ボスは？」

「まだ姿は見えないけど、そのうち帰ってくるでしょ。そういう人だし」

「……それもそうね」

ビニールプールの入った、血まみれの袋を抱え、私たちは屋敷を後にした。どこからか、潮の香りが流れ込んで頬を撫でた。

＊

振り子時計は、単調に時間を刻み続ける。振り子の往復する音だけが、店内に響いていた。ポーン。振り子時計が大きく鳴いた。零時の合図だ。

「どうして！」

私は強く机を叩く。空のティーカップが、がしゅんと音を立てた。隣に座っていたグリシアが、怯えた横目で私を見た。

「ベニス、そんなに取り乱しても仕方ないよ」

「だって……！こんなこと、今までただの一度も無かったわ！」

目線の先には布張りのアンティーク椅子。今は誰も座っていない。主を待っているかのように静かだ。壊れた振り子時計が、ダメ押しにもう一度大きく鳴いた。

「ベニス、もう寝よう。きっと明日の朝には、何にもなかったみたいな顔して椅子に座ってるよ。起きていても、何かできるわけじゃないんだし」

ラクトが目を合わせずに言う。何か言い返そうと、勢いよく口を開いたものの――返すべき言葉は持ち合わせていなかった。

「……ベニス、きもちわるいの？」

グリシアの心配そうな声が聞こえるが、顔を見ることができない。私の中で消えずにある疑念が、彼女の仮面の笑顔を想像させてしまうのだ。

「……わかったわ、寝ましょう」

寝室までの足取りは、鉛を引きずるかのように重かった。

＊

寝られるわけもなかった。もう何時間、こうして無意味に横たわっているのだろう。体は極度に疲労しているというのに、感覚はどこまでも研ぎ澄まされていった。いつもなら気が付くことのできないであろう、僅かな音さえ拾ってしまうほどに。

ぎしり。

床がきしむ音が、振り子時計の鳴き声よりもずっと大きく感じられる。かすかな音を伴って、気配が近づいてくる。

私は今、何者かに寝首をかかれようとしている――

恐怖があった。しかしそれに勝る反撃のイメージが、私の疲れ切った足を、押し縮めたバネに変える。

一步、二歩、三歩――今だ。

跳ね上げた布団は確かに不審者の顔を覆う。ほとんど同時にベッドから飛び降りると、相手の足を払い体制を崩す。腕を払うようにしながら馬乗りになると、刃渡り十数センチの獲物は簡単に床へ落ちた。

「女だからって舐めないで」

相手の顔にかかった布団を剥がす。途端、私は言葉を失った。

「な……どうして！」

私の動揺を見抜いたのか、相手は私を突き飛ばし獲物を拾い上げる。瞬時にこちらへ向き直ると、そのままその腕を私に振るった。まさに間一髪でかわすが、次の一振りは頬を掠めた。痛みに思わず片目を瞑るが、次の攻撃が突きであることは容易に予想できた。私は体を大きく逸らす。相手は突き勢いそのままに、私の後方へ投げ出される。

向けられた無防備な背中に蹴りを一発入れると、その体は無様にも床へ這いつくばった。私は改めて馬乗りになり、今度は獲物を奪い取った。

「信じられない、なぜこんなことを」

沈黙と月明かりで、輪郭が浮き彫りになる。

「答えてラクト！」

私の下で、そう大きくはない体が脱力していた。

「これが、おれの『本業』だからさ」

ラクトの小さな声は掠れていた。私は、彼が右足に手を伸ばそうとしたのを見逃さなかった。彼の指が向かう先を、先んじて押さえる。——そこには手榴弾が入っていた。

「おれは、ベニスにさえ、勝てないのか——」

ラクトの体は、今度こそ戦意を失った。

「爆発されちゃ、さすがに死ぬけどね」

「それはベニス用じゃない。グリシアのために使うはずだったんだ。ナイフじゃ、勝てっこないから」

「そうでしょうね」

「そもそも、おれはこういう仕事は苦手なんだ！」

「情報屋ですものね」

「スパイだよ」

彼の口調は死を悟った者のそれだった。

「全部話して、じゃないと私があなたを殺す」

「ベニスにはできないよ」

「できるわ」

「無理だね。向いてないんだベニスは——おれも、向いてない」

私が思わず腰を浮かせたタイミングで、ラクトは仰向けに体勢を変える。その顔は、未だかつて見たことがないほど大人びていた。

「おれの任務は、バシラス家の長男、バンバレニー・バシラスの情報収集と暗殺補助。二年かかって失敗なんて、笑っちゃうね」



「もう、時間なのではありませんか.....？」

夜闇の中では、彼の表情をうかがうことはできない。光源は、手元のランプと月明かりだけだった。夏とはいえ、夜の風はひんやりしている。

「僕には、帰る家がありませんから」

「何をおっしゃているのです。バンバレニーさんは、バシラス家の跡取りではありませんか」

バシラス家は大きな家だ。爵位こそ与えられていないが、経済力と政治的な影響力は計り知れない。

「いいえ、私はバンバレニー・バシラス「だった者」なのです。パーティには、バンバレニー・バシラスとして紛れ込んでいますが、僕は既に、バンバレニー・バシラスではないのです」

何の話をされているのか全く分からなかった。どうせ政略結婚させられるなら、相手がこの人であつたら、などと考えていた。私に、生まれて初めての「久しぶり」をくれた彼なら、私がこのドレスを脱いでも、名前を呼んでくれるのではないか——期待が胸を掠めては消えていく。

「今、バンバレニー・バシラスであるのは、僕の弟です」

「バシラス家の双子の弟君は、亡くなられたと聞いていますが」

「そうですね。だから、僕がこうして生きているのは不自然なのです。でも残念なことに、僕は臆病なので。僕一人殺すこともできないみたいでして。だから、遠くへ、逃げようと思っているんです。誰かが殺してくれるまでは」

彼は笑顔を絶やさない。代わりにお前が泣けと、強いるような笑顔だった。

「一緒に行きませんか、ベニス嬢」

彼の手が、そっと私の手に添えられる。

「僕の名前は、今日からバシラス・サブティリーです。着いてきてくれますか」

彼が私の名前を呼ぶ。それは、彼が私に「意味」を与えたのと同じだった。道端の草花にも名前があると、気づいてもらったのだ。

その夜、私はドレスとハイヒールを捨てた。向日葵畑の真ん中に立つボロ屋で明かした夜が、この上なく幸せだった。



「任務の内容を話したからには、おれは絶対に許されない。消されちゃうんだ。せっかく二度目のチャンスをもたらったのに」

「一度目は、毒入りモンブラン？」

「.....そうだよ。店長は神出鬼没で奇襲が難しいし、するなら毒殺だって思ってた。おれが毒を隠し持ったり、運び入れたりしたら、おれが犯人だってわかるだろ。だからずっと、他の誰かに「運ばせる」機会を伺ってたんだ」

ラクトは二年間、歯がゆい思いをしたに違いなかった。街に出るのは決まって私だった。顔に全く特徴のない女がお使い係なのだ、毒を運ばせるのは難しい。それでも、ラクトがボスを直接襲わなかったのは――襲わせなかったのは、「ボスの不意を打つことはできない」と確信していたからに違いなかった。ボスに隙などというものは、ないのだから。ボスの動きを止めるなら、視界を奪って大勢で取り押さえる以外にはないだろう。

「店長だけを殺せばよかったんだ。あの時、おれが配膳したモンブランで、殺せるはずだったのに。まさか、熊も即死の猛毒に耐性があるなんて」

「ボスは、世に知られているすべての毒が効かないんですって。薬でさえ、彼に作用することは出来ない」

「それは、店長から聞いてたよ。でも、信頼できない単一情報源の情報と、目で確かめていない情報は、価値がないんだ。ジョークと同じなんだ。だって、冗談としか思えないよ、そんな体質」

ラクトはにこりともしない。

「ボスはどこ」

足の下で無力に寝転ぶ少年を、睨み付ける。彼はあまりにも無力で、弱々しかった。

「ボスは今、おれの組織の本部にいるはずだよ」

「.....案内してくれるわよね」

「.....ベニス、何をするつもりなの？」

私は、自分の顔に「仮面」を張り付けた。

「作戦の指揮はあなたがとるのよ、ラクト」

*

『こんなことをして、ただじゃ帰れないんだからね』

「ただで帰ってあげるつもりはないの」

『ベニス、そんな性格だったっけ』

インカムの向こう側で、ラクトが失笑する。私はグリシアを抱えたまま、ダストシュートの終着地、ごみ溜めに立っていた。

「ごめんねグリシア」

グリシアの頭をなでると、グリシアは不思議そうにした。

『ベニス、右側面に並んでる排出口のうち、上から三番目が三階につながってる。そこを逆上って。最初の分岐を右手に折ればいいから』

「ダストシュートはボスのいる部屋に繋がってるの？」

『いや、ボスはおそらく監禁部屋に閉じ込められてる。そこはダストシュートはおろか、排気管もつながってないんだ。あるのは窓と水道くらいのものだよ。ギリギリまで隠密に移動して、近づいたら強行突破しよう』

「……了解。グリシア、手足につけてるスイッチを入れて。足を動かすときは、必ずつま先から着地して、かかと側から離すのよ。手も、指先から――」

「わかってる、わかってるから」

ちょっとは生意気を言うようになったようだ。グローブとシューズには、鱗のようにびっしりと金属板が敷き詰められている。スイッチを入れると、道具から発せられた磁場が強い存在感を放つ。グローブをしっかりとめ直し、ダストシュート管の内側面に指先から触れると、グローブ上の鱗が金属へ吸い付くのがわかった。

グリシアと二人で、管の中を移動していく。最初のうちは余裕があったが、管が分岐する度に細くなり、次第に窮屈になっていった。ダストシュートの中はどこもかしこも塵が舞っており、まるで誰かが毎日丁寧に埃を撒いているのではないかと思うほどだ。わずかに空気の流れを感じる。

『ねえ、ベニスは どうして 店長に――ボスに入れ込むの』

インカムの向こうでラクトの声がするが、こちらには返事をする余裕がない。

『ボスがまだ、本当にバンバレニー・バシラスだった頃、彼は両親を殺してるんだよ？ 母親の骨はいまだに見つかっていないみたいだし――ボスは、快樂殺人犯かもしれないんだよ』

ラクトの言葉で、初めてボスの部屋に入った時のことを思い出す。今こそびっしりと骨が並べられている彼の部屋だが、当時飾ってあったのは一人分の骨だけだった。

『三月二十日 サブティリカ・バシラス 三十九歳 女性』

それだけ書かれたメモが添えられていた。その骨が誰のものなのか、聞かずとも明白だった。サブティリカ・バシラスは、当時行方不明になったと有名になっていたバシラス家夫人の名だったからだ。

監禁し行方不明となったのちに、殺したのか。もしくは、殺したからこそ「行方不明」と公表されたのか。はたまた、事故死した母を捌いただけなのか――真実はわからないし、ボスは決して語らない。

「でも、そんなことはどうだっていいのよ」

ダストシュートを登り切り、空き部屋に辿り着いた私は、ようやく返事をした。

「ラクト、あなたは私が毎朝二階から降りてくるから、私が私とわかるでしょう？ 私の一張羅を覚えているから、私におかえりと言えるでしょう」

返事はない。

「私が出先で着替えて、考古堂へ戻ってきたら、ラクトは私に「いらっしやいませ」と言うでしょうね。それはグリシアも同じよ。私ではない赤の他人が、朝二階から降りてきても、あなたたちは「おはよう」と言うでしょう。でもボスは違うの。私が私であると分かる」

『でも、それは！』

しばらくの沈黙があった。喉元まで出かかっている言葉を、声にするか飲み込むか、迷っているような数秒間だった。

『……それは、ボスが人間じゃなく、その内側の骨を見てるからだ！ ベニスの顔じゃなくて、ベニスの骨格を見ているから』

「知ってる」

ラクトはついに押し黙った。後ろから、遅れて上ってきたグリシアが、勢いよく飛び出してきた。私の腰に抱き着くような形になり、どんくさい音がする。

「ベニス、こっちも硬い」

「うるさい」

私たちは扉まで忍び足で歩み寄り、扉の外へ聞き耳を立てた。音はない。

『ベニス、外の廊下には、トラップが仕掛けられてるんだ。その部屋の換気口を伝った方がいいと思う。グローブのスイッチは切ってね、身動きできなくなるよ』

「了解」

スイッチを切ってグリシアを見ると、グリシアはまだスイッチを切ろうともしていなかった。

「どうしたのグリシア」

「ラクトは、ほんとに、仲間？」

グリシアが小さな声で私に告げる。透き通ったグレーの瞳に、強張った表情の私が写っていた。私の中に残っていた疑念を鷲掴みにされ、眼前に引き出された思いだ。私は、インカムをミュートに切り替え、しばらくグリシアと見つめあう。

「ラクトが私達を裏切っても、彼は始末される。助かるには」

「助けるには、『みんな』殺すしか、ないよ」

グリシアは目を逸らさない。そんなことは分かっていた。分かり切っていた。ここからボスを救い出したとしても、組織が生き残る限り、裏切り者であるラクトは許されない。ラクトが追われずに生きるには、ここを壊滅させる他にはないのだ。

『ベニス？ どうしたの大丈夫？』

耳元には、いつも通りのラクトの声。彼は今どんな気持ちで、この作戦に臨んでいるのだろうか。私はインカムのミュートを解除した。

「ラクト、この組織は全体で何人いるの」

『え？ ああ、まって。今の所属数は、おれを含めて八十だよ。おれ達とは比べ物にならない戦力だ』

「八十一。まともに相手ができる人数じゃないわね」

私は、ポケットに手を差し込む。そこには、半年前、ボスから与えられたボトルがあった。シフォン・オーラン殺害作戦の際、「いざという時」のために渡されたものだ。私は、これが何なのか知っている。

「分かったわラクト、作戦を変更しましょう。この施設の水源へ案内して」

*

水は、井戸から屋上の貯水タンクへくみ上げられていた。最上階への移動は骨が折れたが、上がってみればどうということはない。建物の中は嚴重な警備とトラップで埋め尽くされていたが、誰も水を護衛しようとは思わないのだ。

「ベニス、半分くらい入ってる。大丈夫なの？」

二人で覗き込んだ巨大なタンクの中には、月が囚われていた。水面で揺らめく月影は、私たち

に液量を伝えてくれる。ざっと見て、二十トン弱といったところだろうか。

「十分よ」

ボトルを取り出す。中身はまさしく、「熊をも殺す猛毒」だった。しぶきが一滴でも肌に触れれば、私は死に至るだろう。扱いは非常に難しい。

「グリシア、これを投げ上げて」

グリシアへボトルを渡す。グリシアは黙ってうなずいた。私は腕付きのライトボウガンを構える。金属を貫くほどの殺傷力はない型。しかし、ガラスの小瓶を割るには十分だ。

「せーの！」

ボトルが宙を舞う。次の瞬間には、貯水タンクの中で弾けていた。

「ラクト！」

『了解』

次の瞬間、爆発音と強い振動が届いた。施設のあらゆる報知器が作動し、唸るように反響するベルの音が耳をつんざいた。連鎖的に起こる爆発で、施設は振動を続ける。

「ベニス……」

私の腕を掴むグリシア。二人で、タンクの水位が急速に下がっていくのを確認した。

『ベニス、グリシア、無事？』

耳元で聞こえるラクトの声は、背後の轟音で聞き取りにくい。

「こっちは大丈夫。ラクトは？」

『おれも——ぼくも、大丈夫』

屋上からは、ごみ溜めのすぐそばで腰を下ろす少年が見えた。ダストシュートの塵が起こした粉塵爆発は、分岐する配管を通じてすべての部屋へ炎を運んだことだろう。——監禁部屋を除いて。

屋上からラクトへ手を振る。こちらを見ているかどうかは確認できない。

『ありがとう、ベニス』

ラクトの表情を伺うことは出来ないが、初めて本物の笑顔を見たような気さえしていた。

*

施設を燃やす炎の明かりがすべて消えるのに、一時間はかかっただろう。外装こそなんともないが、先進的な鉄筋構造でくみ上げられた建物は、中を蒸し焼きにする窯として役立ってしまったようだ。ごみ溜めの排出口から、水が滴っている。制御を失ったスプリンクラーの水だ。すすを含んだ黒い水は、その色以上に凶悪な殺傷力を孕んでいる。

「はあ、危うく蒸し肉になってしまうところでした」

背後から聞こえる声。私たちは待っていたのだ、この声を。振り返るとそこには、スプリンクラーの毒水を全身に浴びた男が立っていた。

「ボス——！」

咄嗟に近寄ろうとするが、制止される。男はほほ笑んだ。しかし彼の顔に張り付いた「仮面」は、見る見るうちに溶けていき、皺くちやに崩れてしまう。しまいには、いつも乾いていた瞳から、涙が零れ落ちた。

「嗚呼、また、殺してもらえなかったのですね」

ボスの涙の意味を、私は知っていた。彼は初めから、殺されるためにこの「仕事」をしているのだから。

彼は弟に憎まれている。親を奪い、長子の責任を投げ捨てて去っていった男。それだけではない、バンバレニー・バシラスは、二人いてはいけないのだ。

殺したい弟と、素直に死ねない兄。ふたりは今ここに結びついた――はずだったのだ。
「また、待たなくてはいけないのでしょうかね。我が弟が、別の刺客を差し向けるまで」
広角は上がっていた。しかしそれは、笑顔とは程遠いものだった。
「いいえ、ボス――バンバレニー・バシラスさん。大丈夫、私が今度こそ、安らかにして差し上げます」

今の私は、らしくない顔をしているだろう。月明かりが影を落とす。グリシアの影は、ボスの背中をとらえ、僅かに重なった。

ずぶり。彼が初めて見せた「隙」に、切れ味のいい肉断ち包丁が滑り込む。

男の意識は、少しずつ引きずり出される。ずっと遠くで、女のわめく声がする。
「もうずっと目を覚まさないのではないのですか！ 刺さなくとも、良かったではありませんか！
なぜこんな乱暴な方法を」

「シフオンのいう「新種の薬草」が効く保証は無かったもの。既存の麻酔が効かない以上、他の方法で眠ってもらうしかなかったのよ」

聞き覚えのある声だ。一方は、毎日のように聞いていた声。もう何年も前から。左手が、何か温かいものに包まれている感覚だけがある。

「シフオンには感謝してる。ありがとう、先生を紹介してくれて。彼は、本当に必要な人にしか、人を紹介しないから――シフオンの「新しい顔」を見たときも思ったけど、先生の手術は確かに素晴らしいわ」

視界が細くひらける。繰り返し瞼を動かし、かすんだ視界を鮮明にしていく。大きく目を見開くと、一瞬まぶしさに目がくらんだ。

「ああ！目を覚まされたのですね！」

駆け寄ってくる、義手の女が一人見える。左手は、別の女に握られていた。美しい、完成された骨格の持ち主――ベニス嬢。

目を凝らすと、さらに少年ひとりと少女一人が確認できた。

「おはよう……ございます。みなさん」

自分の手を確認する。確かに自分は生きていた。胸に手を当てれば、強い脈動を感じる。

「おはよう、シュード。気分はどうかしら？」

「シュード……？何を言っているのですベニス嬢」

「あら、まだ記憶がはっきりしないみたいね。鏡でも見てよく思い出して」

ベニスに差し出された鏡を覗き込む。そこには、見たこともない男の顔が写っていた。体は見慣れた自身のものであるのに、顔だけがすっかり変わっている。

「僕は、バンバレニー・バシラス、では、ないのですか」

つい本名を口に出してしまう。どれだけ思い出しても、最後の記憶は、背中に感じる強烈な痛みだった。

「いいえ、バンバレニー・バシラスは、私たちが始末したわ。刺殺時の写真も、依頼主に送った」

ベニスがほほ笑む。

「身寄りのないあなたには、「新種の薬草」の治験に協力してもらったわ。顔、痛くないでしょう？よく効いてるみたい。行く当てもないみたいだし、うちで働いたらどうかしら、シュード」

「ぼく達のボスを、女だからって舐めちゃだめだよ。敏腕なんだ。貧乳で、ドジだけど」

「ラクト、二言多い」

「シュードさん、歓迎、しますよ」

小さな部屋に、笑い声がこだまする。鏡を再び覗き込んだ。

そうか、バンバレニー・バシラスは、死んだのか。

「ようこそ、レ・パルティール考古堂へ。いい名前でしょう、異国の言葉で『再出発』って意味なんですって」

こぼれた涙が、頬を伝う。

「僕の名前は、シュード」

声の震えも、手の震えも、押さえることができない。新しい肺いっぱい、空気を吸い入れた

。

「初めまして、よろしく願いいたします、ボス」

古びた建物の、小さな部屋。夏の終わりの日差しと、飾らない笑みだけが満ちていた。

おわり

あとがき

二年間連載したことになるのでしょうか。すべてを通して読んでくださった方、ありがとうございます。どのキャラクターにも愛着が湧いてしまって、完結させてしまったのが寂しいくらいです。読者の人も、キャラのうち一人でも気に入ってくれたなら嬉しいな。これで一区切り、安心して卒業できます。

以上、幼夏ちゃんでした。またいずれ、どこかで。

反省会をしましょう（落谷 アツムネ）

反省会をしましょう

落谷 アツムネ

——今日は忙しい中お集まりいただきありがとうございます。

落谷アツムネ（以下、落谷） こちらこそ声をかけていただきありがとうございます。

遠瀬瑠依歌（以下、遠瀬） 呼んでいただいて恐縮です。ありがとうございます。

——それでは早速本題に参りたいと思います。

落谷 そうですね。そうしましょう。

遠瀬 よろしくお願ひします。

——『imitation flower』『或る春の夜 ~Tenjin Dream.』『本当にありそうで怖い話』これが二〇一三年の夏号に落谷さんが投稿したお話でした。

落谷 うわ、めっちゃ懐かしいですねコレ。

遠瀬 落谷さん三つも書いてましたね。

落谷 まあ厳密には高校の時から温めてたというか、高校の時に書いた作品を手直しして出した感じですね。

遠瀬 ああ、なるほど。

落谷 高校で書いてたものが大学でどれだけ通用するのかな、みたいな気分だったと思います。

遠瀬 高校でも書いてたんですね。

落谷 ええ。まあ、でも大学での評判は察してください（笑）

遠瀬 『或る春の』は確かに結構ズバズバ言われてましたね。でも『imitation』はそうでもなかったような。

落谷 あれ、そうでしたっけ。僕けっこう嫌な事ばかり覚えてるタイプなんで、もしかしたらそのせいかも。

遠瀬 だと思いますよ（笑）

——『怖い話』も感想が色々ありましたね。

落谷 あれは「本当にありそうで怖い」と思えるポイントを二つ用意したつもりだったんですよ。自分の人生が詰んだら怖いってのと、キラキラネームがはびこる世の中になったら怖いってのと。

遠瀬 読み手に委ねたわけですね、解釈を。

落谷 まあそうなるんですかね。でも、「どこが怖いのか」とか「どちらかにネタを絞って深く掘り下げた方がよかったのでは」とか言われまして。

遠瀬 でも意外な所というか、予期しなかった部分を怖いと言ってくれた人もいたじゃないですか。

落谷 「もしも自分が誰かの創作の登場人物だったら」という映画の『マトリックス』的な視点での怖さを指摘されたことですね。……これ実際に作品読まないで一連の流れ分からなくないですか。

遠瀬 多分（笑）

落谷 まあ興味がわいたらどうぞ、ってことで

遠瀬 それダイレクトマーケティングじゃないですか（笑）

——『ライカルーザ』これは二〇一三年の製本版に落谷さんが投稿したお話でした。

遠瀬 これはタイトルと最後の文と後書きでハッとさせられる作品でした。

落谷 ありがとうございます。完全に駄洒落ですけどね。

遠瀬 そうなんですけど、上手いなって。

落谷 恐縮です。ちなみにこれ、かなり実体験に即して書いた話です。

遠瀬 ほう、言い切りましたね。具体的には。

落谷 かなり創作した部分と絡めてあるので指し示すのはちょっと難しいんですけど、確実に言えるのは作中のラーメン屋にはモデルがあるということですね。

遠瀬 そこですか（笑）

落谷 これだけは言えます。あとはアサミちゃんとのやりとりは割と。

遠瀬 あれ実体験なんですか。

落谷 九割六分あんな感じですね。本当はラーメン屋じゃなくて高校であった文芸部どうしの交流会でアリサちゃんと出会ったっくらいで。

遠瀬 アリサちゃんとは。

落谷 あ、アサミちゃんのモデルになった元カノですね。まあ本人には絶対バレないでしょう、ここで言ったところで。

遠瀬 何言っちゃってんですか（笑）

——『安寧とルーコウス』これは二〇一四年の冬号に遠瀬さんが投稿したお話でした。

遠瀬 黒歴史ですね。とっとと次行きましょう。

落谷 いや、もうちょっと何かあるでしょう。

遠瀬 彼女ができて頭がウハウハの花畑だった頃にしたんでめっちゃアホくさいです。読んだらダメ。以上。

落谷 ……じゃあペンネームの話でもしましょうか。

——この時は確か「Tuvos Luika」という名前でしたが、どんな意味があったんでしょうか。

遠瀬 僕の好きな歌の中に、合唱曲なんですけど『Rukous』ってのがありまして。その作曲家がトイヴォ・クーラ（Toivo Kuula）って人なんですけど、そこから少しもじりました。この曲は本当にいい曲なんで聴いてみてください。

落谷 ほんと好きなんですね、その曲。

遠瀬 ほんと好きなんです。

落谷 （機嫌なおしてくれて良かった……）

——『春は別れ、空高く橋かかる日に』これは二〇一四年の夏号に遠瀬さんが投稿したお話でした。

遠瀬 当時付き合っていた彼女が引っ越すことになって、それを手伝ったんですよ。その時の話ですね。

落谷 なんとというか、甘ったるい話というか。

遠瀬 そこはちょっと意識しましたね。あと、作中で「!」「?」を一切使わないという制限を自身で課したりして。

落谷 ほう、それはどんな意図で。

遠瀬 高校の時、国語の先生に「記号で感情を表すのは甘え」って言われたのを丁度これ書いてた時に思い出したんですよ。それで挑戦しようかなと。

落谷 ほう、それは面白い話ですね。

遠瀬 先生も面白い人でしたよ。話題が逸れそうなんでアレですけど。

——『マッチョ売りの少女』は二〇一四年の製本版に落谷さんが投稿したお話でしたね。

落谷 「マッチョ売りの少女」ってよく聞くじゃないですか。ちょっとそれを自分なりに書いてみようと思って。

遠瀬 ギャグとハートフルの中間って感じの雰囲気ですね。

落谷 両方のいいところ取りができたならよかったですけど、結局どちらにも突き抜けられなくて中途半端だという感想が多かったように覚えています。

遠瀬 僕はハッピーエンドで良かったなって思いますけどね。すべてが丸く収まったって感じで。小学生並の感想ですけど。

落谷 恐縮です。

——『特別な後輩』は二〇一五年の冬号に落谷さんが投稿したお話でした。

落谷 この頃からですね、過去の作品と絡めて話を作るようになったのは。

遠瀬 どういう事でしょうか。

落谷 ざっくり言うと「ライカルーザ」から約二年後の話なんですよ、これ。あとはユウナさんが出てきたり。

遠瀬 それ「春は別れ」に出てくる僕の元カノのことじゃないですか。

落谷 いや、別人のユウナさんです。たまたまですよ。……それはさておき、まあメグミはけっこう忘れられない後輩なので一回出ただけじゃ足りないなと思って。

遠瀬 思い入れあるんですね。

落谷 ぶっちゃけ忘れられるなら忘れたいですけどね。

——『ファニー・ファッキン・フライデー』は二〇一五年の夏号に落谷さんが投稿したお話で

した。

遠瀬 これも冒頭と終わりがリンクというか、本歌取りというか、そんな感じがしますね。

落谷 そこは結構意識して書きました。

遠瀬 ユウナさんって人が再び登場していますね。

落谷 そうです。遠瀬さんの知っているユウナさんとは全く関係のない別人のユウナさんです。そういう設定です。

遠瀬 一気にメタ臭くなりましたね……。

落谷 そんなことより死神のミヤコちゃん初登場でした。まあこの一回きりなんですけど。

遠瀬 死神にしてはフランクで人間くさい子ですね。

落谷 親しみやすさを意識しました。それで「死神らしくない」って言われちゃいましたけどね。

遠瀬 キャラ作りの難しさ、ですかね。

落谷 そうですね。

——『ああ緒は愛より出でて相寄り……ああ、惜しい。』は二〇一五年の製本版に落谷さんが投稿したお話でした。

落谷 これもタイトルにはこだわりました。と言ってもある日ぽつと浮かんだのですけど。

遠瀬 この言葉が言いたくてこの作品を書いたと聞きましたけど。

落谷 そういうことです。これも実際にあったことを断片的に組み合わせた話で、結構力入れて書きましたね。

遠瀬 確か輪読会でも誰が一番の悪者かという話になりましたよね。

落谷 私が皆に質問しましたからね。登場人物みんな等しく悪者っぽくなるよう調節したつもりだったんですけど、ヨシノリ君にけっこうヘイトが集中してたような気がします。ちょっと納得がいかなかったですね。

遠瀬 わざわざ書き直して二〇一六年の冬号にも載せてましたからね。

落谷 いま思うと逆ですけどね。改めたものを製本版に載せろよ、と。

遠瀬 まあ載ったものは仕方ないですからね。

——『二〇一五年のコバト・ブルー』は二〇一六年の夏号に落谷さんが投稿したお話でした。

落谷 『ああ惜しい』の後日談ですね。

遠瀬 落谷さんちゃっかり出てますけど。

落谷 まあ最後でしたからね。最後といえば、遠瀬さんも書いたら良かったのに。

遠瀬 僕は就活がうまくいってなくて、ちょっと時間の確保が難しかったもので。

落谷 あ、ごめんなさい。

遠瀬 まあ決まったんでもう何言われても官軍気取りですけどね。

落谷 あ、それはおめでとうございます。

遠瀬 ありがとうございます。話、戻しましょうか。

落谷 そうですね。これは前作から「青」というテーマを今度は視覚的に表現したいと思って書きました。

遠瀬 確かに色濃く引き継いでますね。青だけに。

落谷 ……。あとは僕自分が少年を名乗れる最後の時期に差し掛かっていたので、なんかこう、言葉にできないエネルギーというか、そういうのを書きたかった気がします。今さっと振り返ってみると。

遠瀬 いかにも青春って感じですね。……また「青」じゃないですか。

落谷 うまいこと言いますね。本当に恐縮です。

——そう言えば、落谷さんのペンネームの由来は。

落谷 苗字は落谷虹児さんから採りました。名前はネットスラングの「胸熱」をひっくり返してアツムネです。人の胸を熱くする話が書きたかったもので。

遠瀬 うわ、めっちゃ考えてますね。カッコいいじゃないですか。

落谷 ぶっちゃけ名前負けでしたけどね（笑）割と気に入ってはいます。

——今日はありがとうございました。

落谷 ありがとうございました。

遠瀬 ありがとうございました。

あとがき

締切がなければもっと作り込めた（遺言）。

では、またどこかで。（落谷・遠瀬）

人生って案外つまらないな。今後の人生にある程度の見通しがついたとき、私はそんな場違いな思いを抱いてしまった。

去年の夏から始めていた就職活動。結果としてだいたい私の希望通りの会社に就職することができた。夢だったツアープランナーの会社。第一希望の会社ではなかったけれど、希望していた職種だったし、後悔しているわけじゃない。

でも、なんだか自分の人生がまるで途中でオチがわかった映画みたいに思えてしまった。私、岩木友映(いわきともえ)が主人公の物語はこんなにつまらなかったのか？

私は暗闇の中で必死に夢に向かって頑張っていたはずだった。固い岩盤に何度もシャベルを突き刺して少しずつ夢へとつながるトンネルを掘っていたはずだった。なのに、闇の中で一点の光が差し込んだ途端、どうでもよくなった。

夢が叶った時、確かに私は喜んだ。両親や友達に自慢しまくったし、自分がやった就活テクニックを後輩に何度も教えた。でも、その後何に残らなかった。

私は自分のこの状態に脅えた。自分自身で今までの人生を全否定しているみたいなものだ。私はおかしくなったのか。不安で親友の佳奈美(かなみ)にも相談した。「燃え尽き症候群だよ」と佳奈美は言って私を慰めた。

燃え尽き症候群。そうだ。私は全力で夢をかなえた結果、自暴自棄になってしまったのだ。じゃあ、燃え尽きた後は？ 燃えカスの私は何をしたらいいの？ 私は火を求めていた。冷めきった私を奮い立たせる熱い炎を、衝動を求めていた。私のピーターパンがウエンディをさらったみたいな私の想像を軽く飛び越えた衝撃が来ることを。

*

「じゃあ、夏始まったってことで、カンパニー！」

カキン、と十個の中ジョッキを打ち合う心地よい音が響いた。ゴクゴクと生ビールで喉を潤す。その合図を皮切りに他愛もない会話が始まった。

居酒屋のバイトメンバーで親交を深めるための催された飲み会だ。正直帰りたし欠席したかった。だって、ここには私が求める衝動は無いから。ただお金を稼ぐための場所でしかないから。でも、バイトをする以上、急用でピンチヒッターを頼むこともあるからそれなりに仲良くする必要がある。そのための飲み会。欠席するわけにはいかない。だから、私はしぶしぶここにいるのだ。

隣の人と他愛もない会話する。最近来た変なクレームをつけてきた客の話とか、社員の女の子が密かにエリアマネージャーと不倫している話とか。それなりに面白い。下衆な話は酒の肴にはなる。でも、それは炭酸の泡みたいですぐに消え去ってしまうものだ。

陰鬱な気を紛らわすために肘を上げて生ビールの味をのど越しで味わった。三杯目の生ビール。アルコールでふんわりと体が上気した。でも気分は晴れない。

.....こんな鬱でやるせない自暴自棄な気持ちで自分勝手な理由で他人を傷つける犯罪者を産むんだらうなあ、ぽつりとそんな気持ちがため息と一緒に出た。

「どしたの？ そんないかにも悩んでいそうで俺に相談乗って欲しいようなため息ついちゃっ

てさ。はい！ はい！ 俺、ここに座りましたよ！」

中野が話しかけてきた。女遊びに命を燃やしている男は脱色しすぎて毛先がチリチリしているロン毛でかなり痩せている。ひよっとしたらくびれでもできているんじゃないかな。中野は性格が限りなくクズだけど、女性ウケがよさそうな面構えをしている。女にとって尽くしたいタイプの男なのだろう。四六時中女と遊ぶことばかり考えていてバイトを辞めた女の子のほとんどは中野絡みだというのは、バイト仲間では専らの話だ。

「別に相談する話なんてないですよ」

「そう？ じゃあ元気？」

「元気です」

「じゃあ、酒飲めるね？ ハイ！ カンパーイ！」

中野がグラスを差し出す。なんだ、そのいい加減な理由。私もその空気に乗ってグラスを打ちつけた。それからビールをグビグビ飲んだ。

「おお、いい飲みっぷりだね。あっ、店員さーん、ちゅうもんお願いしまーす！」

それから、中野とグラスを勝ち合わせては酒を飲み合った。

「友映ちゃんって手綺麗だよねえ」

「友映ちゃんって可愛い系ってより清楚系とか言われたい？」

「友映ちゃんって週末はなにしてんの？」

正直、普段もそうだけど、中野から名前にちゃんづけで呼ばれると悪寒が背筋を走る。しかし今日は酒の力もあるし、何より褒められているわけだから心地の良さの方が勝っていた。

こうやって女を口説いてんだろなあ。中野の注文のピッチはだんだん早くなっていった。始めは私のスピードに合わせていたが、もう五、六杯飲んだあたりから注文の速さに合わせてグラスを空けていた。中野は私を酔わせようとしているのは明白だった。

「私、酔ってきたかも」

「えーそう？ 見た感じ全然平気そうだけど。……じゃあこのあとさ、場所変えない？ おいしいワイン置いているバーが近くにあるんだけどさ」

「えーでも」

「あっ、今答えなくてもいいから。飲み会終わった後にまた聞くからさあ。あっ、注文来たよ」

バイト仲間の手を伝ってグラスが来た。あれ、私こんなの頼んだっけ？

「これさ、かなり美味いんだよね。レッドブルってあるじゃん？ ウオッカをレッドブルで割ったやつなんだけど、めっちゃ美味いから。何杯でも飲めちゃうから」

中野がこちらにグラスを差し出す。瞬間、中野と目が合った。顔は笑っているが、黒々した瞳がこちらをじっと捉えている。獲物を捕らえる野性的な瞳だ。テレビで見た群れからはぐれたスイギュウを狩ろうと木陰から今にも飛び出しそうなライオンに似ていた。

別に、いいんじゃないかな。そんな野生の餌食になっちゃってもさ。

中野は命に深々と刻まれた子孫繁栄という本能に従って生きている。生命を全うしている。その理性より大きな波にのつてもいいかもしれない。ほら、誰かに求められるっていいじゃん？ 俗物的ですぐに使いつぶされたとしても、消耗品だったとしても。

ずっと一緒に居ような、と約束した彼氏は高校を卒業した後、別の大学で違う女を作って去って行った。永遠の愛なんてありやしない。じゃあ、あぶくみたいに気がつくと消えてしまいそうなインスタント快樂に身を委ねてもいいじゃん。

中野からグラスを受け取る。唇をつけ、グラスを傾けた。

「あっ、それ僕のなんですけど」

レッドブルウオッカを一口飲んだとき、誰かが急に声をかけてきた。声のする方を向いてみると、知らない男がそこにいた。

男性にしては男っぽくなくて、背の低い人だった。ただ、やけに口角を上げた不気味な笑顔が印象的だった。

「はあ？ お前だれだよ？」

中野がすぐさま割り込むが、男はそれを無視してこちらを見ていた。時間が急にゆっくりになったみたいだ。彼は私を試しているんだ。なんとなくそう思った。

「ライオンがウサギのマネしたってウサギにはなれないよ」

見透かしたようなことを彼は言う。

気付くと私は押し付けるようにグラスを彼に渡していた。

男はグラスを受け取ると、ゴクゴクと喉を鳴らして一気飲みをし、中身を空にした。

「ああ、やっぱ美味しいですね」と彼は言い「ここ、座ってもいいですか？」と言って、私たちが答える間を与えずに私と中野の間に座り込んだ。

「あー、僕、先日から入った新人の赤石明です。すみません、自己紹介忘れちゃって。よろしく」

「よろしく」

「ふうん、よろしく」

中野は赤石が来て興が冷めきったことは一目瞭然だ。スイギュウが群れと合流したのを見て狩りを止めたライオンみたいにあっさりとした幕引きだった。深追いはせず、諦めの際をわきまえている。もっとおもちゃ売りの床でバタバタと足を叩きつけて「あれが欲しいの！」と泣き叫ぶ子供みたいに喚き散らかせばいいのにと感じてしまった。いや、私が中野にとって必死になるには値しない存在なのだろう。私はクズの中野を少しだけ見直した。

数分後には死期を悟った猫みたいに中野は私の前から消えていた。別のグループに潜り込んだようだ。

「あんな男のどこがいいんですかね？ 僕にはさっぱりわかりませんよ」

こちらを見て赤石はニヒルな笑みを浮かべた。彼は分からないから聞いているんじゃない。赤石の壁に穴でも開きそうな真面目でつぶらな目は私に自問自答しろと言っているのだ。

「わかんない。でもあの波に乗れば何か変わるんじゃないかって思った。それだけ。ありがとうね。君が来てくれなきゃ私、彼に何されたかわかんなかったよ」

別に、感謝の気持ちなんてこれっぽっちもないのに社交辞令じみたことを言った。場を切り抜くための処世術は、わざと言っていることがバレバレでまったく気持ちがこもってない。

「そうですか」

赤石は私に向けていた視線を逸らした。それからおずおずと照れの入った柔らか腰の目を私に向けた。

「いえいえ。そういえば、僕、お酒飲むのは今日が初めてなんですよ。何かおすすめはありますか？」

へえ。初めて、か。じゃあ、こいつ、潰すか。

酔った勢いで出てきたこの気持ち。赤石を恨んでいるわけじゃない。でも、さっき私を助けてくれたことがどうしても癪に障って、何かで見返してやりたくてしょうがない。

「じゃあ、メニューに載っている品を片っ端から頼んでみます？ 色んなお酒を飲んでみてどれが美味しいか飲み比べましょうよ」

「ああ、いいですね……えっと……そういえば聞いていませんでした。あなたの名前なんて言う

んですか？」

「岩木友映です」

「じゃあ、岩木さん。よろしく」

私と赤石はメニューに載るお酒を片っ端から注文した。飲んで味を確かめ、二人で美味しいとか不味いとかを言い合う。最初は私が美味しいと思うお酒や、バイトでよく客が頼むお酒を選び、最後あたりは、名前に目を引いたお酒を頼んだ。

飲み会が終わった頃には、赤石は私の肩を借りなきゃ歩けないくらい出来上がっていた。顔は赤らみ、常に笑っていた。

「大丈夫ですか？」

「うん？ 大丈夫だって。まだまだ飲めますよ。二件目も行っちゃいますか！」

「いやいやそれは酔っている証拠じゃないですか。……もうそこらでタクシー捕まえますよ。家どのあたりですか？」

他のバイトの面々はそれぞれ二次会でバーに行ったり、シメにラーメンを食いに行くようだ。自然と私に赤石を押し付けた形になる。……まあ、酔わせた張本人は自分だし、ちゃんとお家に帰らせる責任があるだろう。

「ん～僕の家、タクシーで行けませんよ」

「もしかして、遠いの？」

「いんや、近くて遠い」

完全に酔いつぶれていた。このまま見捨てて帰っても男だから何とかなるだろうけど、赤石にはさっき助けられたし、見捨てる気にはなれない。「もう、なにか住所とか分かるもの出してくださいよ」

赤石はズボンのポケットから一枚の紙を取り出した。それを私に渡す。幾何学模様が描かれていた。三角形や円、太さの異なる線は暗号にも見えるし、一つの作品にも見えた。

なんだこれ、と私は首を傾げた。

そのとき、地面が急に柔らかく感じた。

小学生のとき田んぼに足を突っ込んだあの感覚。私も酔いが回ったか。いや違う。周りの人が大きく見える。目線がだんだん低くなっているのだ。既に膝まで沈んでいた。周りに助けを求める暇なんてなかった。私にもがく余裕なんて全く与えず、渦を巻いて排水口に流れる水のように私は地面に吸い込まれていった。

＊

一面が白だった。

微睡みの中で目に映るすべてが白だった。眩しさを覚える。ああ、この感覚。うわあ、また電気を消し忘れて寝ちゃったか。あー電気代がもったいなかったなあ。

私は立て付けの悪い戸を開けるように目を開けて瞼を擦った。ぼんやりとした視界がはっきりとしてきた。そして、気付く。この部屋ってどこだ。

がぼっと布団をはいで上半身だけ起き上がり、辺りを見回す。

襦と畳が見えた。臭いを嗅ぐとイ草の香りがした。えっ、ここどこ？

立ち上がってみる。そして全身を見ると、黒のキュロットと白いブラウスだった。昨日の飲み会の際のままで寝ていたのは間違いない。

三つある襦のうち、手近の襦を開けてみた。中にはびっしりの本が無造作に平積みされていた。ああ、違う。

今度は一番遠い襦を開けてみた。すると、ひらけた廊下が見えた。おそろおそろ歩いてみると、

歩くたびにぎしぎしと床が音をあげた。

廊下を歩くと、右手に庭があった。手入れがいつているようで雑草なんて一切ない。いや、何も植えられていなかった。さびしく感じた。雑草があれば手入れがいつてないと不満を思うのに逆に気が無いと不満を言う自分はなんて嫌な奴だろう。

目の前に洋風のドアが見えた。開けてみる。ダイニングテーブルの上にはまた大量の本とDVDが平積みされていた。

「あ、起きたか。おはよう」

本と本の間から赤石がぬつと顔を出した。

「お、おはよう……」

やっぱり……私飲みすぎて寝落ちしちゃったんだ。しかも、そのまま赤石の家に泊まっちゃったんだ。

「うん？ ああ！ 別になにもしていないから安心して」

察された！ なんか色々ショック。

「いや、こっちこそごめん。知り合ったばかりなのに、こんなずけずけ泊まっちゃって」

「まあ、僕も気づいたら隣で岩木さんが寝ててびっくりしたよ。それよりもさ、どうして岩木さんはここに居るの？」

どうして？ 言っている意味がよく分からない。ああ、さっさと帰ってということかな。

「あーごめんなさい。すぐ帰るから」

「いや、ここはちょっと複雑でね……まあ座って話を聞いてよ」

赤石は椅子から本をどけて座るよう勧めてきた。私は頭に疑問符を浮かべておずおずと座った。

「実は僕はこの世界の主なんだけど――」

そんな突拍子のない、厨二病感ありあまる切り口で赤石は話し始めた。

「ほら、一瞬で見たものを画像として記憶できる、まあ教科書の丸暗記的な能力ってあるじゃん？ 瞬間記憶能力っていうんだけど、僕にはその能力があるわけよ」

「はあ」

「で、ある時、その空間の中に入れることができたんだよ。その空間は僕が記憶していた現実の街とまるっと同じなんだ。でも、一つだけ違うところがある」

赤石が手のひらを出す。すると、一冊の本が出てきた。

「こんな感じで僕が見たものを創り出すことが出来る。はい、どうぞ」

赤石から本を受け取る。パラパラとページをめくると普段見かける本そのもので間違いなかった」

「はい、説明おわり」

「……」

は？ ぜんぜん訳が分からなかった。自分の創った世界？

「えっ、どういうこと？」

「うーん。簡単に言うと、現実と似た空間があって、そこで僕は神様をしているの」

「えっ、なんでできるの？」

「いや、わかんないよ。なんかできてた。それよりもさ、どうして岩木さんはここに来ることができたの？ そっちの方がわからない。だってここは僕だけの世界なのに」

「私も、なんでかなんてわかんないよ」

分かるわけがなかった。そもそも、そんな世界があることだって知らなかったんだから。

体感数分間、私たちは首を傾げたけど、やっぱりわからない。赤石は失笑した。

「まあ、いっか。考えても答えが出るわけじゃないし。じゃあ、あっちの世界に送り届けるよ」
「えっ？」

赤石が立ち上がった。戻る？ 私の心は揺れ動いた。

「あのさ、もう数日だけここに、居てもいいかな？ この世界に興味があるの」

現実には飽き飽きして人生がつまらないと思っていた私には願ってもないチャンスだった。この世界に興味がある。生きる希望がここにはあるような気がした。

赤石は額に手を当てて、それから肩をすくめて大きく息を吐いた。

「……別にいいけど」

「やった。ありがとう」

私は子供みたいに喜んだ。神様最高！

「もしかして、僕に惚れたの？」

ふざけた調子で赤石が言った。いやいやそれだけは絶対はない。

「そんなわけないでしょ。ところで、神様」

「赤石のままでもいいよ」

「赤石さん。なんでもできるってことは……私を男にすることもできるんですかね？」

「できるよ。まあ、この世界でだけだけど」

「じゃあお願い。私を男にして」

「なんでさ？」

「それは言えない。私のプライドが許さないだけ」

「ああ、そういうこと。できるよ」

赤石が声を上げて笑った。私は知り合ったばかりの男の家に泊まったという事実が許せないのだ。でも、男になってしまえば話は別。男同士なら泊まろうがどうってことはないでしょ。

「岩木さんは僕に似ているね」

そんなことを言って、赤石はこっちを凝視した。すると、胸が軽くなったかわりに股間から重力を感じる。

「あっ」

声も低くなっている！

こうして私はこの世界で男として住むことになった。

＊

私がこの世界に来てから一か月余りが過ぎた。最初は数日だけのつもりだったけど、この生活が楽しくなって、それに赤石もいつまでも居てもいいよと言うものだから、お言葉に甘えてこの世界で暮らしている。

日課はこの世界をブラブラと散歩する事だ。今日も散歩で見知らぬ街を散策している。

私はこうやって見知らぬ土地を歩き回ることが大好きだ。だから、将来の夢だってツアープランナーなのだ。

赤石が作ったスニーカーとリュックを背負って街を歩き回るこれほど面白いことはない。

赤石はというと、ずっと部屋にこもって本を読んだり映画を観たりゲームをしていた。それも四六時中。

赤石にもう聞いたことが一回頭に入れたものを見て意味があるのか、と。赤石が言うには、自分には記憶する脳と理解する脳が別々に在って、記憶するときには理解力が激減して感動できないらしい。だから、記憶するときと理解するときで二つの脳を切り替えているらしい。瞬間記憶

力にも欠点があるようだ。

そもそも、赤石が現世に来た理由は新しい、映画や本を集めるためだった。ネカフェで何百冊の本を捲り、何十本もの映画のディスクを眺めまくったのだ。ディスクを見るだけで表面の印刷層を記憶し、この世界でディスクを創ることができるらしい。その要領でゲームも創っている。

あの日、赤石がバイトをしていたのは、ネカフェ代を稼ぐためだったようだ。その流れでお酒も飲んでみようと思ったらしい。

ホント、赤石は不思議な神様だ。

まず、赤石は私が来るまでこの世界で食事らしい食事をしていないのだ。全部サプリメントで済ませている。だからあんなにガリガリなのだ。最近では私が料理をしている姿を見てご飯を食べるようになった。

次に、この世界に太陽は無い。電気がつくように明るくなって、電気が消えるように夜になるのだ。最初は急に真っ暗になって驚いたものだ。赤石は夕日と朝日が大好きらしい。だからこの世界で太陽は創らなかったという。

最後に、極め付けなのが、この世界には私と赤石以外の生命は皆無なのだ。いくら赤石も全能神じゃないらしい。生き物は創れないといていた。それにその方が良いとも言っていた。だからこの世界で動き回れるのは私と赤石だけだ。

赤石は本当に不思議で彼と彼が創った世界は私にとっては遊園地に匹敵する。私が男になったせいもあるのか、一か月という短い時間で私は赤石と親友みたいに仲良くなっていた。

今日は家から見て西方面を散策していた。手元には私が手作りした地図がある。散策しては書き込んで地図を作っているのだ。気分は伊能忠敬だ。

目印になるものがあれば書き込んで、開拓していく。この街の小学校から警察署、病院までメモしている。

看板によると、どうやらこの街は七戸町という名前らしい。都会とは打って変わって高層ビルなんてものはない。

今日も自転車に乗って(これも赤石が創った)街を散策していると、焦げ臭いが鼻腔に入ってきた。

これはいったい.....もしかしてどこかで火事が起きているの？

臭いを追って集落の中を進んだ。すると、一件の家が黒々と焦げていた。見てすぐに分かった。全焼だ。

自転車から降りてみるとその家だったものは数本の柱を残して燃え尽きており、原型は分からなかった。柱に触れると、手が真っ黒になった。

「いくら見たからってこれまで創らなくても良かったんじゃないの」

ここに住んでいた人はどうなったのだろうと考える。そして無事であることを祈った。一応地図に火事現場を書き込んだ。

ふと、下を見ると表札が裏返って落ちている。

苗字もメモしとこうか。拾って確認する。私は絶句した。

表札には『赤石』と書いてあったのだ。

*

二人でテーブルを囲んで夕飯をとっていた。今日は唐揚げを作った。唐揚げは試験の前とか大会の前日に母親がよく作っていた。それは私を勇気づけようとするためだった。だからか、私は何か大事なことをする前には必ず唐揚げを食べるようになっていた。

「なんか元気ないね。岩木、今日なんかあったの」

赤石がいつもと違う私の雰囲気を感じて声をかける。

「うん……」

私と岩木にはお互いの過去にかかわることは一切尋ねないという暗黙の了解があった。互いが互いのことを聞いて相手を傷つけるくらいなら知らないふりをしている方が良いと思った。

これまでもお互いの過去には極力話さないし、聞こうともしなかった。だから、小学校を探索したときに赤石が描いた絵を見つけた時も何も言わずにいた。

緻密に描かれた写真のような風景画だった。飾ってあるのだからきっと良い賞を受賞したのだろう

しかし、今回は違う。

ひょっとしたら赤石の家は現世で燃えてしまったのかもしれない。赤石は本当に神様で人としては死んでいるかもしれない。それは絶対に嫌だった。神になったとしても、赤石には死んでほしくない。

「今日、ね。火事で燃えちゃった家を見つけたの。で、表札には赤石って書いてあったの」

赤石は顔を上げてこちらを見た。私の予想と反して、悲しんだり、怒ったりする様子はない。

「ああ、あれか。うん。僕がこっちに来てから燃やした」

「どうして！」

思わず、大声を上げてしまった。

「いや、別にこっちで燃やしたからってあっちで燃える訳じゃないし、警察に捕まるわけでもない。わるいことなんてひとつもないじゃん」

「そうだけど……」

うまく言えないけど、そうやって自分の家を燃やすのはいけないと思うし、何よりも自分の家を燃やす赤石の姿は想像するだけで怖かった。赤石はそんなことする人じゃないと思ったかった。……？ 私の理想像を赤石に押し付けてどうするんだ。

「こっちの世界で何ができるのかって考えたんだよね。津波や自信みたいな自然災害も自由に起こせるのかなあってね。でも僕にはそんなことできなくて、火事くらいしか起こせなかった」

まるで、子供が母親に嬉々としてできたことを話すみたいに赤石は語る。

私にはそれが許せなかった。でも、赤石の罪悪感が全くない態度で逆に拍子抜けしてしまった。

「もう、そんなことしないでよ」

「？ うん。自分の家以外なんて壊す気にならないよ」

そう言うと赤石は箸を置いて。マンガを読み始めた。皿を見たら、唐揚げは全部なくなっていた。

それ以降、私はこの世界が少しだけ不気味に感じるようになった。いや、そもそも二人だけの世界なんて不気味と思わない方がおかしい話なのだ。

*

それから一週間経って、私はあることに気づいた。そう、親友の佳奈美の誕生日をすっかり忘れていたのだ。

毎年、佳奈美とはお互いの誕生日にプレゼントを贈り合っている。今年も佳奈美から調理器具をもらったのだ。どうしてこんな大事なことを忘れていたんだろう。

(ああ、遅くなったけど、何かプレゼントしないと……早く現世に戻らなくちゃ)

そわそわと左右を見る。赤石の元へと向かった。

「うん？ 現世に戻りたい？ それはどうしてさ」

「親友の誕生日があるの。だから戻らなくちゃ」

すると、火事のことを聞いたときは全く表情を変えなかった赤石に顔に嫌悪の色が見えた。

「別にいいじゃん。そんなの。もう過ぎたんでしょ」

私はイラっとした。そんなの、って言う言い方はいない。「ひどいよ。なんでそういうこと言うのさ」

「いや僕はプレゼントなんてその程度にしか考えていないだけ。それに……間に合わないと思うし。色々」

「えっ」

「実はさ、現世とここだと時間の流れが違うんだよね」

ゾクゾクと悪寒が走る。すぐに浦島太郎の話が浮かぶ。竜宮城から帰ってくると数百年の時が経っていたという話。生唾を飲み込んだ。目から涙が出そうになる。

「こっちの二日があっちだと一日なんだよ」

「じゃあ、私は現世だと三週間くらいの時間を過ごしているってこと？」

「そうなるね」

なんだ。浦島太郎の話と逆か。それなら別にいいじゃないか。あーよかった。

「でも、存在感っていうのは確実に無くなるんだ。幼稚園のときの友達顔全員覚えてる？ 覚えてないよね。そんな感じで他人から忘れ去られているかもしれない。それがこっち世界で生きるための代償」

「そんな……」

私は愕然とした。じゃあ浦島太郎と変わらないじゃん。みんなが私のことを忘れるなんて……

「なんで、そんな大事な事を先に言わなかったの！ 言ったら早く帰ったよ！」

「だってさ、岩木だってこの生活をかなり楽しんでいたじゃん。だからずっとここに居るんだと思ってたよ」

「そんなわけないじゃん……それにさ、赤石はそれでいいの？ 赤石を知っている人がこの世に居なくなるんだよ。辛くないの？」

赤石は首を傾げた。

「この生活は私の理想で夢だよ。悠々と過ごすこの生活。例え独りぼっちでも寂しくないよ。どうせ、人は死ぬときは一人なんだから」

私は呆れてしまった。やっぱり赤石は頭のネジが一本、いやそれ以上にぶっ飛んでいる。そうじゃなきゃこんな考え浮かばない。

「いいよ。私帰る」

「そう、じゃあね」

赤石は席を立ってドアを開けた。帰れということらしい。

廊下に立つとズブズブと体が沈み始めた。

「あんなに人生に嫌気がさしてこっちに來たのに、親友の誕生日ってそれだけで帰る気になるなんて岩木は本当に幸せもんだね」

全身は沈んだ後、泣くような赤石の声が響いた。

＊

「……」

気づくと私はあの飲み会の時と同じ服装で寝ていた。違ったのは、起きた場所が自分のアパートだったということだ。

しばらくぶりに胸が重たく感じ、それから股間が軽くなった。

一回深呼吸した。それからスマホを見ると、やはりあの日から二週間ほど経っていた。すると

、バイトのシフトやら大学のゼミやらいろいろな事をすっぼかしていることを思い出した。

どうして忘れていたんだろう。これもあの世界に居たからなのかしら。

真っ先に親友の佳奈美に電話をかけた。

「もしもし」

「ああ……友映？」

「うん！ 私！」

良かった！ 私の事を覚えている。

「久しぶり～。あれ？ 別にそんな会ってないわけじゃないのにかなり久々に声聞いた気がするよ。なんでだろう」

「あの、誕生日プレゼント。必ず送るからね」

「なにそれ。そうやって言うなら期待しちやっていいのかな？」

それから一時間ほど、私と佳奈美は二人の間にできた溝を埋めるようにおしゃべりをした。途中で私は思わず泣いてしまった。それだけ佳奈美が自分のことを忘れないでいてくれて嬉しかったのだ。

そのあと、大学とバイト先にも電話をかけた。なんと、私は大学を休学して留学予定ということになっていた。流石にこれには驚いた。

こうして、私は普段通りの生活に戻った。

生活は充実しているかどうかは分からないが、あの経験を通して人との繋がりのおかげがえのなさに気づいてからは少しだけ日常が楽しく思えた。

一週間後、私は気が付くと赤石のことを忘れそうになっていた。その度、私はとても怖くなって、赤石のことを必死に思い出した。そして、忘れまいと、日記にあの日の事を詳しく書き込んだ。私の頭の中から赤石と過ごした日々を消したくなかった。

しかし、私の頭の中から赤石の記憶は確実に、雪が解けるみたいに消えてきていた。

どうして、私は赤石との日々を覚えていたいと思うのだろうか。赤石のことを頭に残しておきたいのか。

「ああ……そういうこと。そういうことなの……」

分かってしまった。気付いてしまえば、認めてしまえばとても簡単な事だった。

私は赤石のことが好きなのだ。

頬がぼうっと熱を帯びる。私は決心した。彼の故郷に行こう。

翌日、私は朝早くに新幹線に乗って赤石の故郷である七戸町へ向かった。確実な理由などない。でも、彼の故郷に行って、彼が見てきた風景を、私があっちの世界で見た風景をもう一度見たい。

三時間ほど新幹線に揺られ、私は七戸町に降り立った。

七戸町は赤石が創った七戸町と少しだけ異なっていた。まず、生き物でありふれている。古い商店はコンビニに変わっていたし、銀行も外観がリニューアルされていた。

私は一目散に私と赤石が過ごした家へと向かった。

頭では忘れていても体は覚えている。私は道を間違えることはなかった。しかし、家のある場所で私は唾然とした。

あの生気のなかった空間は草が生い茂っていた。空き地になっていたのだ。

それだけの時間。赤石はあの世界にこもっていたのか。そう考えると、時の長さに胃がきゅっと締まるように気持ち悪くなった。

私は逃げるように、彼の実家へと歩を進めた。

彼の家がある場所まで行き、燃えずに健在の建物が見えてくると私はほっと胸をなでおろした

もしかしたら、と私はインターフォンを押した。

「はい」

女性の声がした。もしかしたら赤石の母親かもしれない

「あの、私、赤石君の友達ですけど……赤石君いますか？」

「はい？」

しまった。苗字で呼んでも意味不明じゃん。この家の人全員赤石だった。

「えっと、明君いますか」

もしかしたら、佳奈美みたいに思い出してくれるかもしれない。そうだったらいいのに。

「……あの、明という子供はいません。それに、私に子供なんていません」

その後彼について私が知っていることを全部説明した。しかし、肝心の彼の過去については一切知らない。ああ、こうなるんだったら聞いとけばよかった。

「ごめんなさい。多分、人違いだと思います。この家は確かに赤石ですけど、明って人はいません」

「はあ……ありがとうございました」

私はとぼとぼと行く当てもなく町を歩いた。こんなにこの町には人がいるんだ、と改めて驚いた。でも彼以外の方がこんなに居ても彼は居ない。私は彼に合いたくて仕方がなかった。

この町で彼を知っている人はいないのかもしれない。彼にまつわる思い出は一切消えてしまったのだ。

いや、あれなら残っているかもしれない。捨てられて無くなっていたら諦めよう。

私は彼の通っていたであろう小学校へ向かった。

気付くと町は夕日で赤く色づいていた。まるで血が滲んだような赤黒く美しい夕日。彼の世界にはなかった夕日。彼はどうして太陽を消してしまったのだろう。

入校手続きをして校内に入ると、放課後ということもあって小学生の数は少ない。

「こんにちは」

「あっ……こんにちは」

小学生が挨拶をしてくる。実習生と間違えているのだろう。

そして、赤石の絵が飾ってある美術室の前に行った。

赤石の絵はあの世界と同じく、飾ってあった。よかった。思わず涙が零れ落ちた。この町で赤石の存在が無くなっても赤石が描いた作品は残っているのだ。そう思うと、嬉しくてたまらなかった。……でも本当は赤石に会いたい。

「君、ここの卒業生？」

後ろから声をかけられた。振り向くとエプロンをしたおじさんがいた。エプロンには絵具の様々な色がついていて、風貌だけで美術の先生だと分かった。優しくそうな顔をしている。きっと生徒からも好かれているだろう。

「いや……友達がここの卒業生なんです」

「ほう」

おじさんは私の隣に立って、それから赤石の描いた絵を見た。

「この絵上手いと思います？」

「はい、まるで写真みたいです」

「でしょ。赤石くんは夏休みの宿題でこれを提出したんですよ。私も最初は写真を書き写したと思いましたがよ」

「えっ、赤石君？ 先生赤石君のこと知っているんですか？」

「そりゃあね」

おじさんはさも当然のように言った。そうか。おじさんは赤石が卒業しても、この絵を毎日見て彼のことを思い出していたのか。唇がわなわなと震えた。

「私はね、彼にこの絵は写真と変わらない、って言ったんです。この絵には赤石の心がどこにもないってね。でも、この絵はあるコンクールで大賞を獲ったんですよ。だから、私の言ったことが彼に届いたかわからないんですけど」

「たぶん、彼は不器用なんだと思います。ありのままを見ることに集中しちやって感じる事が疎かなんですよ」

「はは、そうだね。ありのままが全てじゃないさ」

そう言っておじさんは美術室へと入って行った。

私は絵の入った額縁を持って近くで彼の絵を見つめた。やっぱり写真みたいで寂しげで美しい。その時、かさかさ、と額縁の中で動くものがあることに気づいた。

額縁を開くと一枚の紙がひらひらと床に落ちた。拾い上げてみると、それは一枚の写真だった

。

私は写真を見た。写真の中で小学生の赤石が症状を自慢げに握っていた。

そして分かってしまった。私は分かってしまった。彼は青いスカートを履いていたのだ。

直に絵に触れると、絵の表面は水面を叩いたように波打って揺れた。

私はその中に手を突っ込んだ。そして、掴めるものを手あたりしだいに掴んで一気に引き上げた

。

「えっ、どうして。どうして岩木がここに居るの？」

男の身なりをした彼女は驚きのあまりぺたんと座っていた。

「私、あなたに会いたくて、忘れたくなくてここまで来たんだよ」

「なに、泣いちゃってるの？ 岩木、顔がぐしゃぐしゃ」

「いいじゃん。それに、赤石は赤石『ちゃん』だったんだね」

「そうだよ。だから、僕と岩木は似ているんだよ」

「そうだね。あのさ……。私は赤石のこと忘れたくないから。赤石と一緒に旅行したり、ショッピングもしたいから」

「なにそれ、自分勝手だよ。でも、久々に女の子っぽい服も着てみたい」

「だからさ……。私と仲直りしようよ。友達になろうよ」

赤石は何も言わずに両手を広げた。私は赤石の胸に飛び込んだ。

あとがき、という名の反省文

はい、どうも、今畑鏡です。やっぱり提出日の金曜日に研究室で鶏胸肉を十キロ食べるという企画は最低で最高の企画だったようです。前日は大雪で電車が遅延して三時間しか寝ていない体を、早朝からの筋トレで胃を空っぽにし、そこに鶏肉を詰め込みました。はい、はっきり言ってその調子で小説なんて書けるわけありません。やっぱり提出が遅れてしまいました。ホントすみません。

ごたごた理由を並べても提出が遅れた事実は変えられません。今後はこんなことが無いようにします。

そうですね.....西尾維新風に今作を言うなら「この小説、鶏むね肉百パーセントでできています」でしょうか。

最後に。人はとても自分勝手な生き物です。そう聞くと悪いイメージもあるでしょうが、自分勝手さが新しいナニカを創造していることも事実です。だから、なんといいですか、他人に迷惑をかけない程度に（ここ重要）自分勝手に生きみればいいじゃないでしょうか。

P S . タイトルはウルフルズのある楽曲を参考にしました。名曲です。

伏流水

松本惇暉

ピーピーという鳴き声がきこえてきて、由美子は頭のうえに目をやった。

屋根と柱が交わったところに鳥の巣があった。今まさに親鳥が雛鳥に餌をやっていた。青い毛と開いた鋏のような尾から、由美子にはそれが燕だとわかった。親は何度も何度も口うつしで子に餌をあたえていた。一つしかない親の嘴にいくつもの子の嘴が群がるので、避けようもなく嘴同士がぶつかる。その動きは激しい。火花が散っていてもおかしくはないだろう。人によっては、飢えた人間が食糧を奪い合っているようにも見えるかもしれない。悲鳴のような鳴き声もそれに一役買っている。

気がつけば、由美子はその様子を食い入るような目で見つめていた。見てくれは汚いけれども、子は必死に生を貪っていた。由美子はそのなかにある力強さに魅かれたのだった。

嘴をうえに向けたと思うと、親はあっという間にどこかへ飛び去っていった。

由美子は皿のうえにおいてある食べかけのみたらし団子に手を伸ばした。団子を軽く噛んで竹串から引き抜き、口に含んだ。粘りと甘味を感じながら団子を噛みしめた。由美子は二年前に死んだ父に連れられて、もみじにおおわれた石段を登ったことを思い出した。由美子を産んですぐに死んだ母の墓は山の麓にあった。その山は紅葉の名所だった。母の命日はもっとも盛んに葉が色づく頃にあたっていた。今由美子が座っている長椅子にかけられた布と同じく、石段は赤くなっていた。

落葉があまりにも赤くて幼い由美子には血に見えた。父の袖をきつくにぎった。思わず吐き気を催すほど血が怖かった。同じように由美子の父もまた血を忌み嫌った。

でも、父は血を吐きながら死んだ、と由美子は声にしないでつぶやいた。

今日の団子は特別甘くて感傷を引き寄せるのだった。由美子は竹串を舌の先でもてあそんだ。苦い味がした。砂のような舌のうえにこびりつく感触があった。由美子の脳裏にまた別の記憶が浮かんできた。

それは確かなものではなかった。時間も場所も分からない。ひどく曖昧なものだった。

由美子はぶらんこに乗っていた。空を見上げようとした。身体を後ろにたおしすぎて、頭から落ちた。視界が水色に染まった。由美子は息ができなくなった。なにも感じられなくなって、自分の身体の重みが消えた。

このとき、由美子の胸の奥底で寂しさと楽しさがうまれた。

と、なった時、いつも記憶が途切れる。いくら思い出そうとしても、続きの映像は流れてこない。ちょうど暗幕を下ろしてしまったかのように、黒一色の画面が広がるだけだった。

由美子は琥珀色に汚れた皿のうえに串と茶碗をのせた。それはまるで水に浮かぶ小舟ようだった。由美子は茶碗のなかに一寸法師がひそんでいればいいのにと考えた。小人が決して弱さを見せないのもさることながら、小さい者が大きな者を打ち倒す快感がなにより気に入っていた。子供

の頃の由美子は、父に向かって一寸法師の絵本を読み聞かせられるよう何度もせがんだ。

皿を持ってカウンターにいくと、「今日は全然客が来ないんよ」と、女将が洗い物をしながら由美子に話しかけてきた。由美子は「へえ」とつぶやいて皿を洗う女将の手つきを盗み見た。食器同士がぶつかる音がすると泡が飛び散る。赤くなった指は柘榴の実に見える。女将の手には皺が目立つ。由美子は皺の数を数えた。

「今日は日曜日だっていうのにねえ。なんとかならないもんかねえ。由美ちゃん？」

「天気の良いじゃないですか？」

「そりゃないよ。こんなに晴れてるじゃないか」

女将が顎をしゃくった先には青い空があった。翳雲が広がっていた。梅雨が明けてひときわ日差しが強くなった。今日はどうなるような暑さだった。由美子は乾いて白くなった遊歩道を思い浮かべながらハンカチで首の汗をぬぐった。汗が接着剤のかわりをして、ハンカチと肌をくっつけた。自分の汗が布に吸い込まれていくのがなんとも心地よかった。

「なあ、由美ちゃん、あんたお見合いする気はない？」

「藪から棒になにをいいますかと思ったら……またその話ですか」

「まった！ そんな興味ないですよみたいなことって！」

「私も興味がないわけじゃ……」

「だったら、今度こそ会ってちょうだい。今度の相手の人、実はあたしの甥なんだよ。県庁に勤めてる真面目で物静かな子でね、由美ちゃんにぴったりだよ」

「でも私、お父さんもお母さんもないから」

「そんなの気にする必要なんてないよ！」

女将は自分の子供を叱りつけるように由美子を睨みつけた。皿を洗う手が止まった。由美子は目を細めて首を振った。一瞬、女将には由美子が狐のように見えた。喉を冷たいものが走った。女将は思わず由美子の目を覗き込んだ。由美子の表情は変わらなかった。

なにを考えているのか分からない。あたし、騙されているんじゃないかしら？ なにか裏がありそうだと感じて、女将は口にしかけた言葉を飲み込んだ。

由美子は罵声を浴びたかのように顔を伏せた。瓜実顔のうえにあらわれる細長い目は、いつも由美子をいやな女にさせてしまうのだった。

「……やっぱり、気が進みません」

「もう、仕方がないね。……由美ちゃん別嬪さんなのにもったいないよ。ほんとに」

「ごめんなさい」

由美子はちいさく頭をさげた。女将はため息をついて、出しっ放しになっていた水道の栓をしめた。

そのとき、ヒュッという空気を裂く音がして、雛たちが騒々しく囀りはじめた。由美子は弾かれたように頭をあげて巣のほうを見た。親鳥の細長い嘴が鈍く光った。由美子はその嘴が自分に突き立てられたように感じた。

餌を探しに、すぐに親鳥はどこかへ飛び去っていった。囀りが一斉にやんだ。由美子は急になんかしみに襲われて、叫びたくなった。自分の汚物を見ているようだった。この場にはいけない

気がして、由美子は女将に一言挨拶すると、逃げるようにして店を出た。

*

休憩時間はまだあまっていた。由美子の足は軽鴨池のほうに向かっていた。このまま遊歩道を歩いて、ぐるりと園のなかを一周しようか。由美子は胸のなかでそんなことを呟いた。遊歩道を進んでいくと、由美子は品の良さそうな老女とすれ違った。老女は濃い紅色の着物に包まれていた。まるで経血のようだった。由美子は目をそらした。罪悪感が湧いた。

軽鴨池が見えてくると、水の流れ落ちる音が近づいてくる。由美子は翡翠の滝の前で足をとめた。滝を覆うように苔と楓が生えていた。水と葉が混ざりあった匂いは、冷えたスープを思い出させた。水面にうつる木の影が海草のようにゆらゆらと動いた。

由美子は水が落ちる音に耳を澄ました。決しておおきな音ではなかった。ひよっとすると、人の声にかき消されてしまうかもしれない。誰かに言い聞かせるように、由美子は「今日は身体が怠いよ」とつぶやいた。言葉と一緒に吐き出された息はひどくなまぬるい。腹に手を当てると、普段より熱を帯びていた。血とは違う液体が溜まっているようだった。

風が吹いて、由美子の長い髪が旗のように靡いた。

由美子は髪をおさえながら歩き出した。池を通り過ぎると、歩道のそばに小川が寄り添ってきた。水面のう上に落葉が浮いていた。沈みかかっている。緑色が溶けて輪郭をつき破ってしまいそうだった。葉は流れを阻むように置かれた岩にひっかかっている。

視界から緑色が消えるとき、由美子は水際にうずくまって葉をすくいあげてやりたくなった。「助けて」というつぶやきが口から漏れた。

水と葉が混じり合った匂いがした。それはどこかヨードチンキに似ていた。

由美子は小川のうえにかかっている石橋の前で足を止めた。橋の入口には、〈通行禁止〉と書かれた立札と柵が立てられていた。ちいさな石橋に不釣り合いなくらい、立札と柵は大きかった。いい加減、石橋を修理しなくちゃならないと由美子は思った。

そのとき、「すみません」と、いきなり後ろから声をかけられた。

私と同じ年ぐらいの女の声だ。頭の中に、自分の暗い顔が夜空に浮かぶ月のようにあらわれた。一瞬だけ、由美子は振り向くのをためらった。

「はい」

「ここの橋は、どうして渡れないんですか？」

そうたずねてきた女の顔を見て、由美子は我を忘れそうになった。頭の中が白く塗り潰されたようだった。

茶色の癖毛、鳶色の瞳、鷲鼻、薄い唇。これぞ外国人という顔が由美子と向かい合っていた。驚くほど流暢な日本語だった。その女のそばには夫らしい男と、息子らしい男の子がいた。

「老朽化が進んで、橋が落ちる可能性が出てきまして……だから通行禁止にしています」

「オーそれは残念です！」

女はそう言うと、横にいる男に英語で話しかけた。男はいちいち女の言葉の合間にうなずいて

相槌をうっている。男の子は黒い汚れと傷がついた緑のボールを持っていた。そのボールは、てのひらぐらいの大きさだった。男の子は俯いてボールを手で弄んでいた。

父親がいて、母親がいる。そして、子供がいる。由美子の胸の中で心臓が大きく波打ち、うねりを生んだ。

「日本語、お上手なんですね」

女に向けて、由美子の口からそんな言葉が吐かれたのは、怖かったからだった。うねりに飲み込まれてしまいそうになった。由美子は自分が歪んだ笑いを浮かべていることに気づいていた。

「ありがとう」と言って立ち去りかけた女は少しとまどったが、すぐに笑みを浮かべた。

「自分の言葉をほめられるのは、とってもうれしいです」

女は白い歯を見せながらそう言った。まるでタイルのように整って歯が並んでいた。恐ろしいくらいに健康だ。由美子は眩暈を起こしかけた。目を瞬いて、身体に力を込めた。女は「ありがとう。縁があったらまだどこかで」という台詞を残して立ち去った。そのとき、女の隣にいる男が口元をほころばせた。男の子は相変わらず緑のボールをいじくっていた。

垣根の向こう側に親子は消えた。ひとりでに由美子の口から大きな溜息が漏れた。

由美子の顔には、まだ歪んだ笑みが貼りついていていた。

*

「なあ、とっておくれ。あれは兄様の形見なんだよ」

「おばあちゃん、ごめんよ……あれはどうしてもとれないの」

卵池に浮かぶ石塔を眺めながら通り過ぎようとしたとき、由美子の耳にそんな会話が飛び込んできた。立ち止まって声のするほうに視線を向けると、白髪の老婆と眼鏡をかけた男が池のふちに立っていた。由美子は眉間に皺を寄せた。

「そんなことを言わないでおくれよ。……あれは命よりも大事なものなんだ」

子供が痲癩を起すときのように、老婆の声は震えていた。黒髪の女はそっと老婆の肩を撫でた。「おばあちゃん、もう帰ろう。毬のことは、この人に頼んでおくから、ね」と男が老婆に囁いた。由美子は男の後ろに近づいてその横顔を盗み見た。小さな鼻が小刻みに震えていた。横顔には、疲れと苛立ちが滲んでいた。

由美子は黙っていられなくなり、気づけば二人に向かって「あの、すみません」と声をかけていた。まるであやつり人形のように、ぎこちなく老婆と男が振り向いた。私より二つくらい年下か。由美子は胸のなかでつぶやいた。目の前の男はまだ若かった。丸くて小さい男の顔は饅頭のようなようだった。

「なにかあったんですか？ ずいぶんお困りのようですね……」

男の目は、由美子が首から下げている職員証にむけて注がれていた。突き放すような、すがりつくような、微妙な視線だった。いつぼう、老婆は目を輝かせていた。もぞもぞと口が動いた。笑ったせいで皺が深くなった。まるで腐った果物を見ている気分になる。由美子はこんな老人になりたくないと思った。

「なにか、池に落とし物でもされましたか？」

「いえ、ちょっと……おばあちゃんが」

そう言って男は宙に視線をさまよわせた。男の言葉と視線はどこかずれていた。意味もなく由美子は青いストラップをつまんだ。不気味なのだ。由美子は胸の奥で苛立ちが燻るのを感じた。ちぐはぐだ。

いままで黙っていた老婆がいきなり口を開いた。

「なあ、ミキ姉ちゃん、毬、とってくれんかな？」

「えっ……」と、由美子は息を呑んだ。

「あたし、また池に落としちゃったんだよ」

「ちょっとおばあちゃん、この人ミキさんじゃないよ」

女が慌てて老婆の言葉をさえぎった。男の目がもううんざりだと言っていた。男の顔が急に老けて見えた。まるで歌舞伎役者の隈取りのように、目のまわりには染みが浮いている。男の顔はぐっと犬や猫に近づいた。

「本当にすいません。おばあちゃん、だいぶボケが進んじゃってて……ときどき、突拍子もないことを言うんです」

「そうだったんですか……大変ですね」

「頭のほうはダメになっちゃったのに、身体のほうは元気だから、困っちゃいますよ」

男の声には親しみがこもっていた。言葉の合間に、男は由美子が首からぶらさげている職員証を盗み見た。由美子はその視線に気づいて、奥歯を噛みしめた。やめてよ、そんな話。私は馴れ合いなんてしたくない。由美子は透明なケースに入った職員証を池に投げ捨てた。

老婆の唇がふるえて、その隙間からよく通る声が流れ出した。

「……あんた、嘘ついてる。あの人、やっぱりミキ姉ちゃんだ」

「あのね、おばあちゃん、この人はここの園の人なの。そもそも、ミキさんはずっと東京の病院にいるんだから、こんなところに来れないでしょ？」

「なあ、ミキ姉ちゃん、お願いだから……」

「もう、おばあちゃん。いい加減にして……さあ、帰ろう」

女は老婆の手を引いて歩き出そうとした。けれども老婆は子供のようにうずくまってしまった。男は小さく舌打ちをすると、「ちゃんと拾ってくれるようにしてもらおうから」といってなだめにかかった。老婆は男がなにをいっても答えず、そばに立っている由美子を見上げていた。老婆の目は潤んでいた。老婆は由美子を自分の姉に見立てて甘えようとしていた。「姉ちゃん」と呼ばれたときから、由美子は老婆から目を離せなくなっていた。

皺だらけの老婆の顔がなにかを訴えているように見えた。由美子の身体のなかで、くすぐられるような心地よさと、サイズの合わない靴を履かされたような居心地の悪さが走った。老婆がなにを訴えようとしているのか分かってしまった。由美子は老婆の前に膝をついて口を開いた。

「私がとってあげましょう。どのあたりに落としたんですか？」

「いや、そんなことしていただかなくても……」

泡を食って、どうしていいのかわからない。とでもいうように男は目を瞬かせた。老婆は由美

子の手を固く握りしめて、握り拳を自分の額にこすりつけた。男はその様子を見て、ぱくぱくと口を動かした。水揚げされた魚のようだった。由美子は立ち上がって男にそっと耳打ちした。

「ごめんなさい……差し出がましいことをしてしまって……」

「ああ、いや、まあ」

「なんだか、見ていられなくて。……あの、この方のお名前は？」

「……ユミ、です」

老婆の名前が自分の名前と似ていても、由美子はたいしておどろかなかった。むしろ、そうでなくてはならない気がしていた。由美子も、老婆も、目の前の相手がだす引力にひきつけられていた。由美子は老婆の身体をささえながらたちあがった。太陽に雲がかかって、一瞬あたりが暗くなった。影が濃くなる。由美子は気味の悪い親近感について考えをめぐらせ、老婆は姉が自分の願いをかなえてくれることをよろこんだ。

「ユミさん、今、毬は池のどこに浮かんでますか？」

「あそこ……岩のそばにひっかかっている」

老婆は石塔の隣にあるちいさな島を指差した。由美子は毬と島が寄り添って池に浮かんでいる様子を想像した。想像のなかの毬は沈みかかっていた。もしも沈んでしまったといたら、老婆はどんな顔をするだろうか。由美子はそんな意地悪を試みたくなった。

「よかった。なんとか取れそうですよ」

そういつて、由美子は岸と島をつなぐ橋に向かった。橋は木製で、人一人がやっと通れるくらいの幅しかなかった。検査をして、安全だと保証されているにもかかわらず、由美子は橋を踏みしめるたびに不安になった。泥を踏んでいるようだった。地面にのめりこむような感触がたまらなく嫌になる。

由美子は島にたどりつくつと、老婆が指差したあたりに立って、かがみこんだ。

「ユミさん、このあたり？」

「いや、違う違う。もっと右」

「ここかな」

「ああ、行き過ぎだよ」

「ごめんなさい……こう、かな」

「うん、もう少し左」

岸から響いてくる老婆の声をききながら、由美子は左右に行ったり来たりを繰り返した。なかなか老婆の望む場所につくことができなかつた。だんだんと老婆の声が甲高くなっていった。由美子は緑がかった水面を見つめながら、老婆の声にしたがった。半径一メートルの円のなかを何度も往復するはめになった。

もう島を一周してしまったほうが早いかもしれない、と由美子が胸のなかでつぶやいたとき、老婆が叫んだ。

「そこ、そこ！」

由美子は地面に膝をついて、ゆっくりと手を水のなかにひたした。手に水が触れると、由美子の身体に震えが走った。何匹もの鼠が肌のうえを駆け抜けたようだ。水は刺すように冷たい。

老婆は水面を食い入るように見ていた。男が思わず肩をつかむほど、老婆は岸から身を乗り出してもいた。その様子を見て、はたと由美子は気づいた。自分はどんなふうに毬を拾うふりをすべきだろうか。ちよっともったいぶったほうが良いだろうか。由美子は見えない毬の重さを感じた。パントマイムをする芸人の姿を思い浮かべたりもした。

ほんの少しの間、由美子は拾うのをためらった。老婆どころが、毬に試されているようだった。丁か、半か。由美子は博奕打ちになった気分になった。

水面に写った自分の首を取り出すように、由美子は両手を水の中から抜いた。両手の間には、もちろんなにもない。まるで手の汚れを確かめるような手つきだった。自分は毬をついたことがあつたらうか。そんな問いが胸の奥で湧いた。両手の形を崩さないように由美子は立ち上がった。いつもより橋が軋むような気がした。由美子の歩き方は、まるでてのひらのうえに小鳥の雛をのせているようだった。気がつくど、由美子は老婆が見ている毬の色や形を真剣に考えていた。

色は赤で、龍の刺繍があればいい。

「はい。もう落としちゃだめですよ」

そういつて、由美子は老婆に向かって両手を差し出した。教師のような台詞に、思わず苦笑がこぼれた。老婆は恐る恐る手を伸ばして、自分にしか見えない毬をつかんだ。赤ん坊を抱くように、そのまま毬を腕の中におさめた。

老婆の顔に刻まれた皺が、襷のように蠢いて、深くなった。

由美子も男も黙っていた。うまくいったのに、由美子の胸のなかは晴れなかった。甘いものを食べ過ぎたときのような、気持ちの悪さが残っていた。

老婆と男が礼をいつて立ち去つても、由美子の胸のなかには粘っこいものが居座り続けた。

*

登ヶ池のうえに建っている瑞雲亭の小部屋から、明かりが漏れていた。石の土台に支えられた小部屋は、岸につながれた舟のように見えた。もう陽は暮れていた。明かりは漁火のようにおぼろだった。

部屋から漏れる明かりに照らされた水面は、ほのかに蒼白い。由美子は畳のうえに座つて登ヶ池をながめていた。波が起ることもなく、水面は動かない。一枚の布のように艶やかだった。由美子の膝のうえにおかれているCDケースが、杯に見えた。

由美子は空を見上げた。煌煌と黄色い月が光っていた。部屋の中を冷たい風が通り抜けた。風は澄んだ空気を運んできた。部屋のなかに草の香りがたちこめた。蘆の茂みのなかに頭から倒れ込んだようだった。由美子は謠を口ずさんだ。

互に手に手を取り交はせば又.....消え消えとなり行けば.....いよいよ思ひはます鏡。.....面影も幻も。.....見えつ隠れつするほどに東雲の空も。ほのぼのと明け行けば跡絶えて。わが子と見えしは塚の上の。.....草茫々として唯。.....しるしばかりの浅茅が原となるこそあはれなり

けれ。

瑞雲亭の障子はすべて開け放たれていた。草の匂いを含ませた空気が由美子の歌声と一緒に外へ流れ出ていった。

もしも由美子の声を聴いたなら、畳の隅に置かれたラジオカセットの銀色が急に褪せて見えただろう。心もとなく、所在なさげに見えただろう。

謠が終った。由美子の声が途切れた。息をつくのも憚れるほど静かだった。由美子はこちらに近づいてくる足音を聞いた。

「こんばんは」

低くて重みのある声だった。由美子は身体をまわして声の主を見た。高瀬が部屋の中心を横切って、由美子の真正面にあぐらをかいた。明度を落とした電球に照らされた、男の肌が鈍く光った。それは浅黒く、馬の肌にそっくりだった。

無骨な男、と由美子は胸の底でつぶやいた。男が着ている作業着を甲と鎧に変えてやりたくなる。由美子はラジカセを手元に引き寄せながら、笑いを漏らした。

「いきなりどうしたんですか？……笑ったりして」

「いや、高瀬さんがこの部屋の主のような気がして」

「こんなデカイ図体で、しかもとにかく鈍いって人から言われる男が？」

「戦国時代の武将みたいだって言われませんか？ あなたを見ると、私は黒田如水の肖像画を思い出すんですけど」

そういつて、由美子とはらえどころのない顔をした高瀬を見つめた。高瀬の目は地面に寝そべり遠くを見ている熊の目だった。どこが物憂げなのだった。悟りとも、諦めともつかないものが流れ出している。このとき、由美子はうらやましくてたまらなかった。きっとあなたはなにも感じていない。回路が切れている。高瀬の肌が透明になり、太い幹が上から下に貫いていると由美子は見た。

「さて、はじめましょうか」

「はい、よろしくお願いします」

高瀬は由美子に向かって深々と頭を下げた。まるで熊が水の中で餌を探しているようだった。由美子はラジカセのスイッチを入れた。CDを入れて、しばらく早送りをした。高瀬は胸のポケットから扇を取り出して、まるで弓をひくようにかざした。気持ちの良い、水平。扇がそのまま矢になって飛んでいってしまいそうだと思っただ。由美子は思った。

由美子は一時停止のボタンを押し、高瀬の目を覗き込んだ。高瀬は力強く顎をひいた。ラジカセから、謠と囃子が流れ出した。

さる程に。三光西に行くことは。衆生をして西方に。勧め入れんためがとかや。……

まるで念仏でも唱えるような、唸るような何人もの男の声と、どこか笑いを誘う軽妙な鼓の音色が混ざりあった。由美子は謠と囃子の響きに耳を傾けながら、高瀬の舞う姿をひたすら見つ

めた。

左手を胸の前にあげて、左に二歩。扇を持った右手を胸の前にあげて、右に二歩。

扇を頭のうえからゆっくり振り下ろして、胸の前で止める。

祭壇に捧げ物を置くように、両手を前に差し出して、ゆっくりと腕を身体の横につける。

高瀬の舞は、とてもぎこちなかった。熊が踊っているようにしか見えない。由美子は吹き出しそうになる笑いを何度も口のなかで噛み殺した。笛や鼓はそれなりに扱えるのに、どうして舞だけこんなに下手糞なのだろう。ところどころ、所作も間違っている。由美子は高瀬に悪いとは思いつつも、彼の舞を見るたびに笑わずにはいられなかった。

もう、いっしょに踊りたくなるじゃない。

高瀬が足で拍子をとりはじめたとき、由美子は頭のなかで熊が爪先立ちになって「ガオー」と吠える絵面を想像してしまった。口を押えるのが遅れた。気がつけば口から笑い声が漏れている。由美子はラジカセの停止ボタンを押した。

「やっぱり、柔らかさが足りないですね」

「.....意識してるつもりなんですけど」

「まだ、動きが固いです。.....なんだか、ロボットみたいに見えるときもあるし」

「.....もう一度、お願いします」

「今度は、私が後ろにつきながらやってみましょうか.....」

由美子は素早くCDを巻き戻して、再生ボタンを押した。

また謡と囃子が流れ出した。由美子は高瀬の後ろに立って、彼の両手首をつかんだ。由美子は自分の身体を高瀬の背中にぴったりとくっつけた。高瀬が大きく息を吐き、身震いをした。高瀬のなかで滾る緊張が由美子にも伝わってきた。かすかな殺気を感じて、由美子は獣の背中を撫でている気分になった。

「力を抜いてください。.....それじゃあ、さっきよりもっと動きが固くなりますよ」

由美子の囁きは、高瀬のなかでさかんに波打っている興奮を、かえって煽ったようだった。由美子の柔らかな所作に導かれて、高瀬は舞いはじめた。高瀬の耳に流れ込む由美子の息遣いは、リズムを持っていて、一つの楽器になっていた。

姨捨山に照る月を見て照る月を見て.....

高瀬が所作を間違いそうになると、由美子は手首を強く握って正しい所作を終え、自ら演じた。由美子が手首を握り締めるたびに、高瀬の首筋にうっすらと汗が滲んだ。これじゃあまるで舞踏会にいるみたい。シャンデリア、磨かれ輝く白い床、バイオリンとチェロの音色。由美子は今自分がある部屋が和室であることを忘れた。

戯るる舞の袖.....

もしも、この謡にでてくる老婆のように、自分が山のなかに捨てられたら、どうなるだろう。

やっぱり、狂気に襲われるのだろうか。謠にあわせて足で畳を踏みながら、由美子は自分に向かってそう問いかけていた。大きな木の下に座って月を見上げる老婆の姿が鮮やかに目に浮かぶ。死ぬことを、選ぶだろうか。

謠が終わりに近づいていた。鼓がひととき強く打ち鳴らされる。

由美子は老婆と自分を重ねあわせた。突然月が憎らしくなり、身を投げるための場所を探して夜の山をさまよった。小さな湖を見つけて、躊躇うことなく水のなかに入った。吸い込まれるように身体は底へ底へと沈んでいった。身体が泡にまみれていくなかで、誰かに右手首を握られた。沈みながら隣を見ると、高瀬が青白くひかる手で手首をつかんでいた。泡で視界が霞んだ瞬間、高瀬の身体が指先から溶けだして、由美子を覆う膜になった。膜を通して見る月は、卵の黄身のように艶を帯びていた。由美子は目を閉じた。もう大丈夫、帰ってきた。これで安らかに眠れるから。

私は、別の生き物に生まれ変わる。

もう謠が終ろうかというとき、由美子は高瀬の耳元に「ねえ」と囁いた。
「あなたから、土と草の香りがします」

おきみやげ

佐倉 奏

「めがね」

冬のめがねはめんどくさい
ちよつとのことですぐくもる

朝一番のコーンスープ
「風邪を引くな」と届いたマスク
においもおいしい味噌ラーメン
雪舞う街で待ったバス

あと少し
明かりが灯る家

「ただいま」 眩き開くドア
「おかえり」 聞こえた台所
「いただきます」 みんなで囲む鍋

冬のめがねはめんどくさい
ちよつとのことですぐくもる
ほんと、めんどくさい

「ある冬の日」

白い吐息と夜の闇
マフラー引っ張り笑う君
星座を探しに星空散歩
教えてもらったオリオン座
そのうち消滅するらしい
「また見よう」とゆびきりげんまん
差し出す左手 あたたかい

白い粉雪夜の闇
マフラー引っ張り締め直す
意味もないのにその辺散歩
教えてもらったオリオン座
ベテルギウスはあの日のまま
雲も阻むゆびきりげんまん
差し出す左手 行き場なし

雪が闇を飲んでいく
白が全てを染めていく

「雪の日」

雪が積もった日の朝は
いてもたってもいられない
誰より早く飛び出したい

一面広がる新世界
最初の一步は譲れない
ぎゅうって足跡つけてやる

さて 何を作ろうか
まだ何も無いこの白に

あとがき

どうも、佐倉奏です。今度こそ文芸部員生活最後の部誌投稿です。最後の投稿………なのですが、案の定、切十分前にこの後書きを書いています。七年間通して何の成長もなかったですね………。

私事ですが、春から故郷の小学校で教壇に立つことになりました。出会った子どもたちに少しでも読書や創作の楽しさを伝えられる教師になりたいと思っています。そしてそのためにも、自分自身がこれからも読書や創作を楽しんでいきます。

最後になりますが、文芸部でお世話になった先輩方や同級生、後輩たち、そして、読者の皆様、本当にありがとうございました！

それでは、機会があればまたどこかでお目にかかりましょう。